宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第３集

下田畑遺跡
SHIMO TA BATA

小山尻東遺跡
KO YAMA JIRI HIGASHI

田上遺跡
TA GAMI

赤坂遺跡
AKA SAKA

小山尻西遺跡
KO YAMA JIRI NISHI

1985
宮崎県教育委員会

宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第３集

下田畑遺跡
SIIMO TA BATA

小山尻東遺跡
KO YAMA JIRI HIGASHI

田上遺跡
TA GAMI

赤坂遺跡
AKA SAKA

小山尻西遺跡
KO YAMA JIRI NISHI

1985
宮崎県教育委員会

正　誤　表

ページ	行	誤	正
例言	上から9行目	あった。	あたった。
3～4	下から1行目	(アカシヤ地区)	(アカホヤ地区)
9	上から7行目	口縁は平口縁	口縁は平口縁
〃	下から5行目		石鏃
10	下から3行目	輪部	輪部
〃	〃	掘析	掘析
17		VI類	古類
27	上から2行目	，外面	，内外面
〃	上から3行目	無脚壺	無脚壺
〃	下から10行目	形態となす	形態となす
〃	下から9行目	立より	立より
〃	下から4行目	底部付近	底部付近
〃	〃	ものである。	ものもある。
28	上から7行目	玄で重	玄と重
〃	下から12行目	口縁中	脚裾中
〃	下から4行目	独立柱建物と主体	独立柱建物を主体
29	註(3)	縄文・前期	縄文/草創・前期
〃	〃	論改	論攻
〃	〃	『るめん』	『どるめん』
〃	註(5)	民俗学東	民俗学東
〃	〃	浦武町教育委員会	福武町教育委員会
〃	註(6)	「宮崎学園短大理紀	「宮崎学園短大理紀
34	表号28	庵	蓋
43	上から3行目	れない，定制	れない，が完備
〃	下から7行目	薄いヒビ入り	薄いヒビが入り
46	上から17行目	1個土器は	1個土器は
47	上から2行目	へう状工具	へう状工具
53	下から10行目	大厚2.85㎝を	大厚2.85㎝を
57	上から13～14行目		13～14行目を削除
58	上から4行目	類1	類1（第11図1）
60	上から2行目	底部には刺ゥ	底部は刺ゥ
61	下から1行目	出土土師器様分類	出土土師器様分類
70	上から5行目	下層は茶褐色	下層は茶褐色
80	上から11行目	留まらざる	留まらざる

ページ	行	誤	正
83	上から17行目	上拡1基	上拡1基
〃	下から14行目	北高差	北高差
93		第9図	第10図
94		第9図	第10図
〃		第10図	第11図
〃		第11図	第12図
〃		第12図	第13図
〃	下から8行目	石器の土出状況	石器の出土状況
95		第10図	第11図
〃		第11図	第12図
96		第12図	第13図
〃		第13図	第14図
97		第14図	第15図
〃		第15図	第16図
98		第13図	第14図
99		第14図	第15図
〃		第15図	第16図
100	下から1，2行目	上拡	土拡
101	上から1・2・4行目	土拡	土拡
〃	下から7行目	確元	確光
108	上から4行目	宏ノ神式	宏ノ神式
112	上から2行目	(1，11，22号)	(1，11，22号)
114		V：磨製両色土	
120	下から12行目	高台付ものの出土	高台付ものの出土
〃	下から9行目	バリエーションなか	バリエーションなのか
126			V類 暗褐色土
130	上から20行目	(第4図V，VI，VII)	(第4図V，VI，VII)
	下から8行目	基部Vと	基部Vと
図版5		A2	SA2
図版10		左上の109	109
図版14		91	98
		98	91

序

宮崎県教育委員会では，地域振興整備公団の委託を受け，昭和55年から宮崎学園都市建設地における埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施しています。

本書は，この調査のうち主として昭和58年２月から59年６月にかけて実施した遺跡について集録したものです。時代は旧石器，縄文，弥生，古代，中世と多岐にわたり，遺物にも本地方では出土例の少ない曽畑式土器，また本県では希少例の墨書土器も見られ，他地区の報告書と同様，貴重な資料が提供されたといえます。

本書が専門の研究だけではなく，学校教育や社会教育の面にも広く活用されると共に，文化財に対する認識と理解のために役立つことを期待しています。

発掘調査にあたって深い御理解と御協力を賜わった公団や調査指導の先生方，地元清武町に対して衷心から御礼を申し上げます。

昭和60年２月

宮崎県教育長　後　藤　賢三郎

例　言

1. 本書は，昭和56・58・59年度に実施した宮崎学園都市建設事業に係るものの内，従来農業高校予定地とされた5遺跡の発掘調査報告である。

2. 発掘調査は，地域振興整備公団宮崎学園都市開発事務所の委託を受けて，宮崎県教育委員会が実施した。

3. 本書の執筆は，面高哲郎・永友良典・長津宗重・北郷泰道・近藤　協・菅付和樹・日高孝治・谷口武範が行った。

4. 執筆の分担は次のとおりであるが，文責については，各文末に明記した。また，総括編集には北郷があった。

第Ⅰ章……北郷
第Ⅱ章……北郷，日高
第Ⅲ章……長津，近藤
第Ⅳ章……菅付，谷口
第Ⅴ章……面高
第Ⅵ章……近藤

本　文　目　次

第Ⅰ章　序　説

第1節　調査に至る経緯と経過…… 1
第2節　調査の組織…… 1

第Ⅱ章　下田畑遺跡の調査

第1節　遺跡の立地と環境…… 5
第2節　調査の経過および概要…… 5
第3節　層　位…… 5
第4節　各時代の遺構と遺物…… 6
1. 旧石器時代…… 6
2. 縄文時代…… 6
3. 弥生時代…… 10
4. 平安時代…… 12
第5節　まとめ…… 28

第Ⅲ章　小山尻東遺跡の調査

第1節　遺跡の立地と環境…… 38
第2節　調査区の設定と概要…… 38
第3節　包含層の状態…… 38
第4節　縄文時代の遺構と遺物…… 38
Ⅰ　集石遺構…… 38
1. 礫群の分布状況…… 38
2. 集石遺構…… 41
3. まとめ…… 46
Ⅱ　遺　物…… 46
1. 土　器…… 46
2. 石　器…… 47
3. まとめ…… 55
第5節　弥生時代の遺構と遺物…… 58
第6節　古墳時代の遺構と遺物…… 58
第7節　平安時代の遺構と遺物…… 58
第8節　中世の遺構と遺物…… 70
第9節　まとめ…… 70

第Ⅳ章　田上遺跡の調査

第1節　調査の概要…… 80
第2節　遺跡の立地と環境…… 80
第3節　層　序…… 80
第4節　遺構と遺物…… 82

1. 遺　構……82
2. 遺　物……87
第5節　まとめ……97
第Ⅴ章　赤坂遺跡の調査
第1節　遺跡の立地……105
第2節　調査の経過及び概要……105
第3節　調査の記録……105
1. 縄文時代の遺構と遺物……105
2. 古墳時代の遺物……110
3. 平安時代の遺構と遺物……110
4. その他……112
第4節　まとめ……120
第Ⅵ章　小山尻西遺跡の調査
第1節　遺跡の立地と環境……125
第2節　調査の方法……125
第3節　遺構と遺物……125
第4節　歴史的背景……134
第5節　まとめ……135

挿　図　目　次

下田畑遺跡
第1図　土層断面実測図……3～4
第2図　ナイフ形石器実測図……6
第3図　縄文土器実測図・拓影(1)……6
第4図　石鏃実測図……7～8
第5図　縄文土器実測図・拓影(2)……7～8
第6図　縄文土器実測図・拓影(3)……7～8
第7図　縄文土器実測図・拓影(4)……7～8
第8図　スクレイパー実測図……7～8
第9図　石斧実測図……7～8
第10図　石器実測図……7～8
第11図　SA4　出土弥生土器実測図・拓影(1)……11
第12図　SA4　出土弥生土器実測図・拓影(2)……11
第13図　SA5　出土弥生土器実測図・拓影……11
第14図　A　区　出土弥生土器実測図……11
第15図　SA4　実測図……12
第16図　SB1・2・3　実測図……13
第17図　SB4・5　実測図……14
第18図　SB6・7　実測図……15
第19図　SA1　実測図……17
第20図　SA2　実測図……17
第21図　SA2　カマド実測図……17
第22図　SZ1　遺物出土状況……18
第23図　SA1　出土土器実測図……19～20
第24図　SA1　出土須恵器実測図……19～20
第25図　SA2　出土土師器実測図……19～20
第26図　SA2　出土土師器実測図(2)……19～20
第27図　SZ1　出土土師器・須恵器実測図……21
第27図－2　SZ1　出土須恵器実測図……21
第28図　SB1　出土土器実測図……21
第29図　A区出土土師器実測図……23～24
第30図　A区出土土師器実測図……23～24

第31図　A区出土布目土器実測図……23～24
第32図　ＳＡ１　出土土錘実測図……23～24
第33図　ＳＺ２　出土土錘実測図……23～24
第34図　ＳＺＩ　出土土錘実測図……23～24
第35図　A区　出土土錘実測図……25～26
第36図　A区　出土須恵器実測図……25～26
第37図　石器実測図……25～26
第38図　砥石実測図……25～26
第39図　ＳＡ１　出土軽石製支脚……25～26
第40図　ＳＡ２　出土鉄製品実測図……25～26

小山尻東遺跡

第１図　グリッド配置図及び礫・集石遺構分布図……　40
第２図　Ｓ１２・３・４・５号……　44
第３図　Ｓ１６・７・８・９号……　45
第４図　出土土器拓影(1)……　48
第５図　出土土器拓影(2)……　49
第６図　出土土器拓影(3)……　50
第７図　出土土器拓影(4)……　51
第８図　出土土器拓影(5)……　52
第９図　出土石器１……　54
第10図　出土石器２……　56
第11図　A地区出土弥生土器実測図……　58
第12図　１号土壙実測図……　59
第13図　１号土壙出土土器実測図……　59
第14図　ＳＡ１　実測図……　60
第15図　ＳＡ１出土土師器(I)……　63
第16図　ＳＡ１　出土土師器(II)……　64
第17図　ＳＡ１　出土土師器(III)……　65
第18図　ＳＡ１　出土土師器(IV)……　66
第19図　ＳＡ１　出土土師器・陶磁実測図(V)……　67
第20図　ＳＡ１　出土須恵器(VI)……　68
第21図　ＳＡ１　出土土錘……　68
第22図　１号集石遺構……　69
第23図　１号集石遺構実測図出土石臼・板碑実測図……　70

田上遺跡

第１図　土層実測図……　81
第２図　Ｓ１１・２・３遺構実測図……　83
第３図　Ｓ１４・５・６遺構実測図……　84
第４図　Ｓ１７・８遺構実測図……　85
第５図　集石遺構分布図……　86
第６図　出土縄文土器実測図・拓影(1)……　89
第７図　出土縄文土器実測図・拓影(2)……　90
第８図　出土縄文土器実測図・拓影(3)……　91
第９図　土器分布図……　91
第９図　石器実測図(1)……　93
第10図　石器実測図(2)……　95
第11図　石器実測図(3)……　95
第12図　石器出土分布図……　96
第13図　ＳＣ１遺構実測図および出土器物実測図……　98
第14図　その他の遺物実測図(1)……　99
第15図　その他の遺物実測図(2)……　99

赤坂遺跡

第１図　周辺の地形図……　106
第２図　遺構分布図……　107
第３図　Ｓ１２実測図……　108
第４図　縄文時代遺物分布状況図……　108
第５図　縄文時代遺物実測図……　109
第６図　石器実測図……　110
第７図　古墳時代遺物実測図……　111
第８図　平安時代遺物分布状況図……　112
第９図　ＳＡ１実測図……　113
第10図　ＳＢ１・２実測図……　114
第11図　平安時代遺物実測図……　115
第12図　平安時代遺物実測図……　116
第13図　平安時代遺物実測図……　117
第14図　平安時代遺物実測図……　118
第15図　平安時代遺物実測図……　119
第16図　ＳＥ１　土壙実測図……　120

小山尻西遺跡

第１図　土層断面図……　126
第２図　大乗妙典供養碑塚周辺地形図……　127
第３図　羽込部形状模式図……　128
第４図　大乗妙典供養塚図……　129
第５図　大乗妙典供養大永六年板碑実測図……　130
第６図　Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ板碑実測図……　131
第７図　出土遺物実測図……　133

図　版　目　次

図版1　下田畑遺跡(1)　下田畑遺跡遠景（南東より）
A区遺物出土状況（北東より）
図版2　下田畑遺跡(2)　東からSB2・SB3（南西より）
東からSB1・SB4・SB5（南西より）
図版3　下田畑遺跡(3)　SB7（南東より）
SE1　セクション
図版4　下田畑遺跡(4)　SA2遺物出土状況（南西より）
SA2（北西より）
図版5　下田畑遺跡(5)　SA2　東カマド（西より）
SA2　東カマド（西より）
図版6　下田畑遺跡(6)　縄文土器(1)
図版7　下田畑遺跡(7)　縄文土器(2)
図版8　下田畑遺跡(8)　縄文土器・石器・弥生土器
図版9　下田畑遺跡(9)　弥生土器・土師器
図版10　下田畑遺跡(10)　布痕土器・須恵器・軽石製支脚
図版11　小山尻東遺跡(1)　小山尻東遺跡遠景
小山尻東遺跡近景
図版12　小山尻東遺跡(2)　集石遺構写真（7・8・9号）
図版13　小山尻東遺跡(3)　縄文土器写真1
図版14　小山尻東遺跡(4)　縄文土器写真2
図版15　小山尻東遺跡(5)　土器・石器
図版16　小山尻東遺跡(6)　石　器
図版17　小山尻東遺跡(7)　環状石斧出土状況
SC1
図版18　小山尻東遺跡(8)　SA1
SI1
図版19　小山尻東遺跡(9)　SC1　出土土師器
SA1　出土土師器
SC1　出土石臼
SA1　出土土錘
図版20　田上遺跡(1)　北　小山尻東遺跡・南　田上遺跡近景（西より）
SI2（南より）
図版21　田上遺跡(2)　A－1類出土状況
底2類出土状況
図版22　田上遺跡(3)　出土縄文土器(1)
図版23　田上遺跡(4)　出土縄文器(2)
出土石器
SC1　出土土師器
図版24　赤坂遺跡(1)　礫分布状況（北西より）
SI1・2・3検出状況（北より）
図版25　赤坂遺跡(2)　SI2（東より）
古墳時代遺物出土状況(北より)
図版26　赤坂遺跡(3)　SB1・2（西より）
SA1　遺物出土状況（西より）
図版27　赤坂遺跡(4)　SA1　カマド（西より）
SA1　「大」の字刻字のある土師器出土状況（北西より）
図版28　赤坂遺跡(5)　SE1（北より）
SE1　土層（南より）
図版29　赤坂遺跡(6)　縄文・古墳・平安時代遺物
図版30　赤坂遺跡(7)　平安時代遺物
図版31　小山尻西遺跡(1)　大乗妙典供養塔近景
大乗妙典供養碑基部付近
図版32　小山尻西遺跡(2)　S2・N1トレンチ・遺物出土状況
図版33　小山尻西遺跡(3)　出土遺物

表　目　次

下田畑遺跡

表1　縄文土器観察表…… 30
表2　弥生土器観察表…… 33
表3　土師器・須恵器観察表…… 34
表4　石器計測表…… 37
表5　掘立柱建物跡一覧表…… 37
表6　土壙法量表…… 37

小山尻東遺跡

表1　土師器法量表…… 61
表2　ＳＡ１出土土師器坏分類図…… 61
表3　縄文土器観察表…… 72
表4　ＳＡ１出土土器観察表…… 76
表5　ＳＡ１出土土師観察表…… 79

田上遺跡

表1　石器計測表…… 93
表2　縄文土器観察表…… 102

赤坂遺跡

表1　土器観察表…… 121

小山尻西遺跡

表1　宮崎県内経典供養碑一覧表…… 136

付図1　下田畑・小山尻東・田上・小山尻西遺跡位置図
付図2　下田畑遺跡遺構分布図

第 I 章　序　　説

第1節　調査に至る経緯と経過

昭和56年11月19日から昭和57年3月30日までの間，福祉施設建設予定地造成に先立ち，工事用取り付け道路等の必要から赤坂遺跡（7号地）の発掘調査が要請され，県文化課において調査を実施したが，本報告に収録するその他の遺跡群は農業高校建設予定地として造成が計画された地域に所在するものである。造成に先立つ発掘調査を急ぐとの学園都市建設局及び地域振興整備公団の要請から，調査期間は昭和58年度から59年度にまたがり，第1期の調査は下田畑，小山尻東遺跡の一部を昭和59年2月29日から3月31日まで，第2期の調査で第1期の継続と田上遺跡，小山尻西石塔群の発掘を昭和59年4月5日から6月30日まで実施した。

第2節　調査の組織

発掘調査委員会および調査事務局の組織は，次のとおりである。

特別調査員　藤原宏志　宮崎大学助教授
町田　洋　東京都立大学助教授

事務局　宮崎県教育委員会

教育長　後藤賢三郎（昭和56～59年度）

教育次長　甲斐俊則（昭和56年度），内田琢也（昭和57・58年度），兼田克己（昭和59年度）

教育次長　船木　哲（昭和56～59年度）

文化課長　山本一廣（昭和56年度），井上鉄哉（昭和57・58年度），平田和彦（昭和59年度）

課長補佐　村田広則（昭和56年度），佐野芳弘（昭和57・58年度），成見　実（昭和59年度）

庶務係長　島中　勲（昭和56・57年度），安部信宏（昭和58・59年度）

主任主事　穂之上　昇（昭和56～58年度），井野伸一（昭和59年度）

文化財係長　山下正明（昭和56年度まで）

主幹兼埋蔵文化財係長　田中　茂（昭和57～59年度）

（調査員）

岩永哲夫（昭和56～58年度），面高哲郎（昭和56～59年度），永友良典（昭和56～59年度），長津宗重（昭和57～59年度），北郷泰道（昭和56～59年度），近藤　協（昭和59年度），曽付和樹（昭和56～59年度），日高孝治（昭和57～59年度），谷口武範（昭和57～59年度）

調査協力　清武町教育委員会

調査補助員　永友加奈子，長友三千夫

埋蔵文化財センター整理専門員　津隈久美子

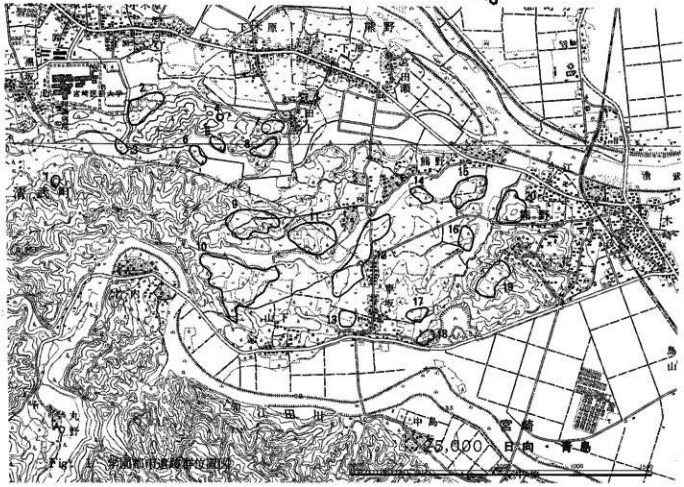
整理補助員　増田慈子，酒井晴子，日野美智子（昭和58年度まで）

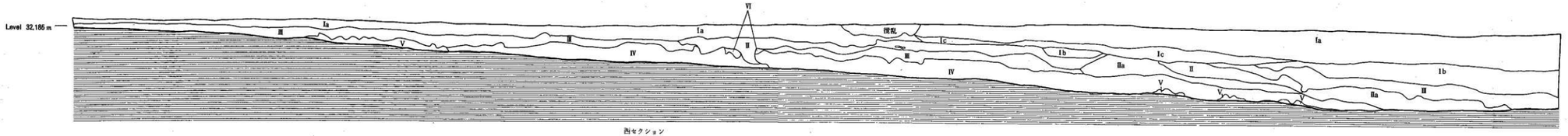
整理員（昭和56・59年度）　藤丸美代子，渡辺　祥子，菊野　悦子，鳥越　智子，荒武　望恵，荒木　慶子，荒木真由美，加藤　泰子，富永　優子，橋本真智子，松岡　邦子，清水　玲子，永峰まり子，竹島　典江，川崎　法子，高山　幸子，田原　辰子，金丸　琴路，西　洋子，丸山　直子，佐々木ゆみ子，

溝口ふさ子，野村　凉子，長沼　幸子，斉藤　保子，追坪千代子，金井　裕子，東　えり子

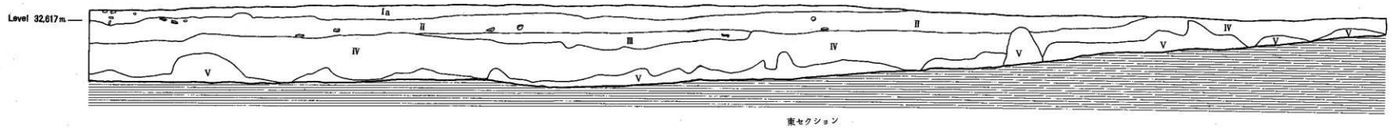
（北郷泰道）

1. 山内石塔群（23号地）
2. 下田畑遺跡（1号地）
3. 赤坂遺跡（7号地）
4. 小山尻西石塔群（8号地）
5. 浦田遺跡（4号地）
6. 入料遺跡（5号地）
7. 小山尻東遺跡（2号地）
8. 田上遺跡（3号地）
9. 堂地西遺跡（9号地）
10. 平畑遺跡（10号地）
11. 堂地東遺跡（11号地）
12. 熊野原遺跡（14号地）
13. 犬馬場遺跡（13号地）
14. 前原西遺跡（15・16号地）
15. 前原北遺跡（20号地）
16. 前原南遺跡（19号地）
17. 陣ノ内遺跡（18号地）
18. 車坂城跡
19. 木花遺跡（21号地）
20. 今江城（仮称）跡

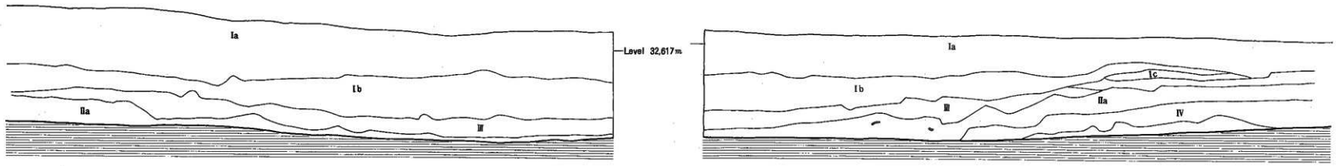


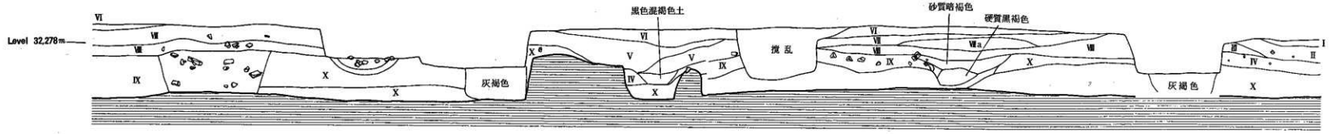


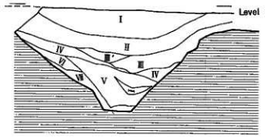
西セクション



東セクション







第1図　土層断面実測図

第Ⅱ章　下田畑遺跡の調査

第１節　遺跡の立地と環境

下田畑遺跡は，学園都市建設予定地内の北西端部に位置し，標高35mから32mの丘陵縁辺に営なまれた縄文時代早・前期，弥生時代，平安時代に及ぶ複合遺跡である。地形的には，西に隣接する宮崎医科大学敷地と一連で北に傾斜をもち，現況は段々畑に開削され，遺構，遺物の検出はその最上段部に限られた形となったが，最下段の現水田面に至る傾斜面上に遺跡は広がっていたものと思われる。

（北郷泰道）

第２節　調査の経過および概要

下田畑遺跡は宮崎郡清武町大字木原字下田畑に所在する。宮崎学園都市遺跡群内の農業高校開発予定地内の調査として昭和59年２月29日より６月30日まで発掘調査を行った。

本遺跡は昭和56年に行なわれた事前調査や近接地における道路拡幅工事の立会い調査等によりアカホヤ層上位に黒色土層が存在し，また下位の硬質褐色土層よりは焼石が出土することが確認されていた。

調査は調査区内をＡ・Ｂに分けて行った。Ａ区においてはまず重機により表土を除去した後，土層確認の為の土手を２ヶ所南北方向に残しながら掘り下げを行った。その結果アカホヤ層の上層より縄文時代前期の曽畑式土器の包含層，その上位には古代（平安時代）を主とする包含層が確認されたが，同様な黒色土層内であったため平面的に識別することは困難であった。そのため，遺物の分布状況を平板測量で実測を行いながら，遺構検出面（アカホヤ層）まで掘り下げを行った。その結果Ａ区において，遺構としては古代（平安時代）の掘立柱建物跡７軒，カマド付竪穴住居跡２軒，土拡１基及び土器集積遺構と弥生時代の土拡１基が確認された。また主な遺物としては，土師器，須恵器弥生土器および縄文時代前期の曽畑式土器が出土している。

また，アカホヤ層上面の遺構確認後，アカホヤ層下位の遺構，遺物に関する調査を行った。まず，重機により無遺物層であるアカホヤ層を除去した後，掘り下げを行った。アカホヤ層直下には，硬質黒色土層が存在したが無遺物層であった。その下位の硬質褐色土層より，焼石と縄文土器（塞ノ神式土器）および石器等の散布が見られた。しかし焼石の散布状況は集石として確認しえるものではなかった。またその他の遺構は平面的には確認しえなかったが，土層断面より数ケ所の掘り込みが確認されている。またその下層よりはナイフ形石器が１点出土している。

Ｂ区は原地形が東から西へ傾斜しており，西側の部分ではかなりの量の黒色土層の堆積が認められたが，遺構，遺物は少量確認された程度であった。しかし東側の部分において若干の削平は受けていたが，アカホヤ層上面において弥生時代の竪穴住居跡が１軒確認されている。

（日高孝治）

第３節　層　　位

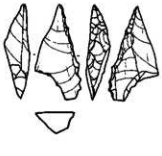
約20cmの表土層を除去した後の，下田畑遺跡における基本層序は次のとおりである（第１図）。

土層は，黒褐色土層で文明の火山灰に起源すると思われる白黄色の火山灰を含み，その混入の状態によってさらに細分出来る。Ⅱ層は，暗褐色土層で土器片を包含しはじめ，Ⅲ層は，黒褐色土層でこの層中から竪穴住居跡及び掘立柱建物跡の掘り込みが存在するが，その明瞭な把握は困難であった。Ⅳ層の黒色土層は，縄文時代から古代にかけての土層といえるが，本遺跡においては，縄文前期の曽畑式土器を下層に包含しただけである。Ⅴ層からアカホヤの混入がはじまり，Ⅵ層が6,300 B.P.年といわれるアカホヤ火山灰層である。

アカホヤ火山灰層下のⅦ層は，硬質黒色土層でこの中にはほとんど遺物が混入されることがない。塞ノ神式土器を包含するのは，Ⅷ層の硬質黒褐色土層であり，集石遺構等のこの時期の遺構はⅨ層の硬質褐色土層に掘り込まれる。

X層の黄褐色土層が旧石器時代の層といえるが，その面的な遺物の広がりはとらえられている。さらに，その下のXI層は，姶良Tn火山灰層に相当するようである。

（北郷泰道）



第2図　ナイフ形石器実測図

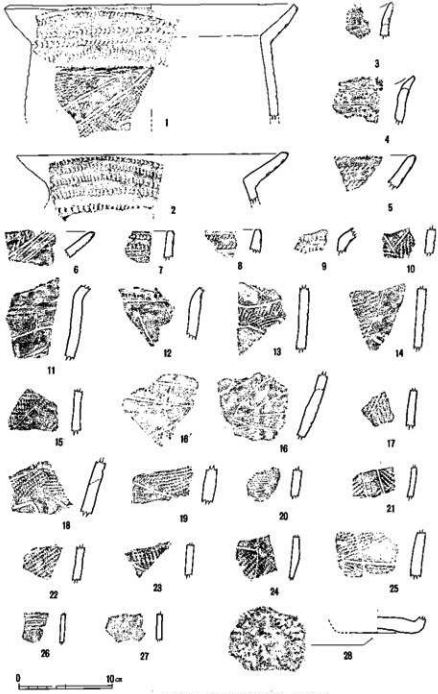
第4節　各時代の遺構と遺物

1. 旧石器時代

明確な旧石器時代の包含層は確認されなかったが，ナイフ形石器が，IX層下層で出土している。ナイフ形石器は，硬砂岩を素材とする横長剥片を使用した長さ3.7 cm 最大厚0.9 cmのものである。刃部の背面には刃潰し加工が施されている。

2. 縄文時代

縄文時代の遺物は，アカホヤ火山灰層を挟む上下層から出土している。アカホヤ層の下層から出土したものは塞ノ神式土器を中心とするもので，上層から出土したものは曽畑式土器を中心とするものである。他に石器類として石鏃，スクレイパー，磨石などがある。

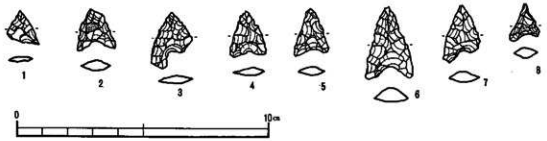


第3図　縄文土器実測図・拓影(1)

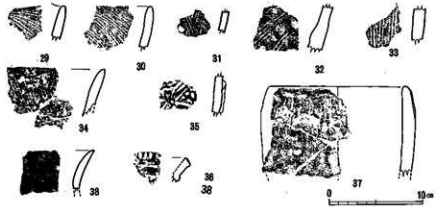
塞ノ神式土器（第3図）

VIII層から礫群に伴って出土しているが，礫群の中には明瞭な集石遺構といわれるものは確認されていない。塞ノ神式土器は，撚糸文・縄紋施文を中心とするもので貝殻文系のものは含まれていない。

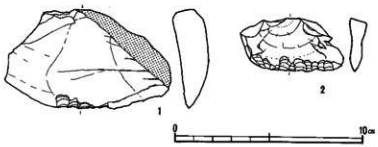
1・2・5・6などは大きく「く」字形に外反する口縁部をもち，口縁部の文様帯は刺突文を主体としている。3・4・12は同一個体と思われるが，全体に作りは粗く16・16'と共に他の土器類と異質な印象を与えるものである。それは，文様の施文にも指摘されることで，沈線文で区画された中に縄紋を施文するが，同じ文様構成をもつ13・14・18などの沈線の区画線が直線的にはっきりしている



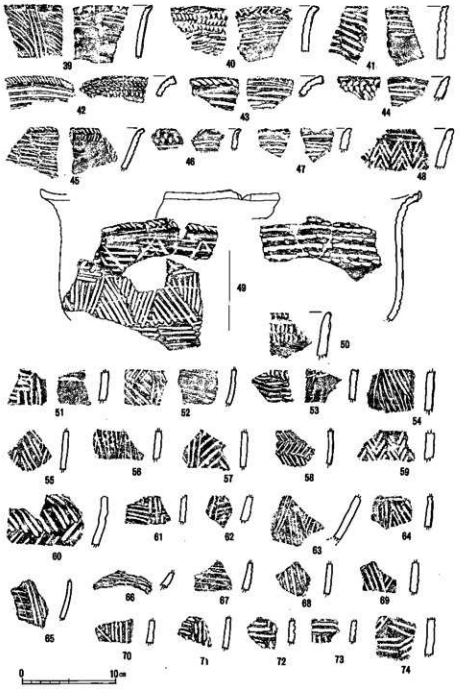
第4図　石鏃実測図



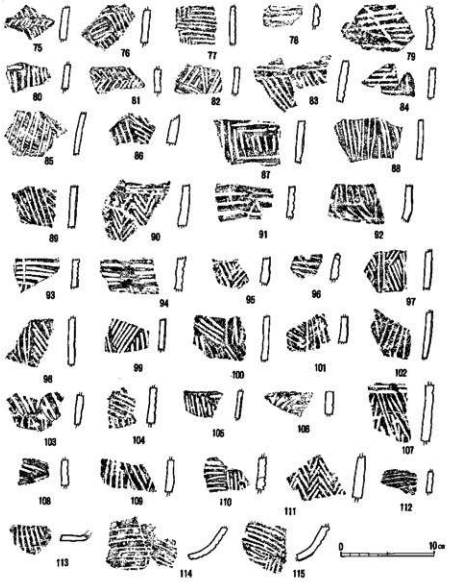
第5図　縄文土器実測図・拓影(2)



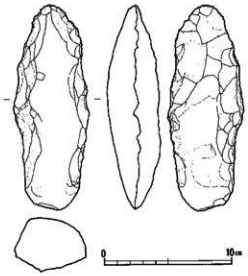
第8図　スクレイパー実測図



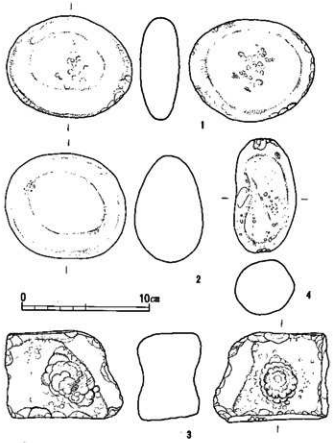
第6図　縄文土器実測図・拓影(3)



第7図　縄文実測図・拓影(4)



第9図　石斧実測図



第10図　石器実測図

のに対し，曲線を帯び粗雑な施文となっている。

これらに対し24・26は，撚紋・縄紋を地文とし，その上に沈線文を重ねるもので，この類は少ない。

一方，胎土については，14・15・19に金雲母が含まれるほかは，長石・石英を中心とするものに角閃石が半数の土器片に含まれるというのが全体的な傾向といえる。

貝殻条痕文土器（第5図29～34）

同じくアカホヤ下層から少数であるが貝殻条痕文土器が出土している。29は山形口縁を成すと思われる口縁部片である。他の口縁は平口縁である。胎土には，塞ノ神式土器でみられた金雲母を含むものはみられない。

平栓式土器（第5図35・36）

貼付け突帯文あるいは刺突文をもつ類で，わずか2点の出土である。他の施文は，沈線文，刺突文の組み合せで，突帯文を貼り付け，その上にも刺突を施している。

円筒土器（第5図37）

砂質の強い胎土を用いた脆い土器で，風化が進んでいるが，長さ約4㎝のへら先による極細の沈線を縦方向に1㎝程の間隔で施文する。復元口径は14㎝を測る。

曽畑式土器（第6・7図）

アカホヤ火山灰層上層から出土し，包含された層はアカホヤの土壌化した土層である。

また，ＳＢ4の北東に長軸約1.9m，短軸約0.9mのやや輪郭のくずれた掘り込みが検出され，曽畑式土器の集中した出土がみられた。

口縁部の形状は，おおむね二類に分けることが出来，短かく「く」字形に外反する42・43・49と，口縁端部まで直線的ないしは端部のみが小さく屈曲するものとに分けられる。また，口縁部に施文される文様要素は，刺突文と短線列文で，50を除き表裏面に施文はみられる。49はこの類の破片としては最も大きく全体形をうかがい知ることの出来る資料であるが，外反する口縁から胴部は直立し，その下部で屈曲し底部を形成するものと思われ，丸底の底部が推定される。底部の資料は，113～115に見ることが出来る。

胴部への文様の構成は，短かい沈線文を鋸歯状，綾杉状，菱形状，「口」字状に施すなど単一の施文要素を用いての多様性が示されているといえる。

全体に焼成は悪く，色調も褐色系のものを中心としている。胎土については，43・63・67に金雲母が含まれ，その他は長石・石英・角閃石を含むもので，胎土の様相としては塞ノ神式土器に共通しているといえる。

石　器

（第4図）

石鏃は8点出土している。1が正三角形状を呈するほかは，おおむね二等辺三角形状を呈する。3が基部の抉りが狭く特徴的な脚部を整形するのに対し，ほかは基部が両脇からゆるやかに抉りを整形するものとなっている。

素材とする石は，チャートと黒曜石に二分されるが，黒曜石はさらに気泡の多い白濁したもの（2，5）と透明度のあるもの（8）とを判別することが出来る。

スクレイパー（第８図）

１は硬砂岩，２は白濁した黒曜石を素材としている。１には表裏の剥離の際の打撃面にはさまれた箇所に自然面が残されており，剥離によって形成された鋭利な部分をそのまゝ刃部として使用している。長軸5.4cm，2.8cm，厚さ0.9cmを測る。

２は表裏とも同じ面を打撃面に使用し，ポジティブな面とネガティブな面が表裏を成している。刃部にはさらに細かい調整剥離が加えられている。長軸8.8cm，短軸5.3cm，厚さ1.9cmを測る。

石　斧（第９図）

長さ16.0cm，幅5.9cm，厚さ4.0cmを測る打製石斧である。片面には一部自然面を残している。

凹石・磨石・敲石（第10図）

３の凹石は，ＳＢ１のピットから出土している。長軸9.1cm，短軸6.8cm，厚さ4.9cmを測り，両側に凹みがつけられている。１は長軸9.7cm，２は長軸9.5cmをおのおの測る磨石で，４は長軸8.8cmを測る敲石で長軸両端が使用されている。

3. 弥生時代

遺跡地の東半Ｂ区では，弥生時代の遺構が検出されたが，北に続いたであろう丘陵は早くから開削されており，まだ多くの遺構が北に延びる丘陵上に存在した可能性がある。現況地形の中で確認されたのは，竪穴住居跡１と掘り込みの全体は削平のため不明瞭であったが竪穴住居跡の床面の残存と思われる土器片の集中した箇所が１箇所認められた。前者をＳＡ４後者をＳＡ５として記述を進める。

ＳＡ４（第15図）

南辺に約１mの幅広の住居跡内部への張り出し部を掘り残すタイプの竪穴住居跡である。全体形は長方形を呈し，東西の長辺で6.3m，南北の短辺で4.3mを測る。現在の壁面での最深は35cmを測る。柱穴は明確ではないが東西の２本柱が考えられ，東側の１穴は確実であるが，西側の柱穴ははっきりとした掘り込みを作らなかったものとみられる。

弥生土器（第11・12図）

甕形土器が主なもので，突帯文土器が特徴である。１はタガ状の突出した大きめの突帯を貼り付けるもので，突帯端は上向きに成形されている。口縁部への屈曲はルーズで，内面にも陵を作らない。口唇部は中凹みを呈する。こうした大型の甕形土器に対して，10・11は小型の屈折する口縁部をもつ突帯文土器で，14～18は下城式の刻目突帯文土器である。

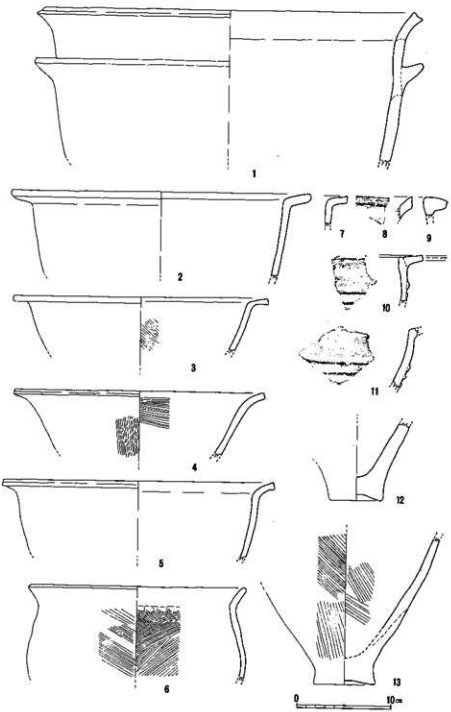
９の口縁端に突帯を貼り付けるタイプは１点のみ出土している。

また，19は壺形土器の胴部の突帯文部と思われる。

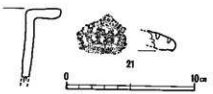
その他の弥生土器（第13・14図）

ＳＡ４の南西に輪郭が不明ながら弥生土器の若干の集中がみられた。第13図20は，ほぼ直角に屈折する甕形土器の口縁で，21は刻突をもつ脚部片である。

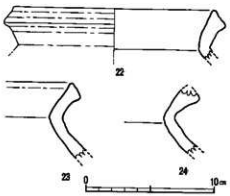
また，Ａ区ＳＢ３の西方に，撹乱された掘り込みがあり，第14図22～24が出土したが，22に明瞭にみるように二



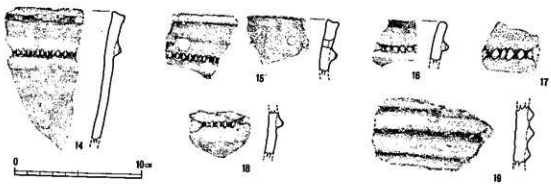
第11図　SA4　出土弥生土器実測図・拓影 (1)



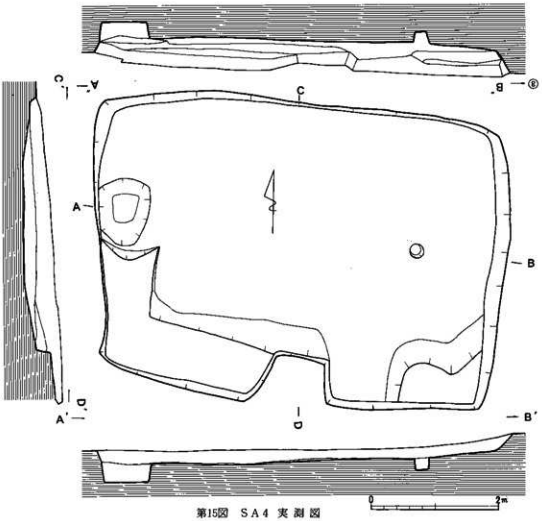
第13図　SA5　出土弥生土器実測図・拓影



第14図　A区　出土弥生土器実測図



第12図　SA4　出土弥生土器実測図・拓影 (2)



第15図　SA4 実測図

条の凹線を口唇部に施す口縁部片である。

（北郷泰道）

4. 平安時代

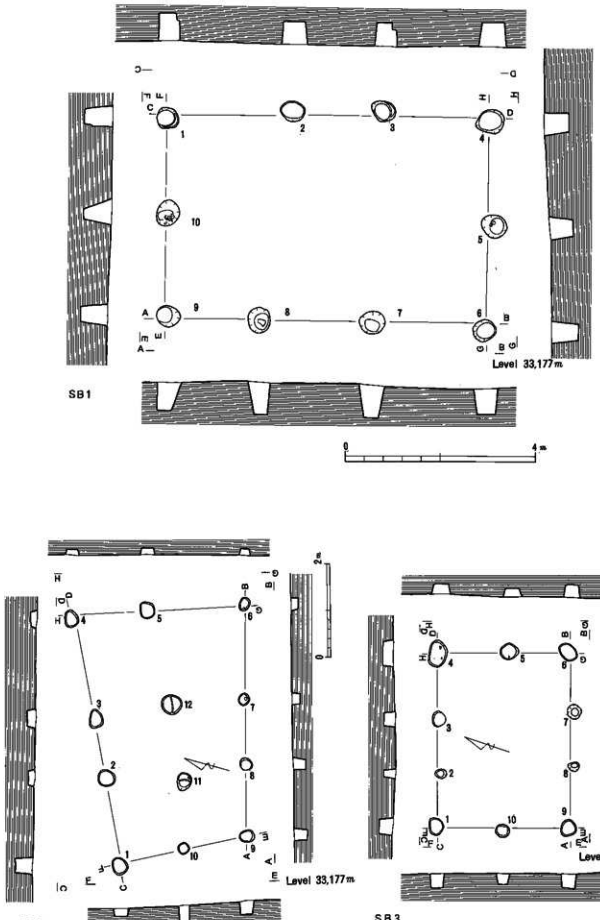
本遺跡においては，A区でアカホヤの上層より平安時代に相当する遺構および遺物が確認された。層位的にはアカホヤ上層より出土した曽畑式土器の包含層より上層に包含層があると考えられるが，黒色土層内での識別は困難であったため，包含層内出土遺物については，平板測量により分布状況を実測しながら掘り下げアカホヤ面において遺構確認を行った。

遺　構

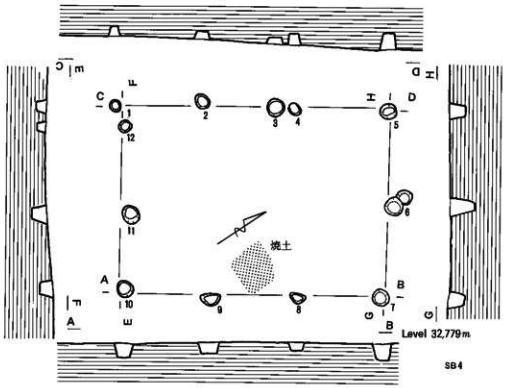
遺構としては，掘立柱建物跡（ＳＢ）～７軒，カマド付竪穴住居跡（ＳＡ）～２軒，土拡（ＳＣ）１基，溝状遺構（ＳＥ），性格不明（土器集積）（ＳＺ）およびピット群が確認されている。

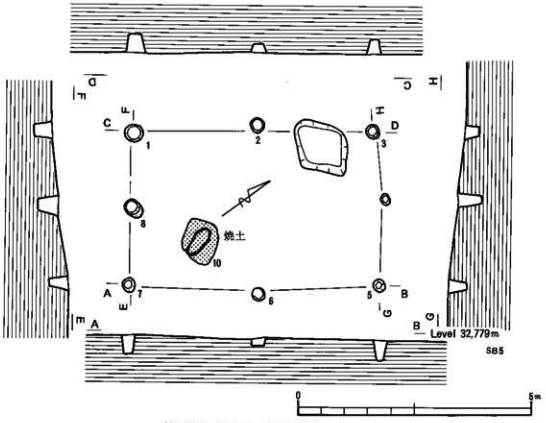
掘立柱建物跡　（第16～第18図）

掘立柱建物跡は全部で７軒確認されている。規模及び主軸方向は表５にしめす通りである。全体的に見ると規格は３間×２間と２間×２間の２種類があり，規模としてはＳＢ１が7.0m×4.4mと最大でＳＢ３が3.8m×2.8mで最小となり，その他は桁行５m前後×梁行3.5mが前後に集約される。また柱間寸法は2.6m（約９尺）～1.2m（約

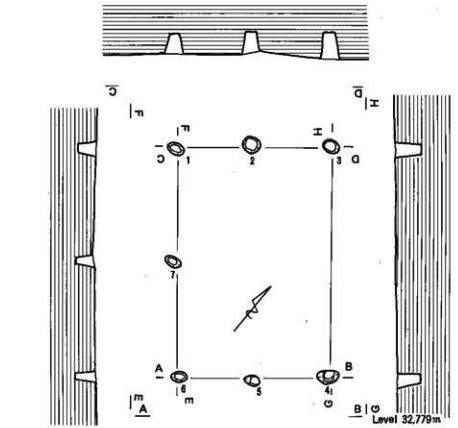


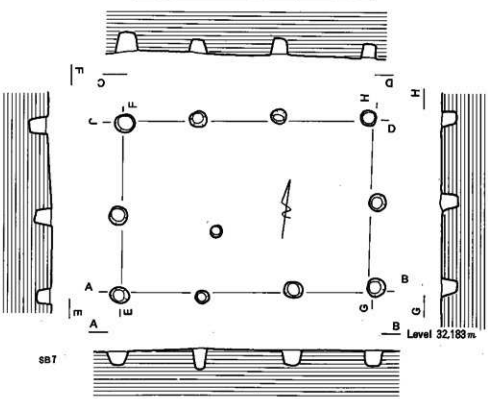
第16図　SB1・2・3 実測図





第17図　SB4・5 実測図





0 5m

第18図　SB６・７ 実測図

4尺）まで各種存在している。主軸方向はＳＢ６を除いて東へ向いている。またＳＢ２は総柱建物であり，廂を有する建物は存在していない。ＳＢ４・５には建物内にカマドまたは炉になると思われる焼土の盛上った遺構が存在した。全体的に調査区内の中央部に広場を設ける格好でやや周辺部に分布しているという状況である。尚，掘立柱建物の切り合い関係は認められなかった。

竪穴住居跡

ＳＡ１（第19図）

ＳＡ１は調査区の北東，ＳＢ２・３とＳＢ７のほぼ中間に位置する竪穴住居跡である。方形プランを呈し，規模は５ｍ（南北）×4.5ｍ（東西）を計る。検出面からの深さは約30cmである。東・西・北壁にそれぞれカマドを有し屋外に煙道が延びている。

西カマドは西壁のほぼ中央部に位置し，カマド部分は直径80cmの浅い掘り込みを有し，長さ１ｍ，幅50cmの煙道が屋外へ延びており煙道の先端には直径45cm深さ70cmの煙出し部分を有する。

北カマドは北壁のほぼ中央部に位置する。カマド部分は直径１ｍの浅い掘り込みを有し，掘り込み内には両側に直径25cm程度の浅いピットが存在する。これは，北カマド付近より出土している軽石製支脚を立てるためのものであろうと思われる。煙道は長さ１ｍ，幅50cmを計りその先端に直径40cm深さ70cmの煙出し部分を有する。

東カマドは東壁の中央からやや北よりに位置しており，カマド部分は50cm×70cmの楕円形状の掘り込みを有しており煙道入口付近には両側より軽石製の支脚が出土している。煙道は長さ1.1ｍ，幅50cmを計りその先端には直径40cm，深さ60cmの煙出し部分を有する。これは西・北カマドと同様であるが，東カマドは煙道の両壁に沿って偏平な石が立ててあり，１ケ所その上から偏平な石で蓋をしている状態が検出されたので，もともとは煙道には石蓋がなされていたものと思われる。その構造や検出状況から考えて，北カマドを廃棄した後に東カマドを構築したものと思われる。住居跡内にはピットは４個確認されている。

住居内からは，土師器（坏・甕）・布痕土器・須恵器・石製品（軽石製支脚・砥石）が出土している。分布は東カマド付近に集中している。遺物の中には坏の外底に「宅」の字を墨書してある土器が出土している。

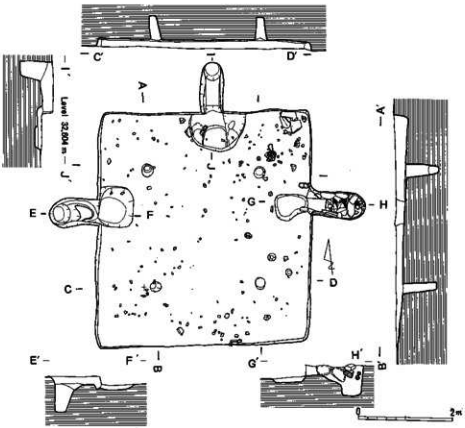
ＳＡ２（第20図）

ＳＡ２は調査区の南端に検出された竪穴住居跡である。方形プランを呈し4.4ｍ（南北）×4.5ｍ（東西）を計り，検出面からの深さは約50cmである。ピットは全部で６個確認されている。

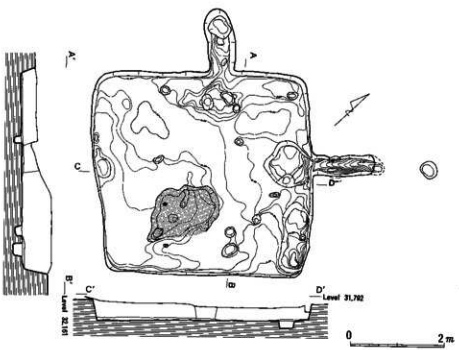
この住居跡はＳＡ１と同様に北と東の壁にカマドを有するものである。

北カマドは北壁の中央よりやや東側に位置しており，カマド部分には直径60cmの浅い掘り込みがある。その両側には直径10cm程度のピットが存在する。屋外には長さ1.4ｍ幅60cmの煙道が延びており，その先端には直径60cmの煙出し部分がある。煙出しはＳＡ１で見られるようなピット状に深くほりこんだものではなく，煙道より若干凹む程度のものである。埋土は明灰白色粘質土で床面付近は明茶褐色の焼土が存在した。

東カマドは東壁の中央よりやや北に位置する。カマド部分は直径90cmの浅い掘り込みを呈しその両側には直径30cmのピットが存在する。屋外には長さ1.5ｍ，幅50cmの煙道がのびている。煙道は入り口部分よりなだらかに下降しながら煙出し部分に至る。またその間は両側に偏平な石を立ててその上を同様な石で蓋をする構造である。また煙突部には底部が欠如した土師器（甕）を３つ重ねた状態で使用していた。その中には，使用時から入っていたものであるか廃棄時に入れられたものか不明であるが，第21図にみられるように石が詰っていた。また煙道部の最先端には，煙突に使用されたと同様の甕が横倒しにして置かれていた。灰だまりであったと思われ甕の内面には多量のススの付着が見られた。また，煙道の石蓋の上面や煙突の周囲には明灰白色粘質土が薄くではあるが確認できた。

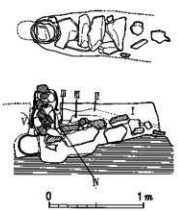


第19図　SA1 実測図



第20図　SA2 実測図

Ⅰ層～暗褐色土層
Ⅱ層～暗褐色土層（軟質）
Ⅲ層～暗褐色土層（粘性あり）
Ⅵ層～明灰白色土層（粘質土）
Ⅴ層～明灰白色土層（アカホヤ混）



第21図　SA2 カマド実測図

カマドの構造としては北・東カマドともＳＡ１とほぼ同様の形態を示すと思われるが，ＳＡ１のような軽石製支脚は出土しておらず，他になんらかの支脚を用いたと思われる。

北カマドと東カマドはその残存状況より見て，北カマドが廃棄された後東カマドが構築され使用されたものと思われる。

また，住居内の西南の部分において焼土の集中がみられたが，浅い掘り込みを呈するのみで構造は不明である。

出土遺物としては，煙突として使用されていた土師器・甕をはじめとして，皿や黒色土器（内黒）や布痕土器，須恵器及び鉄器等が出土している。（第25・26図）なかでも28の黒色土器は鉢形を呈している。

ＳＺ１（土器集積）（第22図）

Ａ区の東端，すなわちＳＢ１の東側には土器が集中して出土している箇所が存在した。直径２ｍの範囲に土師器・須恵器が集中して出土しておりその中央部には偏平な石が立った状態で出土している。土器を取り上げると数ケ所の焼土の集中がみられたが，明確な掘り込み等は確認できなかった。ＳＢ１に付随する平カマドの可能性が考えられる。出土遺物には土師器・須恵器などがある。また須恵器の中には気泡が入りこんだようなものも見られ，周辺からは窯壁の付着した同様の須恵器（143）も出土している。

第22図　ＳＺ１遺物出土状況

溝状遺構

調査区の西端を南北に走る溝状遺構が１本検出されている。幅1.5ｍ，を計り検出面からの深さは約50cmである。断面は台形状を呈す。

溝内よりは，土師器，須恵器，縄文土器等が出土している。掘立柱建物，竪穴住居にともなうものと思われる。

遺　物

遺物としては，土師器・須恵器・布痕土器・土錘・石製品及び鉄製品が出土している。

土師器　坏

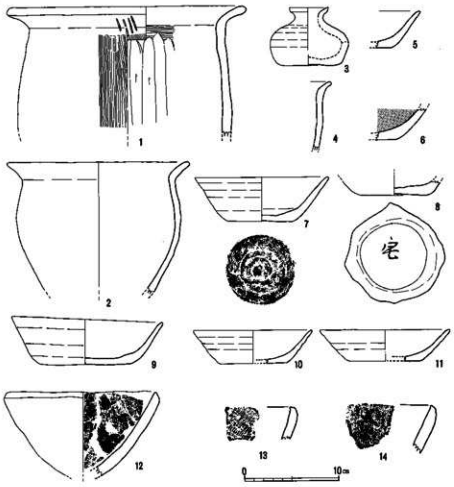
坏は全てヘラ切り底である。ほとんどのものが切り離しの後底部を再調整しており，ヘラ切り痕が明瞭に残っているものは少なかった。形態的特徴（底部より体部への立上りや口縁部の形態）によって数類に分けることができる。尚形態分類は「山内石塔群」の分類に準拠しⅠ類をヘラ切り，Ａ類を坏とし，細分を行う。

Ⅰ－Ａ－１類

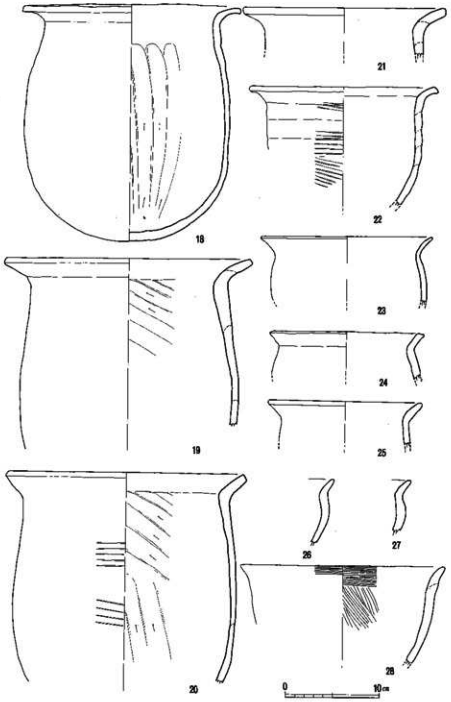
底部と体部の境が明瞭なタイプである。底部は平底で口径12.5 cm～ 14.5 cm，器高3.5 cm～ 4.6 cm底径７cm～ 8.6 cmを計る。口縁部の形態によりさらに２類に細分できる。

１ａ～直線的ないしは内湾ぎみに立上りそのまま口縁部へ至るもの。(52，69，73，75，76，78，83，88，90)

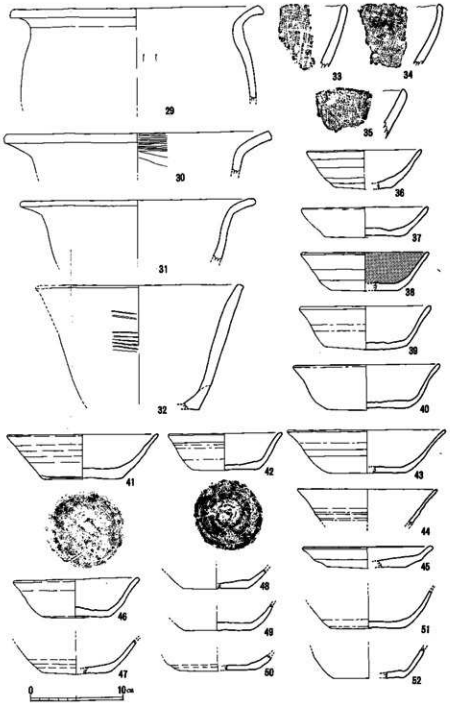
１ｂ～直線的に立上り口縁部付近で外反するもの。（39，46，55，70，72，77，85)



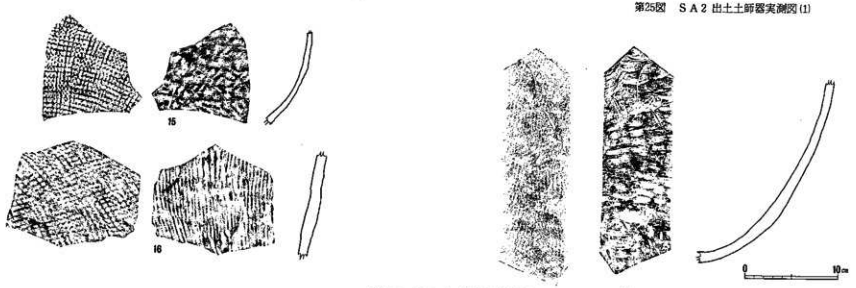
第23図　SA1　出土土師器実測図



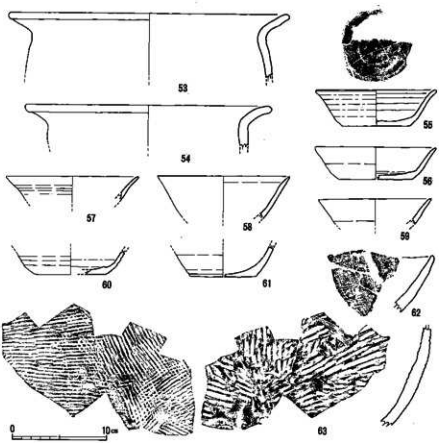
第25図　SA2　出土土師器実測図(1)



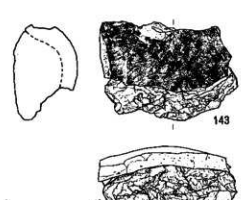
第26図　SA2　出土土師器実測図(2)



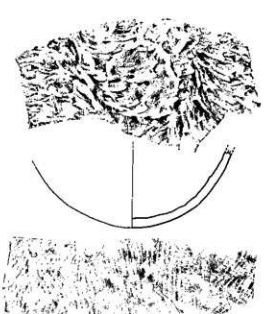
第24図　SA1　出土須恵器実測図



第27図　ＳＺ１出土土師器・須恵器実測図



第27図－２　ＳＺ１出土須恵器実測図



第28図　ＳＢ１出土土器実測図

a・b 類ともに焼成・胎土及び内面の形態によりさらに細分される可能性がある。

Ⅰ－A－2類

底部と体部の境が丸味を持つタイプである。底部は平底で口径17.0 cm～12.4 cm，器高3.6 cm～4.8 cm，底部7 cm～8.5 cmを計る。これも1類同様口縁部の形態により2類に細分できる。

2a～直線的ないしは内湾ぎみに立上りそのまま口縁部へ至るもの。(7，8，9，10，11，37，41，61，66，68，71，74，84，87，91)

2b～直線的に立上り口縁部付近で外反するもの。(40，65)

さらに，2a類は法量的に2類に細分できる。

土師器・皿(45，80，81)

坏以外に皿と呼べるものが出土している。法量的にいうと器高が3cm以下で口径13.4cm～13.8cmを計る。56はSA3出土である。底部がていねいに仕上げられている。体部の中半で段を持ちそれから外反するタイプである。79，80は同タイプである。若干丸味をもった底部より直線的に口縁部まで立上るタイプである。焼成は良好で堅く焼き締っている。

甕類

土師器の甕類は，坏についで多くの出土があった。これらの甕は口縁部片が多いため全体的な器形は不明な部分が多いが，口縁部や胴部の形態等によって分類を行いたい。

まず口縁部の径の大きさによって，口縁径20cm以下を小型（Ⅰ類），20cm以上を大型（Ⅱ類）として分け，それぞれに対して分類を行った。

Ⅰ－a類（2，23)

頸部がくびれ胴部が張り口縁部ないしは胴部中半に最大径を有するタイプ。口縁部はシャープで内外面ともナデ調整である。薄手である。

Ⅰ－b類　(24，101)

胴部の張りはa類と同様であるが，頸部が丸味をおびて外反し口縁部は丸ないし角を呈する。内側ヘラケズリが施されている。薄手である。

Ⅰ－c類（22，25)

頸部が丸味をおびて外反する。胴部は直線的に下降する。口縁端部は丸ないし角を呈する。内面はヘラケズリが施され，外面はタタキを行った後その上をナデ消している。厚手である。

Ⅱ－a類　(53，54，93，99)

頸部がしまり胴部が張り，口縁ないしは胴部中半に最大径を有するタイプである。内外面ともナデ調整である。

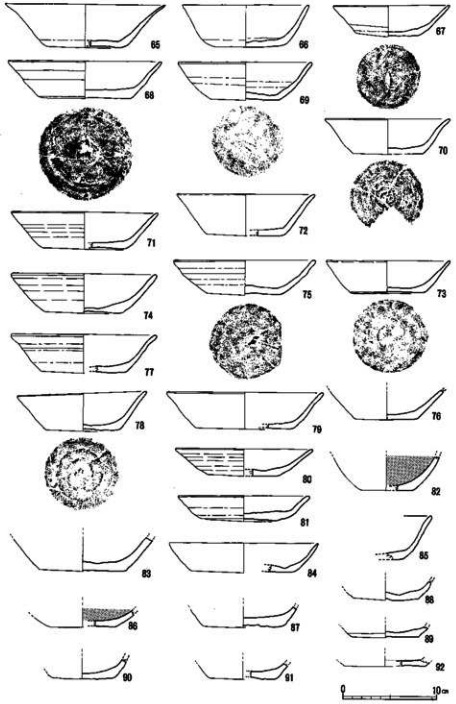
Ⅱ－a'類（95)

Ⅱ－a類と同類と思われるが頸部がくびれず外湾するタイプ

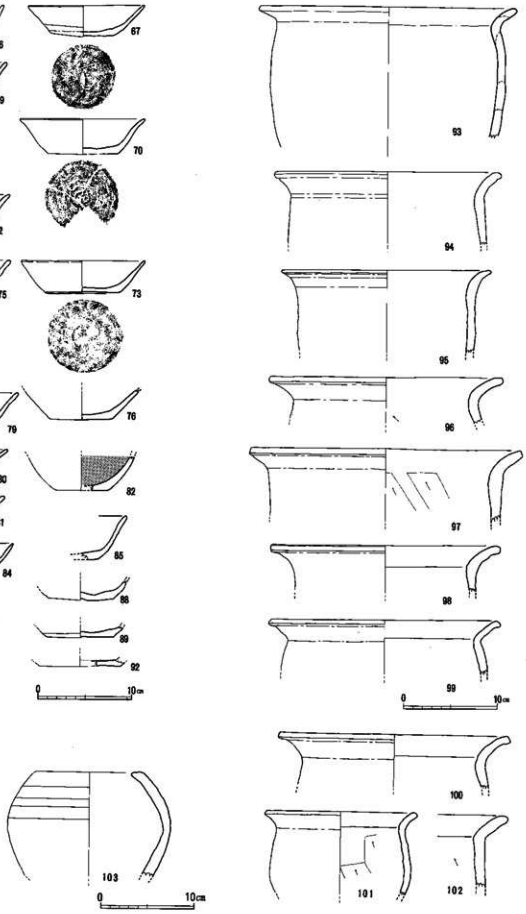
Ⅱ－b類（1，18，19，20，29，94，97，98，100)

頸部が丸味をおびて外反し，胴部は直線的にやや開きながら下降し最大径を胴部中半ないしそれ以下にもつタイプである。外面はハケ，ナデと各種ある。内面ヘラケズリを施す。

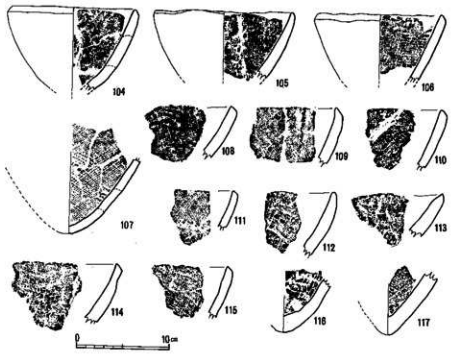
以上おおまかな形態分類を行った。まだ口縁部の形態などの細部の技法等によって細分は可能であると思われるが，SA2の煙突部に使用された一括資料として扱える土器にも若干の形態・技法の違いが見られたので，ここでは同じ形態内によるバリエーションとして理解しておきたい。



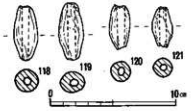
第29図　A区出土土師器実測図



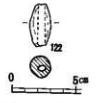
第30図　A区出土土師器実測図



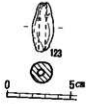
第31図　A区 出土布痕土器実測図



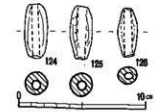
第32図　SA1 出土土錘実測図



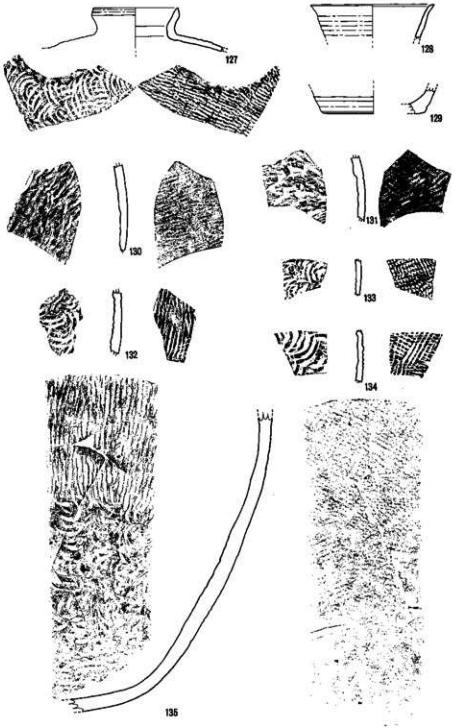
第33図　SA2
出土土錘実測図



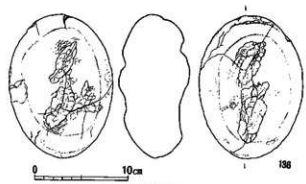
第34図　SZ1
出土土錘実測図



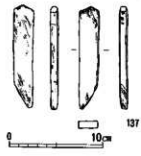
第35図　A区　出土土錘実測図



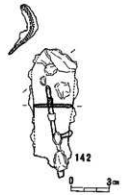
第36図　出土須恵器実測図・拓影



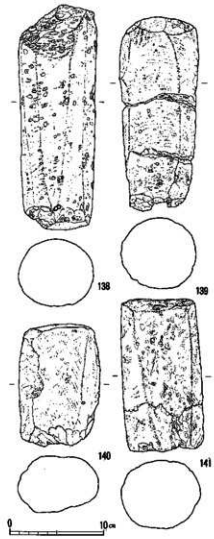
第37図　石器実測図



第38図　砥石実測図



第40図　SA2　出土鉄製品実測図



第39図　SA1　出土軽石製支脚

また，ＳＡ２よりは32の鉢形土器も出土している。口径22cm器高12cmを計り平底である。胎土は砂粒を含み，焼成は良好で，外面ともナデ調整である。ＳＡ１においては３のミニチュア壷も出土している。また　のような球形胴部をした無頭壷も出土している。
103

黒色土器（内黒）

本遺跡において出土している黒色土器は全て内黒である。１軒の住居跡より１～２点の出土で量的には少ない。ＳＡ１よりは坏の破片（６）が１点，ＳＡ２よりは28，38が出土している。28は坏・塊が多い黒色土器の中では珍らしく口径21cmを計る鉢形土器である。内外面とも研磨されており，内面は部分的に黒色を呈していない所も存在する。38は坏の破片である。内面に炭素が吸着しているが研磨があまり施されておらず光沢がない。黒色部分が剥落している所も存在した。82，86は包含層内よりの出土である。両者とも坏であるが外面は，荒い研磨しか施されていない。82は立ち上りが丸味を持つタイプで，86は底部と体部の境目が明瞭なタイプである。

布痕土器

本遺跡においては，土師器とともに内面に布目圧痕のある土器が出土している。ＳＡｆ・２より数点出土しているが，その他は包含層内よりの出土である。完形品はないが，口径は12～15cm程度で底部は尖底かそれに近い丸底を呈す。全体的な器形は円錐形の胴部を若干膨ませたような碗弾型となっている。型づくりされた土器らしく，内面は型はずしを容易にするために型にまかれていた布が圧痕として残り，外面は指頭痕が残る荒い作りであり，口縁部は型よりはみだした粘土を取るためであろうか，ヘラ状工具によって外方はそぎ落されている。胎土は荒く，焼成は良好である。二次焼成を施したものは認められなかった。容量は420～480 ccを計る。

土　錘

土錘は全部で９個出土している。その半分は遺構よりの出土である。また法量については，表６に示す通りである。全て土師質で小型粘土筒状をしたものである。焼成も良好で調整はナデ調整が行なわれている。その法量によって大型（118，119，123，124）と小型（120，121，122，125，126）の２種類に大別できる。

須　恵　器

須恵器は坏および甕が出土している。

坏は土師器坏とほぼ同様な形態となす。全てヘラ切り底である。その形態によって底部から体部へ丸味をもって内湾気味に立上るタイプ（43，48，51）と偏平な底部より直線的に立上り口縁部で少し外反するタイプ（42，77），偏平な底部より丸味をおびて直線的に立上るもので器高が低いタイプ（68）に分けられる。色調は灰白色～灰色を呈し内外面ともナデ調整であり，焼成は良好である。また焼成の際に生じたと思われる線状をなした黒斑を有するものが存在する。

甕はほとんどが胴部片である。その器壁には外面～格子目文，平行線文，内面～平行線文，同心円文の各種の叩き目が施されている。135の甕の底部付部付近のように内面に２種類のアテ具を部位を違えて使用しているものである。また中には131のように内面を板状工具によって荒く仕上げた例もある。

またＳＺ１では焼き歪んだようなものや，器壁に気泡を多く含んだような不良品と思われるものが出土したり，その周辺よりは窯壁の付着した須恵器が出土したりしている。

石 製 品

138～141は，軽石製の支脚である。いずれもＳＡ１よりの出土である。最も完全に残存しているのは138で，長さ23.5㎝，幅８㎝を計る側面はていねいに加工されている。出土状況等から考えて細い部分を下にして立てていたものと想定される。上端部は斜めに加工されておりその部分で土器を支えたものと思われる。139～141も同様な形態をなすものと思われる。

137のような砥石も出土している。長さ10.5㎝，幅２㎝，厚さ0.8㎝を計る四面とも使用されており擦痕が存在する。136は15㎝×11㎝の楕円形を呈し厚さ7.5㎝の砂岩である。表で裏両面に２ヶ所ずつ凹みが見られる。砥石の一種ではないかと思われる。

鉄製品

142はＳＡ２出土の鉄器である。残存長9.5㎝，幅３㎝を計る。先端がおれているため全体形は不明であるが，基部が曲っており，鎌の一部ではないかと思われる。

（日高孝治）

第５節 まとめ

旧石器時代の遺物と思われるものはナイフ形石器があるが，その面的な広がりについては不明である。

縄文時代の早期土器としては，貝殻条痕文土器などがあるが，その量は少ない。主体となるのは塞ノ神式土器で，いわゆるＡ式といわれるものに限られる。塞ノ神式土器を早期土器とすべきか否かについては，ここでは新東晃一氏[1]の説を支持しておきたい。アカホヤ下の土層形成については，かって辻遺跡の調査結果をふまえ問題点を指摘[2]したが，それについては，まだ地質学的な方面からの充分な検証を経ていない。その問題点とは，アカホヤ下の土層が黒色土を形成している地域と，褐色土を形成している地域との二つに別けられることである。辻遺跡の場合，隣接した二つの丘陵は黒色土が層を成す丘陵と，褐色土が層を成す丘陵に分れ，前者は塞ノ神式土器を中心に，後者は前平・吉田式土器を中心に包含していた。第１の問題点はこうした土層形成の画然とした違いについてである。さらに，同じく黒色土層でありながら，硬質の黒色土層の場合遺物が包含されることがないことである。下田畑の場合その硬質黒色土層下の褐色土層に塞ノ神式土器を中心とする遺物は包含されていた。学園都市内においても，アカホヤ下に黒色土が形成される地域と，されない地域とがあり，こうした早期文化層の在り方については一考される必要がある。

アカホヤ層上において検出された曽畑式土器は，県下においても貴重な調査例といえるし，性格不明ながら曽畑式土器の集中した掘り込みは，充分に注目されるべきであろう。しかし，その掘り込みは，アカホヤと黒色土層との漸□層中に浅く掘り込まれており，輪郭も不明瞭さらにピット等も認められず，柱を用する上屋が乗る規模とも思えない。ここでは単に土拡と呼んでおくしかないが，類例がふえることを待ちたい。一方，土器については，口縁部が小さく山形を成すものがみられ，かつ短線列文を主とした文様もやや粗く，曽畑式土器の終りに近く位置付けるべき資料と思われる。

弥生時代に属する竪穴住居跡は１棟のみであったが，南辺に幅約１ｍの突出した掘り残し部をもつもので，住居跡の主軸に直交するこの部分は入り口部と考えられ，いわゆる日向型間仕切り住居の間仕切りとは役割りを異にするものとみておきたい。出土した下城式土器から中期に位置付けられるべきものであるが，共伴の大型甕形土器の口縁部の屈曲がややルーズになるあたりから中期末に比定しておきたい。

また，時代が下って古代に入ると，カマド付竪穴住居・掘立柱建物と主体とする集落が営まれる。

カマド付竪穴住居２軒，掘立柱建物跡７軒が確認されている。カマド付竪穴住居は屋外に煙道を延ばすタイプのもので，県内においては，宮崎市浄土江遺跡304号住居跡[3]が初見である。学園都市遺跡群内においては，本遺跡の南約100ｍに位置する赤坂遺跡で確認されたのをはじめとして，前原南・平畑[4][5]・浦田の各遺跡で発見され現在の

所５遺跡９軒が確認されている。これらの住居跡は浄土江304号住居跡で見られるようなくり抜き式の煙道ではなく掘り込み式の煙道を持っている。その形態も煙出し部分にピット状の掘り込みを有するものとそうでないものの２種類に分けられる。これは本遺跡において煙道に石蓋を施す同タイプの煙道に併存しているので，時期差とともに，何らかの機能差も考えられるのではなかろうか。またカマドは２～３回作り変えられている。

掘立柱建物は７軒確認されているが，廂を有するもは存在せず，２間×２間・３間×２間のみである。またＳＢ２は総柱建物であり倉庫の可能性がある。それに近接するＳＢ３もその規模等から考えて倉庫の可能性があると思われる。主軸方向はＳＢ６を除いて東へ傾いている。ＳＢ４，５ＢＳ５には建物内に焼土が存在する。

これらの竪穴住居および掘立柱建物はその出土遺物等から考えて，あまり隔差がないので，ほぼ同時期に併存していたのではないかと考えられる。この様相は神奈川県向原遺跡[6]で復元された村落景観に類似するものではないかと考えられる。

また本遺跡出土の土師器は，その法量の面から見ると大形の傾向を示すものが存在している。これは学園都市遺跡群内の浦田遺跡のカマド付竪穴住居より出土している坏に類似している[7]。浦田遺跡ではこの時期より後出する段階で脚台を有する坏が出土している。なおこの時期の坏は小山尻東遺跡において10世紀中頃に比定される越州窯系青磁とともに出土している[8]。これらの関係から考えると本遺跡出土の土師器は概ね10世紀前半代に位置づけることができると考えられる。

ＳＺ１よりは窯壁の付着した須恵器や，焼きひずんだ須恵器等が出土していることから本遺跡は須恵器生産に何らかの形でたずさわった人々によって営まれた集落であろうと思われる。その場合の須恵器窯であるが，場所や胎土分析[9]等の結果より見て清武川をはさんで約３kmの所に位置する松ケ迫窯跡[10]が考えられる。

以上のことから下田畑遺跡は，平安時代（10世紀前半代）に営まれた一般的な集落形態をなしているものと考えられる。また土師器の全体的な編年や，カマド付竪穴住居の変遷および掘立柱建物との機能差等については，他遺跡との詳細な比較検討がなされるべきである。

（北郷泰道・日高孝治）

註 (1) 新東晃一「火山灰からみた南九州縄文 ・前期土器の様相」
『鏡山猛先生稀記念古文化論攷』（1980年）
同 「南九州の火山灰と土器形式」『 るめん』№19（1978年）
(2) 北郷泰道・長津宗重『辻遺跡』清武町教育委員会（1980年）
(3) 宮崎市教育委員会 宮崎市文化財調査報告書 第６集「浄土江遺跡」 1981
(4) 宮崎県教育委員会 「宮崎学園都埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ」 1981
(5) 〃 「 〃 〃 Ⅲ」 1982
(6) 神奈川県教育委員会，神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告１「向原遺跡」 1983
(7) 宮崎県教育委員会 「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第２集・浦田遺跡」 1985
(8) 長津宗重氏の御教示による（本書掲載～小山尻東遺跡）
(9) 宮崎県教育委員会 「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第２集」 1985
(10) 石川恒太郎 「宮崎県の考古学」吉川弘文館昭和43年

表1 縄文土器観察表

図版番号	地区名	遺構名	器形	器部及び残存	調整 去	調整 表	文様 表	文様 裏	胎土	色調 表	色調 裏	焼成	備考
1	A	—	深鉢	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	隆帯文 刺突文	—	石英、長石多く含む	橙	灰	不良	
2	〃	—	〃	口縁部	〃	〃	口縁部文様帯 刺突文	—	多量長石、石英、角閃石	明赤褐 5YR 5/6		良好	スス付着
3	〃	—	〃	〃	〃	〃	刺突文 沈線	—	砂質 石英、長石	にぶい黄橙 10YR 6/3		〃	同一個体
4	〃	—	〃	〃	〃	〃	〃	—	長石、石英、角閃石	暗黄褐 2.5YR 3/2	明赤褐 5YR 5/6	不良	
5	〃	—	〃	〃	〃	〃	口縁部文様帯 刺突文	—	石英、長石、角閃石多く含む	にぶい褐		〃	
6	〃	—	〃	〃	〃	〃	口縁部刺突 刺突文、沈線	—	砂質 微細石英	浅黄橙 7.5YR 8/3		〃	
7	〃	—	〃	〃	〃	〃	〃	—	角閃石、長石	暗赤褐	橙	良好	
8	〃	—	〃	〃	〃	〃	刺突文	—	長石、石英	にぶい橙 7.5YR 7/3		不良	
9	〃	—	〃	胴部	〃	〃	〃	—	石英、長石	褐	明赤褐	良好	
10	〃	—	〃	胴部	〃	〃	沈線文 隆帯文	—	長石、角閃石、石英	にぶい橙 7.5YR 7/2		〃	
11	〃	—	〃	胴部～胴部	〃	〃	〃	—	長石、石英やや砂質	明黄褐 10YR 7/6		不良	
12	〃	—	〃	〃	〃	〃	刺突文 沈線文、縄文	—	長石、石英、角閃石	暗褐 2.5YR 3/2	明赤褐 5YR 5/6	〃	3,4同一個体
13	〃	—	〃	胴部	〃	〃	隆帯文 沈線文	—	石英、長石、角閃石	黒褐 7.5YR4/2～3/2	にぶい褐 7.5YR 5/3	不良	
14	〃	—	〃	〃	〃	〃	〃	—	長石、石英、角閃石、金雲母	にぶい橙 7.5YR 7/3	褐 7.5YR 4/3	良好	スス付着
15	〃	—	〃	〃	〃	〃	〃	—	石英、長石、角閃石、金雲母	浅黄橙		〃	
16	〃	—	〃	〃	〃	〃	〃	—	長石、石英、角閃石	明赤褐 5YR 5/6	褐 7.5YR 4/3	〃	スス付着
17	〃	—	〃	〃	〃	〃	〃	—	微細石英、長石	明赤褐 5YR 5/6		〃	〃
18	〃	—	〃	〃	〃	〃	〃	—	長石、石英、金雲母	浅黄橙 10YR 8/3		〃	
19	〃	—	〃	〃	〃	〃	〃	—	砂質石英、長石、金雲母	褐 7.5YR 4/3		不良	スス付着
20	〃	—	〃	〃	〃	〃	〃	—	長石、石英	にぶい橙		良好	
21	〃	—	〃	〃	〃	〃	〃	—	長石、石英	浅黄橙 7.5YR 8/3		〃	

図版番号	地区名	遺構名	器形	器部及び残存	調整 去	調整 表	文様 表	文様 裏	胎土	色調 表	色調 裏	焼成	備考
22	A	—	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	縄文	—	砂質微細、長石、石英	浅黄橙 10YR 8/3		良好	
23	〃	—	〃	—	—	—	沈線文 縄文	—	微細石英、長石	黄褐		良好	スス付着
24	〃	—	〃	—	—	—	〃	—	長石、石英	浅黄橙		不良	
25	〃	—	〃	—	—	—	沈線文 磨消縄文	—	砂質石英、長石少量	にぶい橙 7.5YR 7/4	浅黄橙 10YR 8/3	〃	
26	〃	—	〃	—	—	—	〃	—	長石、石英、角閃石	明黄褐 10YR 7/6		良好	
27	〃	—	〃	—	—	—	懸垂文	—	長石、石英、角閃石	浅黄橙 10YR 8/3		〃	
28	〃	—	〃	底部	—	—	—	—	砂質1～2mm大長石、石英、角閃石	明黄褐 10YR 7/6		不良	
29	〃	—	〃	口縁部	—	ナデ	刺突縄文帯	—	角閃石、石英、長石	明黄褐 10YR 7/6		良好	山形口縁
30	〃	—	〃	〃	—	—	〃	—	角閃石、石英、長石	にぶい橙		〃	
31	〃	—	〃	胴部	—	—	〃	—	石粒も含む	にぶい橙		良好	
32	〃	—	〃	底部付近	—	—	〃	—	砂質角閃石、長石、石英	にぶい橙	にぶい褐	不良	
33	〃	—	〃	胴部	—	—	〃	—	長石、石英、角閃石	橙 5YR 6/6		〃	
34	〃	—	〃	口縁部	—	—	〃	—	砂質もろい長石、石英、角閃石	浅黄橙		不良	
35	〃	—	〃	胴部	—	—	沈線文、刺突文 貝殻文	—	石英、長石	にぶい橙		良好	
36	〃	—	〃	口縁部	—	—	口唇部刺み 突帯文	—	微細	にぶい黄		不良	
37	〃	—	円筒土器	〃	—	—	へら描き文	—	砂質、石英、長石、角閃石	橙	灰	良好	
38	〃	—	—	〃	ナデ	ナデ	—	—	砂質、微細粒	浅黄橙 7.5YR 8/3		不良	
39	〃	—	—	〃	—	ヨコナデ	沈線文 刺突文 貝殻文	刺突文 沈線文	微細混入少ない	橙 7.5YR4/2～3/2		〃	
40	〃	—	—	〃	—	—	短縄刺突文 刺突文	短縄刺突文 刺突文	微細混入少ない	黒褐 10YR 3/1	にぶい橙	良好	
41	〃	—	—	〃	—	—	短縄刺突文	短縄刺突文	砂質多量	にぶい橙 7.5YR	浅黄橙 10YR 8/3	〃	スス付着
42	〃	—	—	〃	—	—	口唇部刺み 沈線文	刺突文	緻密砂質少ない石英、長石	明赤褐	暗赤褐	良好	〃

図面番号	地区名	遺構名	器形	器部及び残存	調整		文様		胎土	色調		焼成	備考
					表	裏	表	裏		表	裏		
43	A	—		口縁部		—	口唇部刻み 沈線文	短線列文	長石、石英、金雲母	暗赤褐 7.5YR 3/2		良好	スス付着
44	〃		—	〃	ナデ	—	刺突文	〃	角閃石、長石、石英	灰褐 7.5YR4/2~3/2		〃	
45	〃	—	—	〃	—		短線列文 口唇部刻み	刺突文	微細長石、石英	黒褐		〃	
46	〃	—	—	〃	—	ヨコナデ	沈線文 刺突文	短線列文	角閃石、石英、長石	黒		〃	
47	〃	—	—	〃	—	—	沈線文	〃	石英、長石	橙 5YR 6/6		不良	
48	〃	—	—	〃	—		隆帯状 沈線文	刺突文	砂質強	にぶい褐		良好	風化が著しい
49	〃	—	—	〃	—	—	短線列文 口唇部刻み	刺突文 短線列文	長石、石英	明赤褐 5YR 5/6	にぶい褐	〃	
50	〃	—	—	〃	—		口唇部刻み 刺突文		砂質微細粒	にぶい褐		不良	
51	〃		—	胴部	—	—	短線列文	—	長石、石英、角閃石	浅黄橙 10YR 8/3		良好	
52	〃	—	—	〃	—	よこ 細いケズリ	〃	—	角閃石、長石	灰褐 7.5YR4/2~3/2		不良	
53	〃		—	〃	—	—	短線列文 刺突文	短線列文	微細混入少ない	黒褐 10YR 3/1	にぶい褐	良好	
54	〃	—	—	〃	—	—	短線列文	—	長石、角閃石	褐灰 10YR 5/1		〃	スス付着
55	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	角閃石、石英、長石砂質多し	灰褐 7.5YR4/2~3/2		〃	
56	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	石英、長石、角閃石	橙		〃	
57	〃		—	〃	—	—	〃		石英、長石	浅黄橙 7.5YR 8/3		不良	
58	〃	—	—	〃	—	ヨコナデ	〃	—	石英、長石	灰褐		良好	スス付着
59	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	石英、長石、角閃石	明赤褐 10YR 7/6		不良	
60	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	やや砂質石英、長石多く含む	明赤褐 5YR 5/6		良好	スス付着
61	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	角閃石、長石、石英	にぶい橙		〃	
62	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	砂質長石、石英	明黄褐 10YR 7/6		不良	
63	〃	—		〃	—	ヨコナデ	〃	—	石英、長石、金雲母	明黄褐 10YR 7/6	灰褐 7.5YR4/2~3/2	〃	

図面番号	地区名	遺構名	器形	器部及び残存	調整		文様		胎土	色調		焼成	備考
					表	裏	表	裏		表	裏		
64	A	—	—	胴部	—	ヨコナデ	短線列文	—	角閃石、長石、石英	にぶい橙	灰黄褐	良好	
65	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	角閃石、長石	にぶい褐 7.5YR 5/3		〃	
66	〃	—	—	底部付近	—	—	〃	—	長石、石英	灰褐		不良	
67	〃	—	—	胴部	—		〃	—	角閃石、長石、金雲母	明黄褐		良好	
68	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	石英、長石	灰褐 7.5YR4/2~3/2		〃	スス付着
69	〃	—	—	〃	—	ナデ	〃	—	石英、長石、角閃石	浅黄橙 10YR 8/3	明黄褐	〃	
70	〃	—	—	〃	—	ヨコナデ	〃		角閃石、長石	明赤褐 5YR 5/6		不良	スス付着
71	〃	—	—	〃	—	〃	〃	—	角閃石、長石	にぶい褐 7.5YR 5/3		良好	
72	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	角閃石、長石、石英	明赤褐		〃	
73	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	長石	にぶい橙		不良	
74	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	微細石英、長石	にぶい橙		良好	
75	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	長石、石英	明赤褐		〃	
76	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	微細長石、石英	灰褐 10YR 6/2	浅黄橙 10YR 8/3	不良	スス付着
77	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	長石、石英、角閃石	灰褐		良好	
78	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	長石、角閃石、石英	浅黄橙 7.5YR 8/3		〃	スス付着
79	〃	—	—	〃	—	ヨコナデ	〃		石英、長石多く含む	明黄褐 10YR 7/6	灰黄褐 10YR 6/2	〃	
80	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	角閃石、石英、長石	橙 5YR 6/6		〃	
81	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	微細長石、石英	褐 7.5YR 4/3	浅黄橙 10YR 8/3	不良	
82	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	長石、石英、	橙	にぶい褐	良好	
83	〃	—	—	〃	—	ヨコナデ	〃	—	石英、長石多量に含む	明黄褐	灰黄褐	〃	
84	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	角閃石、長石	明赤褐		〃	

図面番号	地区名	遺構名	器形	器部及び残存	調整 表	調整 裏	文様 表	文様 裏	胎土	色調 表	色調 裏	焼成	備考
85	A	—	—	胴部	—	ヨコナデ	短縄刺文	—	砂質 石英、長石は少ない	灰褐 7.5YR4/2～3/2		—	
86	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	石英、長石は少ない	灰褐 7.5YR4/2～3/2		—	
87	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	石英、長石多く含む	灰褐 7.5YR4/2～3/2		良好	スス付着
88	〃	—	—	〃	—	ヨコナデ	〃	—	石英、長石少量含む	橙 5YR 6/1		〃	
89	〃	—	—	〃	—	ナデ	〃	—	砂質、石英、長石	にぶい橙	浅黄橙	不良	
90	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	砂質強、長石多く含む	にぶい橙		〃	
91	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	砂質1～2mm大長石、石英多く含む	灰黄褐 10YR 6/2		—	
92	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	砂質やや繊維、微細石英砂	明赤褐 5YR 6/6		良好	
93	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	繊維、微細石砂質を含む	橙赤褐 2.5YR 6/2		—	
94	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	繊維、微細、石英、長石多く含む	橙		良好	
95	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	砂質強長石、石英多く含む	浅黄橙		不良	
96	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	石英、長石、角閃石砂質	橙 10YR 7/1	灰黄 5/2	〃	
97	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	砂質強	灰黄褐 10YR 6/2		良好	
98	〃	—	—	〃	—	ヨコナデ	〃	—	やや砂質 石英	黄橙		〃	
99	〃	—	—	〃	—	ナデ	〃	—	砂質、繊維	明赤褐		〃	
100	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	砂質1～2mm大、火山礫を含む	明赤褐		〃	
101	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	石英、長石、砂少量	にぶい橙		〃	
102	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	砂質強1mm大長石含む	橙	にぶい橙	〃	
103	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	石英、長石、角閃石	灰褐	にぶい橙	〃	スス付着
104	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	砂質長石、石英、角閃石	にぶい黄橙 10YR 6/3		〃	
105	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	角閃石、長石、石英	にぶい橙	灰黄褐	〃	

図面番号	地区名	遺構名	器形	器部及び残存	調整 表	調整 裏	文様 表	文様 裏	胎土	色調 表	色調 裏	焼成	備考
106	A	—	—	胴部	ナデ	—	短縄刺文	—	角閃、石英、長石	明赤褐 5YR 5/6		良好	
107	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	微細長石など	7.5YR 4/3		不良	
108	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	微細石など	褐 7.5YR 4/3		〃	スス付着
109	〃	—	—	〃	—	ヨコナデ	〃	—	石英、長石、角閃石	褐 7.5YR 4/3		〃	〃
110	〃	—	—	〃	—	〃	〃	—	長石、石英	黒褐	灰黄褐	良好	
111	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	砂質長石、石英、角閃石	にぶい橙		不良	
112	〃	—	—	〃	—	粗いヨコナデ	〃	—	長石、角閃石、石英	明赤褐 10YR 7/6	灰黄褐色 10YR 6/2	良好	
113	〃	—	—	底部付近	—	—	〃	—	微細長石、石英	浅黄橙	黒褐 10YR 3/1	不良	
114	〃	—	—	〃	—	ヨコナデ	〃	—	繊維石英、長石、少量	明赤褐	黒褐	良好	
115	〃	—	—	〃	—	—	〃	—	長石、石英	にぶい橙	灰黄褐	不良	

表2 弥生土器観察表

図面番号	地区名	遺構名	器形	器部及び残存	調整 表	調整 裏	文様 表	文様 裏	胎土	色調 表	色調 裏	焼成	備考
1	砂	SA4	甕	口縁部	ナデ	ヨコナデ	突帯文	—	1~2mm大の石粒多量に含む	浅黄橙 7.5YR 8/4	橙 7.5YR 6/6	良好	
2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	石粒含む	浅黄橙		不良	
3	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	ヨコナデ ヤガキハケ目	—	—	微細、石英砂	にぶい橙 7.5YR 7/4		良好	スス付着
4	〃	〃	〃	〃	タテハケ目 ヨコナデ	ヨコナデ ミガキハケ目	—	—	微細少ない	橙		〃	
5	〃	〃	〃	〃	ナデ	ナデ	—	—	微細、石英粒、石粒も含む	にぶい橙 7.5YR 7/4		〃	スス付着
6	〃	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	—	—	5mm石粒多く含む	にぶい黄橙		〃	
7	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	〃	—	—	石粒、石英	灰黄 2.5Y 6/2		〃	
8	〃	〃	〃	〃	ナデ	—	—	—	1mm石粒含む	浅橙	黒	〃	
9	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ	—	—	微細、石英、砂1mm大石粒	暗赤褐		〃	スス付着
10	〃	〃	〃	〃	〃	〃	突帯文	—	石英、長石、金雲母、多く含む	暗赤褐		〃	〃
11	〃	〃	〃	胴部~頸部	〃	〃	〃	—	微細、石英砂	黒	灰	〃	〃
12	〃	〃	〃	底部	ダナナデ ヨコナデ	—	〃	—	石砂粒、多量混	赤褐		〃	
13	〃	〃	〃	〃	強いナデ	粗いハケ目	—	—	石砂粒ほどほどに含む	浅黄橙 7.5YR 8/4		〃	
14	〃	〃	〃	口縁部	ヨコナデ	ナナメハケ目	肩A突帯文	—	長石、石英多く含む	黒褐	灰	〃	同一個体
15	〃	〃	〃	〃	—	—	〃	—	〃	〃		〃	補修孔あり スス付着
16	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	〃	—	微細砂物粒少量	灰黄		〃	
17	〃	〃	〃	胴部	〃	〃	〃	—	微細、石英砂	浅黄橙 7.5YR 8/4		〃	
18	〃	〃	〃	〃	〃	ナナメハケ目	〃	—	石英、長石含む	赤褐		〃	
19	〃	〃	壺	〃	—	—	突帯文	—	石英、長石、黒雲母を多量に含む	明赤褐 5YR 5/4		〃	
20	〃	SA5	〃	口縁部	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	細石粒、やや多く	浅黄橙		不良	
21	〃	〃	〃	胴部	ナデ	—	—	—	石砂、多量	浅赤橙		良好	

図面番号	地区名	遺構名	器形	器部及び残存	調整 表	調整 裏	文様 表	文様 裏	色調	胎土 表	胎土 裏	焼成	備考
22	A	SC2	甕	口縁~胴部	ヨコナデ	ナデ	—	—	0.1~1.5mm大の砂粒を多く含む 白色、黒石を含む	にぶい黄橙 10YR 7/4		やや不良	
23	〃	〃	〃	〃	ナデ	ナデ	—	—	0.1~1.0mm大の砂粒を多く含む 黒石を含む	橙 5YR 7/6		良好	
24	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	ナデ	—	—	0.1~1mm大の砂粒を多く含む	橙 5YR 7/6	浅黄橙 10YR 8/4	やや不良	

表3　土師器・須恵器観察表

図面番号	地区名	遺構名	器形	器部及び残存	調整 表	調整 裏	法量	胎土	色調 表	色調 裏	焼成	備考
1	A	SA1	甕	口縁部~胴部	タテハケ目 ヨコナデ	ヨコハケ目 ナデ	口径~20.4cm	石粒多く含む	灰黄 2.5YR 8/3		良好	
2	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	口径~19.0cm	2~5㎜石粒含む	にぶい黄橙 10YR 7/3		〃	スス付着
3	〃	〃	小甕	完形	〃	ー	口径~4.0cm 器高~6.0cm 底径~6.5cm	砂質	灰褐~灰黄褐		〃	硬質に焼成
4	〃	〃	甕	口縁部	ヨコナデ タテナデ	ー	ー	石粒多く含む	褐灰		不良	
5	〃	〃	坏	口縁部~底部	ー	ー	ー	砂質	黄橙 7.5YR 7/8		良好	
6	〃	〃	〃	〃	ー	ー	ー	微細粒	黄橙		〃	内黒土師
7	〃	〃	〃	完形	ヨコナデ	ヨコナデ	口径~14.0cm 器高~4.5cm 底径~7.0cm	微細砂質	にぶい橙		〃	
8	〃	〃	〃	底部	ー	ー	底径~7.0cm	砂質強	浅黄橙		〃	「宅」文字有り
9	〃	〃	〃	完形	ナデ	ナデ	口径~16.0cm 器高~4.4cm 底径~9.5cm	砂質、表面風化	〃		〃	
10	〃	〃	〃	口縁部~底部	ー	ー	口径~12.4cm 器高~3.5cm 底径~7.0cm	砂質	黄橙 7.5YR 7/8		〃	
11	〃	〃	〃	〃	ー	ー	口径~13.6cm 器高~3.3cm 底径~7.5cm	砂質多量	黄橙 7.5YR 7/8		〃	
12	〃	〃	布目	半完形	ー	布目	口径~15.7cm	砂質	橙		〃	
13	〃	〃	〃	口縁部	ナデ	布目	ー	0.1~2㎜大の砂粒を含む 1.5㎜大の茶色の粒を含む	〃		〃	
14	〃	〃	〃	〃	ー	〃	ー	0.1~2㎜大の砂粒を含む	〃		〃	
15	〃	〃	須恵器	胴部	ー	ヨコナデ	ー	堅緻	灰		〃	
16	〃	〃	〃	〃	ー	ー	ー	1㎜石粒、少し含む	赤灰		〃	
17	〃	〃	〃	胴部~底部	ー	ー	ー	堅緻	灰黒	淡赤灰	やや不良	スス付着
18	〃	SA2	甕	完形	ヨコナデ	ヨコナデ	口径~23.0cm 器高~25.0cm	3~5㎜大の石粒多量に含む	浅黄橙 7.5YR 8/4		良好	スス付着
19	〃	〃	〃	口縁部~胴部	ヨコナデ 削り	ナナメ タテ ナデ) 削り	口径~25.6cm	3~8㎜大の石粒多く含む	浅黄橙 7.5YR 8/4		〃	
20	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ タタキ後ナデ	ー	口径~25.5cm	3㎜石粒を多量に含む	にぶい黄橙 10YR 7/3		〃	
21	〃	〃	〃	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	口径~20.8cm	3~5㎜大石粒砂質	にぶい橙		〃	

図面番号	地区名	遺構名	器形	器部及び残存	調整 表	調整 裏	法量	胎土	色調 表	色調 裏	焼成	備考
22	A	SA2	甕	口縁部~胴部	ナデ	削り	口径~19.0cm	1~5㎜大石粒、多く含む	灰褐		良好	
23	〃	〃	〃	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	口径~17.6cm	3~4㎜大石粒、多量に混入	浅黄橙		〃	
24	〃	〃	〃	〃	ー	削り、ナデ	口径~15.3cm	2~3㎜大石粒	にぶい橙		不良	スス付着
25	〃	〃	〃	〃	ー	ー	口径~16.1cm	1~2㎜大石粒含む	浅赤橙		良好	
26	〃	〃	〃	〃	ー	削り、ナデ	ー	3㎜大石粒含む	にぶい橙		不良	スス付着
27	〃	〃	〃	〃	ー	削り	ー	4㎜大石	橙		良好	
28	〃	〃	埦	口縁部~胴部	ヘラ磨き	ナデ	口径~21.2cm	精緻な胎土	浅赤褐 2.5YR 7/4		〃	
29	〃	〃	甕	〃	ヨコナデ	ナデ、削り	口径~26.0cm	1~5㎜大石粒含む	灰黄褐	浅黄橙	不良	
30	〃	〃	〃	口縁部	ー	ー	ー	0.5㎜大石粒含む、やや砂質	浅黄橙		良好	
31	〃	〃	〃	〃	ー	・・	ー	2~5㎜大石粒多く含む	〃		〃	堅緻
32	〃	〃	鉢	口縁部~底部		ー	口径~21.0cm	砂質、4㎜大石粒多く含む	橙 5YR 7/8		良好	
33	〃	〃	布目	口縁部	ー	-	ー	砂質、1~2㎜大石	にぶい橙		〃	
34	〃	〃	〃	〃		布目	ー	5㎜大、石粒	赤橙		〃	
35	〃	〃	〃	〃	ー	ー	ー	砂質強、石粒少量	橙		〃	
36	〃	〃	坏	口縁部~底部	ナデ	ナデ	口径~11.8cm 器高~4.4cm 底径~6.3cm	きめが細かい 0.5㎜大の砂粒及び光る粒を含む	黄橙 7.5YR 7/8		〃	
37	〃	〃	〃	完形	〃	〃	口径~13.1cm 器高~3.2cm 底径~8.2cm	きめが細かい、砂粒を含む	にぶい橙 7.5YR 7/4		〃	
38	〃	〃	〃	口縁部~底部	ヨコナデ	ヨコナデ	口径~13.2cm 器高~4.1cm 底径~7.2cm	きめが細かい 0.5~1㎜大の砂粒を含む	橙 7.5YR 6/6		〃	内黒
39	〃	〃	〃	〃	〃	〃	口径~13.6cm 器高~4.6cm 底径~8.6cm	きめが細かい 0.1~1㎜大の砂粒を含む	浅黄橙 10YR 8/4		〃	
40	〃	〃	〃	〃	〃	-	口径~15.1cm 底径~8.5cm 器高~4.8cm	0.1~1.5㎜大の砂粒を多く含む	赤橙 10R 6/8		〃	
41	〃	〃	〃	〃	ヨコヘラナデ ヨコナデ	ヨコナデ	口径~15.8cm 器高~4.7cm 底径~8.5cm	精良、白色の細砂粒を含む	橙 5YR 7/6		〃	
42	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	〃	口径~11.9cm 器高~3.9cm 底径~6.6cm	砂粒約0.5㎜大の砂粒少々を含む	灰黄 2.5YR 7/2		〃	

図面番号	地区名	遺構名	器形	部器及び残存	調整 表	調整 裏	法量	胎土	色調 表	色調 裏	焼成	備考
43	A	SA2	坏	口縁部~底部	ヨコナデ	ヨコナデ	口径~16.4cm 器高~4.5cm 底径~8.1cm	きめが細かい 砂粒を含む	灰黄 2.5Y 7/2		良好	
44	〃	〃	〃	口縁部	〃	〃	口径~14.8cm	堅緻、石、砂粒少ない	浅黄橙		〃	
45	〃	〃	皿	口縁部~底部	〃	〃	口径~13.8cm 器高~2.3cm 底径~8.6cm	黒く光る粒3mm大の小石、透明な粒を含む、0.1~1mm大の砂粒を多量に含む	黄橙 7.5YR 7/8		〃	
46	〃	〃	坏	完形	〃	〃	口径~18.0cm 器高~4.1cm 底径~7.0cm	1~5mm大の褐色の砂粒を含む	灰黄 2.5YR 7/2		〃	
47	〃	〃	〃	底部	ナデ	ナデ	底径~7.1cm	きめが細かい 砂粒及び光る粒を含む	橙 7.5YR 7/6		〃	
48	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	底径~7.0cm	きめが細かい 0.1~0.5mm大の砂粒を含む	灰黄 2.5Y 7/2		〃	
49	〃	〃	〃	〃	〃	〃	底径~7.0cm	砂質、1~2mm大石	にぶい橙		〃	
50	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ	底径~8.2cm	0.1mm大の砂粒及び5mm大の小石を含む、きめが細かい	橙 5YR 7/8		〃	
51	〃	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	底径~8.0cm	砂粒(約0.5mm大の砂粒)を含む	灰黄 2.5Y 7/2		〃	
52	〃	〃	〃	〃	〃	〃	底径~7.5cm	5mm大石多量、堅緻	にぶい褐		〃	
53	〃	SZ1	甕	口縁部	〃	〃	口径~29.0cm	3~4mm大石粒含む	灰赤褐		不良	
54	〃	〃	〃	〃	〃	—	口径~24.8cm	2~6mm石粒を含む	〃		良好	
55	〃	〃	坏	半完形	〃	ヨコナデ	口径~12.5cm 器高~3.8cm 底径~7.0cm	0.1~1mm大の砂粒を含む	浅黄橙 7.5YR 8/4		〃	
56	〃	〃	〃	口縁部~底部	〃	ナデ	口径~17.6cm 器高~3.4cm 底径~7.7cm	砂質強	灰黄 2.5YR 7/2		〃	
57	〃	〃	〃	口縁部	〃	ヨコナデ	口径~13.9cm	微細粒、長石など	浅黄褐		〃	
58	〃	〃	〃	〃	—	—	口径~12.9cm	微細、砂質1~2mm大、砂質	灰赤褐		〃	
59	〃	〃	〃	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	口径~11.8cm	砂質	浅黄 2.5YR 7/3		〃	黒斑線有り
60	〃	〃	〃	底部	—		底径~7.5cm	やや砂質、全体に緻密	淡赤橙		〃	
61	〃	〃	〃	〃	—		底径~7.0cm	1mm大石粒含む、砂質	〃		〃	
62	〃	〃	布目	口縁部	—	—	—	砂質、砂粒多い	橙		〃	
63	〃	〃	須恵器	胴部	—	—	—	堅緻	灰褐		やや不良	

図面番号	地区名	遺構名	器形	部器及び残存	調整 表	調整 裏	法量	胎土	色調 表	色調 裏	焼成	備考
64	A	SB1	須恵器	底部	タタキ	タタキ	—	精良	赤灰 2.5YR 5/1	赤灰 2.5YR 4/1	良好	
65	〃	—	坏	口縁部~底部	—	—	口径~17.0cm 器高~4.6cm 底径~8.0cm	透明な粒を含む 0.1mm~1mm大の砂粒を多く含む	にぶい橙 7.5YR 7/4		〃	風化著しい
66	〃	—	〃	完形	ナデ	ナデ	口径~15.2cm 器高~4.5cm 底径~7.6cm	砂質	橙 5YR 7/8		〃	
67	〃	—	〃	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	口径~12.2cm 器高~3.25cm 底径~6.9cm	きめが細かい砂粒を含む	〃		〃	
68	〃	-	〃	〃	〃	〃	口径~16.1cm 器高~4.0cm 底径~10.0cm	砂粒(白く光る粒)を含む	浅黄 2.5Y 8/3		〃	スス付着
69	〃	—	〃	〃	—	—	口径~13.8cm 器高~4.05cm 底径~7.2cm	0.1~2mm大の砂粒を多く含む 透明な粒光る粒及び3mm大の小石を含む	浅黄 2.5Y 8/3		〃	風化著しい
70	〃	—	〃	半完形	ヨコナデ	ヨコナデ	口径~13.0cm 器高~3.8cm 底径~7.4cm	きめが細かい 0.1mm~1mm大の砂粒及び光る粒を含む	浅赤橙 2.5YR 7/4		〃	風化著しい
71	〃	—	〃	口縁部~底部	〃	〃	口径~15.3cm 器高~3.9cm 底径~9.0cm	きめが細かい砂粒を含む	にぶい橙 7.5YR 7/4		〃	ウラ風化著しい スス付着
72	〃	-	〃	〃	—	-	口径~14.4cm 器高~4.4cm 底径~8.2cm	0.1mm~1mm大の砂粒を含む	赤橙 10R 6/8		〃	風化が著しい
73	〃	—	〃	完形	ヨコナデ	ヨコナデ	口径~12.5cm 器高~3.5cm 底径~7.9cm	精良(白色の砂粒を含む)	にぶい橙 7.5YR 7/4		〃	
74	〃	—	〃	口縁部~底部	〃	〃	口径~15.0cm 器高~4.2cm 底径~8.4cm	透明な粒、光る粒を含む 0.1mm~0.5mm大の砂粒を含む	にぶい橙 7.5YR 7/4		〃	
75	〃	—	〃	完形	〃	〃	口径~14.5cm 器高~3.7cm 底径~7.96cm	0.1~1mm大の砂粒を多く含む 半透明な粒及び光る粒を含む	橙 7.5YR 6/6		〃	風化著しい
76	〃	-	〃	底部	—	〃	底径~6.8cm	0.1mm~1mm大の砂粒を多く含む	黄橙 7.5YR 7/8		〃	〃
77	〃	-	〃	口縁部~底部	ヨコナデ	〃	口径~15.0cm 器高~4.1cm 底径~9.1cm	0.2~1mm大の砂粒を多く含む	灰黄 2.5Y 6/2		〃	
78	〃	-	〃	完形	〃	〃	口径~13.4cm 器高~3.96cm 底径~7.9cm	きめが細かい砂粒を含む	黄橙 7.5YR 7/8		〃	風化著しい
79	〃	—	〃	口縁部~底部	—	ナデ	底径~7.2cm	きめが細かい 0.1mm~1mm大の砂粒を含む	浅黄 2.5Y 7/3		〃	〃
80	〃	—	〃	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	口径~14.3cm 器高~2.9cm 底径~7.6cm	きめが細かい砂粒を含む	〃		〃	
81	〃	-	皿	〃	〃	〃	口径~13.6cm 器高~2.7cm 底径~8.0cm	精良	〃		〃	須恵器
82	〃	-	坏	底部	—	—	底径~5.3cm	微細	〃		〃	内黒土師
83	〃	—	〃	〃	—	—	底径~9.3cm	光る粒及び砂粒を多量に含む	浅黄 2.5Y 8/3		〃	
84	〃	—	〃	口縁部~底部	ナデ	ナデ	口径~15.8cm 器高~3.10cm 底径~11.0cm	長石、石英を含む 砂粒を含む	にぶい橙 7.5YR 7/4		〃	

図面番号	地区名	遺構名	器形	器部及び残存	調整 表	調整 裏	法量	胎土	色調 表	色調 裏	焼成	備考
85	A	—	坏	口縁部～底部	ヨコナデ	ヨコナデ	—	きめが細かい砂粒を含む	赤橙 10YR 6/8		良好	
86	〃	—	〃	底部	磨き(黒斑)	磨き	底径～6.8cm	0.1mm～0.5mm大の砂粒を含む	にぶい黄橙 10YR 7/4	黒 10YR 2/1	〃	内黒土師
87	〃	—	〃	〃	—	ヨコナデ	底径～8.0cm	0.1mm～1mm大の砂粒を多く含む 3mm大の石粒を含む	黄橙 7.5YR 7/8		〃	表風化が著しい
88	〃	—	〃	〃	ナデ	ナデ	底径～6.9cm	0.1mm～1mm大の砂粒を多く含む 石英を含む	にぶい橙 7.5YR 7/4		〃	
89	〃	—	〃	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	底径～7.2cm	きめが細かい 白い粒及び砂粒を含む	淡赤橙 2.5YR 7/4		〃	
90	〃	—	〃	〃	—	〃	底径～7.1cm	0.1mm～5mm大の砂粒を含む	浅黄 2.5Y 7/3		〃	表風化が著しい
91	〃	—	〃	〃	ヨコナデ	〃	底径～7.0cm	きめが細かい砂粒を含む	淡赤橙 2.5YR 7/4		〃	〃
92	〃	—	〃	〃	ナデ	磨き	底径～8.6cm	0.1mm～0.5mm大の砂粒を含む	にぶい黄橙 10YR 7/4	黒 10YR 2/1	〃	内黒土師
93	〃	—	甕	口縁部～胴部	ヨコナデ タテナデ	ヨコナデ	口径～26.4cm	1～2mm石粒多量に含む	にぶい黄橙 10YR 7/3		〃	
94	〃	—	〃	口縁部	ナデ	ナデ	口径～24.0cm	0.1～2mm大の砂粒及び3mm大の石粒を多く含む	にぶい橙 5YR 7/4	にぶい橙(5YR 7/4) 浅黄橙(10YR 8/4)	〃	
95	〃	—	〃	〃	〃	〃	口径～22.0cm	0.1～2mm大の砂粒を多く含む 4mm大の石粒及び光る粒を含む	浅黄橙 10YR 8/4		やや良好	
96	〃	—	〃	〃	〃	ナデ ヘラケズリ	口径～24.5cm	0.1～2mm大の砂粒を多く含む 2.5mm大の石粒及び白い粒を含む	橙 2.5YR 7/8	橙 2.5YR 7/6	〃	
97	〃	—	〃	〃	〃	〃	口径～28.6cm	0.1～2mm大の砂粒を多く含む 2.5～5mm大の石粒を含む	橙 5YR 7/6	浅黄橙 7.5YR 8/6	良好	
98	〃	—	〃	〃	〃	ハケ ヘラケズリ	口径～24.2cm	0.1mm～2mm大の砂粒を多く含む 2.5mm～4mm大の石粒を含む	浅黄橙 7.5YR 8/6	にぶい橙 5YR 7/4	〃	
99	〃	—	〃	〃	〃	—	口径～23.6cm	2.5mm～3.5mm大の石粒を含む 0.1mm～2mm大の砂粒を多く含む 光る粒を含む	橙 5YR 7/6		〃	
100	〃	—	〃	〃	〃	ナデ	口径～24.0cm	0.1mm～2mm大の砂粒を含む 3mm大の石粒を含む	にぶい橙 7.5YR 7/4		〃	
101	〃	—	〃	〃	—	ヘラケズリ	口径～15.7cm	0.1mm～2mm大の砂粒を多く含む 3mm大の石粒を含む	淡赤橙 2.5YR 7/4		やや良好	
102	〃	—	〃	〃	ナデ	ヘラケズリのあとナデ ヘラケズリ	—	0.1mm～2mm大の砂粒を多く含む	にぶい橙 5YR 7/4		〃	
103	〃	—	〃	口縁部～胴部	ナデ叩き	ナデ	口径～9.0cm	きめが細かい 0.1mm～1mm大の砂粒を含む	浅黄橙 10YR 8/4		良好	
104	〃	—	布目	〃	—	布目うすい	口径～13.0cm	砂質、1mm大の砂粒を含む	橙 5YR 7/8		〃	
105	〃	—	〃	〃	—	—	口径～14.5cm	砂質強い	にぶい橙 7.5YR 7/8		〃	

図面番号	地区名	遺構名	器形	器部及び残存	調整 表	調整 裏	法量	胎土	色調 表	色調 裏	焼成	備考
106	A	—	布目	口縁部～胴部	—	—	口径～13.0cm	砂質、1mm大の砂粒を多く含む	橙		良好	
107	〃	—	布目	底部	—	1～2mm大布目	—	硬質、微細粒含む	赤橙		〃	
108	〃	—	〃	口縁部	—	—	—	3～4mm大の石粒 砂質	橙		〃	
109	〃	—	〃	〃	—	—	—	砂質	にぶい橙		不良	
110	〃	—	〃	〃	—	—	—	1mm～5mm大 石粒含む 砂質	赤橙 10R 6/8		〃	
111	〃	—	〃	〃	—	—	—	3mm大の石粒	にぶい橙		良好	
112	〃	—	〃	〃	—	布目粗い	—	8mm大の石粒 砂質	〃		〃	
113	〃	—	〃	〃	—	—	—	5mm大石粒多い、8mm大石粒含む	橙色		〃	
114	〃	—	〃	〃	—	—	—	砂質1mm大石粒含む	にぶい橙		不良	
115	〃	—	〃	〃	—	布目2mm大	—	5mm大前後石粒	〃		良好	
116	〃	—	〃	底部	—	粗い	—	砂質、1mm～2mm大石粒含む	橙		不良	
117	〃	—	〃	〃	—	布目	—	硬質	赤橙		良好	
118～126	土錘観察表											
127	A	—	須恵器	口縁部	タタキ(格子目)	タタキ(同心円)	口径～8.9cm	0.5～1mmの砂粒を含む	暗赤褐色 5YR 3/2	暗灰黄色 2.5Y 5/2	良好	
128	〃	—	須恵器坏	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	口径～13.0cm	0.5mm前後の砂粒を含む	灰色 5Y 6/1	オリーブ 5Y 6/2	〃	
129	〃	—	須恵器坏	底部	ヘラナデ	ヨコナデ	底径～10.7cm	0.5～1mmの砂粒と含む	黄灰色 2.5Y 5/1	灰色 5Y 6/1	〃	
130	〃	—	須恵器	胴部	タタキ	タタキ(青海波)	—	0.5mm前後の砂粒を含む 石英の細砂粒	灰黄色 2.5Y 7/2	にぶい褐色 7.5YR 6/3	〃	
131	〃	—	〃	〃	タタキ(平行線)	タタキ	—	細砂粒を含む	黄灰色 2.5Y 5/1	黄灰色	〃	
132	〃	—	〃	〃	タタキ(平行線)	タタキ(同心円)	—	0.5mm前後の砂粒を含む	にぶい褐色 7.5YR 5/4	にぶい褐色 7.5YR 5/3	〃	
133	〃	—	〃	〃	タタキ(格子目)	〃	—	細砂粒を含む	灰色 5Y 5/1	黄灰 2.5Y 6/1	〃	
134	〃	—	〃	〃	タタキ(平行線)	〃	—	0.5mm前後の砂粒を含む	灰黄色 2.5Y 6/2	にぶい褐色 7.5YR 5/4	〃	
135	A	—	須恵器	底部	タタキ(平行,同心円)	タタキ(格子目)	—	0.5～3mmの砂粒を含む	灰黄色(10YR 5/2) 浅黄橙色(7.5YR 8/4)	にぶい黄橙(10YR 7/1) 浅黄橙色	良好	底部付近はタタキがナデ消してある

表4　石鏃計測表

番号	出土地区	型式	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	抉り 幅 (cm)	抉り 深さ (cm)	先端角度 (度)	重さ (g)	石材	破損状態	備考
1	A	正三角形	1.39	(1.21)	0.28	—	0.12	60	0.4	チャート	片脚部	
2	〃	二等辺三角形	(1.59)	(1.55)	0.44	0.79	0.39	(41)	0.6	黒曜石	先端部	
3	〃	〃	2.17	(1.73)	0.37	(0.52)	0.68	70	0.9	チャート	片脚部	
4	〃	〃	1.78	(1.45)	0.35	0.89	0.18	49	0.8	〃	—	
5	〃	〃	1.78	(1.44)	0.40	—	0.21	42	0.7	黒曜石	片脚部	
6	〃	〃	2.86	1.88	0.56	1.21	0.49	36	1.9	〃	—	
7	〃	〃	2.28	(1.58)	0.49	(0.49)	0.39	44	1.3	チャート	片脚部	
8	〃	〃	1.48	(1.17)	0.43	(0.84)	0.28	50	0.4	黒曜石	〃	

表5　掘立柱建物跡一覧表

建物No.	柱間	桁行	梁行	柱間寸法 桁行	柱間寸法 梁行	主軸方向	備考
SB1	3間×2間	7.0m	4.4m	2.05m (2～2.7m)	2.15 (2.1～2.2m)	N−62°−E	
SB2	3間×2間	5.1m	2.8～3.7m	1.7m (1.3～2.2m)	1.6m (1.4～2m)	N−59°−E	総柱建物
SB3	3間×2間	3.8m	2.8m	1.2m (1.1～1.4m)	1.4m	N−66°−E	
SB4	3間×2間	5.8m	3.9m	1.8m	1.8m (1.1～2.3m)	N−35°−E	焼土有
SB5	2間×2間	5.1m	3.2m	2.6m	1.6m (1.5～1.8m)	N−34°−E	焼土有
SB6	2間×2間	4.8m	3.2m	2.4m	1.6m	N−40°−W	
SB7	3間×2間	5.2m	3.7m	1.8m (1.6～2m)	1.8m (1.7～2m)	N−79°−E	

表6　土錘法量表

No.	出土区	長さ	径	孔径	重	備考
118	SA1	4.12	1.92	0.49	11.9	
119	SA1	4.43	1.88	0.45	13.3	
120	SA1	3.42	1.64	0.49	6.65	
121	SA1	3.08	1.48	0.43	4.9	
122	SA3	3.32	1.69	0.37	6.7	
123	SZ	3.84	1.73	0.48	8.35	
124	A	4.24	1.76	0.52	12.95	
125	A	4.14	1.84	0.54	8.3	
126	A	3.85	1.33	0.45	5.75	

第Ⅲ章　小山尻東遺跡の調査

第1節　遺跡の立地と環境

小山尻東遺跡は，学園都市遺跡群が集中する清武川と加江田川に挟まれた丘陵の北側の小丘陵の東端に位置する。標高約25mの丘陵平坦部の南面に立地し，下位面の谷底低地との比高差は15mである。当遺跡に対面して南に縄文時代早期の集石遺構10基を検出した田上遺跡が，西の山の頂上には大永6(1526)年銘の板碑がある小山尻西石塔群が，山を隔てて南西に弥生終末の竪穴住居6軒や土壙10基，10世紀のカマド付竪穴住居1軒，11世紀の2間×3間の掘立柱建物1棟で構成された浦田遺跡がある。

第2節　調査区の設定と概要

トレンチ調査を行なったところ，アカホヤ層以上は畑の耕作によってほとんど撹乱されていたため，アカホヤ層下位の文化層を中心に調査することにした。北側に東からN1グリッド（2×6m），N2グリッド（6×7.5m），N3グリッド（7×7.5m），N4グリッド（2×8m），N5グリッド（5×5m），N6グリッド（2×7m），N7グリッド（4×5m），中央部に東からM1グリッド（8×2m），M2グリッド（6×2m），M3グリッド（5×2m）M4グリッド（7.5×2m），南側に東からS1グリッド（6×5m），S2グリッド（7.5×4.5m），S3グリッド（9×8m），S4グリッド（8×9m），S5グリッド（2×8m）を設定してアカホヤ層下の集石を検出した。N2・5・6・7，M1・2，S2～5グリッドには焼石が集中している。N2グリッドに4基，N7グリッドに1基，S2グリッドに1基，S3グリッドに2基，S4グリッドに1基の計9基の集石遺構が検出された。集石遺構・焼石間から前平式・押型文・塞ノ神式・貝殻条痕文の早期の土器群が出土し，共伴して環状石斧・打製石斧などが出土した。特に早期の磨製環状石斧が出土したのは注目された。

B地区では，平安時代（10世紀）の竪穴住居が検出され，ヘラ切りの土師器の坏・高台付埦・布痕土器に共伴して緑釉皿・越州窯系青磁埦などが出土している。

中世の集石遺構がS－1グリッドで検出され，4.85m×2.40m×0.45mの土壙の上層に焼けた河原石・角礫が充填していた。

第3節　包含層の状態

当遺跡の基本層序は，Ⅰ　耕作土，Ⅱ　黒色土層，Ⅲ　アカホヤ層，Ⅳ　明褐色土，Ⅴ　褐色土層である。A地区は耕作によって黒色土層がほとんど削平されていた。B地区は黒色土層がA地区よりは残っていた。

（長津　宗重）

第4節　縄文時代の遺構と遺物

Ⅰ集石遺構

本遺跡においては10基の集石遺構が確認された。そのうちの1基は出土遺物から中世に比定されるものであり，残りの9基が縄文時代に比定されるものと思われる。これらの9基の集石遺構はすべて礫群中より確認されたものである。集石を含むこの焼礫群は，上層のⅠ暗褐色表土層，Ⅱ赤褐色層（アカホヤ層）下に位置する明褐色土層中に包含されていた。先にこの礫群の広がりを各グリッドごとにみてゆきたい。

1.　礫群の分布状況（第1図）

(1)　N1グリッド

3ケ所のトレンチが残るグリッドである。3ケ所のトレンチは礫層を包含する明褐色土層より深く掘り込まれているために当然のことながら礫の分布はみられない。このグリッドでは全体にわたり礫の分布がみられ，とくに南端の100×80cmの範囲に集中していた。しかし，これは人為的な集石ではない。

(2) N2グリッド

濃密な集石をみるグリッドで，北側に一部散慢な分布範囲がある。礫層は平均30cmほどの重なりをもち，その礫上，礫間に多数の土器片，石器の出土をみた。グリッド中央より東側に2基（4号，5号），同じく南西に2基（6号，7号）の集石遺構を確認した。

(3) N3グリッド

グリッド中央より東側に不定形に広がる濃密な分布帯をもつほか，南西方向に弓状の分布帯，南端に不定形に広がる分布範囲をもつ。出土遺物はグリッドの南東端に集中し，このグリッドは，必ずしも礫群の分布範囲と一致していなかった。

(4) N4グリッド

全体にやや疎に礫の分布をみる。中央より北に100×50cm内外の楕円状の濃い分布域をみるが，これも人為的集石ではなかった。

(5) N5グリッド

南東の一画にほとんど礫のない範囲をみるほかは，全面にわたって濃密な分布をみるグリッドである。礫層の幅は平均20cmから25cmに及び，出土する遺物はほぼこの礫層分布域に一致している。

(6) N6グリッド

濃密な礫の分布がみられるわりには出土遺物点数が6点とひじょうに少なかった。

(7) N7グリッド

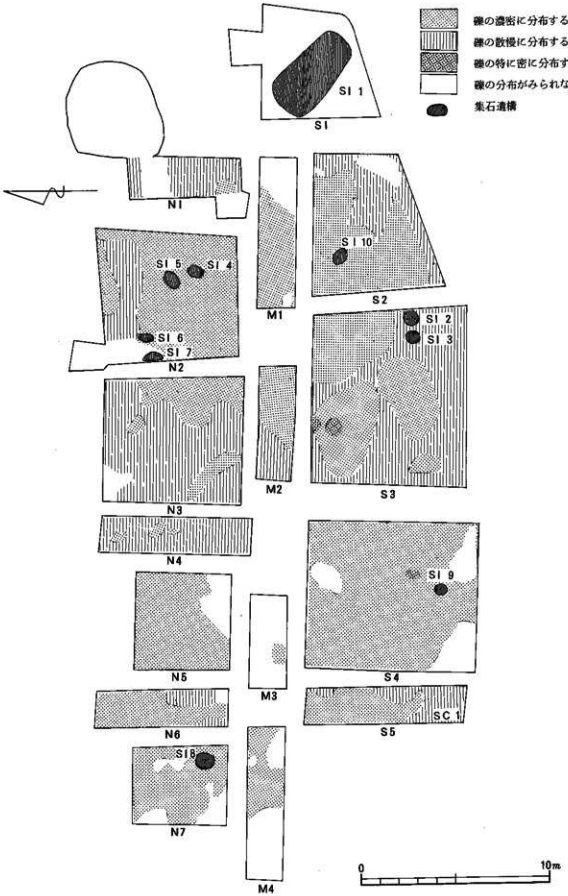
グリッド中央より南西方向に集石遺構（8号）を確認した。南東の隅，北東の隅，集石より北側1mのところに不定形の礫のほとんどない範囲がある。その他の範囲は濃密に礫が分布している。

(8) M1グリッド

グリッド東側の3分の1ほどにまったく礫のない範囲がある他は濃密な分布域である。出土遺物は礫群の分布範囲と一致している。このグリッドの礫層はN2グリッドの礫層に続くものと考えられる。

(9) M2グリッド

全体に濃密に分布するが，西側の3分の1の範囲はやや散慢に分布する。散慢に分布する範囲には，石器1点の他は遺物の出土がなかった。濃密に分布する範囲は，N2，N3グリッドの礫層に続くものと思われる。



第１図　グリッド配置図及び礫・集石遺構分布図

⑩ M3グリッド

グリッド中央より北側の100cm×50cmの楕円状の小範囲に礫の集石がみられたほかは，全く礫の分布がみられなかった。礫の集石は人為的になされたものではない。

⑪ M4グリッド

グリッド中央より西側2分の1の範囲，南東の隅に礫の全くみられない範囲がある他は，比較的濃密に分布するグリッドである。ただ，遺物の出土は4点と数少ない。

⑫ S1グリッド

中世に構築されたと考えられる大きな集石遺構（S11）を確認した。

⑬ S2グリッド

全域にわたって礫の分布をみるが南へ行くにしたがい散慢となる。中央付近の1m×1.5mの楕円形の範囲と南東隅の1.5m×2mの不定形の範囲に礫の分布をみなかった。中央付近から北東方向に集石遺構（S110）を確認した。N2M1グリッドと続く礫層がこのS2グリッドへも続き終了するものと思われる。S1・2・3・4・5グリッドから南は深い谷となる。

⑭ S3グリッド

S2グリッドと同様に南へ行くにしたがい散慢な分布となる。不定形の濃密で大きな礫群がみられる。濃密な分布域のなかに，さらに礫の集中した1m×1m，50cm×50cmの小範囲がある。単に礫の集中したものに思え，人為的なものではない。北東の隅に集石遺構2基（S12，S13）を確認した。この2基は近接している。

⑮ S4グリッド

N2グリッドと共にもっとも濃密な分布を示し，礫層は平均30cmほどの重なりをもつ。

南東の隅，南西の隅，北の中央付近にはとんど礫のみられない範囲がある。南側の中央付近に集石遺構（S19）を確認した。出土遺物は多数に及び，とくに石皿はこのグリッドのみに出土している。出土範囲は礫の分布範囲に一致している。

⑯ S5グリッド

南側3分の1は散慢に分布するが，北側に向うにしたがい分布が多くなる。

2. 集石遺構

S12 （第2図）

S3グリッドの南東に位置し，東側ベルトに接している。S13と近接しており，集石中心間の距離はS12から西にほぼ130cmを測る。集石の範囲は南北110cm，東西90cmを測り南北にやや長い楕円形を呈する。集石を構成する礫は総数72個を数え，火成岩系の河原礫，砂岩質の河原礫により構成される。割れているもの，丸礫のものがあるが，割れているものが数量的には多い。丸礫のものは比較的大型である。割れているものは，熱を受けて割れたものではなく，丸礫を人工的に打ち欠いており鋭利なカット面を残している。集石中央付近に，20.2×14cm，25×15cm。

22×12cmを測る比較的大型で扁平な丸礫3個を配する。礫を取りのぞくと集石の範囲とほぼ一致する南北93cm×東西85cmを測るほぼ円形の土壙を検出した。土壙の深さは約11cmを測り，断面は皿状を呈す。土壙底部に非常に扁平な板石を数枚ひいている。各礫は比較的密に集石しており，S3グリッドの散乱する礫群のなかから集石遺構として確認するのに困難はなかった。集石の南端において，貝殻条痕文を施す小土器片が出土した。(第6図・97)・全体に色調赤褐色を呈し，胎土に0.5～1mmの石英粒を含み焼成は堅く焼きしめられ良好である。色調赤褐色を呈するのは二次的な熱を受けたものと思える。

S I 3

S3グリッドの南東に位置し，S I 2と隣接している。集石の範囲は南北95cm，東西80cmを測り，これもS I 2と同様に南北にやや長い楕円形状を呈する。S I 3はS I 2に比べ，やや散慢な集石となっている。集石を構成する礫は総数60個を数え，SI2同様火成岩系の河原礫，砂岩質の河原礫である。丸礫と角礫で構成されるが，丸礫は比較的大型で，角礫は小型の丸礫を打ちかいて半截したものや，数回打ちかいて角礫としたものがある。

丸礫の大型のものは，集石の中心部付近に配されている。最も大型の丸礫で20×17cmを測る。

集石の範囲にほぼ一致して，深さ約20cm，南北90×東西80cmを測る土壙を検出した。土壙の底部にはS I 2と同じく，扁平な板石を土壙面にそって配石している。

SI2，S I 3はほぼ同じレベル上にあり，しかも近接して位置する。集石端部は極めて接近し30cmを測る。

S I 4

N2グリッドの南東に位置し，S I 5と中心距離で約1.4mと近接している。集石の範囲は南北約1m，東西約90cmを測りほぼ円形に広がる。この集石は角礫が多く，また中央より南側は散慢な集石となっている。南北75cm×東西72cm，深さ9cm～12cmを測る不定形の土壙を検出し，土壙底は南側で約5cm上がっていた。土壙検出の際，炭化粒の出土をみている。また，土壙底にこの集石では板状の礫を敷いたり，立てたりしたようすはなかった。

S I 5

N2グリッドのほぼ中央に位置して，S I 4に近接している。集石の範囲は南北約1.2m，東西約1.2mでほぼ円形に広がる。半壊，あるいは数回割られたと思われるものが多いが，丸礫も若干含まれている。全体に2号，3号に比べて礫が小さいが，比較的形はそろっている。この集石では重なり合った二重の土壙を検出した。外側の土壙は南北約1m×東西約70cm，内側は南北約65cm×東西60cmを測る。北側の土壙壁を共有している。外側の土壙は集石の範囲と一致するから，内側の土壙がまず掘り込まれ，後に広げられたものと考えられる。

内側土壙の範囲により大きな礫が集石していた。また土壙底に礫は敷かれておらず，炭火粒を含む暗褐色土がつまっていた。集石中より剝片二点（第10図21，22）が出土している。

S I 6

N2グリッドの西側に位置し，S I 7に近接している。集石の範囲は南北1.3m×東西40cmで南北に長い不定形を呈している。この集石は破片といえるくらいの小角礫が多く，土壙を共なっていなかった。

S I 7

N2グリッドの西端に位置し，南北に1.3m広がるが，東西はグリッドベルトにかかり確認し得なかった。比較的

形の揃った集石であり，また土壌は深く掘りこまれ，約28cmを測る。集石の東端部，暗褐色土層中より環状石斧（第10図18）が出土した。礫は土壌底までつまっており，底に敷きつめたようであった。土壌は方形を呈していたかもしれない，完掘できなかったことがおしまれる。

S I 8

N 7グリッドの南東隅に位置し，他の集石からかなり離れている。S I 7から西に約22m，S I 9から北西に約16mを測る。集石の範囲は南北110cm，東西125 cmを測るが東西方向にかけ離れて小集石がある。他の集石に比べ小礫を乱雑に組んだ印象を受ける。小礫は丸礫がほとんどなく，打ちかいた角礫がほとんどを占める。他の集石が丸礫を中心部付近に配したり，板石を底に敷いたりするのに対して，S I 8は比較的大きさのそろった角礫を無雑作に組み込んで構成している。このS I 8もまた周辺に同じ大きさの礫が散乱していたため，また上記のように無雑作に組まれていたがために一見しただけでは集石遺構として判断し得なかった。礫を取り除く過程で土壌をともなっていたので集石遺構として確定し得た。土壌は南北100 cm，東西95cmの不定形であった。集石底より土壌底まで厚さ10 cmほどの黒褐色土層がつまっており，その中に炭化粒を確認することができた。同時に第4図18に掲載している前平吉田系の貝殻文土器片を採取しえたことから最終的に集石遺構と断定するに至った。貝殻文土器片にはススが付着していた。

S I 9

S 4グリッドの南側に位置する南北70cm，東西55cmの広がりをもつ小さな集石である。礫総数は角礫，丸礫合わせて25個を数える。24×24cm，18×25cm，15×23cmの3個の扁平な丸礫を土壌の縁にそって立てかけて炉を組むように構成している。集石のほぼ中央の底の部分にはこの集石中最も大型の22×26cmを測る不定形の扁平な丸礫を敷いている。S I 9は集石自体の広がりは小さいが，集石を構成する礫自体は比較的大型であり，人為的な意図が明確に感じられる。集石下に50×50cmに広がるほぼ円形の土壌を検出した。深さは20cmを測り比較的深い，ただし集石は土壌底まで及んでいない。土壌を検出する際炭化粒を検出した。土壌内の土は明らかに床面である第2層とは異なり，黒褐色を呈していた。

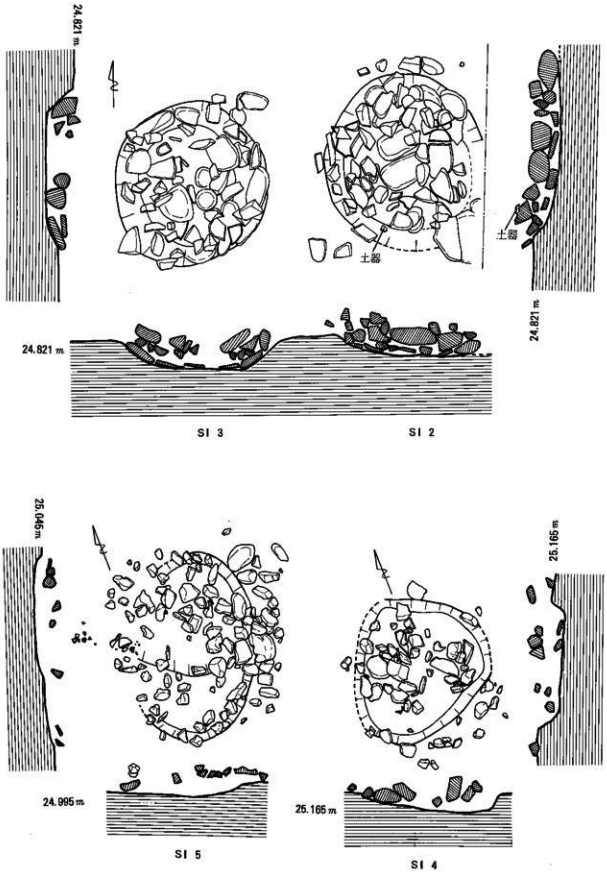
S I 10

S I 10はS Iグリッド北西に位置し，南北75cm×東西70cmを測るほぼ円形の集石で，比較的形の揃った人頭大の角礫よりなる。深さ約10cm程度の浅い土壌を伴なっている。

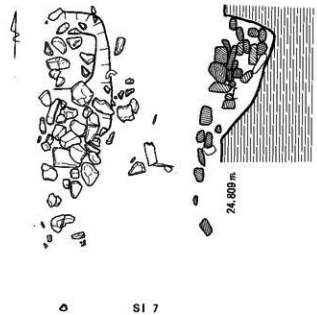
3. ま と め

本遺跡の集石遺構は，発掘区一面の礫群のなかよりの発見であった。集石遺構と確定する過程には，礫層が現われた段階ですぐに集石と認められるもの，（それとても，礫が周辺に散乱して範囲が明確ではなかったが）礫層を取り除く過程においてそれと認知するものがあり，必ずしも容易ではなかった。集石遺構を含む礫群のなかには赤色，あるいは赤褐色を呈して深いヒビ入り，一見して熱を受けたと思われるものがあったが，すべてが熱を受けているかどうかは判然としなかった。集石遺構と礫群との関係は明確ではないが，あるいは，焼石礫は集石遺構の廃棄礫である可能性がある。礫群中より磨石，石皿が出土しているがこれらも部分的，あるいは全面に赤化して加熱されていた。ただ，これらは集石遺構に組み込まれていた確証はない。なお，熊本県菊池郡大津町中後迫遺跡[1]で，磨石7点，石皿3点が集石内より出土した例がある。

本遺跡の集石遺構を大別すると次のようである。(1)比較的広く，浅い土壌をもち，土壌底に扁平な板石を敷く。また中央付近に比較的扁平に近い丸礫を置く。（S I 2，S I 3）(2)比較的広く浅い土壌をもち，集石礫が土壌底に接しない

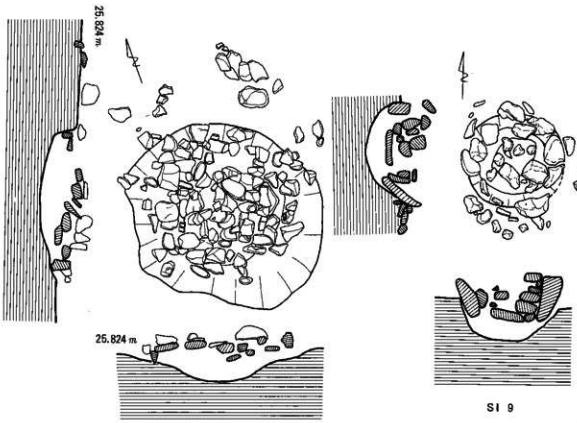


第2図　集石遺構2・3・4・5号



SI 7

SI 6



SI 8

SI 9

第3図　集石遺構6・7・8・9号

もの。（S15，S18），⑶土壙を持たず平面上に集積するもの。（S16），⑷比較的径は小さいが，深い土壙をもち土壙側壁にそって扁平な大型礫を立て，底にも扁平な板石を敷くもの。集石礫は土壙底に接しない。（S19），⑸方形に近い土壙を有するもの（S17）以上である。使用目的の相違，あるいは時期的な相違があるものと思われる。集石を含む礫群は，赤ホヤ属直下に層をなしていたものであり，また集石遺構中からは貝殻条痕文土器片，前平・吉田系土器片が出土していることから縄文早期に比定したい。集石遺構の機能としては，earthoven としての使用が推定されることが多いようであるがなかには遺骸の埋葬時における墓標的機能[2]をもつものもあるという。本遺跡の集石遺構の場合は，礫に加熱された形跡が窺われたこと，炭化粒の出土，ススの付着した土器片の出土などからしてやはりearthoven 的機能を果たしたものかと思われる。

註 ⑴ 中後追遺跡調査報告 熊本県菊池郡大津町 1978

⑵ 「大分県地方史」34号－ －稲荷岩遺跡 大分県大野郡朝地町大恩寺稲荷 1964

Ⅱ 遺 物

1. 土 器（第4・5・6・7・8図）

本遺跡出土の土器は，破片がほとんどをしめ，完形に近く復元できたものはなかった。

器形は深鉢がほとんどで，浅鉢，円筒，角筒土器が混在する。

押型文土器，貝殻文土器，その他があり，文様器形等からⅠ類からⅩⅢ類に大別した。

Ⅰ類

Ⅰ類器は貝殻条痕を横位，斜位に施して地文とし，その上に貝殻腹縁刺突線文を施すものである。円筒と角筒の器形をもっている。

Ⅰa －円筒形を呈するもの。（1～13，17～26）

Ⅰb －角筒形を呈するもの。（14・15・16）

Ⅱ類

Ⅱ類土器は押型文土器である。

Ⅱa －山形押型文を施文するもの （27～38）

Ⅱb －楕円押型文を施文するもの （39）

Ⅲ類

Ⅲ類土器は凹線と撚糸文を組み合わせたもの （40～46）

Ⅳ類

Ⅳ類土器は貝殻による条痕を斜位に施す土器である。

Ⅳa －口唇を丸くおさめる口縁部。 （47～54）

Ⅳb －口唇を平坦にして角をもつ口縁部。 （55～60）

Ⅳc －口唇部端に刻目などの模様を施すもの （61～66）

Ⅳd －貝殻条痕をもつ胴部 （67～107）

Ⅴ類

Ⅴ類土器は，器体外面に浅い擦痕が数条みられるもので，板状のもので調整したものと思われる，外面はきれいに磨かれている。 （108～110）

Ⅵ類

Ⅵ類土器は，器体外面に細い条痕をもつもので，先のとがった串状のものでひっかいている。

Ⅶ類

Ⅶ類土器は，器体外面に深い条痕を密に施しているもので，ヘラ状土具によるものかと思われる。

Ⅷ類

Ⅷ類土器は，縄文を施すもの，115は口唇部，胴部に斜行縄文を施す。116は縄文を施す文様帯上に二条の隆帯をもっている。

Ⅸ類

Ⅸ類土器は，器体外面に刺突列点文を施すもの。（117・118）

Ⅹ類

Ⅹ類土器は，太い貝殻条痕を横位に施すもの。（119～122）

Ⅺ類

Ⅺ類土器は，3ないし4の波状口縁で縄目突帯を口縁と頸部にめぐらし，縄目突帯のつなぎ目は突瘤文となる下部突帯下は縦位のヘラ描きによる刻文を地文として，菱形，あるいは惰円に近い刻文を3条にわたって施している。（123～126）

Ⅻ類（底部）

Ⅻa 一平底で，胴部へゆるく立ち上がるもの。（133～136）

Ⅻb 一平底で，胴部へ比較的急に立ち上がるもの。（137～140）

Ⅻ Ⅻc 一平底で，胴部へ垂直に近く立ち上がるもので，細刻線をもつもの。（141～144）

Ⅻd 一平底で，底に貝殻条痕をもつもの。（145）

Ⅻe 一比較的強い上げ底で，胴部へと立ち上がるもの。（146）

Ⅻf 一比較的ゆるやかな上げ底で，底部近くに貝殻腹表圧痕文をもつもの。（147）

ⅩⅢ類

ⅩⅢ類は，上記のⅠ～Ⅻ類と明らかに時期が異なるものである。

ヘラ状施文具による数条の沈線がある。（148）

図版に掲載している土器の器形・調整・文様等については土器観察表に一括している。

2. 石　器

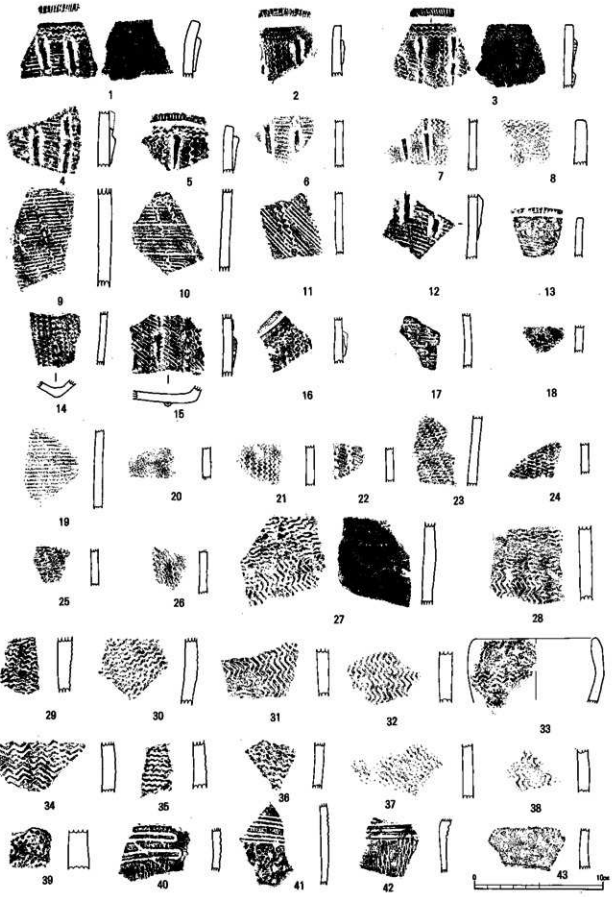
本遺跡では礫の散乱する中に各種の石器が出土した。

磨石7点，敲石2点，凹石1点，石皿2点，石錘2点，打製石斧2点，磨製石斧1点，環状石斧1点，剥片石器2点である。

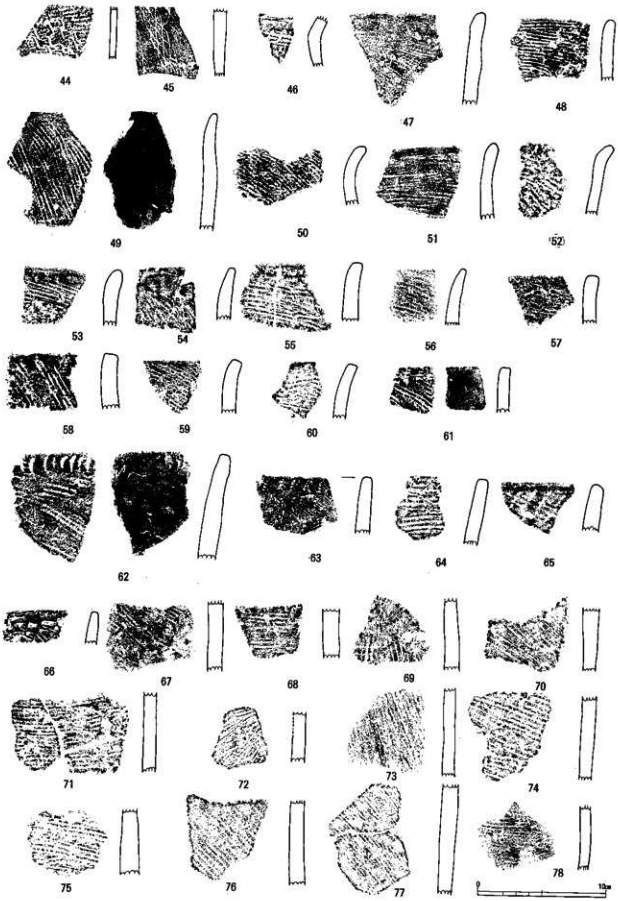
(1) 磨石（第9図1～7）

第9図1～7は磨石である。1・2・3は円形の礫を用い，比較的厚い断面形をもっている。1はとくに平坦な面をもっておらず，球に近い形状をしている。熱をうけたと思われ広範囲にわたってヒビが入っている。2は片面に小範囲の平坦面をもっている。3は平坦面が中心軸より一方にかたより，しかも緩傾斜がついている。平坦面は裏面，側面に比較して平滑である。1・2・3ともに砂岩製，1はやや軟質，3は硬質である。

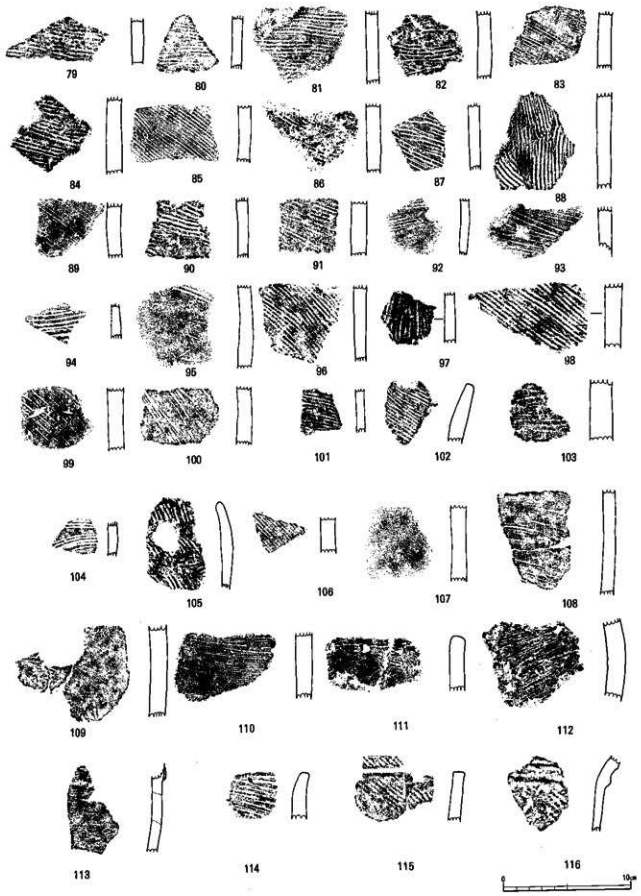
4・5は縦長の丸礫を用いた磨石である。4の平坦面はそれほど顕著ではない。これも熱をうけて深いヒビ割れがある。5は片面に顕著な平坦で平滑な面をもっている。下端には潰痕が残り敲石としても使用された形跡がある。4 5ともに砂岩製，やや硬質である。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
0
10cm

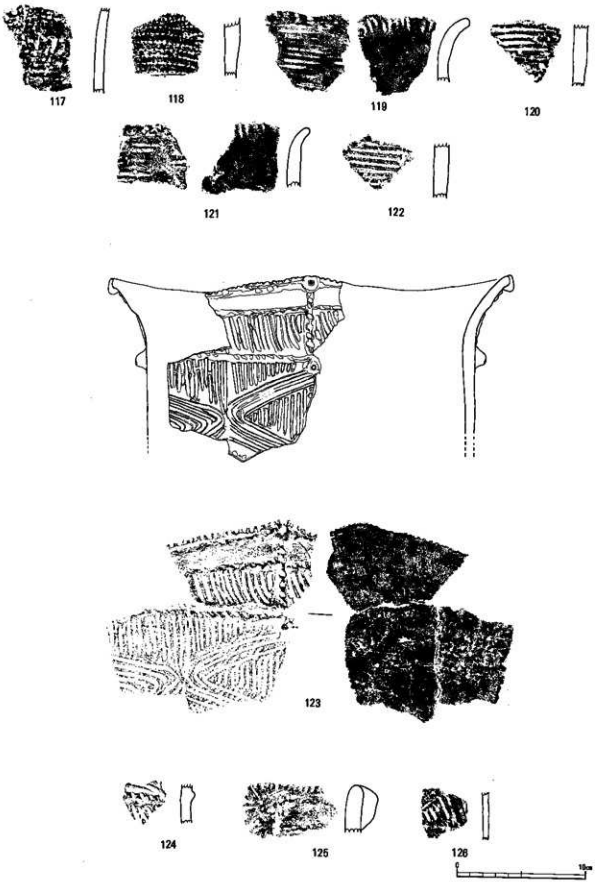
第4図　出土土器拓影(1)


44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
0
10cm

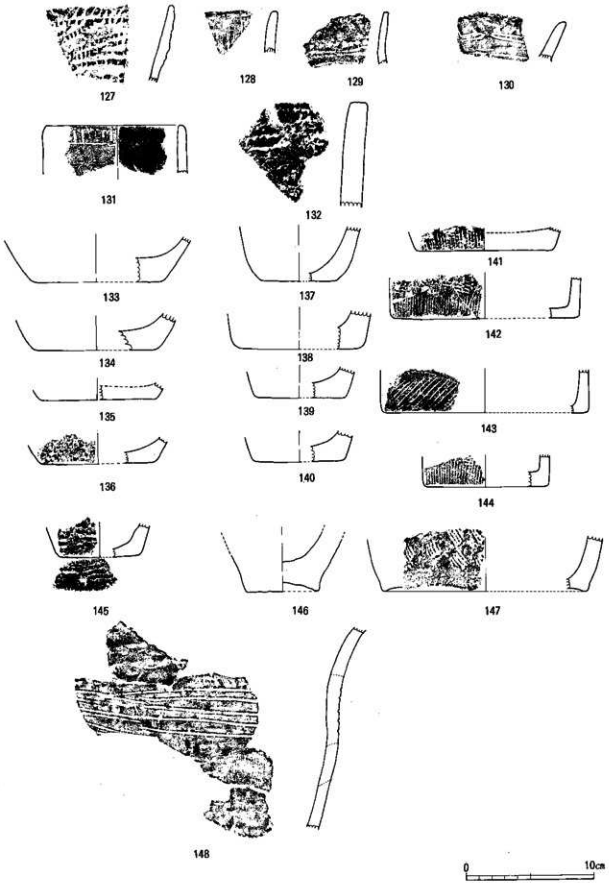
第5図　山土土器拓影(2)


79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
0
10cm

第6図　出土土器拓影(3)



第7図　出土土器拓影(4)


127
128
129
130
131
132
133
137
141
142
134
138
135
139
143
136
140
144
145
146
147
148
0
10cm

第８図　出土土器拓影(5)

6・7は円形，あるいは楕円形の丸礫を用いる扁平な磨石である。6・7とも広範囲の平坦で平滑な面をもつ。7には中央付近に凹みがあり台石としても使用された形跡が残る。6・7とも砂岩製，7は硬質である。

(2) 敲石（第9図8・9）

第9図8・9は砂岩製の敲石である。8は敲石としては特異な形状をもつ。全体にゆるく湾曲し，上端内湾部と下端に潰痕を有する。下端の潰痕部は平坦ではなく，これも曲面である。潰痕は上端，下端ばかりでなく，湾曲部内面の一面と外面にも連続した潰痕が残る。

これは敲石として使用されるまえに他の目的のために使用された石器の一部のように思える。これは，N7グリッド中のSI8中より出土しており，焼けてやや赤褐色を帯びている。9は楕円形の丸礫を半壊したもので，下面に潰痕を残している。また石器中央部にゆるやかな角度の稜があり，両縁に向って平坦，かつ平滑に加工してある。

(3) 凹石（第9図10）

第9図10は楕円形を呈する凹石である。最大長8.1㎝，横幅5㎝，最大厚3.8㎝を測る中央部に円形の凹みを有する。凹みは小さな潰痕からなり，2㎜～3㎜の深さである。背面にも潰痕を有するが不定形で，表面のような明確な円形は呈していない。

(4) 石皿（第10図，11・12）

第10図11・12は石皿である。11は最大長26.8㎝，最大幅17.6㎝，最大厚4.7㎝。を測る。中央部付近がわずかに凹むが，石皿の表面としてはフラットな面で構成される平坦磨面の石皿である。二次的な加熱を受けており，赤化している。12は最大長29.2㎝，最大幅23.5㎝，最大厚4.9㎝を測る。これは隅丸の三角形を呈して両辺に縁を残し，中央部で弓状に強く凹んでいる。これも，二次的な熱を受けたとみえ部分的に赤褐色を呈している。11・12とも砂岩質である。11は，安達厚三氏の分類（注1.）によるⅠa（扁平な転石を利用した全体に浅く凹むもの），12はⅡb（不定形の石塊を利用して，縁を残して中央が弓状に凹むもの）にあたる。

(5) 石鏃（第9図，13・14）

第9図13・14は石鏃である。本遺跡からはわずかこの2点が出土したにすぎない。2点とも非常に小型の打製石鏃である。13はチャート製の基部がやや抉れる凹基無茎鏃である。両側縁と基部の長さがほぼ同じで正三角形を呈する。計測値は最大長11㎜，最大幅10㎜，最大厚2㎜である。14は硅石製で11とは逆に基部中央にふくらみをもつ無茎鏃である。脚の片方は欠けている。側面からみるとわずかに左右方向にゆがみがみられる。現存の計測値で最大長14㎜，最大幅12㎜，最大厚25㎜をそれぞれ測る。

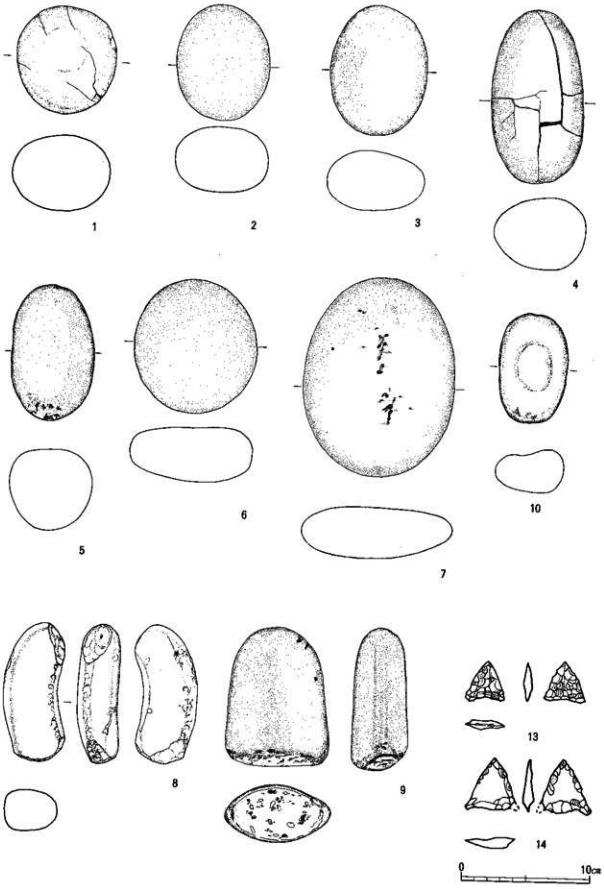
(6) 石斧（第10図15・16・17）

第10図15・16・17は石斧である。15・16は打製，17は磨製である。15は現長で最大長12.2㎝，最大幅4.85㎝，最大厚2.85を測る。片面により多く調整剝離を行っているが，全体に磨耗が著しく明確に剝離面を残していない。両刃の石斧であったと思われるが刃先端を欠損している。しかし，一度折れたものをそのまま使用し続けたと思われ，使用痕を残している。断面をみると肥厚しており，全体は乳棒状を呈している。石質は極めて粒子の粗い火山岩質で暗青灰色を呈する。16は現長で最大長8.8㎝，最大幅3.75㎝を測る小型の片刃短冊形石斧である。全周縁に調整剝離を行っているが両縁均等でなく片縁に丁寧に施す。刃部に磨耗痕を残している。基部片側は欠損している。砂岩質で明青灰色を呈する。

17は両刃の磨製石斧の刃部で上部を欠いている。現長で最大長6.2㎝，最大幅5.5㎝，最大厚2.6㎝を測るが，おそらく13㎝～15㎝ほどの長さがあったものと思われる。刃部は極めて鋭利であり，使用痕として刃こぼれが観察できる。

表面はよく磨かれている。断面はやや厚めの凸レンズ状を呈している。石質は硬質砂岩である。

(7) 環状石斧（第10図18）



第9図　出土石器(1)

第10図18は環状石斧である。これはＮ２グリッドＳＩ７下，暗褐色土層中より出土した磨製の環状石斧である。視覚した限りでは熱を受けた形跡はない。円盤状を呈して中高であり，復元径10.7cm，孔径（外孔径3.2㎝，内孔径2.2㎝），厚さ2.1㎝を測る日下部善己氏の分類[2]によるＡＩａにあたるものと思われる。すなわち中央孔の周囲に隆帯や凹帯を持たず，中央孔の断面形が珠玉状〔><〕を呈する両刃のものである。硬質の砂岩を素材として全面にわたって丁寧に研磨されている。刃部には使用痕と思われる細かな剝落痕が観察できる。孔は両方向より均等に穿孔され，孔面は磨かれたように平滑で，回転運動を主とする穿孔具により穿孔されたものと思われる。なお，穿孔具を確認することはできなかった。

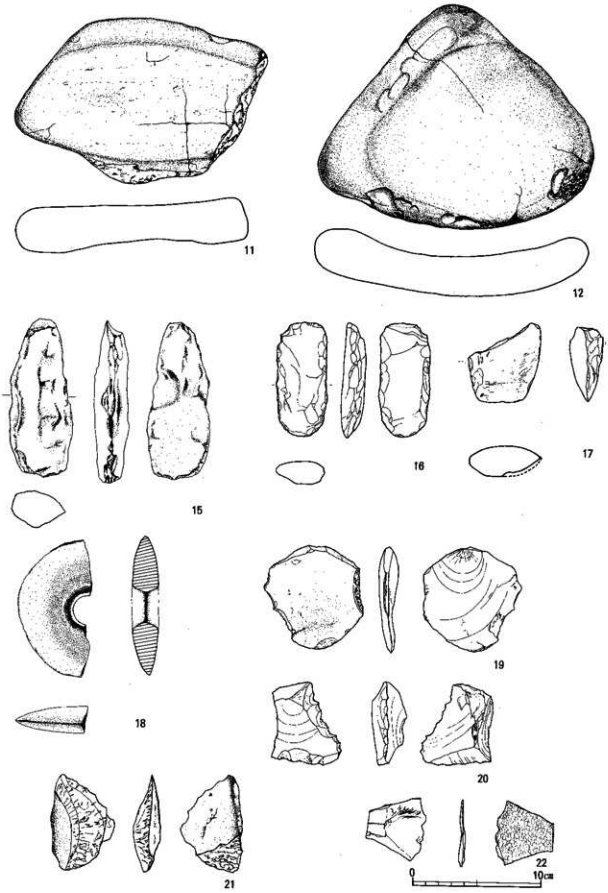
(8) 剝片石器（第10図19・20・21・22）

第10図19は未加工の自然面を片面に残す円形掻器である。全周にわたって片面縁部調整が施され，一部に剝落痕をみる。20は片面よりの粗い剝離の後，細かい調整剝離を施した剝片である。21・22はＳＩ５中より出土した剝片で視覚したかぎりでは熱を受けた形跡はなかった。

3. ま と め

本遺跡出土の石器は，縄文早期において出土が指摘されているもののほとんどを確認し得た。ただ，石鏃の出土が他の石器に比較して極めて少なかった。各石器は礫群に伴なって出土し，礫石の分布が疎である範囲には当然のことながら極めて希であった。同様のことは土器片についてもいえる。特に密に礫石が集積されていたＳ４グリッドからは，磨石のほとんどと石皿が出土した。石皿は床に置かれたように出土していたので，この範囲は何らかの遺構の存在を思わせたが，礫群を取り去っても何らの遺構も確認できなかった。また，この磨石と石皿は明らかに熱を受けたあとがあり，集石中に組み込まれた後，廃棄されたものかと思われる。実際，岐阜県堂之上遺跡[3]で，集石遺構の床面に石皿を配した例が知られている。また敲石と環状石斧が集石遺構中より出土している。環状石斧は日下部善己氏[2]によって算出されている外径，厚さの平均値内にほぼ合致しており，西日本では希な出土である縄文早期の磨製品ということで特に注目される。県内では近年，もう一例縄文早期の磨製環状石斧が出土している。宮崎郡田野町芳ケ迫遺跡[4]のものがそれで，本遺跡のものよりひとまわり小型であり，復元径8.4㎝，孔径2.5㎝，厚さ1.6㎝を測る。全面に丁寧に研磨された硬砂岩製のもので，本遺跡と同様に集石遺構をともなう礫石群中よりの出土である。ただ，本遺跡の環状石斧の場合は集石中からの出土であり，極めて希な例である。この環状石斧は損壊したために集石中に投入，廃棄されたのか，あるいは人為的に半壊して何らかの儀礼のために投入したものかは，集石遺構の機能と共に検討すべき課題である。ただ，石器の本来的な機能を喪失して，集石遺構という二次的なものへ転用されたことは疑う余地がない。

出土した縄文土器はⅩⅢ類の一点を除き，アカホヤ土壌下の褐色土層より，礫と混在しながら得られた。よって，土器の出土範囲は礫群の分布範囲とほぼ一致している。Ⅰ類土器は前平・吉田系土器で，底部Ⅻc に組合わされると考えられる。うち一点は集石遺構中よりの出土であった。Ⅱ類の押型文土器はわずか13点の出土で，うち12点が山形押型文，残りの１点のみが楕円押型文土器片であった。Ⅲ類土器は凹線文と撚糸文を組合わせた河口貞徳氏の分類における塞ノ神Ａ式ｂ にあたる。これもわずか７点の出土であった。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類，いずれも縄文早期に比定できるものである。量的に本遺跡の主流を占めるのはⅣ類土器で，116点が出土している。うち１点は集石遺構中からの出土であった。Ⅳ類は口縁部から胴部にかけて貝殻条痕文を斜位に浅い角度で施し，内面は磨かれていて丁寧なつくりである。口唇部は角がつくか丸くおさめられ，心もち外反している。刻目などの模様があるものは少ない。器形は深鉢形を呈すると思われる。色調，胎土，焼成からみて底部Ⅻa （平底）タイプと組合わされると考えられる。同種のものは宮崎学園都市遺跡内の田上遺跡のほか，宮崎郡田野町芳ケ迫遺跡でも同様のものが出土している。いずれも集石遺構をともない



第10図　出土石器(2)

性格のよく似た縄文早期の遺跡である。このⅣ類の他，施文原体がⅣ類の二枚貝より大型で，もっと深くて太い貝殻条痕を施すX類がある。この土器では条痕は口縁にほぼ平行，横位に施される。底部Xaに太い貝殻条痕をもつものが出土しているが，あるいはこれと組合わさる可能性がある。

XI類七器は4点を数え，N6グリッドより出土した2点とS4グリッド出土の1点は接合している（第7図，124）。

この種の土器は初見であり，口縁は三ないし四の低い山形で，口縁に沿って縄目突帯を巡し，突瘤文で結ばれる。胴部はヘラ状施文具で縦位に刻文を施している。器体下部の出土がなかったため，全体の器形は明らかではないが，そのまま少しふくらみながら底部へ続くのか，あるいは胴部「く」の字形に屈折して底部へと続く深鉢形を呈すると思われる。県内の出土例では宮崎市跡江貝塚出土の，器体上部細形刻文，下部山形押型文を斜走または縦走させる跡江式土器にもっとも近いものである。跡江式は手向山式と称される土器群の一つで，手向山式の要素のなかにこのXI類土器に類似するものをみると「Ⅲ式一平行線，鋸歯文，弧線文を描き曽畑式と曰勝山式の文様を踏襲する」[5]ものがある。XI類の場合は刻線が縦方向に施される点が異なるが，手向山のなかにも縦位に施すものが知られている。[6]また手向山式の口縁は通常直行するが，これもなかには山形口縁を呈するものがあるという。[7]また曽畑系の細形刻文は縄文早期の押型文土器に共伴することがしばしばであるといい，四本遺跡の共伴土器との関連で，このXI類土器の出土は興味をひく。

細形刻文は縄文早期の押型文土器に共伴することがしばしばであるといい，[8]本遺跡の共伴土器との関連で，このXI類土器の出土は興味をひく。

XIII類はⅠ～XII類の出土状況と異なり，赤ホヤ土層上の暗褐色土層中からの出土で明らかに時期が異なるものである。いかなる系統に属するか明らかではないが，ヘラ状工具による数条の沈線は後期の土器をおもわせる。以上，本遺跡の主な出土土器について概観したが，ここで各土器の編年関係を岡本勇氏の編年でみてゆく。氏によれば，前平式吉田式（本遺跡ではⅠ類に相当するものと考えられる。）を早期中葉に，塞ノ神式（本遺跡でのⅢ類）を早期後半に位置づけ，手向山式（本遺ではXI類に相当すると考えている）を平椎式と共に，前平式，吉田式よりは新しい早期中葉に位置づけられている。[9]本遺跡ではⅠ～XII類土器のほとんどが散乱する礫間中より混在して出土し，この編年を明確に確認し得るような層位的資料をなし得なかった。

また，本遺跡の土流をなしているⅣ類の貝殻条痕を施す土器も他種と混在しての出土で，層位関係を明らかに出来なかった。しかし，SI2中より出土したものが1点あり，同じくSI8から出土したⅠ類土器との関連から，ここでは早期中葉に位置づけておきたい。Ⅳ類土器は現在のところ明確な系譜をたどれないようであるが，近年その出土例が除々に増えつつあり，今後その成果から明確な位置づけを期待したい。尚，XI類土器については乙益重隆氏に御教示をうけた。厚く感謝申し上げます。

（近藤　協）

註　(1)「縄文文化の研究」7.道具と技術，安達厚三氏筆「石皿」

(2)　同　上　7.道具と技術　口下部善己氏筆「擬状石斧」

(3)「宮之上遺跡」岐阜県大野郡久々野町教育委員会，1978年

(4)「芳ケ迫第1遺跡」概報，宮崎県宮崎郡田野町教育委員会，1984年

(5)「日本の考古学」縄文時代，九州東南部　河出書房

(6)　乙益重隆氏の御教示による。

(7)　乙益重隆氏の御教示による。

(8)「日本の考古学」縄文時代，九州東南部　河出書房

(9)「縄文土器大成1～早・前期」講談社　1982

第5節　弥生時代の遺構と遺物

耕作によって削平されていた点もあるが，弥生土器はわずか2点である。

遺物

甕1

短い逆L字状口縁で，口唇部は凹気味であり，三条の三角形突帯を有する。胎土には1㎜大の砂粒（雲母・石英など）を多量に含み，焼成は良好で，色調は橙色を呈する。

甕2（第11図2）

斜目下方へ垂れ下がる口縁部を有する口径20.5㎝の甕で，内外面ともナデを施す。胎土には0.5～1㎜大の砂粒（黒雲母など）を含み，焼成は良好で，色調はにぶい黄橙～褐灰色を呈する。

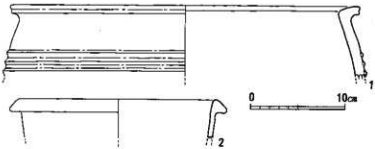
第6節　古墳時代の遺構と遺物

1号土壙（第12図）

1号土壙はS－5グリッドに位置する。1号土壙は，主軸長157㎝，幅124㎝，深さ42㎝で，長方形プランを呈している。主軸は東西方向で，中央部の床面より若干浮いた形で，甕・壷が各1個ずつ出土した。甕は横位に，壷は倒位でほぼ完形で出土している。

甕（第13図1）

端部がやや平坦な口縁部がやや直立気味に真っすぐ伸び，胴部最大径がやや上位になる。底部は丸底で厚い。口径16.0㎝，胴部最大径20.8㎝，器高22.2㎝。



第11図　A地区 出土弥生土器実測図

甕（第13図2）

端部がやや平坦な口縁部がくの字に外反し，長胴の上げ底である。胴部最大径が上位にある。口径27.5㎝，胴部最大径26.7㎝，器高33.5㎝。

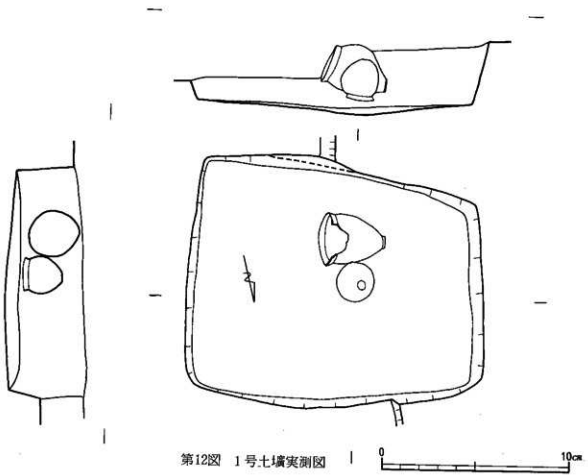
第7節　平安時代の遺構と遺物

SA1

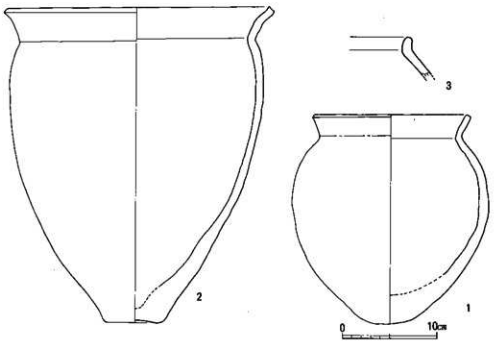
1号竪穴式住居は，調査区の西部B地区に位置する。長軸6.64 m，幅4.38 mの楕円形プランを呈し，主軸は南北方向である。主柱穴は南北方向の2本である。

土師器

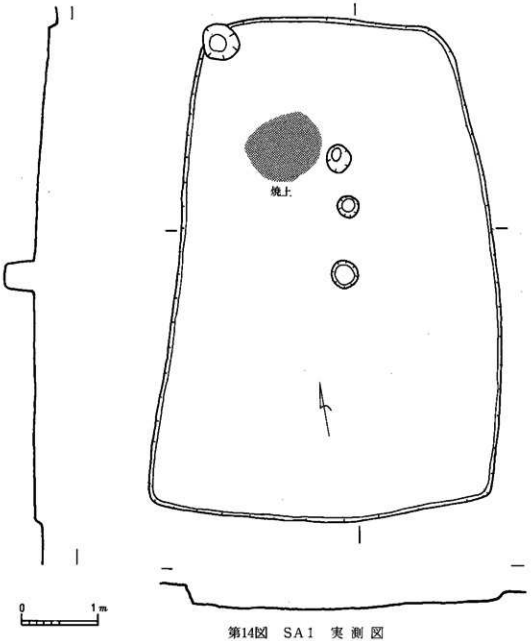
土師器はほとんど1号竪穴式住居から出土した。ヘラ切りの坏・高台付塊が主で，糸切りの坏や皿は出土していない。土師器に共伴して，緑釉皿・越州窯系青磁碗が出土している。当遺跡の土師器の坏を底部の切り離し技法によってヘラ切りのⅠ類，糸切りのⅡ類に分けるが，Ⅱ類は出土していない。Ⅰ類を底部の形態によってA～E類に分け，底部の器壁の仕上げ方によって薄手のa類と厚手のb類に分ける。更に底径の法量によって7.5㎝～8.0㎝の1類，6.8㎝～7.2㎝の2類，4.2㎝～6.2㎝の3類に分ける。上述した3要素による土師器の形態分類を次のように行ないたい。



第12図　1号土壙実測図



第13図　1号土壙出土土器実測図



第14図　SA1　実測図

緑釉皿　（第17図138）

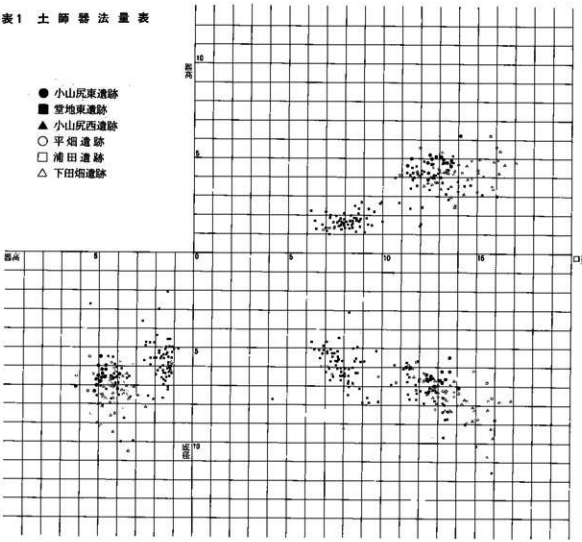
口縁部以外の外面をヘラ削りし，全面にヘラ磨キ調整する。暗灰色の硬い素地に緑褐色の釉を施す。底部には削ゆ出しによる蛇の目高台である。口径14.8㎝，底径6.9㎝，器高3.2㎝。

越州窯系青磁碗　（第17図140）

釉は淡緑灰色で，体部下方から底部にかけて露胎のままで赤褐色に発色している。底部の内面，側面に重ね焼きの目跡を残す。胎土には小砂粒を含む。高台底面がやや上げ底状を呈するもので，底面端部をヘラ削りし，底部から体部が直線的に伸びる。口径15.8㎝，底径6.6㎝，器高5.1㎝。

表1 土師器法量表

● 小山尻東遺跡
■ 堂地東遺跡
▲ 小山尻西遺跡
○ 平畑遺跡
□ 浦田遺跡
△ 下田畑遺跡



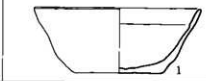
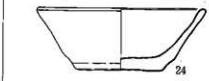
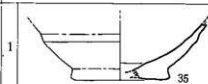
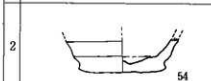
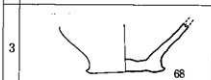
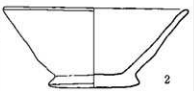
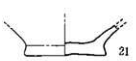
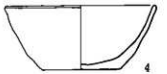
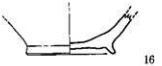
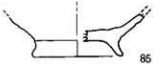
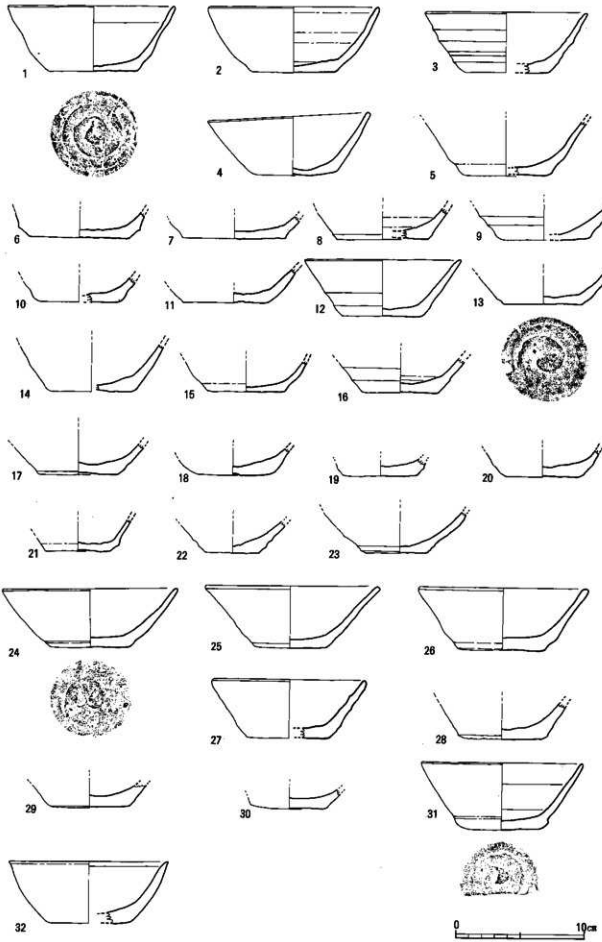
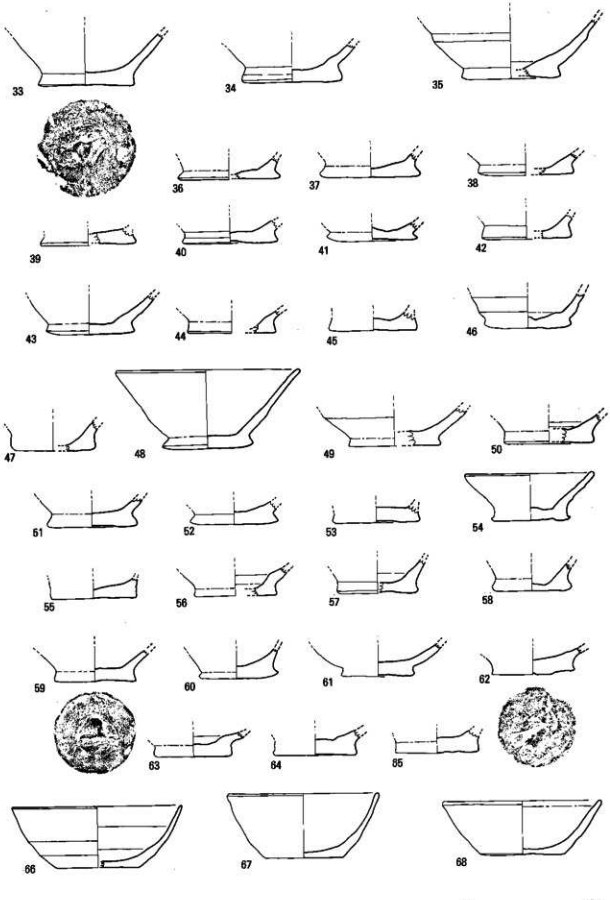
				形態の特徴	法量 cm	特徴
I	A	a		 1	口径 12.6～13.1 底径 6.5～ 7.0 器高 4.7～ 5.1	・底部と体部の境は明瞭である。 ・体部の斜目上方に直線的に伸びる。 ・底部は平底で薄手である。 ・口唇部は丸い。
		b		 24	口径 11.7～13.6 底径 5.5～ 6.8 器高 4.2～ 4.9	・底部は平底で厚手である。 ・口唇部は丸いものと鋭いものがある。
	B	a	1	 35	底径 7.5～ 8.0	・底部と体部の境が明瞭で、底部は斜目下方へ強く張り出す。 ・口唇部は丸い ・底部は平底で薄手である。 ・底径の法量によって7.5～8.0cmの1類6.8～7.2cmの2類、5.7～6.4cmの3類に分かれる。
			2	 54	底径 6.8～7.2	
			3	 68	口径 10.1前後 底径 5.7～6.4 器高 3.7前後	

表2 SA1 出土土師器垣分類図(1)

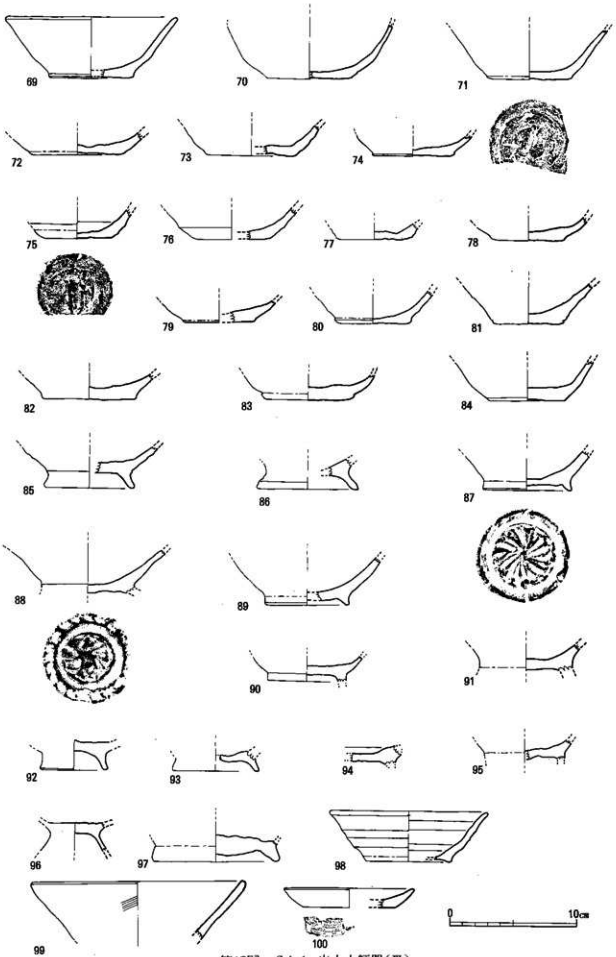
				形態の特徴	法量cm	特徴
I	B	b	1	12	底径 7.5～8.0	◦底部は平底で厚手である。
			2	 2	口径 14.1 前後 底径 6.8～7.2 器高 3.2 前後	
			3	 21	底径 5.7～6.4	
	C	b		 4	口径 11.5～13.2 底径 6.0～ 6.6 器高 4.2～ 5.0	◦底部と体部の境があまり明瞭でない。 ◦底部は平底で丁寧なナデ調整を施し，薄手である。 ◦口唇部は丸いものと鋭いものがある。
	D	a		15	底径 5.6～ 7.4	◦底部と体部の境がやや甘くなり，ヘラ切後の調整が雑である。 ◦口唇部は丸い。 ◦底部は平底で薄手である。
		b		61	口径 13.4 前後 底径 6.6～6.7 器高 4.8 前後	◦底部は平底で厚手である。
	E			 16	底径 6.0～7.0	◦外方へ伸びる高台を有し，端部は丸い。 ◦高台の内面をヘラ状工具で放射状に削る。
	F		1	89	底径 6.5 前後	◦外方へ伸びる短い高台を有し，端部は丸い。 ◦高台の内面はヘラ切りの後，ナデを施す。
			2	 85	底径 6.5～7.0	◦外方へ伸びる長い高台を有し，端部は丸い。



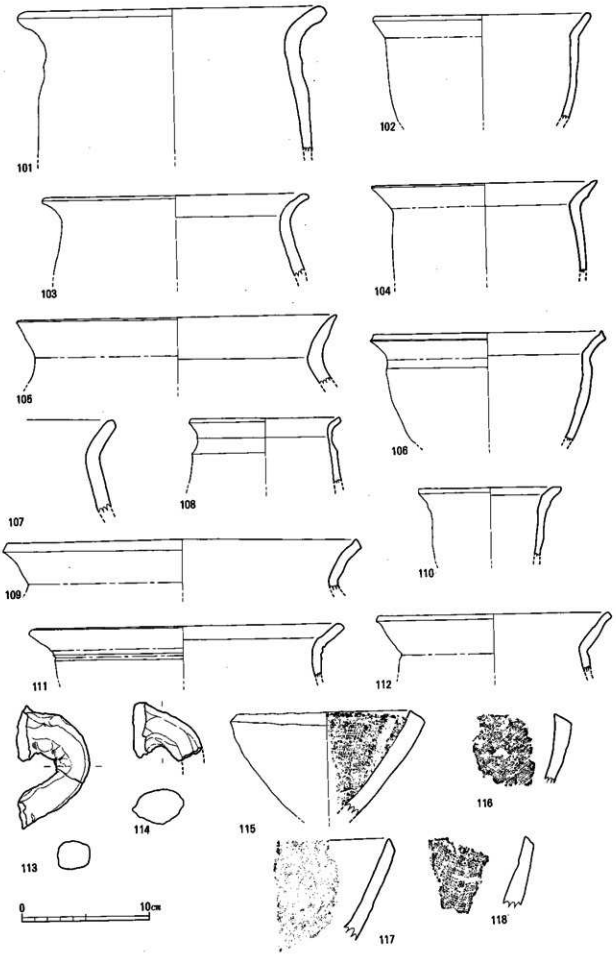
第15図　SA 1　出土土師器(I)



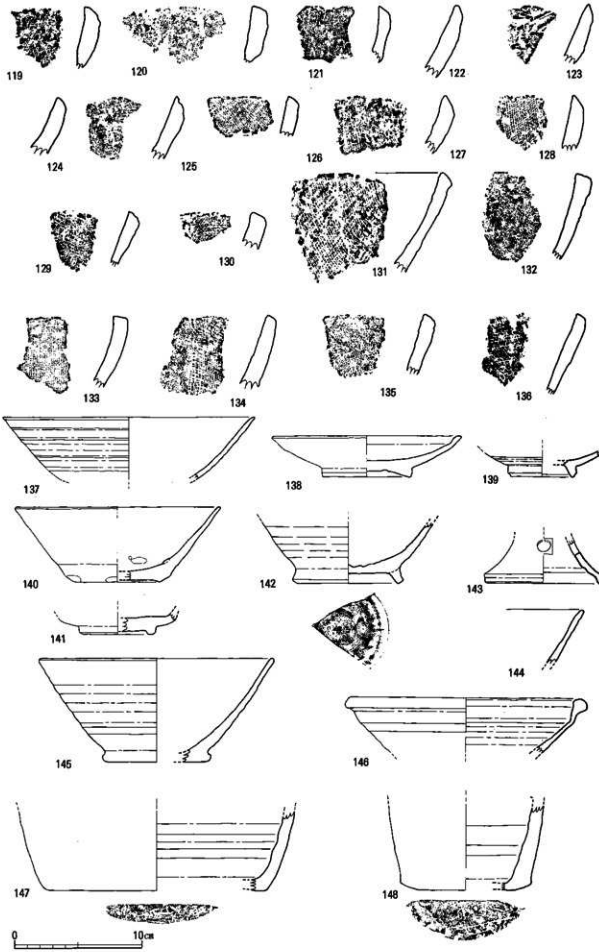
第16図　SA 1 出土土師器(Ⅱ)



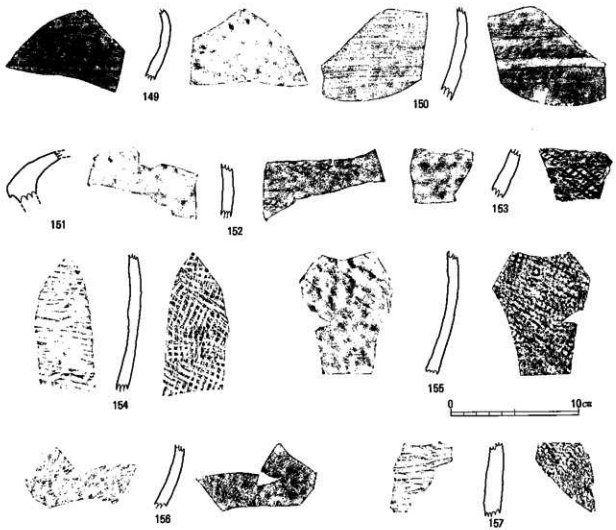
第17図　SA 1　出土土師器(Ⅲ)



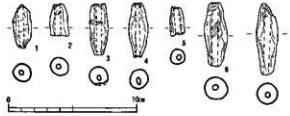
第18図　SA１ 出土土師器(Ⅳ)



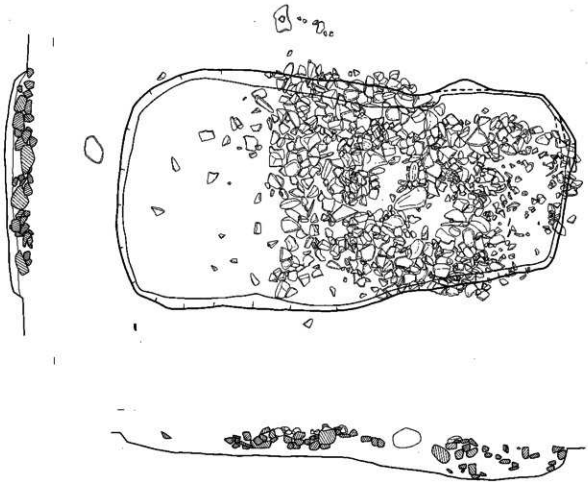
第19図　SA 1　出土土師器・陶磁器実測図(V)



第20図　SA 1　出土須恵器(VI)



第21図　SA 1　出 土 土 錘



第22図　1号集石遺構

当遺跡出土の土師器坏はヘラ切りの底部の形態によってA～E類に分類した。特にA類・B類は1号住居の主体を占めている。土師器坏を決定するには在地の土師器の編年の中で行なう方法と，共伴する陶磁器で行なう方法がある。

在地の編年は，学園都市遺跡群の調査によって資料が蓄積されつつあるが，編年を提示するまでには至っていない。一部，ヘラ切りから糸切への転換時期以降について「山内石塔群」[1]で型式変化から編年試案が提示されたが，石塔群という遺構の性格のために時期決定が困難であった。学園都市遺跡群では10世紀代の平畑遺跡，[2] 12・13世紀の堂地東遺跡[3]が調査され，その時期の土師器が解明されつつある。当遺跡のⅠA類の法量は口径11.7㎝～13.6㎝，底径5.5㎝～7.0㎝，器高4.2㎝～5.1㎝であり，御笠川南条坊遺跡出土の土師器の法量と比較すると，3つの法量とも合致するものはなく，口径ではⅠ1A以前・Ⅰ1A・Ⅰ3B・Ⅰ3C，底径ではⅠ1A以前～Ⅰ2B，底径は合致するものはない。高台付碗・内黒土器を共伴することから10世紀が妥当であると考えられる。[4]

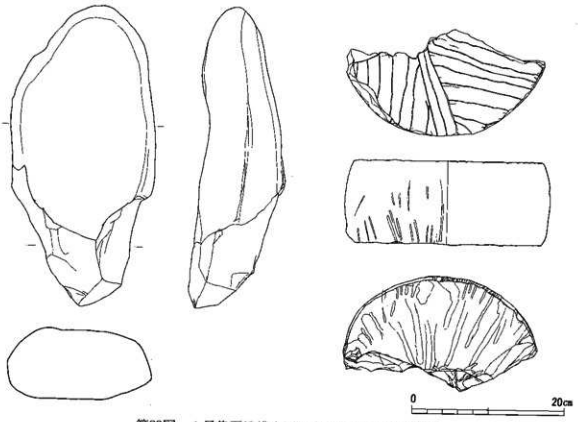
共伴した中国陶磁器としては越州窯系青磁碗が出土しており，亀井明徳氏分類のB類碗Ⅲ類，[5] 横田賢次郎・森田勉両氏分類の碗Ⅱ類3に相当し，大宰府遺跡のSK674の10世紀中頃に比定される。[6]

土師器坏・高台付碗の形態・調整，内黒土器，須恵器，緑釉，越州窯系青磁の組み合わせから平安時代中頃前後（10世紀前半）に比定される。

第8節　中世の遺構と遺物

1号集石遺構

1号集石遺構はS－1グリッドに位置し，長さ485㎝，幅240㎝，深さ20～45㎝の楕円形プランの土壙を伴なう。土壙の埋土は2層に分かれ，上層には焼けた河原石や角礫がぎっしりつまっており，石臼・自然石板碑が混入していた。下層はは茶褐色土で，木炭粒やアカホヤの微粒子が混じっており，石はほとんどない。遺物としては，土師小片がある。



第23図　1号集石遺構実測図出土石臼・板碑実測図

石　臼

1号集石遺構の上層で出土した。復元径30㎝，厚さ11.1㎝の半欠の下臼で，磨歯は幅0.2㎝，深さ0.2㎝である。その他の面には幅0.7㎝ののみで整形した痕跡をそのまま残している。石材は凝灰岩である。

板　碑

長さ40.0㎝，幅19.0㎝，厚さ9.2㎝の河原石製の自然石板碑である。荒く割って基部を製作しているが，墨書などはない。

第9節　ま　と　め

当遺跡は丘陵の先端部の幅の狭い所に立地しながらも縄文時代早期から人間の営みが行なわれたことが明らかになった。

アカホヤ層下位で縄文時代早期の集石遺構が9基検出された。当遺跡の全面に焼石が分布していたが，分布に濃淡の差があり，集石遺構として使用された後の最終段階を示していた。集石炉としての機能が考えられる集石遺構が形態から5タイプに分かれるが，形態差が機能差になるのか，或いは集石遺構としての使用段階差なのかは，不明であ

る。磨製の環状石斧の県内の発掘調査例としては芳ケ迫第一遺跡[7]（田野町）に次いで2例目であり，両者とも縄文早期の遺物として注目される。縄文土器は12類に分類され，早期の前平式・塞ノ神式・押型文が出土している。

縄文時代後期の土器はわずか1点で，晩期の土器はなく，早期に比較すると非常に希薄になっている。この現象は平畑遺跡が平坦地中位面Ⅰ～Ⅱに立地し，55軒の竪穴住居が検出されたことを鑑みると，集落を形成するには立地が非常に悪いのに起因すると思われる。

弥生時代中期後半の土器が2点検出されたことは，その時期に人間の営みが行なわれたことを示しているが，残念ながらアカホヤ層以上が耕作によって削平されていたために遺構は検出されなかった。遺物の量からすれば前代と同様に住居が営まれた可能性は少ないと考えられる。

古墳時代になると丘陵の南の裾に1号土壙が形成される。土壙の中央部に壷と甕が各1個ずつ置かれていたが，土壙の掘り込み面が削平されているので，土壙の性格は不明である。

古墳時代後期～奈良時代の遺物は検出されていないので人間の営みが行なわれた可能性は非常に少ない。

平安時代中頃になると，B地区に竪穴住居が1軒営まれる。この時期，赤坂遺跡・前原南遺跡では長い煙道を有するカマド付きの竪穴住居が存在する。遺物としては土師器の坏，高台付埦に共伴して緑釉皿・越州窯系青磁碗[8]が出土したことで，10世紀前半に比定したが，土師器の時期を決定する上で重要である。土師器の詳細な時期について学園都市遺跡群の平畑遺跡・堂地東遺跡が整理されていく中で明らかになろう。

当遺跡の発掘は，縄文早期の環状石斧を層位的に捉えたことと，平安時代中頃の土師器の様相が明らかになった点で大きな成果があった。

（長津　宗重）

註 (1) 宮崎県教育委員会「山内石塔群」 1984

(2) 宮崎県教育委員会「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ」1983

(3) (2)に同じ

(4) 前川威洋他「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第2～8集 1975～79

(5) 亀井明徳「日本出土の越州窯陶磁器の諸問題」『九州歴史資料館研究論集1』 1975

(6) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』 1978

(7) 田野町教育委員会「芳ケ迫第一遺跡調査報告書」 1984

(8) 県内で越州窯系青磁碗が土師器と共伴した例としては，高崎町東霧島出土例があり10世紀前後に比定されている。面高哲郎「高崎町東霧島出土の輸入陶磁器」『宮崎考古』第6号 1980

表3　縄文土器観察表

図面番号	地区名(遺構名)	器形	器部	器面調整 外器面	器面調整 内器面	(底面)	文様 外器面	文様 内器面	胎土	色調 外器面	色調 内器面	焼成	備考
1	N−4	円筒	口縁	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文 楔形貼付文	−	石英0.1mm,黒雲母	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	良	
2	S−4	円筒	口縁	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文 楔形貼付文	−	0.1〜0.15mmの石英含む	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	良	
3	A	円筒	口縁	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文 楔形貼付文	−	石英,長石0.1〜0.2mm	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/3	良	
4	N−5	円筒	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文 楔形貼付文	−	石英,長石	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/3	良	
5	N−3	円筒	口縁	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文 楔形貼付文	−	石英,長石	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/3	良	
6	N−2	円筒	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文 楔形貼付文	−	細かい 石英,長石	橙 5YR6/6	浅黄橙 7.5YR8/3	極良	
7	N−4	円筒	口縁	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文 楔形貼付文	−	石英粒,砂粒を含む	橙 7.5YR6/6	浅黄橙 7.5YR8/3	良	
8	N−7	円筒	口縁	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文	−	細かい,長石(少ない)	橙 5YR6/6	橙 7.5YR6/6	極良	
9	S−4	円筒	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ (縦)	−	貝殻腹縁文	−	石英,長石	浅黄橙 7.5YR6/6	浅黄橙 7.5YR8/3	良	
10	N−5	円筒	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文	−	0.05〜0.1mmの黒雲母 0.05mm長石	橙 7.5YR6/6	浅黄橙 7.5YR8/3	良	
11	N−2	円筒	口縁	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文 二列	−	0.1mm前後の石英 0.1mm前後の黒雲母	橙 7.5YR6/6	浅黄橙 7.5YR8/3	良	
12	N−5	円筒	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文 楔形貼付文	−	石英粒	浅橙 YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/3	良	
13	S−4	円筒	口縁	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文	−	細かい,石英	橙 5YR6/6	浅黄橙 7.5YR8/3	良	
14	M−2	角筒	胴の角部	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文	−	0.5〜1.0mm石英 0.1〜0.2mm黒雲母	橙 5YR6/6	浅黄橙 7.5YR8/3	良	スス付着
15	N−2	角筒	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文 楔形貼付文	−	0.1〜1.0mmの石英粒 黒雲母	橙 7.5YR6/6	浅黄橙 7.5YR8/3	良	
16	N−5	角筒	山形口縁	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文 楔形貼付文	−	石英,長石	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/3	良	
17	N−2	円筒	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文	−	石英(極少),粒小さい	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/3	良	
18	8号集石中	円筒	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文	−	石英1.0mm,小石5mm	橙 7.5YR7/6	橙 5YR6/6	良	スス付着
19	A	円筒	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文	−	細かく,粒めだたない	浅橙 7.5YR8/3	橙 5YR6/6	極良	
20	N−2	円筒	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文	−	細かい,石英	浅橙 7.5YR8/3	橙 5YR6/6	極良	
21	S−3	円筒	胴部	ナデ	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文	−	長石,石英0.5〜1mm	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	良	
22	S−4	円筒	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文	−	細かい	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	極良	
23	M−2	円筒	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文	−	細かい	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄橙 10YR8/6	極良	
24	M−2	円筒	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文	−	細かい	灰黄褐 10YR6/2	浅黄橙 10YR8/6	極良	
25	A	円筒	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文	−	細かい	灰黄褐 10YR6/2	灰黄褐 10YR6/2	極良	
26	M−1	円筒	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	−	貝殻腹縁文	−	細かい	浅黄橙 7.5YR8/3	橙 5YR6/6	極良	
27	N−2	深鉢	胴部	山形文	ミガキ	−	山形文	−	細かい	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR7/3	やや良	
28	N−7	深鉢	胴部	山形文	ヘラケズリ	−	山形文	−	長石,間隙多い	淡黄 2.5Y8/4	浅黄 2.5Y7/3	やや不良	
29	A	深鉢	胴部	山形文	ミガキ	−	山形文	−	長石,石英	淡黄 2.5Y8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	やや不良	
30	N−2	深鉢	胴部	山形文	ミガキ	−	山形文	−	長石,石英	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	良	
31	S−4	深鉢	胴部	山形文	ミガキ	−	山形文	−	長石,石英	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR7/3	やや不良	
32	A	深鉢	胴部	山形文	ミガキ	−	山形文	−	長石,石英	黄灰 2.5Y5/1	浅黄 2.5Y7/3	やや不良	
33	A	浅鉢	口縁	山形文	ヘラケズリ	−	山形文	−	石英	橙 5YR7/6	橙 7.5YR7/6	やや不良	
34	S−2	深鉢	胴部	山形文	ミガキ	−	山形文	−	長石,石英0.1〜0.2mm	淡黄 2.5Y8/4	にぶい黄橙 10YR7/3	やや不良	
35	A	深鉢	胴部	山形文	ミガキ	−	山形文	−	石英	浅黄橙 7.5YR8/4	淡黄 2.5Y8/4	やや不良	
36	S−4	深鉢	口縁	山形文	ミガキ	−	山形文	−	石英,黄色石英	淡黄 2.5Y8/3	淡黄 2.5Y8/4	良	
37	A	深鉢	胴部	山形文	ミガキ	−	山形文	−	石英	淡黄 2.5Y8/3	にぶい黄橙 10YR7/4	やや不良	スス付着
38	N−7	深鉢	胴部	山形文	風化	−	山形文	−	石英,長石 金雲母	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	良	
39	A	深鉢	胴部	楕円押型	ミガキ	−	山形文	−	石英,長石多い 金雲母	明赤褐 5YR5/6	淡黄 2.5Y8/4	良	
40	S−2	深鉢	胴部	ナデ	ヘラケズリ	−	沈線 [illegible]紋	−	細かい 長石粒,石英(0.1mm)	浅黄橙 10YR8/4	黒褐 10YR3/1	極良	
41	S−2	深鉢	胴部	ナデ	ヘラケズリ	−	沈線 [illegible]紋	−	細かい 長石粒,石英(0.1mm)	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/3	極良	
42	M−1	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	−	沈線 [illegible]紋	−	細かい 長石,石英(0.1mm)	褐灰 10YR6/1	浅黄橙 7.5YR8/3	極良	スス付着

図面番号	地区名(遺構名)	器形	器部	器面調整 外器面	器面調整 内器面	器面調整 (底面)	文様 外器面	文様 内器面	胎土	色調 外器面	色調 内器面	焼成	備考
43	M-1	深鉢	胴部	ナデ	ヘラケズリ	—	撚糸文	—	細かい 長石、石英(0.1mm)	浅黄橙 10YR8/4 (一部褐灰10YR5/1)	浅黄橙 10YR8/4	良	スス付着
44	M-1	深鉢	胴部	撚糸	ヘラケズリ	—	撚糸文	—	細かい 長石、石英(0.1mm)	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	良	
45	N-5	深鉢	胴部	ナデ	ヘラケズリ	—	撚糸文	—	細かい 長石、石英(0.1mm)	浅黄橙 7.5YR8/6 (一部黒色)	にぶい黄橙 10YR7/4	良	スス付着
46	A	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	—	撚糸文	—	ひじょうに細かい 長石、石英(0.3mm)	にぶい黄橙 10YR7/2	浅黄橙 7.5YR8/3	極良	
47	M-1	深鉢	口縁	貝殻条痕	ヘラケズリ	—	撚糸文 貝殻条痕文	—	石英、長石	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	良	
48	S-4	深鉢	口縁	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	石英粒0.5mm(多い) 黒雲母0.2~0.3mm	黄橙 10YR8/6	黄橙 10 YR8/6	良	
49	N-5	深鉢	口縁	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	石英0.2~0.5mm 雲母(黒)0.1mm 白粒0.3mm	淡黄 2.5Y8/4	浅黄橙 10YR8/4	良	
50	S-3	深鉢	口縁	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	石英、長石多い 黒雲母	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	良	
51	N-2	深鉢	口縁	貝殻条痕	ヘラケズリ	—	貝殻条痕文	—	石英 長石	灰白 7.5YR8/1	灰白 7.5YR8/1	良	
52	N-4	深鉢	口縁	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	石英(大、多い) 小石(大)	淡黄 2.5Y8/4	淡黄 2.5Y8/4	やや不良	
53	A	深鉢	口縁	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	-	石英	浅黄 2.5Y7/3	浅黄橙 10YR8/4	良	
54	N-2	深鉢	口縁	貝殻条痕	ミガキ	-	貝殻条痕文	—	長石(多い)	にぶい赤褐 5YR5/4	橙 5YR6/6	良	スス付着
55	N-2	深鉢	口縁	貝殻条痕	ヘラケズリ	—	貝殻条痕文	—	長石、石英	明黄褐 10YR6/6	明黄褐 10YR6/6	やや不良	
56	M-2	深鉢	口縁	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	石英、長石	浅黄褐色 10YR8/3	淡黄 2.5Y8/4	良	
57	S-4	深鉢	口縁	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	--	石英、長石	淡黄 2.5Y8/3	灰白 7.5YR8/1	やや不良	
58	M-2	深鉢	口縁	貝殻条痕	ミガキ (黒化)	—	貝殻条痕文	—	石英、長石	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1	やや不良	
59	S-2	深鉢	口縁	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	石英 長石	浅黄 2.5Y7/3	灰白 7.5YR8/1	やや良	
60	S-3	深鉢	口縁	貝殻条痕	ミガキ (風化)	—	貝殻条痕文	—	石英 長石	にぶい橙 5YR7/4	橙 5YR6/6	不良	
61	N-3	深鉢	口縁	刺突 貝殻条痕	ミガキ	—	刺突文 貝殻条痕文	--	石英粒0.2~0.3mm 白粒0.1mm	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	良	
62	S-5	深鉢	口縁	貝殻条痕	ミガキ	--	貝殻腹縁文	—	長石多い 細かな間隙多い	灰白 2.5Y8/2	灰白 2.5Y8/2	不良	
63	S-1	深鉢	口縁	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文 貝殻腹縁文 (押圧)	—	石英(微粒) 長石(多い)	浅黄橙 10YR8/4	灰黄褐 10YR6/2	やや良	

図面番号	地区名(遺構名)	器形	器部	器面調整 外器面	器面調整 内器面	器面調整 (底面)	文様 外器面	文様 内器面	胎土	色調 外器面	色調 内器面	焼成	備考
64	N-2	深鉢	口縁	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文 貝殻腹縁文 (3段横位)	—	石英(粒多い)	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR6/4	やや不良	
65	N-2	深鉢	口縁	貝殻条痕	風化	-	貝殻条痕文 貝殻腹縁文 (押圧)	--	長石	橙 5YR7/6	橙 5YR6/6	良	
66	S-2	深鉢	口縁	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文 刺突文	—	長石 石英	淡黄 2.5Y8/4	にぶい黄橙 10YR7/3	やや不良	
67	N-3	深鉢	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	—	貝殻条痕文	—	石英(微粒) 長石(多い)	淡黄 2.5Y8/4	灰黄 2.5Y6/2	やや良	
68	S-3	深鉢	胴部	貝殻条痕	風化	—	貝殻条痕文	—	石英(微粒)	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/6	良	
69	S-4	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	石英	浅黄橙 7.5YR8/4	淡黄 2.5Y8/4	やや良	
70	S-4	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	石英	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	やや良	
71	S-4	深鉢	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	-	貝殻条痕文	—	細かい 石英、長石	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 5YR6/6	やや不良	
72	S-3	深鉢	胴部	貝殻条痕	風化	—	貝殻条痕文	—	細かい 石英粒(やや大)	明黄褐 10YR7/6	橙 5YR6/6	良	
73	M-1	深鉢	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	—	貝殻条痕文	—	長石、石英	橙 2.5Y6/8	橙 5YR6/6	良	
74	S-3	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	石英多い	淡黄 2.5Y8/4	黄灰 2.5Y5/1	不良 [illegible]	
75	N-5	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	粗い、間隙多い、石英	明黄褐 10YR7/6	浅黄橙 10YR8/4	やや不良	
76	M-2	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	--	粗い、大粒の石英 間隙多い	明黄褐 10YR7/6	にぶい赤褐 5YR5/4	不良	
77	N-5	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	石英粒、長石	浅黄橙 10YR8/4	淡黄 2.5Y8/3	やや不良	
78	S-5	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	間隙、石英、長石	明黄褐 10YR7/6	浅黄 2.5Y7/4	不良	
79	M-2	深鉢	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	—	貝殻条痕文	—	細かい 石英、小石、黒雲母	浅黄橙 7.5YR8/3	橙 5YR6/6	良	
80	N-2	深鉢	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	—	貝殻条痕文	—	細かい、石英(少ない) 黒雲母	明黄褐 10YR7/6	橙 5YR6/6	良	
81	N-2	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	·	貝殻条痕文	—	石英、黒雲母 間隙多い	明黄褐 10YR7/6	浅黄橙 10YR8/4	やや不良	
82	S-4	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	-	石英、長石	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	良	
83	N-2	深鉢	胴部	貝殻条痕	風化	—	貝殻条痕文	—	石英(0.1~1mm大、多い)	淡黄 2.5Y8/4	灰白 7.5YR8/1	良	
84	N-5	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	石英、長石、間隙多い	明黄褐 10YR7/6	浅黄 2.5Y8/3	やや不良	

図面番号	地区名(遺構名)	器形	器部	器面調整 外器面	器面調整 内器面	器面調整 (底面)	文様 外器面	文様 内器面	胎土	色調 外器面	色調 内器面	焼成	備考
85	N-4	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	細かい、石英	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/3	良	
86	N-2	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	石英 長石	明黄褐 10YR7/6	灰白 7.5YR8/1	良	
87	N-2	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	長石、石英	明黄褐 10YR7/6	灰白 7.5YR8/1	良	
88	S-4	深鉢	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	—	貝殻条痕文	—	長石 石英	橙 5YR6/8	橙 5YR6/8	良	
89	N-1	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	間隙多い、石英	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄褐 10YR5/3	不良	
90	N-2	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	長石	灰黄褐 10YR6/2	灰白 7.5YR8/1	やや不良	
91	N-3	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	細かい石英	にぶい黄橙 10YR7/4	褐灰 10YR5/1	不良	
92	N-3	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	長石、石英、黒雲母	浅黄橙 7.5YR8/6	にぶい黄橙 10YR7/4	良	
93	S-3	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	間隙あり、黒雲母、長石 石英粒大あり(2~3mm)	明黄褐 10YR7/6	浅黄橙 10YR8/3	やや不良	
94	S-4	深鉢	胴部	浅い 貝殻条痕	風化	—	貝殻条痕文	—	細かい、長石、石英粒	灰白 2.5Y8/2	淡黄 2.5Y8/3	良	
95	S-5	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	石英(1mm)、長石	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	良	
96	M-2	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	細かい、長石(微粒) 石英(小)	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/3	良	
97	2号集石中	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	長石、石英(0.5~1mm)	明赤褐 2.5YR5/6	橙 5YR6/8	良	
98	N-2	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	石英粒3.0~5.0mm 黒雲母0.1~0.2mm	灰黄褐 10YR6/2	黄橙 10YR8/6	良	
99	N-2	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	石英大(1mm)、長石	浅黄橙 10YR8/4	明黄褐 10YR6/6	不良	
100	S-2	深鉢	胴部	擦痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	粗い、間隙多い 石英粒、黒雲母	明黄褐 10YR7/6	黄橙 10YR8/6	やや不良	
101	N-2	深鉢	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	—	貝殻条痕文	—	長石、黒雲母多い	橙 5YR6/6	橙 5YR6/8	良	
102	N-3	深鉢	胴部	貝殻条痕	ヘラケズリ	—	貝殻条痕文	—	長石多い、石英	橙 2.5YR6/8	明赤褐 5YR5/8	不良	
103	N-2	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	長石(多い)、間隙多い	浅黄橙 7.5YR8/6	灰黄褐 10YR6/2	不良	
104	S-4	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	石英 長石 } 多い	灰黄 2.5Y6/2	黄灰 2.5Y4/1	良	
105	M-1	浅鉢	口縁	貝殻条痕	ヘラケズリ	—	貝殻条痕文	—	石英 長石	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	良	

図面番号	地区名(遺構名)	器形	器部	器面調整 外器面	器面調整 内器面	器面調整 (底面)	文様 外器面	文様 内器面	胎土	色調 外器面	色調 内器面	焼成	備考
106	N-2	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	石英(多い) 長石	浅黄橙 10YR8/4	淡黄 2.5Y8/3	良	
107	M-2	深鉢	胴部	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	長石(多い)、石英	浅黄橙 10YR8/4	にぶい褐 7.5YR5/4	良	
108	S-3	深鉢	胴部	擦痕	ミガキ	—	擦痕	—	石英 長石	浅黄橙 10YR8/4	浅黄 2.5Y7/3	やや良	
109	N-2	深鉢	胴部	擦痕	ミガキ	—	擦痕	—	長石(多い)	浅黄橙 10YR8/4	灰黄褐 10YR6/2	やや不良	
110	N-2	深鉢	胴部	擦痕	風化	—	擦痕	—	石英、長石 角閃石	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 10YR8/4	やや不良	
111	N-2	深鉢	胴部	ナデ	ミガキ	—	条痕 (ひっかき)	—	石英(1mm大) 長石(0.5~1mm大)	にぶい橙 10YR6/3	橙 5YR7/6	不良	
112	N-6	深鉢	胴部	ナデ	ヘラケズリ	—	条痕 (ひっかき)	—	石英0.2前後多い 砂粒0.1前後多い	橙 5YR6/6	浅黄橙 7.5YR8/6	不良	
113	N-2	深鉢	胴部	ナデ	ヘラケズリ	—	条痕 (ひっかき)	—	石英(細かい)多い	褐灰 10YR4/1	にぶい黄橙 10YR6/3	不良	
114	N-2	深鉢	口縁	貝殻条痕	ミガキ	—	貝殻条痕文	—	石英3.0~4.0mm(多い) 白粒0.2~0.3mm(多い)	にぶい橙 5YR6/4	橙 5YR7/6	良	
115	N-2	深鉢	口縁	撚糸文	ヘラケズリ	—	撚糸文	—	石英、長石、角閃	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい橙 7.5YR6/4	良	
116	S-2	深鉢	胴部	ヨコナデ 撚紋	ヘラケズリ	—	撚糸文	—	石英(少ない)小粒、角閃石	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	良	
117	N-1	深鉢	胴部	ナデ	ヘラケズリ	—	刺突列点文 (縦位、横位)	—	石英(細かい)多い、長石 角閃石	明赤褐 5YR5/6	橙 7.5YR6/6	やや不良	
118	N-3	深鉢	胴部	ナデ	ヘラケズリ	—	刺突列点文 (横位)	—	長石 角閃石	明赤褐 5YR5/8	橙 5YR6/6	やや不良	
119	N-5	深鉢	口縁	貝殻条痕 (太い)	ミガキ	—	貝殻条痕文 (太い)	刻線文 (口縁)	石英 角閃石(多い)	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	良	
120	N-7	深鉢	口縁	貝殻条痕 (太い)	ミガキ	—	貝殻条痕文 (太い)	刻線文 (口縁)	石英、長石 角閃石(多い)	橙 7.5YR6/6	明黄褐 10YR7/6	良	
121	N-7	深鉢	胴部	貝殻条痕 (太い)	風化	—	貝殻条痕文 (太い)	—	長石(大)、間隙あり	橙 5YR7/8	黄橙 7.5YR7/8	やや不良	
122	S-4	深鉢	胴部	貝殻条痕 (太い)	ミガキ	—	貝殻条痕文 (太い)	—	長石	橙 7.5YR7/6	黄灰 2.5Y4/1	やや不良	
123	N-6 S-2	深鉢	波状口縁	網形刻文	ヘラナデ	—	網形刻文 刻目突帯 突帯文	条痕文 (横位)	石英、長石 金雲母	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3	良	
124	S-4	深鉢	胴部	網形刻文	ヘラケズリ	—	網形刻文 刻目突帯	—	長石 金雲母	にぶい黄橙 10YR6/4	橙 7.5YR6/6	良	
125	N-7	深鉢	口縁	風化	ヘラケズリ	—	刻目突帯 突帯文	—	石英 角閃石	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	良	
126	S-2	深鉢	胴部	風化	風化	—	網形刻文	—	長石(多い)、長石	灰黄褐 10YR6/2	灰黄褐 10YR6/2	良	

図面番号	地区名(遺構名)	器形	器部	器面調整 外器面	器面調整 内器面	器面調整 (底面)	文様 外器面	文様 内器面	胎土	色調 外器面	色調 内器面	焼成	備考
127	N－7	深鉢	口縁	ナデ	ヘラケズリ	—	刺目突帯	—	長石・多い	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/4	良	
128	N－6	浅鉢	口縁	丁寧なナデ 条痕(たて)	ヘラケズリ	—	丁寧なナデ 細い条痕(たて)	—	石英(細)、長石	橙 5YR6/6	橙 5YR6/8	極良	
129	S－3	深鉢	口縁	風化	ヘラケズリ	—	沈線 列点	—	長石(多い)、金雲母	にぶい橙 7.5YR5/4	橙 7.5YR6/6	良	
130	S－2	深鉢	口縁	ナデ	ミガキ	—	沈線	—	石英、角閃石	橙 7.5YR7/6	浅黄 2.5Y8/3	良	
131	M－1	浅鉢	口縁	ナデ	ヘラケズリ	—	沈線	—	石英、黒雲母	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	良	
132	N－2	深鉢	口縁	ナデ	ミガキ	—	貝殻腹縁文	—	長石、石英 間隙多い	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	極不良	
133	M－2	深鉢	底部	ナデ	底化	ナデ	—	—	長石(多い)	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	良	
134	N－5	深鉢	底部	風化	ナデ	ヘラケズリ	—	—	石英(多い)、長石、加雲母	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄 2.5Y8/3	不良	
135	N－2	深鉢	底部	ミガキ	底化	ミガキ	—	—	石英、長石、黒雲母	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	やや不良	
136	N－2	深鉢	底部	ヘラケズリ	ケズリ	ヘラケズリ	刺突文	—	石英、黒雲母、長石	明赤褐 5YR5/8	明赤褐 5YR5/8	良	
137	N－2	浅鉢	底部	ナデ	ミガキ	ミガキ	—	—	石英、長石、間隙多い	浅黄橙 7.5YR8/3	灰黄褐 10YR5/2	不良	
138	N－2	深鉢	底部	ミガキ	ナデ	ミガキ	—	—	長石、石英、間隙特に多い	浅黄橙 7.5YR8/3	灰黄褐 10YR5/2	極不良	
139	N－2	深鉢	底部	ナデ	ナデ	ミガキ	—	—	長石、石英、小石、間隙多い	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR5/2	不良	
140	S－1	深鉢	底部	ナデ	ナデ	ナデ	—	—	長石、石英	橙 2.5YR6/8	にぶい黄橙 10YR6/4	良	
141	S－3	深鉢	底部	細沈線	風化	ナデ	細沈線	—	長石、石英	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/8	良	
142	S－3	深鉢	底部	貝殻条痕	ナデ	ナデ	貝殻条痕文 底部痕	—	0.1mm程度の長石	浅黄橙 10YR8/4	浅黄 2.5Y7/3	良	
143	S－4	深鉢	底部	細沈線	ケズリ	ケズリ	細沈線	—	石英	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/3	良	
144	S－2	深鉢	底部	細沈線	ナデ	ナデ	細沈線	—	0.1mm程度の長石	浅黄橙 10YR8/4	浅黄 2.5Y7/3	良	
145	S－4	深鉢	底部	貝殻条痕	ヘラケズリ	貝殻条痕	貝殻条痕文	—	石英、長石	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/3	良	
146	S－3	深鉢	底部 (上げ底)	ナデ	ナデ	ナデ	—	—	1～5mm小石多い	灰白 10YR8/2	橙 5YR6/8	不良	
147	S－4	深鉢	底部 (上げ底)	ナデ	ケズリ	ナデ	貝殻条痕文	—	石英、長石	橙 5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/3	良	

図面番号	地区名(遺構名)	器形	器部	器面調整 外器面	器面調整 内器面	器面調整 (底部)	文様 外器面	文様 内器面	胎土	色調 外器面	色調 内器面	焼成	備考
148	M－2	深鉢	胴部	ヨコナデ	風化	—	隆線(5条)	—	G英、黒雲母	橙 5YR6/8	明赤褐 5YR5/6	やや不良	

表4 SAI 出土土器観察表

番号	出土位置	器種	器形	法量 口径	底径	器高	色調 内面	外面	胎土	焼成	調整 内面	外面	底部	分類	備考
1	MG 2SA 1	土師器	坏	㎝ 12.8	㎝ 7.0	㎝ 5.1	浅黄橙 (10YR[illegible])	左に同じ	1ミリ大の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	I A a	
2	〃	土師器	坏	13.1	6.7	5.1	浅黄橙 (10YR[illegible])	左に同じ	0.5~2ミリ大の黒褐色の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
3	〃	土師器	坏	12.6	6.6	4.7	浅黄橙 (10YR[illegible])	左に同じ	きめ細かい 0.5ミリ前後の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
4	〃	土師器	坏	12.4	6.5	5.0	黄橙 (7.5YR[illegible])	黄橙(7.5YR[illegible]) にぶい黄橙(10YR[illegible])	0.5ミリ程の茶褐色の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
5	〃	土師器	坏		7.3		明黄褐 (10YR[illegible])	左に同じ	0.5~1ミリ大の砂粒を少し含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
6	〃	土師器	坏		7.8		にぶい橙 (7.5YR[illegible])	左に同じ	0.1~2ミリの茶灰の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
7	〃	土師器	坏		8.0		浅黄橙 (10YR[illegible])	浅黄 (2.5Y[illegible])	金雲母を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
8	〃	土師器	坏		7.2		淡黄 (2.5Y[illegible])	左に同じ	きめ細かい 微粒子を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
9	〃	土師器	坏		7.0		淡黄 (2.5Y[illegible])	左に同じ	きめ細かい 2~3ミリの砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
10	〃	土師器	坏		6.6		浅黄橙 (10YR[illegible])	左に同じ	きめ細かい 0.5ミリ前後の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
11	〃	土師器	坏		6.5		浅黄橙 (10YR[illegible])	左に同じ	細砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
12	〃	土師器	坏	12.2	6.2	4.4	黄橙 (7.5YR[illegible])	橙 (5YR[illegible])	きめ細かい 0.5ミリ前後の砂粒を含む まれに石英・角閃石を含む	良好	ナデ	ナデ	ヘラ切り	〃	
13	〃	土師器	坏		6.2		浅黄橙 (10YR[illegible])	左に同じ	0.5~2ミリ大の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
14	〃	土師器	坏		6.2		浅黄橙 (10YR[illegible])	左に同じ	きめ細かい 微粒子を含む	やや良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
15	〃	土師器	坏		6.1		浅黄橙 (10YR[illegible])	左に同じ	きめ細かい 0.5~2ミリの砂粒を含む まれに石英	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
16	〃	土師器	坏		6.1		浅黄橙 (10YR[illegible])	左に同じ	0.2~1ミリ大の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
17	〃	土師器	坏		6.0		にぶい黄橙 (10YR[illegible])	左に同じ	きめ細やか 0.5ミリ前後の砂粒を含む 黒雲母・石英を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
18	〃	土師器	坏		5.9		にぶい黄橙 (10YR[illegible])	左に同じ	細かい砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
19	〃	土師器	坏		6.2		にぶい黄橙 (10YR[illegible])	左に同じ	細砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
20	〃	土師器	坏		5.6		淡黄 (2.5Y[illegible])	左に同じ	砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
21	〃	土師器	坏		5.1		浅黄橙 (10YR[illegible]) にぶい[illegible] (7.5YR[illegible])	左に同じ	細砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	

番号	出土位置	器種	器形	法量 口径	底径	器高	色調 内面	外面	胎土	焼成	調整 内面	外面	底部	分類	備考
22	MG 2SA 1	土師器	坏	㎝	㎝ 4.2	㎝	浅黄橙 (10YR[illegible])	左に同じ	0.1ミリ大の黒色の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	I A a	
23	〃	土師器	坏		5.0		浅黄橙 (10YR[illegible])	左に同じ	0.5~1ミリ大の砂粒を含む	良好		横ナデ		〃	
24	〃	土師器	坏	13.6	6.2	4.6	橙 (7.5YR[illegible])	左に同じ	きめ細やか 1ミリ前後のうす茶・茶色の砂粒を少し含む 黒雲母・半透明のガラス質のもの少々含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	I A b	
25	〃	土師器	坏	13.6	5.5	4.9	にぶい黄橙 (10YR[illegible]~[illegible])	にぶい黄橙 (10YR[illegible])	きめ細やか 1~2ミリ前後の砂粒を少し含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
26	〃	土師器	坏	13.2	6.8	4.9	黄橙 (7.5YR[illegible])	左に同じ	きめ細やか 0.5~1ミリ前後のうす茶・茶色の砂粒少々含む、ガラス質も少々	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
27	〃	土師器	坏	11.3	6.0	4.6	浅黄橙 (10YR[illegible])	左に同じ	細砂粒と1ミリ大の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
28	〃	土師器	坏		6.0		浅黄橙 (10YR[illegible])	左に同じ	細砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ		〃	
29	〃	土師器	坏		6.2		にぶい黄橙 (10YR[illegible])	左に同じ	0.5ミリ以下の細砂粒を含む 石英・黒雲母含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
30	〃	土師器	坏		6.3		灰黄 (2.5Y[illegible])	にぶい黄 (2.5Y[illegible])	きめ細かい 0.1~3ミリ前後の砂粒を少し含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
31	〃	土師器	坏	12.5	7.3	5.2	浅黄橙 (10YR[illegible])	左に同じ	0.2~0.5ミリ大の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り		
32	〃	土師器	坏	12.4	6.4	4.8	浅黄橙 (7.5YR[illegible])	黄橙 (10YR[illegible])	きめ細かい 微粒子を含む	やや不良	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り		
33	〃	土師器	坏	7.5			浅黄橙 (10YR[illegible])	[illegible] (10YR[illegible]) (7.5YR[illegible])	きめ細やか 1~4ミリ前後の茶灰の砂粒と、半透明のガラス質のものを含む	良好	ナデ	ナデ	ヘラ切り	I B b 1	
34	〃	土師器	坏	7.8			浅黄橙 (7.5YR[illegible])	左に同じ	きめ細やか 0.5ミリ前後の白茶の砂粒含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
35	〃	土師器	坏		6.7		橙 (5YR[illegible])	左に同じ	1~3ミリ大の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	I B a 1	
36	〃	土師器	坏		8.0		にぶい橙 (7.5YR[illegible])	左に同じ	0.5~1ミリ大の砂粒を少し含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
37	〃	土師器	坏		7.8		浅黄橙 (7.5YR[illegible])	左に同じ	きめ細かい 0.5ミリ以下の白っぽい砂粒と石英少量含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
38	〃	土師器	坏		7.5		浅黄橙 (10YR[illegible])	にぶい橙 (7.5YR[illegible])	0.2~1ミリ大の褐色の砂粒などを多量に含む	良好	ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
39	〃	土師器	坏		7.2		橙 (7.5YR[illegible])	左に同じ	0.1~1ミリ大の砂粒を多く含む 透明、茶黒く光る粒を含む	良好	ナデ	ナデ	ヘラ切り	〃	
40	〃	土師器	坏		7.2		浅黄橙 (10YR[illegible])	左に同じ	0.5ミリ以下の砂粒を含む	良好	横ナデ		ナデ	〃	
41	〃	土師器	坏		7.1		にぶい橙 (7.5YR[illegible])	左に同じ	0.5~2ミリ大の砂粒を少し含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
42	〃	土師器	坏		7.0		橙 (5YR[illegible])	橙 (7.5YR[illegible])	1ミリ大の茶・黒色の砂粒を含む	良好	横ナデ		ナデ	〃	

番号	出土位置	器種	器形	法量 口径	底径	器高	色調 内面	外面	胎土	焼成	調整 内面	外面	底部	分類	備考
43	MG 2SA 1	土師器	坏	cm	cm 6.9	cm	浅黄橙 (10YR8/4·8/3)	左に同じ	0.2~0.5ミリ大の砂粒を含む	良好	横ナデ	ナデ 横ナデ	ヘラ切り (風化著しい)	I B a 1	
44	〃	土師器	坏		6.9		浅黄橙 (10YR8/4)	左に同じ	0.2~1ミリ大の褐色の砂粒を含む	良好	ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
45	〃	土師器	坏		6.9		にぶい橙 (7.5YR7/4)	左に同じ	1~2ミリ大の褐色の砂粒を多量に含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
46	〃	土師器	坏		6.8		浅黄 (2.5Y7/3)	淡赤橙 (2.5YR7/4)	きめ細かい 2ミリ前後の砂粒含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
47	〃	土師器	坏		6.6		にぶい橙 (7.5YR7/4)	左に同じ	きめ細かい 0.5~2ミリ前後の砂粒とまれに3~4ミリ前後の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
48	〃	土師器	坏	14.1	7.1	6.2	浅黄橙 (10YR8/4)	黄橙 (7.5YR7/8)	黒・白・褐色の細かい砂粒を含む	良好	横ナデ ナデ	横ナデ		I B b 2	
49	〃	土師器	坏		6.5		浅黄橙 (7.5YR8/4)	左に同じ	きめ細かい 0.5~2ミリ前後の砂粒と石英を少量含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
50	〃	土師器	坏		7.0		黄橙 (7.5YR7/8)	左に同じ	0.2~1ミリ大の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
51	〃	土師器	坏		7.0		明黄褐 (10YR7/6)	橙 (5YR6/6)	細かい砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
52	〃	土師器	坏		6.9		にぶい黄橙 (10YR7/3~7/4)	左に同じ	精良	良好	横ナデ		ヘラ切り	〃	
53	〃	土師器	坏		6.8		浅黄橙 (7.5YR8/4)	左に同じ	細かい砂粒多含む	良好	ナデ	ナデ	ヘラ切り	〃	
54	〃	土師器	坏	9.9	6.2	3.7	浅黄橙 (7.5YR8/4)	左に同じ	1ミリ大の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	I B a 3	
55	〃	土師器	坏		6.6		浅黄橙 (10YR8/4)	左に同じ	きめ細かい 0.5ミリ前後の砂粒を含む	やや不良	ナデ?	横ナデ?		〃	
56	〃	土師器	坏		6.4		浅黄橙 (10YR8/4)	左に同じ	きめ細かい 0.5ミリ前後の赤っぽい砂粒多く含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
57	〃	土師器	坏		6.3		にぶい黄橙 (10YR7/4)	左に同じ	0.5~1ミリ大の砂粒を多量に含む	良好		横ナデ	ヘラ切り	〃	
58	〃	土師器	坏		6.2		浅黄橙 (10YR8/4)	左に同じ	きめ細かい 0.5~2ミリ前後の赤っぽい砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
59	〃	土師器	坏		6.2		橙 (5YR6/6)	左に同じ	2ミリ大の砂粒を少し含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	I B b 3	
60	〃	土師器	坏		6.3				0.1~2ミリ大の黒っぽい砂粒を含み、石英を多く含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
61	〃	土師器	坏		5.8		橙 (5YR6/6)	左に同じ	雲母を含む	良好		横ナデ	ヘラ切り	〃	
62	〃	土師器	坏		6.4		浅黄橙 (10YR8/4)	左に同じ	1ミリ大の砂粒少し含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
63	〃	土師器	坏		6.0		浅黄橙 (7.5YR8/4)	左に同じ	きめ細かい 0.5ミリ前後の砂粒と長石を含む	やや不良	横ナデ?	横ナデ	ヘラ切り	〃	

番号	出土位置	器種	器形	法量 口径	底径	器高	色調 内面	外面	胎土	焼成	調整 内面	外面	底部	分類	備考
64	MG 2SA 1	土師器	坏	cm	cm 6.5	cm	浅黄橙 (10YR8/4)	左に同じ	砂粒を含む	良好	横ナデ	ナデ	ヘラ切り	I B b 3	
65	〃	土師器	坏		6.4		浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄 (2.5Y7/3)	0.1~2ミリ大の砂粒を多く含む 光る粒を含む	良好	風化著しい	ナデ	ヘラ切り	〃	
66	〃	土師器	坏	13.2	6.2	4.8	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR6/6)	きめ細かい 微粒子、まれに0.5~2ミリ前後の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
67	〃	土師器	坏	11.5	6.0	5.0	橙 (7.5YR6/6)	左に同じ	0.5~1ミリ大の砂粒を少し含む	良好	ナデ?	ヘラ状工具による丁寧なナデ	ヘラ切り	I C	
68	〃	土師器	坏	12.4	6.6	4.2	浅黄橙 (7.5YR8/4) 橙 (5YR [illegible])	浅黄橙 (7.5YR8/4)	0.5ミリ以下のうす茶・灰・白・黒の粒子を含む 石英・黒雲母含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
69	〃	土師器	坏	13.4	6.6	4.8	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR [illegible]) 浅黄橙 (10YR [illegible])	0.5~2ミリの黒・茶・灰色の砂粒 石英・黒雲母含む	良好	横ナデ	横ナデ	ナデ	〃	
70	〃	土師器	坏		6.6		橙 (5YR6/6)	左に同じ	きめ細かい 1~3ミリ大の砂粒を少し含む	良好	磨き?	横ナデ	ヘラ切り	I D a	
71	〃	土師器	坏		6.7		明黄褐 (10YR7/6)	左に同じ	0.2~0.5ミリ大の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
72	〃	土師器	坏		7.4		淡赤橙 (2.5YR7/4)	左に同じ	細かい砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
73	〃	土師器	坏		7.0		浅黄橙 (10YR8/4)	左に同じ	きめ細かい 0.5~2ミリ前後の茶の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
74	〃	土師器	坏		6.4		浅黄 (2.5Y7/3)	左に同じ	1ミリ大の砂粒を少し含む	良好	ナデ?	横ナデ	ヘラ切り	〃	
75	〃	土師器	坏		5.7		橙 (5YR6/6)	左に同じ	きめ細かい 0.5ミリ以下の微粒子と石英少量含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
76	〃	土師器	坏		6.2		浅黄橙 (10YR8/4)	左に同じ	0.5~3ミリ前後の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
77	〃	土師器	坏		6.0		浅黄橙 (7.5YR8/4)	左に同じ	きめ細かい 0.5~3ミリ前後の茶の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
78	〃	土師器	坏		5.8		浅黄橙 (7.5YR8/4)	左に同じ	きめ細かい 微粒子を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
79	〃	土師器	坏		5.6		浅黄橙 (7.5YR8/4)	左に同じ	きめ細かい 微粒子を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
80	〃	土師器	坏		5.6		灰黄 (2.5Y [illegible])	淡黄 (2.5Y [illegible])	きめ細かい	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
81	〃	土師器	坏		5.5		浅黄橙 (10YR8/4)	左に同じ	細砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
82	〃	土師器	坏		7.1		黄橙 (7.5YR7/8)	淡赤橙 (2.5YR7/4)	精良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	I D b	
83	〃	土師器	坏		6.7		黄橙 (7.5YR7/8)	左に同じ	細砂粒を含む精良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	〃	
84	〃	土師器	坏		5.9		橙 (5YR6/6)	浅黄橙 (10YR8/4)	0.5~3ミリ大の砂粒を多く含む	良好	風化著しい	横ナデ	ヘラ切り	〃	

番号	出土位置	器種	器形	法量cm 口径	底径	器高	色調 内面	外面	胎土	焼成	調整 内面	外面	底部	分類	備考
85	SA1	土師器	高台付椀		6.8		黄橙(7.5YR [illegible])	左に同じ	きめ細かい	良好	横ナデ	横ナデ		IF1	
86	・	土師器	高台付椀		7.9		淡赤橙(2.5YR [illegible])	左に同じ	きめ細かい 0.5〜3ミリ前後の砂粒含む	良好	横ナデ	横ナデ	横ナデ	・	
87	・	土師器	高台付椀		7.0		浅黄橙(10YR [illegible])	左に同じ	1ミリ以下の砂粒含む 石英含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ状工具で放射状に削る	IE	
88	・	土師器	高台付椀				橙(5YR [illegible])	左に同じ	きめ細やか 1ミリ以下の白・茶・黒の砂粒 石英を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ状工具で放射状に削る	・	
89	・	土師器	高台付椀		6.4		浅黄橙(10YR [illegible])	左に同じ	きめ細かい	良好	ナデ?	ナデ?	ヘラ状工具で放射状に削る	・	
90	・	土師器	高台付椀		6.1		橙(7.5YR [illegible])	左に同じ	0.1〜0.2ミリ大の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ナデ	IF	
91	・	土師器	高台付椀				浅黄橙(10YR [illegible])	左に同じ	きめ細かい 0.5ミリ前後の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	・	
92	・	土師器	高台付椀		5.4		浅黄橙(10YR [illegible])	左に同じ	0.5ミリ大の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ナデ	・	
93	・	土師器	高台付椀		6.6		黄橙(7.5YR [illegible])	左に同じ	きめ細かい まばらに0.5ミリ前後の粒子含む	やや不良	横ナデ	ナデ	ナデ	・	
94	・	土師器	高台付椀				浅黄橙(10YR [illegible])	左に同じ	きめが細かい 砂粒及び光る粒を含む	良好	風化著しい	横ナデ	ヘラ切り	・	
95	・	土師器	高台付椀				黄橙(7.5YR [illegible])	左に同じ	きめ細かい 長石をわずかに含む	やや良好	ナデ	横ナデ	ナデ	・	
96	・	土師器	高台付椀				黄橙(7.5YR [illegible])	左に同じ	精良	良好	ナデ	横ナデ	ナデ	・	
97	・	土師器	高台付椀		9.6		橙(5YR [illegible])	明黄褐(10YR [illegible])	0.5〜2ミリ前後の砂粒を多く含む	良好	内面剝離	横ナデ	横ナデ	・	
98	・	土師器	坏	12.4	6.4	3.9	浅黄橙(10YR [illegible])	左に同じ	きめ細かい 砂粒子を含む	良好	横ナデ	横ナデ		・	
99	・	土師器	椀	16.3			黒	浅黄橙(10YR [illegible])	0.5〜1ミリ大の砂粒を含む	良好	ヘラ磨き	ヘラ磨き			内黒土器
100	A	土師器	小皿	10.2	7.2	1.5	浅黄橙(7.5YR [illegible])	にぶい橙(7.5YR [illegible])	きめ細かい 1ミリ前後の細砂粒含む	やや不良	ナデ	ナデ	糸切り		
101	SA1	土師器	甕				橙(5YR [illegible]) 浅黄橙(7.5YR [illegible])	浅黄橙(7.5YR [illegible])	0.3〜5ミリ前後の砂粒多く含む	良好	ナデ	ナデ			
102	・	土師器	甕				橙(5YR [illegible])	褐色(7.5YR [illegible])	0.5〜2ミリ前後の砂粒と3〜5ミリ前後の石粒含む	良好	ナデ	ナデ			
103	・	土師器	甕	20.3			黄橙(7.5YR [illegible])	左に同じ	1〜3ミリ大の砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ			
104	・	土師器	甕	17.5			浅黄橙(10YR [illegible])	左に同じ	雲母を少々含む	良好	ナデ	ナデ			
105	・	土師器	甕	24.6			淡赤橙(2.5YR [illegible])	左に同じ	細砂粒、1ミリ大の砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ			

番号	出土位置	器種	器形	法量 口径	底径	器高	色調 内面	外面	胎土	焼成	調整 内面	外面	底部	分類	備考
106	SA1	土師器	甕	cm 18.2	cm	cm	にぶい橙(7.5YR [illegible])	左に同じ	1〜3ミリの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ			
107	・	土師器	甕				浅黄橙(10YR [illegible])	左に同じ	0.5〜2ミリ前後の砂粒と3〜4ミリ大の石粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ			
108	・	土師器	甕	11.5			黄橙(7.5YR [illegible])	左に同じ	1〜3ミリ大の砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ			
109	・	土師器	甕	27.0			橙(5YR [illegible])	[illegible]	2〜5ミリ大の砂粒を多く含む 石英・黒雲母を少し含む	良好	ナデ	ナデ			
110	・	土師器	甕	11.1			にぶい黄橙(7.5YR [illegible])	左に同じ	金雲母・雲母を含む	良好	ナデ	ナデ			
111	・	土師器	甕	24.0			浅黄橙(10YR [illegible])	左に同じ	1〜3ミリ大の砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ			
112	・	土師器	甕	17.8			にぶい橙(7.5YR [illegible])	左に同じ	1〜3ミリ大の砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ			
113	・	土師器	鍋					橙(7.5YR [illegible])	0.1〜0.5ミリ大の細砂粒を含む	良好		ナデ			取手
114	・	土師器	甑					橙(7.5YR [illegible])	1〜2ミリの灰黒色・褐色の砂粒を多く含む	やや不良		ナデ			取手
115	・	布痕土器		13.6			橙(5YR [illegible])	左に同じ	細砂粒、1ミリ大の砂粒を含む	良好	布目	風化著しい			
116	・	布痕土器					黄橙(7.5YR [illegible])	左に同じ	細砂粒を含む	良好	布目	ナデ			
117	・	布痕土器					橙(5YR [illegible])	淡赤橙(2.5YR [illegible])	細砂粒を含む	良好	布目	ナデ			
118	・	布痕土器					浅黄(2.5Y [illegible])	左に同じ	細砂粒を含む	良好	布目	ナデ			
119	・	布痕土器					黄橙(7.5YR [illegible])	左に同じ	細砂粒を含む	良好	布目	ナデ			
120	・	布痕土器					上橙(5YR [illegible]) 下灰(7.5YR [illegible])	灰(7.5YR [illegible]) ↓ 明黄褐(10YR [illegible])	2〜4ミリ大の小石を含む	良好	布目	ナデ			
121	・	布痕土器					黄橙(7.5YR [illegible])	左に同じ	細砂粒を含む	良好	布目	ナデ			
122	・	布痕土器					黄橙(7.5YR [illegible])	左に同じ	細砂粒を含む	良好	布目	風化著しい			
123	・	布痕土器					淡赤橙(2.5YR [illegible])	左に同じ	細砂粒を含む	良好	風化著しい	風化著しい			
124	・	布痕土器					にぶい橙(7.5YR [illegible])	左に同じ	細砂粒を含む	良好	布目	ナデ			
125	・	布痕土器					にぶい橙(7.5YR [illegible])	にぶい橙(7.5YR [illegible])	2〜7ミリ大の小石を含む	良好	布目	ナデ			
126	・	布痕土器					黄橙(7.5YR [illegible])	橙(5YR [illegible])	細砂粒を含む (細かい雲母も含まれている)	良好	布目	風化著しい			

番号	出土位置	器種	器形	法量 口径	底径	器高	色調 内面	外面	胎土	焼成	調整 内面	外面	底部	分類	備考
127	MG2SA1	布痕土器		cm	cm	cm	黄橙(7.5YR [illegible])	左に同じ	細砂粒を含む	良好	布目	ナデ			
128	〃	布痕土器					にぶい橙(7.5YR [illegible])	左に同じ	2～7ミリ大の小石を含む	良好	布目	ナデ			
129	〃	布痕土器					黄橙(7.5YR [illegible])	左に同じ	細砂粒を含む	良好	布目	風化著しい			
130	〃	布痕土器					淡赤橙(2.5YR [illegible])	左に同じ	1ミリ大の砂粒を含む	良好	布目	風化著しい			
131	〃	布痕土器					橙(5YR [illegible])	左に同じ	1ミリ大の砂粒を含む	良好	布目	風化著しい			
132	〃	布痕土器					にぶい黄橙(7.5YR [illegible])	左に同じ	5ミリ大の小石を含む	良好	布目	風化著しい			
133	〃	布痕土器					黄橙(7.5YR [illegible])	左に同じ	細砂粒を含む	良好	布目	ナデ			
134	〃	布痕土器					橙(5YR [illegible])	左に同じ	1ミリ大の砂粒を含む	良好	布目	ナデ			
135	〃	布痕土器					にぶい橙(7.5YR [illegible])	淡黄(2.5Y [illegible])	細砂粒を含む	良好	布目	ナデ			
136	〃	布痕土器					淡赤橙(2.5YR [illegible])	左に同じ	細砂粒を含む	良好	布目	風化著しい			
137	〃	緑釉	碗	19.6			浅黄(5Y [illegible])	左に同じ	精選	良好	横ナデ	横ナデ			
138	〃	緑釉	皿	14.4	7.0	3.3	暗オリーブ(5Y [illegible])	[illegible]	精選	良好	[illegible] ヘラ磨き	[illegible] ヘラ磨き			
139	〃				4.9		灰白(5Y [illegible])	[illegible]	精選	良好	ナデ	ナデ			
140	〃	越州窯系青磁	碗	15.8	7.7	5.7	オリーブ黄(5Y [illegible])	[illegible]	精選	良好	横ナデ	横ナデ			
141	〃	青磁	高台付皿		5.9		明緑灰(10GY [illegible])	[illegible]	精選	良好	ナデ	ナデ			
142	〃	須恵器	高台付椀		8.6		黄灰(2.5Y [illegible])	左に同じ	0.5～1ミリ大の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ナデ		
143	〃	須恵器	高坏		9.1		灰オリーブ(5Y [illegible])	左に同じ	細砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ			穿孔1
144	〃	須恵器	埦				にぶい黄(2.5Y [illegible])	左に同じ	細砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ			
145	〃	須恵器	埦		8.4		灰白(10Y [illegible])	(10Y [illegible])	細かい砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ナデ		
146	〃	須恵器	埦	18.0			灰白(5Y [illegible])	左に同じ	精良	良好	横ナデ	横ナデ			
147	〃	須恵器	壺		10.2		灰黄(2.5Y [illegible])	にぶい黄橙(10YR [illegible])	砂粒を少し含む	良好	横ナデ	横ナデ	ナデ		

番号	出土位置	器種	器形	法量 口径	底径	器高	色調 内面	外面	胎土	焼成	調整 内面	外面	底部	分類	備考
148	MG2SA1	須恵器	壺	cm	cm 16.8	cm	灰(5Y [illegible])	左に同じ	細かい砂粒を少し含む	良好	横ナデ	横ナデ	ナデ		
149	〃	須恵器	壺				灰黄(2.5YR [illegible])	左に同じ	精良	良好	横ナデ	叩きの後横ナデ			
150	〃	須恵器	壺				灰白(2.5Y [illegible])	灰(5Y [illegible])	精良	良好	横ナデ	横ナデ			
151	〃	須恵器	壺				灰(5Y [illegible])	にぶい黄(2.5Y [illegible])	細砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ			
152	〃	須恵器	甕				暗灰黄(2.5Y [illegible])	黄灰(2.5Y [illegible])	精良	良好	横ナデ	格子目の叩きの後横ナデ			
153	〃	須恵器	甕				灰オリーブ(5Y [illegible])	灰黄褐(10YR [illegible])	精良	良好	横ナデ	格子目叩き			
154	〃	須恵器	甕				にぶい黄橙(10YR [illegible])	橙(7.5Y [illegible])	精良	良好	平行叩き	格子目叩き			
155	〃	須恵器	甕				黄灰(2.5YR [illegible])	左に同じ	1ミリ大の砂粒を数個含む 精良	良好	横ナデ	格子目叩き			
156	〃	須恵器	甕				灰白(2.5YR [illegible])	左に同じ	精良	良好	平行叩き	ナデ			
157	〃	須恵器	甕				にぶい黄(2.5Y [illegible])	左に同じ	精良	良好	平行叩き	格子目叩き			

表5 SAI 出土土錘観察表

№	出土区	長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重(g)	色調	胎土	焼成
1	MG2・SA1	3.5	1.4	0.4	4.85	にぶい黄橙～暗灰黄 10YR [illegible]～2.5YR [illegible]	精良	良好
2	〃	2.45+α	1.45	0.5	5.15	浅黄 2.5Y [illegible]	1mm大の砂粒を含む	〃
3	〃	4.0	1.45	0.5	7.45	橙 7.5YR [illegible]	1mm大の砂粒を含む	〃
4	〃	4.1	1.55	0.45	7.6	橙 7.5YR [illegible]	細砂粒を含む	〃
5	〃	2.2+2	1.3	0.45	2.25	明黄褐 10YR [illegible]	精良	〃
6	〃	4.9	1.8	0.5	12.3	橙 7.5YR [illegible]	細砂粒を含む	〃
7	〃	5.6	1.65	0.5	11.85	橙 7.5YR [illegible]	細砂粒を含む	〃

第Ⅳ章　田上遺跡の調査

第1節　調査の概要

田上遺跡は宮崎学園都市建設計画の農高予定地のなかの比較的平坦な標高約27mの場所に確認された。当初，かなりの範囲に広がると予想されたが試掘の結果，西側部分はすでにアカホヤ層以下まで削平されており遺構・遺物は検出することはできなかった。そこでアカホヤ層が残存していた東側部分約2,500㎡を調査の対象とした。調査区は座標北にあわせて10mグリッドをもとに北南をA～F，東西を1～6として設定し発掘調査を行った。

検出された遺構・遺物のほとんどが縄文時代早期のもので，集石遺構8基，縄文土器約120点，石鏃11点，石皿片1点，磨石3点と黒曜石やチャートの剥片，チップが出土した。集石遺構は，他の同時期の遺跡にみられるものと同様に掘り込みをもたないものが多かった。掘り込みをもつものは2基（S I 4，S I 6）であった。縄文土器は，条痕文土器，貝殻文土器，寒之神式土器，隆起線文土器など多岐にわたる。条痕文土器，貝殻文土器は，従来いわれている前平式土器，吉田式土器の範疇にはいるものであるが，そのほとんどが破片で相対的な編年を決定づけられるものではなかった。その他の土器もこの時期の資料の蓄積に留まざるをえない程度のものである。石器は少なく石鏃が主体をなしている。磨石，石皿はさらに少なくなる。なお，先土器時代の遺物である細石核が1点表土中から出土した。弥生時代の遺構はみられなかったが弥生土器片が数点出土している。当遺跡の立地する小丘陵上の遺跡では，弥生時代中期の住居跡1軒が下田畑遺跡で，中期の土器片が小山尻東遺跡から検出されており，弥生時代の生活の場があったことを窺せるものである。その他に青磁片，擂鉢片，糸切り底をもつ土師器の小皿等が出土したがそれに伴なう遺構はまったく検出されず，当地は縄文時代早期以後の遺構・遺物は希薄である。また西側部分で土取りによって土器が出土し急拠発掘を行ない，土拡1基とそれに伴なう土師器壺1個体を検出した。その周辺も広げたがそれ以上の遺構・遺物はなかった。

（谷口武範）

第2節　遺跡の立地と環境（付図）

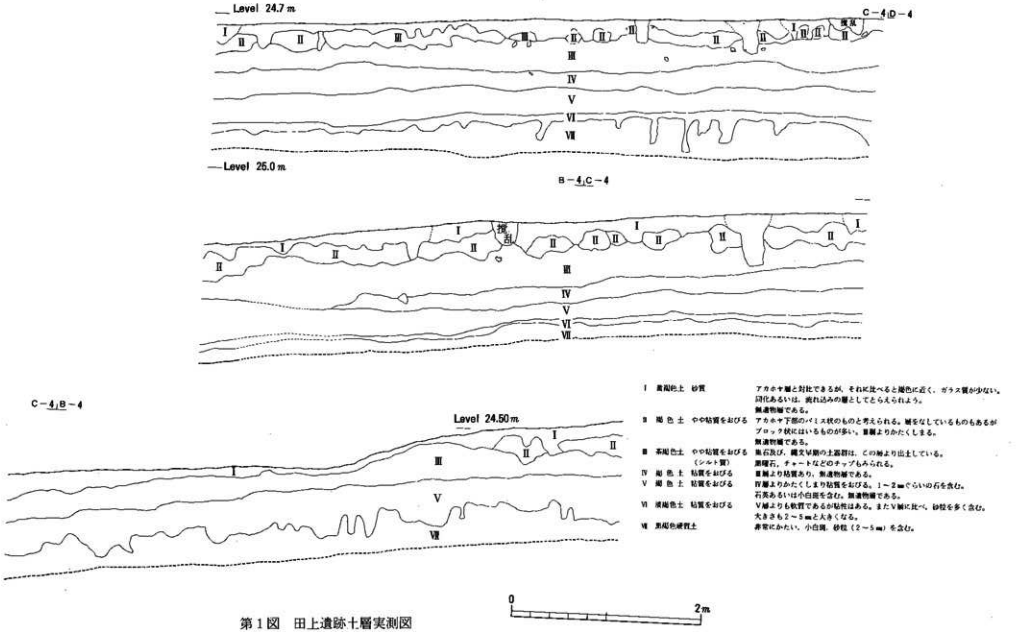
田上遺跡は宮崎都清武町大字木原に所在する。学園都市遺跡群の多くが点在する舌状台地の北西の付根から東へ分岐する小丘陵地帯の東端部に位置する。此高差約15mの谷底低地を挟んで南に舌状台地が広がり，東は清武川へ開けた谷底低地の出口を見渡せる。その先には，清武川，そして日向灘が見える。田上遺跡の北には，小さな開析谷を挟んで標高26mの小山尻東遺跡が隣合わせている。そして，急傾斜で下る丘陵の北には，東流する清武川の河岸段丘や自然堤防，沖積地が広がっている。また，北西の尾根上に板碑が数基確認された小山尻西石塔群，さらに南西，尾根を越えた所にはテラス状の緩斜面に弥生時代の住居跡や土壙，縄文早期の集石遺構等を検出した浦田遺跡が位置している。そして，この丘陵地帯の頂部を越えた西の平坦地には，下田畑遺跡，その南西に赤坂遺跡等が存在している。

このような環境の下，田上遺跡は標高約25mの北東へ傾斜したなだらかな地形にあって，三方を急傾に囲まれている。そして，小山尻東遺跡との間の開析谷には湧水点も見られ，縄文時代早期の遺跡に共通した高台状のめぐまれた立地条件にあるといえよう。

（菅付和樹）

第3節　層　序（第1図）

4・5列の境で南北に土層観察を行った。Ⅰ層は黄褐色土でアカホヤ層として対比されるが従来のものよりガラス質が少なく，褐色が強い。風化あるいは流れ込みのアカホヤ層とも考えられる。Ⅱ層は固くしまった黄褐色土となる。Ⅰ層下部のパミス状のものである。層をなすものが少なく，ブロックとしてはいるものがほとんどである。Ⅰ，Ⅱ層は無遺物層である。Ⅲ層はやや粘質をおびる茶褐色土で，集石遺構および縄文早期の土器や石器類が出土し



I	黒褐色土	砂質	アカホヤ層と対比できるが、それに比べると褐色に近く、ガラス質が少ない。
II	褐色土	やや粘質をおびる	同化あるいは、流れ込みの層としてとらえられよう。
			無遺物層である。
III	茶褐色土	やや粘質をおびる	アカホヤ下部のパミス状のものと考えられる。層をなしているものもあるがブロック状に広いるものが多い。II層よりかたくしまる。
		(シルト質)	無遺物層である。
IV	褐色土	粘質をおびる	風化及び、鍾乳質層の土器群は、この層より出土している。
V	褐色土	粘質をおびる	黒曜石、チャートなどのチップもみられる。
			II層より粘質あり、無遺物層である。
			灰褐よりかたくしまり粘質をおびる。1～2㎜ぐらいの石を含む。
			石英あるいは小白斑を含む、無遺物層である。
VI	褐褐色土	粘質をおびる	V層よりも軟質であるが粘性はある。またV層に比べ、砂粒を多く含む。
			大きさも2～5㎜と大きくなる。
VII	黒褐色礫質土		非常にかたい、小白斑、砂粒（2～5㎜）を含む。

第１図　田上遺跡土層実測図

ている。Ⅳ層は褐色土で Ⅲ層より粘質をもつ。当遺跡では無遺物層であったが，耕作土中から頁岩製の細石核が出土していることから先土器時代の文化層の存在が考えられ，それは他の浦田遺跡，下田畑遺跡の調査結果からこのⅣ層と対比できるものであろう。Ⅴ層は褐色土となる。Ⅳ層より固くしまり粘質をおびる，小白斑あるいは石英を含む。Ⅵ層は淡褐色土である。Ⅴ層よりは軟質で，砂粒を多く含む。砂粒も2～5㎜と大きくなる。Ⅶ層は黒褐色土となり非常に固く小白斑を含む。当遺跡ではⅣ層～Ⅶ層は無遺物層である。

対面の小山尻東遺跡でも同様な層序をなし，当遺跡におけるⅢ層と対比できる層から集石遺構や縄文時代早期の土器や石器が検出されている。これらの遺跡の尾根の向こう側の北斜面に立地する下田畑遺跡では若干層序の様相を異にし，Ⅰ層（黒褐色土），Ⅱ層（アカホヤ層），Ⅲ層（黒褐色土），Ⅳ層（褐色土）となる。Ⅰ層からは縄文前期の曽畑式土器，Ⅳ層から塞之神式土器，Ⅳ層下部においてナイフ形石器が出土しており，先土器時代から縄文時代前期までの一連の文化層を把握でき良好な資料として注目される。なお，Ⅲ層は無遺物層となっている。

（谷口武範）

第4節　遺構と遺物

1. 遺　構

集石遺構（第2図～第4図）

ＳＩ1

Ｅ－4グリッドの北西端で検出された。約80×55cmの範囲で南北に長い楕円形に礫が集中する。礫は，15～20cm大の大きめの自然礫を中心に10cm以下の割れた礫が東側から北側に多くみられる。いずれもわずかに赤変し，加火されたと思われる。これらは平面的な堆積状態を示し，礫面下約5cmの深さまで検出されたが，明確な掘り込みは確認できなかった。また，周辺及び礫群中には炭化物等はみられず，土色の変化も認められなかった。

ＳＩ2

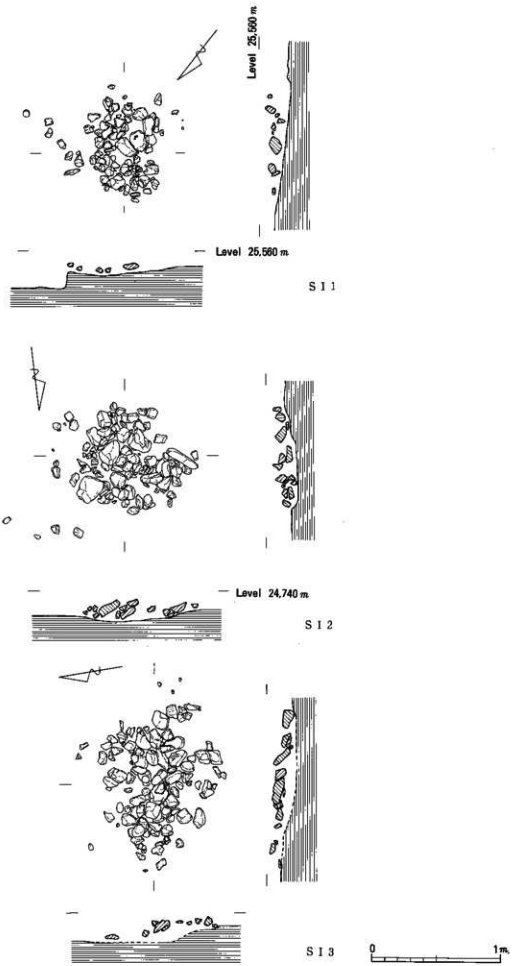
Ｃ－4グリッド南端やや東よりの位置で検出された。ＳＩ1の北東約14.5ｍにあたる。大小の礫が平面的に広がる部分の東端で，約100×90cmの略円形に礫が集中していた。20数cmの大きめの礫も含まれるが，多くは10cm大の礫で，割れているものが多い。北西側はやや希薄な分布状態を示す。礫のうち少量は，やや黒っぽく変色しているが，炭化物や焼土等は確認されていない。礫群は約15cmの厚さに堆積し，深さ5cm前後の掘り込みを有していたとも思われるが，埋土と周囲の検出面との土色の違いはみられなかった。

ＳＩ3

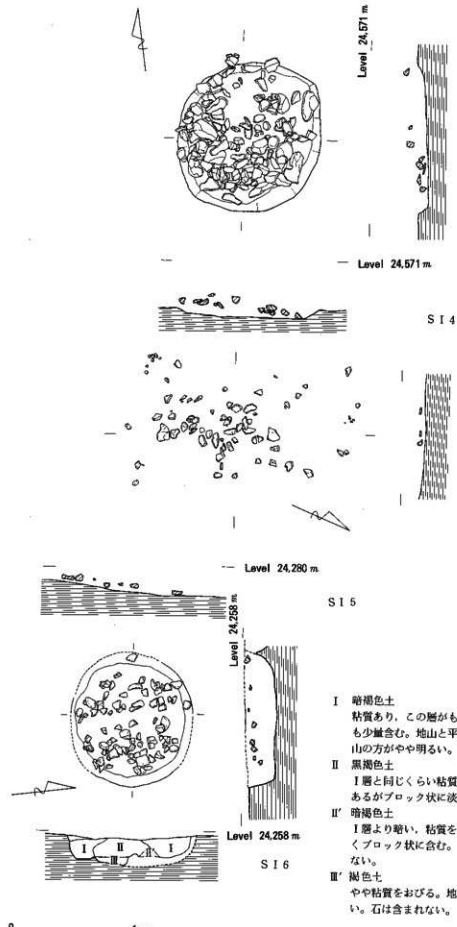
Ｃ－3グリッド西端やや北よりで検出された。ＳＩ2の北西約7ｍの傾斜地にある。礫群は約120×100cmの範囲に集中し，東西に若干長い楕円形を呈す。中央には15～20cm程度の大きめの礫があり，周囲には10cm未満の割れた礫がみられる。礫群は平面的に堆積し，傾斜に沿う様に北東方向へ傾いていた。礫群中には貝殻条痕文土器が1点混在し，また，変色した礫はあまり見られなかった。そして，礫群中あるいは礫群下の土色にも変化はみられず，掘り込みは確認できなかった。しかし，小さな炭化物が礫群下の土に混入しており，約5cm程の深さまでみられた。焼土等は確認していない。

ＳＩ4

Ｃ－5グリッドの北西端で検出された。周囲にも2基確認され，計3基が集中している。礫は約120×110cmの略円形の範囲に集中し，北側がやや希薄であった。周囲に約20cm大の大きめの礫が，中央には10cm未満の礫がみられ，殆ど割れていた。変色の度合は低い。割れた礫の中には接合可能なものも見られた。礫群は約15cmの厚さに堆積し，礫面下に浅い掘り込みを持つと思われるが，明確には検出できなかった。また，小さな炭化物が少量含まれていたが



第2図　SI1・2・3 遺構実測図



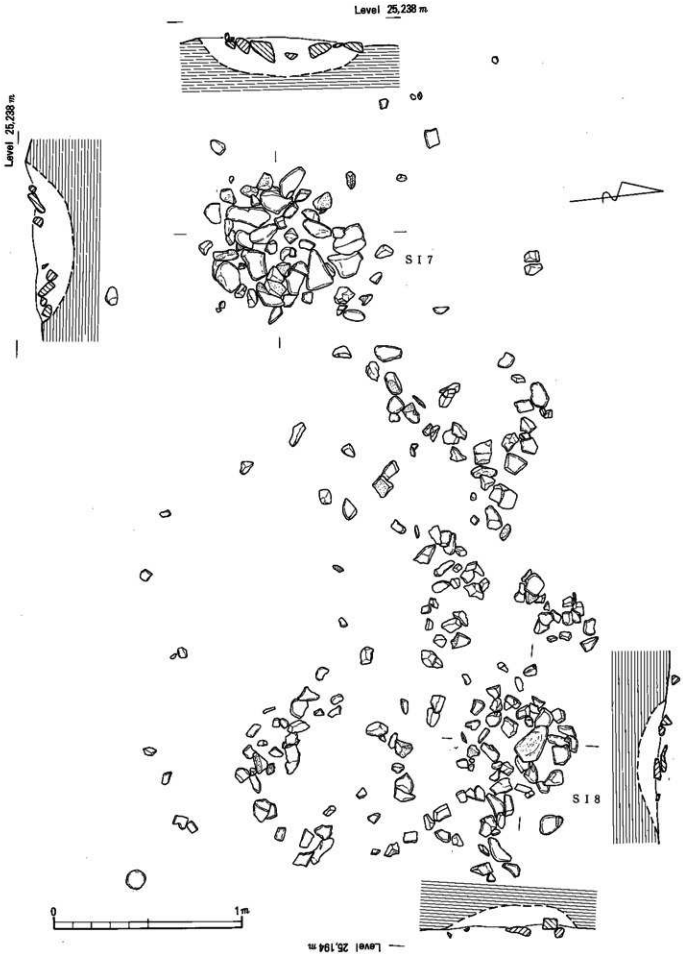
I　暗褐色土
粘質あり，この層がもっとも小礫を含む。炭化物も少量含む。地山と平面的には，見分けにくい。地山の方がやや明るい。

II　黒褐色土
I層と同じくらい粘質あり，炭化物を含む。少量であるがブロック状に淡褐色土（地山の土）を含む。

II′　暗褐色土
I層より暗い，粘質をおびるII層より淡褐色土を多くブロック状に含む。I′層とした方がいいかもしれない。

III′　褐色土
やや粘質をおびる。地山との漸移層，I′としてもいい。石は含まれない。

第3図　SI4・5・6 遺構実測図



第4図　SI7・8 遺構実測図

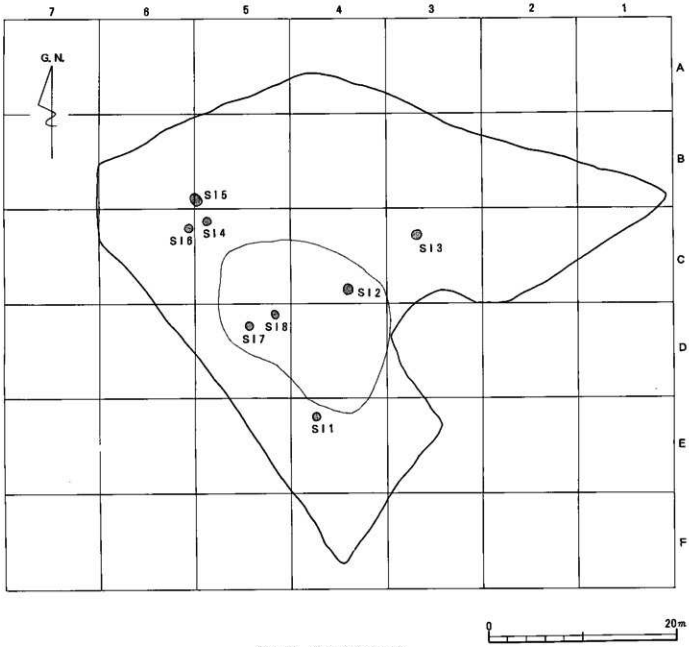
焼土等はみられず，埋土の変色・変質もみられなかった。

S I 5

B－5・6グリッドのグリッド境南端で検出された。S I 4の北西約2.5mに位置するが，検出面の高さはほぼ同じである。10～5cm程度の礫が傾斜面に沿って散在する状態で確認され，そのうち，やや大きめの礫があいまいなまとまりをみせている。殆どが割れていて，火を受けた様な赤っぽい色を呈していた。この礫面下及び礫間には炭化物等はみられず，掘り込みも確認できなかった。

S I 6

C－6グリッド北東端で検出された。S I 4の南西約2mと近接しており，礫面中央の高さはS I 4より約8cm程低い。S I 6は，検出時から掘り込みが確認された唯一のものである。遺構面は，中央が黒褐色，周囲が暗褐色を呈し，検出層の茶褐色土とは，輪郭こそ不明瞭であったが，明らかに識別できる状態にあった。掘り込み内には3cm大



第5図　集石遺構分布図

から10cm大の割合小さめの礫が，量的には少ないが全面にみられ，中央部は多少希薄であった。これらは，割れたような角礫であり，遺構内上層から中層に集中していた。また，掘り込みは，検出面で105×95cmの東西に長い略円形で，床面は，88×86cmの円形である。検出面からの深さは，端部で約15～20cm，中央で約25cmを計る。床面の中央部は，堅くしまっていた。そして，やや粘質を帯びた埋土の中には炭化物がみられ，中央の黒褐色土中に最も多く，床面近くが少なかった。焼土は確認されていない。

ＳＩ７

ＳＩ８とともにＤ－５グリッド北側で検出された。検出時，10cm前後の礫が面的に広がる中で，西端にＳＩ７が，北東端にＳＩ８が，周囲より多少礫が集中した状態で確認されている。ＳＩ７は約80×85cmの略円形に15～20cm大の礫及び10cm未満の礫で構成されている。小さな礫は殆ど割れているが，全体的に礫自体の変色はなく，礫間の土色・土質ともに変化はみられない。また，礫群は地形に沿ってやや北東方向に傾斜している。周囲及び礫群中に焼土は確認できなかったが，礫群下には小さな炭化物が含まれており，約86×88cmのほぼ礫群と同じ範囲で深さ約20cmまで検出された。掘り込みは明確でなく，礫も若干すり鉢状になるものの，ほぼ平面的な状況を呈していた。

ＳＩ８

Ｄ－５グリッド内，ＳＩ７の北東約３mに近接している。ＳＩ７と一連の礫層面にあるもので，22×13cmの石皿状の礫を中心として，まわりに約55×65cmのほぼ円形に10cm未満の礫が集中している。しかし，密度は周囲に比べてやや集中している程度のものであり，礫は平面的に検出され，礫群下に明確な掘り込みはみられない。小礫は殆ど割れているが，礫自体の変色や礫間の土色・土質に変化は確認できず，ただ，小さな炭化物の含まれる範囲を約72×70cm，約12cmの深さまで確認できた。焼土等はみられなかったが，東端付近の礫のひとつに，スス状の黒い炭化物の付着しているのが確認された。このＳＩ８も，ＳＩ７同様地形に沿って北東方向へ傾いている。

集石遺構の検出状況（第５図）

当遺跡では，先ず礫群が面的に層をなす状態が確認された。ほぼ，Ｃ－４・５グリッド及びＤ－４・５グリッドの範囲にみられたが，Ｃ－６グリッド西側やＣ－４グリッド中央では既に遺跡の北側の開析谷の方向へ傾斜する状況をみせ，礫群の範囲も，礫量もさほど広くもまた多くもなかった。このような中で，ＳＩ・３・４・５・６は，礫層の縁辺部に検出されている。また，礫群層中で確認されたＳＩ２は，既に傾斜しはじめた礫の不安定な出土状況の中にあって，礫が集中している状況ではあったが，単に礫が積重なっているとの印象を受ける出土状態であり，甚だ感覚的ではあるが，下部に掘り込みを有する種類のものとは異なる印象を受けた。ＳＩ７・８は前述のとおり，礫群の中にややまとまりをみせる程度の集中状況が観察できた。

２．遺　物

縄文土器（第６図～第８図）

田上遺跡出土の縄文土器は，貝殻条痕文・貝殻腹縁文を用いる貝殻（条痕）文系土器が主体を占め，その外に無文・沈線文・撚糸文・押型文土器等が少量みられる。土器は全般に出土量が少なく，主体をしめる貝殻文系土器も個体数としては少ないと考えられる。これらの土器の出土層位は，殆どアカホヤ火山灰層下の茶褐色シルト質土層中である。文様や口縁部形態により分類を行った。また，個々の土器については，別に観察表を作成した。

(1) 貝殻（条痕）文系土器

器面調整に二枚貝条痕を用いる土器群である。施文形態により２類に細分した。

A．貝殻条痕の外に，貝殻腹縁刺突線文や楔形貼付文を特徴とする土器群。角筒と思われる土器が少量出土してい

るので，さらに2類に細分した。

A－1　円筒土器。口唇部にきざみを有し，口縁部はわずかに外反する。外器面はナデ調整され，地文の貝殻条痕が一部痕跡として残っている。口唇部直下に1～1.5cm幅の文様帯を持ち，その下に縦位の平行腹縁刺突線文，そして，横間隔約2cm前後で楔形貼付文を縦位に施すが，胴部以下接合するものがなく，個数は不明である。楔形貼付文の横押さえはヘラ状またはクシ状施文具によると思われる。縦位の貝殻腹縁刺突線文は手法に2類みられる。

a　貝殻腹縁刺突文が線状に続けて施文されるもの。口唇部直下の文様が横位のもの（1～2）と斜位のもの（5）がある。1は貝殻肋かクシ状施文具によると思われる。

b　続けて施文されないもの（3～4）。口唇部直下の文様は斜位に施される。同一個体と考えられる。

胴部1．縦位の楔形貼付文及び貝殻腹縁刺突線文，ヘラきざみのみられるもの。

a　腹縁刺突文が続けてされるもの（6～9・13～27・32～35）。このうち32～35は底部付近と考えられる。

b　腹縁刺突文を間隔をおいて施したもの（10～12・28～31）。

胴部2．貝殻腹縁以外の施文具によると思われる縦位の刺突文（36～38）。貝殻肋かクシ状施文具によるものと思われる。

A－2　角筒土器。口縁部は出土していないため全体器形は不明である。外器面は浅い貝殻条痕がみられ，その上に楔形貼付文と斜位の貝殻腹縁刺突線文を施す。胴部の屈曲部に刺突文のみられるもの（40～41）とみられないもの（42）がある。斜位の腹縁刺突線文は交差し，菱形になるものと思われる。39～41は同一個体と思われる。また，43も角筒土器の胴部片と思われる。

B．外器面に貝殻条痕文のみみられる土器群。胴部以下は不明であるが，口縁部形態により2種に細分できる。

B－1　口縁端部が肥厚し外反気味になるもの（44）。

B－2　口縁部が直行するもの。

a　貝殻条痕文以外に施文がないもの（45～47）。47は口唇部直下に波状の貝殻条痕文が施される。

b　貝殻条痕文以外に口縁端部にヘラ状施文具によるきざみを有するもの（48～50）。

胴部3．貝殻条痕が地文にみられるもの。

a．横あるいは斜め方向に乱れた調整のみられるもの（51～52）。

b．斜方向の規則的な調整のみられるもの（53～80）。

c．横方向の太い条痕がみられるもの（81）。

d．縦方向に条痕と思われるものがみられるが，風化のためわかりにくい（82）。

(2) その他の土器

文様形態の異なる少量出土のものを一括した。

C．斜方向の貝殻条痕の地文に刺突列点文を施すもの。口縁部は内湾気味に直行する（83）。

D．口唇部にきざみを有し，刺突列点文か押圧文状の文様を施すもの（84）。口縁部は直行する。

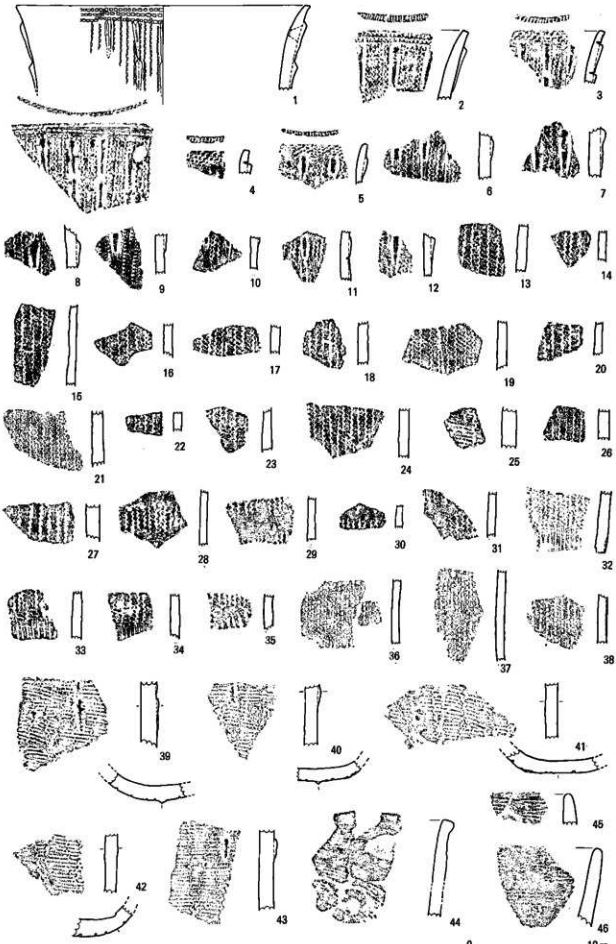
E．横方向の条痕状の文様を施すもの。器面が風化していてわかりにくい。口縁部は内湾気味に内傾すると思われる（85）。

F．無文の土器。口縁部形態により2種に細分できる。

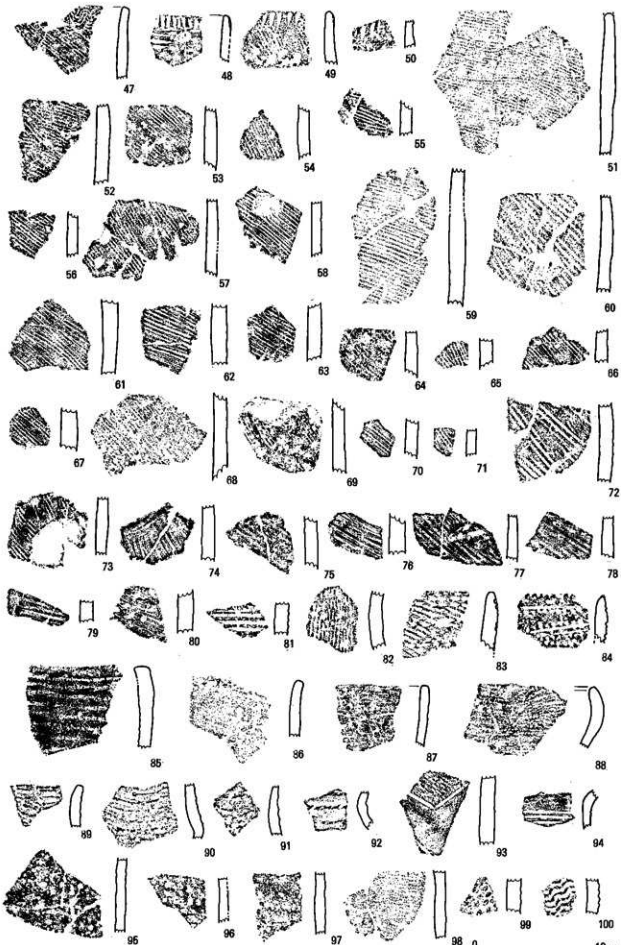
F－1　口縁部が外傾し，端部が外反するもの（86）。

F－2　口縁部が直立し，端部が内湾するもの（87）。

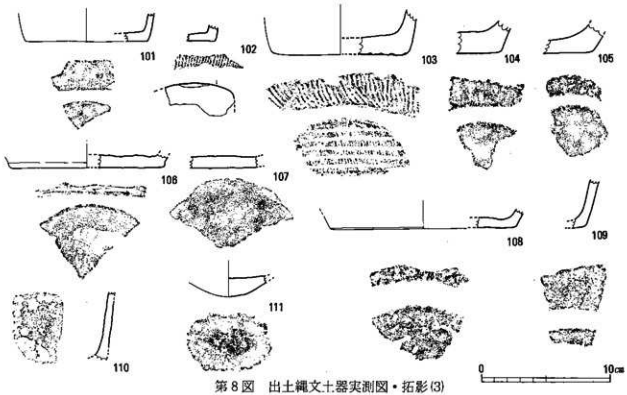
G．貝殻肋によると思われる刺突文が横あるいは斜方向に施される。口縁部は大きく内湾し，キャリパー状になる



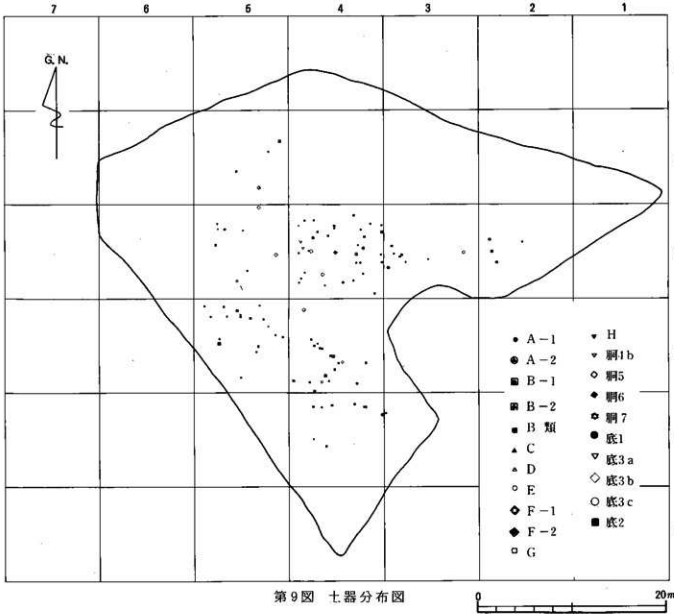
第6図　出土縄文土器実測図・拓影(1)



第７図　出土縄文土器実測図・拓影 (2)



第8図　出土縄文土器実測図・拓影(3)



第9図　土器分布図

と思われる（88）。

H．ヘラ状具による押し引きの結果，微隆起線文状の文様をなす（89）。

胴部4．隆起線文のみられるもの。

a．ヘラ状具による押し引きの結果，微隆起線文状の文様をなすもの（90～91）。

b．細隆起線文状の貼付の上にきざみを有するもの（92）。

胴部5．沈線文のみられるもの

a．沈線で囲まれた所に撚糸文を施すもの（93）。

b．横方向に平行沈線を施すもの（94）。

胴部6．無文のもの（95～98）。

胴部7．押型文の施されるもの。

a．楕円押型文（99）。

b．山形押型文（100）。

底部1．端部にきざみ目のみられるもの。

a．円筒土器の底部と思われ，貝殻腹縁刺突文を縦位に多条施す（101）。

b．角筒土器の底部と思われるもの（102）。

底部2．側面に貝殻条痕が縦方向にみられ，底面に網代痕がある（103）。

底部3．無文のもの。

a．丁寧な調整の行われているもの（104～105）。

b．ナデ調整を用いた特徴のないもの（106～110）。

c．底が丸くなると思われるもの（111）。

縄文土器の出土状況（第9図）

出土縄文土器は，全体的にみるとC－4グリッドとD－4・5グリッドを中心に分布する。これは，集石遺構の礫層の分布範囲内にほぼ含まれるものであり，土器も礫間に混在して出土している。また，土器は発掘区中央から北側にかけて，全体的に地形の傾斜に沿って出土しているが，北端では明らかに流れ落ちたと考えられる状況のものもみられた。主体を占めるA類・B類については，A類土器がC－4・D　5グリッドに集中するのに対し，B類土器は主にD－4グリッド及びE－4グリッドに出土するという傾向がみられる。

（菅付和樹）

石　器

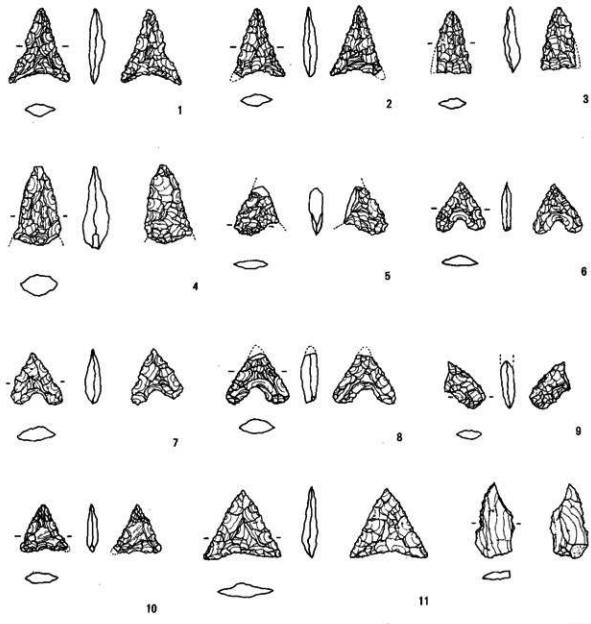
石器は土器に比べ出土量は少なく石鏃11点，磨石3点，石皿片1点，小型のスクレパー様石器1点，不明石器1点である。これらはC・D－4・5グリッド周辺に集中する。その他黒曜石，チャート等のチップ，剝片もみられる。石材は黒曜石，砂岩，チャート，安山岩などある。黒曜石は次のA～D類の4にわかれる。

A類―　透明度があるが少量の気泡を含む。霧島産のものと思われる。

B類――濃い飴色をなす。気泡は含まれない。

C類――不透明な黒色を呈す。気泡を多量に含む。

D類――乳灰色をなす。一般に姫島産といわれるものである。



第9図　石器実測図(1)

表1　石　鏃　計　測　表

番号	出土地区	型式	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	抉り(cm) 幅	抉り(cm) 深さ	先端角度(°)	重さ(g)	石材	破損状態	備考
1	C−5	Ⅰ−a	2.0	1.6	0.4	1.4	0.3	45	0.6	ob−A	完形	
2	C−4	Ⅰ−a	1.8	1.4	0.4	1.1	0.2	47	0.5	ob−B	脚端部欠損	第2ブロック
3	E−4	Ⅰ−b	1.7	1.1	0.4	—	—	62	0.4	ob−A	脚部欠損	
4	D−4	Ⅰ−a	—	1.2	0.7	—	—	48	1.2	ob−A	脚部欠損	第1ブロック
5	D−4	Ⅰ−a	—	—	—	—	—	—		ob−A	脚部のみ	第1ブロック
6	C−4	Ⅱ−a	1.3	1.3	0.3	0.8	0.3	68	0.3	ob−B	完形	第2ブロック
7	C−3	Ⅱ−a	1.3	1.3	0.4	0.9	0.3	67	0.45	ob−D	完形	
8	D−4	Ⅱ−a		1.7	0.5	1.1	0.5	—	0.7	ob−C	先端部欠損	第1ブロック
9	D−4	Ⅱ a	—	—	—	—	—	—	0.3	ob−A	脚部のみ	第1ブロック
10	D−4	Ⅱ−b	1.2	1.3	0.3	0.9	0.1	69	0.3	ob−A	脚端部欠損	第1ブロック
11	C−4	Ⅱ−b	1.8	2.1	0.4	1.6	0.2	64	0.7	Sn	完形	第1ブロック

石　鏃　（第９図１～11）

石鏃は形態が二等辺三角形をなすもの（Ⅰ類），正三角形をなすもの（Ⅱ類）がある。また，それは浅い抉りのあるもの（a類）とU字状に深く抉りのはいるもの（b類）に細分できる。Ⅰ－a類（１・２・４・５），Ⅰ－b類(3)，Ⅱ－a類（６・７・８・９），Ⅱ－b類（10・11）となる。石材からみるとob－A類は全タイプにあり，ob－B類はⅠ－a・Ⅱ－a類，ob－C類はⅡ－a類（８）のみ，ob－D類はⅡ－a類（７）のみである。11は安山岩製のもので全長1.8cm，幅2.1cmと大型であるが厚さは0.4cmと普通である。完形で出土しているものは４点で，先端部欠損のもの１点，脚部欠損のもの４点である。10は表裏に剥離が残されている。

スクレイパー様石器　（第９図12）

12は剥片を利用したもので，左側辺に表面から約1.2cmにわたってリタッチが施されている。表面右側基部には自然面が残る。長さ2.1cm，幅1.1cm，厚さ0.2cmを測る。ob－A類に含まれる。D－５グリッド出土である。

不明石器　（第10図）

不整形の十字形を呈す。左側辺は自然面が残され，基部は表裏からていねいな基部調整がなされる。右側辺は裏面からの調整だけで，裏面上半には主要剥離面を，表面中央部にも剥離面を残す。硬質砂岩製である。長さ7.5cm，幅4.1cm，厚さ1.2cmを測る。D－５グリッド出土である。

石　皿　（第11図１）

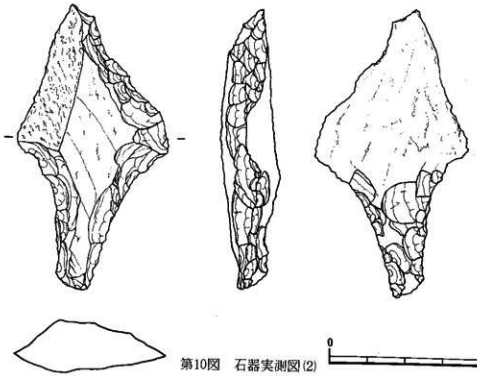
砂岩製のもので½ほどの残存である。表裏とも凹みがあり擦痕が観察できる。ＳＩ８から出土しており集石遺構に伴なうものかもしれない。あるいは集石遺構に使用された可能性もある。

磨　石　（第11図２～４）

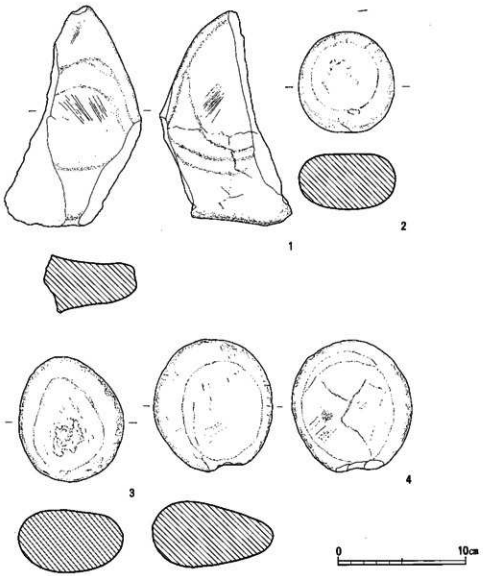
２は円形をなし，表面のみに5.5×5.1cmの幅で磨痕が観察できる。砂岩製のもので長さ7.8cm，幅7.5cm，厚さ4.3cmを測る。C－４グリッド出土である。３は表面のみに磨痕があり，一部中央が凹んでいる。平面は卵形をなす砂岩製のものである。長さ9.8cm，幅8.2cm，厚さ5.0cm。B－５グリッド出土。４は砂岩製の磨石である。表裏に磨痕が観察できる。裏面にヒビが入る。下部が一部欠損している。長さ10.4cm，幅9.5cm，厚さは一様でなく左が5.1cmで右にいくにつれて薄くなっている。C－５グリッド出土である。

石器の土出状況　（第12図）

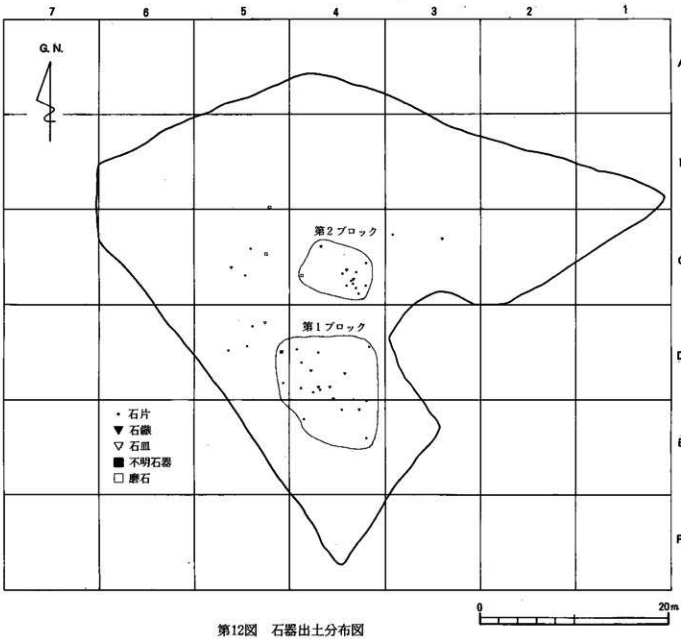
石器および石片は発掘区の中央から南寄りにかけて分布する。その中で小さく２つのブロックに分けることができる。第１ブロックはＳＩ１，ＳＩ２，ＳＩ７，ＳＩ８に囲まれた広い範囲で分布する。石鏃５点，不明石器１点，石皿片１点，石片15点でなる。石鏃はＳＩ１周辺に集中する。石材はob－A類が４点を占める。不明石器はＳＩ７・８付近の散石に混じってまた，石皿片はＳＩ８の中から出土した。第２ブロックはＳＩ２周辺に分布する。石鏃３点，磨石１点，石片９点からなる。石材はob－B類が２点，安山岩製が１点である。ＳＩ２に伴なう可能性が大きい。そのほかに，第２ブロックとＳＩ４の間に磨石２点，石鏃１点，石片２点がみられる。またＳＩ２の東側にはob－D類の石鏃１点と石片１点が分布している。



第10図　石器実測図(2)



第11図　石器実測図(3)



第12図　石器出土分布図

ＳＣ１　（第13図）

(1) 遺　構

発掘区の西側約60mのところから土取り作業中に発見された。そのため東隅の約¼程度が削平されていた。長さ2.5m，幅1.9m（推定），深さ約35cmを測る。埋土は粘質をおびた褐色土である。中央やや北寄りの部分から壷１個体分が出土した。レベルは遺構の中位よりやや下方であった。その他の出土遺物はみられない。発掘後周辺にまで拡げたが，その他遺構は確認できなかった。

(2) 遺　物

１は土師器壷である。ＳＣ１からの出土遺物はこれだけである。口縁はかるく外反し短い。端部は細くなり丸味をおびると思われる。胴部はやや長胴気味で最大径が胴部中央となる。底部は丸底を呈すと思われる。内外面とも風化が著しい。胎土はきめ細かいが0.5～4㎜の砂粒を含む。焼成は良好。色調は内外面とも浅黄橙（7.5 YR 8/6）をなす。２～９は須恵器の甕片でSC1周辺出土のものである。２は頸部片で外面は格子目叩き，内面は口縁部が横ナデ，頸部は平行条線叩きである。焼成は良好。外面には自然釉が被る。内面は淡青灰色をなす。３は外面が格子目叩き，内面

に平行条線叩きが施される。外面は黒褐色をなし自然釉が被る。内面は暗青灰色をなす。2次的焼成を受けた可能性がある。4は外面が格子目叩きで一部ナデ消される。内面は同心円文叩きである。焼成は良成。外面は青緑色をなし自然釉が被る。内面は青灰色を呈す。5は外面が格子目叩きで一部ナデ消される。内面は同心円文の叩きが施される。焼成は良好。外面には薄く自然釉が被る。内面は青灰色をなす。4，5は同一個体と考えられる。6は外面に格子目叩き，内面には平行条線の叩きが施される。内面の平行条線の原体は長さ約2.0cm，幅（3＋α）cmと考えられ施文法は縦方向のあと斜方向という順に調整が行なわれている。焼成は良好。外面は自然釉が被り暗青緑色，内面が青灰色を呈す。7は外面が格子目叩き，内面は外面より大きい桝目の格子目叩きでその後ナデ消されている。焼成は良好。外面が淡青灰色，内面が灰色を呈す。8は甕の底部である。外面は格子目叩きで一部ナデ消される。胴部内面は平行条線叩き，底部内面は指による調整で部分的に平行条線の叩きが入る。内面の叩きは幅3.4cm，長さ（3＋α）cmで左回りに下から上へ施されている。焼成は良好。外面は暗青緑色，胴部内面は暗青灰色，底部内面が黄褐色をなす。9は外面は格子目叩きで一部ナデ消される。内面は平行条線の叩きである。焼成は良好。外面が暗青緑色，内面が暗青灰色を呈す。3・6・8・9は同一個体と考えられる。

その他の遺物（第14図，第15図）

1は流紋岩系の細石核である。正面観が幅広いU字形，底面が舟底形を呈す。底縁および背面に自然面が残されている。このことから母岩の一隅を剥離後，その剥離面を利用し1度ないし2度の調整によって打面が作られる。側面の調整は粗く平面形が三角錐状をなす。全長4.7cm，幅3.4cm，厚さ2.1cmを測る。表採資料である。

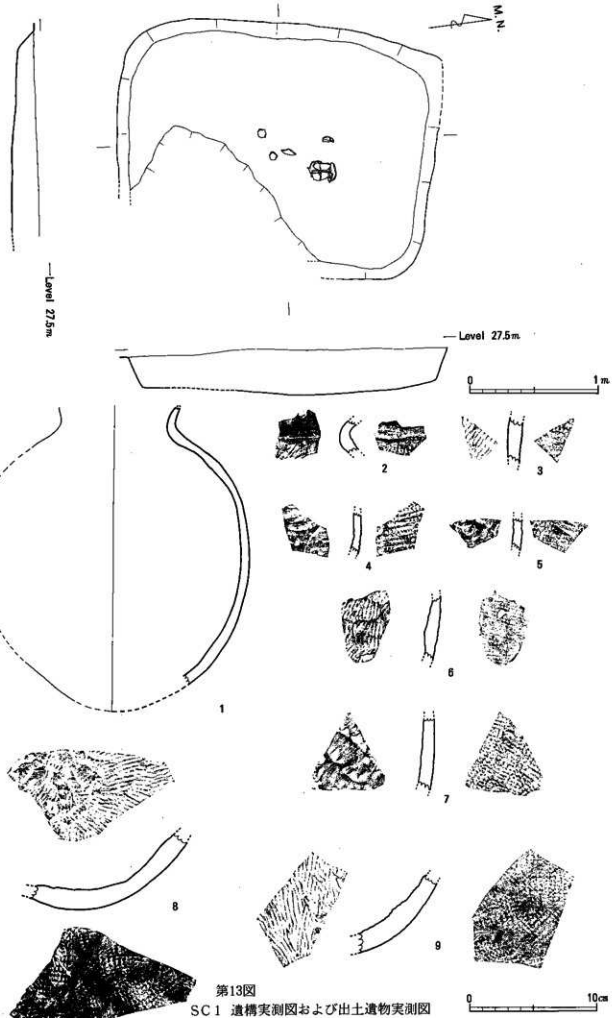
1～4は弥生壺形土器の底部である。1は平底で厚さ約0.9cmと比較的薄手である。胴部下半は指による押さえと思われるが風化が著しく明確でない。胎土には1～3mmの小石を多量に含む，焼成は良好。色調は外面が黄褐色，内面が淡黄褐色をなす。B－6グリッド出土である。2は1に比べ1.8cmと厚手の底部で底径も7.1cmと小さい。やや上げ底気味である。胴部はハケ調整と思われる。底部付近は指による押さえ。胎土には1～2mm大の石を多量に含む。焼成は良好。色調は内外面とも淡黄褐色を呈す。B－6グリッド出土である。5は土師器鉢である。口縁部は外反し端部は丸く収められる。屈曲部は外面は不明瞭であるが内面は明瞭に残る。外面は横ナデ，内面は口縁部が横ナデ，胴部が斜方向のナデの調整が施される。胎土には1～2mm大の石を含む。焼成は良好。色調は外面が赤褐色，内面が淡黄褐色を呈す。口径24.3cmを測る。6は掘鉢片と思われる。内外面とも横ナデ。内面には条線はみられない。2～3mmの石を含む。焼成は良好。色調は外面の口縁部が青灰色，体部が灰黄褐色，内面が暗黄褐色を呈す。B－6グリッド出土である。7は底部が回転糸切りの手法をもつ土師器小皿である。底部はやや上げ底気味で，体部はほぼ直線的に外上方にのびる。口縁端部は丸く収められる。口径8.3cm，器高2.3cm，底径5.3cmを測る。焼成は良好。色調は外面が赤褐色，内面が淡赤褐色を呈す。C－5グリッド出土である。

（谷口武範）

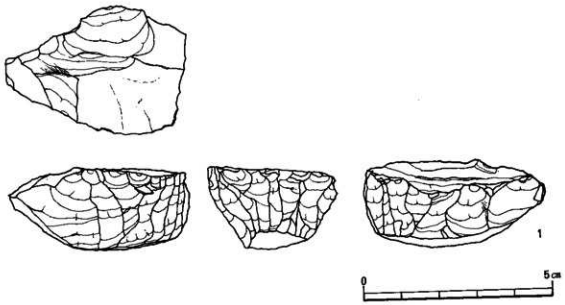
第5節　まとめ

田上遺跡は，前述した如くアカホヤ上面まで削平されていたため，それに掘り込まれた遺構とそれ以前に営なまれた縄文時代早期あるいは先土器時代のものに限られる結果となった。特に縄文時代早期のものが中心で集石遺構8基，遺物（土器，石器）約200点を検出した。先土器時代の遺物としては細石核が1点表採資料としてあるだけであった。

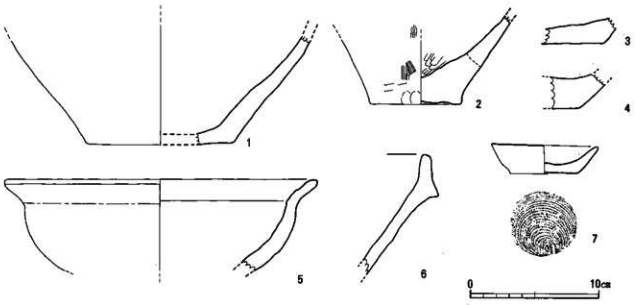
細石核は形態および調整から船野型細石核[1]と考えられる。宮崎学園都市遺跡群内での細石核の出土は前原西遺跡[2]に次いで2例目となる。前原西遺跡の細石核は黒曜石（本遺跡分類のob－A類）製で第Ⅳ層黒褐色土（小白斑を含む）から出土している。背面に自然面を残し，正面，両側面が細石刃剥離作業面となり，下部が一部欠失する。このように同じ遺跡群内でも形態のちがいがみられ，出土層位，調整技術などの詳細な検討が必要である。しいては，県内でも畦原型細石核，船野型細石核[4]といった技法が存在しそれとの関連も考えなければならない。



第13図
SC1 遺構実測図および出土遺物実測図



第14図　その他の遺物実測図(1)



第15図　その他の遺物実測図(2)

さて，縄文時代の田上遺跡は，一定範囲の礫群や集石遺構の存在によって，単に早期の包含層としてではなく，人間の生活の場としての意義が認められる。当遺跡で出土した縄文土器は，少量の口縁部とやや多めの胴部，少量の底部のみであったが，このうち，A－1類に胴1類・底1a類が，A－2類に底1b類が，そしてB類に胴3類・底2類の土器がそれぞれ対応関係にあると考えられる。また，従来の型式内容に相当すると考えられるものに，C・D類，胴5類が塞之神式土器に，B－2類の48・49，胴3a・b類が桑之丸遺跡[5]2類土器や永野遺跡[6]X類土器タイプの前平式土器に相当するものと思われる。そして，当遺跡でA類としたものは，A－1類が加栗山遺跡[7]ⅣA類に，A－2類が同ⅧA類に相当するもので，前平式土器であるか吉田式土器であるかその帰属が問題になったものである[8]。このうちA－1類は，地文の貝殻条痕を殆どナデ消している点及び口縁部直下の文様が横位の腹縁刺突線文のほかに斜位の腹縁刺突文を施した例がみられる点，加栗山タイプと多少異なる様である。また，A－1b類・胴1b類としたものは縦位の腹縁刺突線文が短く途切れたように施文されるものであった。これは，腹縁を一定の間隔をおいて縦位に刺突したものか，あるいは，刺突線文を後に一定間隔にナデ消したものの様であったが，破片が小さいため不明である。ただ，28の胴部片は1単位の長さがわかるものであるが，器表面に残る腹縁端部は風化を受けていて，ナデ消しか一回の刺突によるものか微妙なところである。この種のものも加栗山タイプにはみられない様である。

集石遺構を含む礫群と出土遺物との分布上の関係は，土器・石器それぞれの項で述べたとおりである。即ち，主体をなしたA類・B類土器及び，石器の主体をなした石鏃・チップ等の分布状況が，礫群の範囲内に集中しているということ。そして，土器ではC－4・D－5グリッドにA類が集中し，B類は主にD－4グリッド南半に集中しているということ。石器はSI1とSI8との間，主としてD－4グリッド南半とC－4グリッドSI2の周辺に分布の集中がみられることなどである。また，礫が集中した状態で出土する集石遺構の分布も，SI1・3・4・5・6が礫群の周辺で，SI2・7・8が礫群の中に他と判別できる状況で検出されている。この遺物の分布と密接な関係にあった礫群については，最近県内各地の遺跡で集石遺構と共に検出されている。特に宮崎郡田野町の芳ケ迫第1遺跡[9]では，焼石が厚さ10cm前後に層をなして確認され，それらが集石遺構上あるいは近接して検出されるという分布状況から調査担当者は，焼石が「廃棄礫」である可能性を指摘している。このような分布状況は近くでは，学園都市遺跡群内の赤坂遺跡や北隣の小山尻東遺跡でも確認され，次第に例を増している。当遺跡の礫群においては，肉眼で識別できる程顕著な赤変を示す礫は多くはなかったが，殆ど全ての礫が打ち割られた様な角礫状であり，使用後廃棄された礫である可能性が高い。そして，これら礫群中には遺物が集中していたが，礫面上で生活が営まれたとは考え難く，あるいは，礫群中の3基の集石遺構を含むこの空間は，遺物や使用後の礫等を破棄した空間であった可能性もある。礫群周辺にみられた5基の集石遺構のうち，SI5は加火されたと思われる少量の礫が弱いまとまりをみせ，その下部には炭化物や掘り込み等は確認できなかったが，一方，SI4とSI6は礫が下部は平坦で上方へ積み重ねられた状態のSI4と，炭化物の混入した明確な土拡に少量の礫が確認できたSI6という対象的な集石遺構であった。これらは集石遺構の機能を考える上でひとつの意義を有すると思われる。SI6におけるearth oven 的機能と，それに使用し或るいは再び使用するために，近くに積まれたSI4，そして，使用に耐えなくなった廃棄礫としてのSI5というひとつの可能性であるが，他の礫群周辺の明確な掘り込みを持たない集石遺構の性格など今後の課題は多く，さらに類例の増加を待ち検討してゆきたい。また，これら集石遺構・礫群・遺物相互間の関係を有機的に考えることによって，田上遺跡ひいては北隣の小山尻東遺跡との相互の生活圏の問題を解くことができるものと考えられる。

宮崎学園都市遺跡群内の古墳時代遺跡は，非常に少なく前原北遺跡[10]，前原南遺跡[11]，熊野原遺跡C地区[12]の3例だけである。いずれも古墳時代初頭のもので5世紀から6世紀にかけての遺跡の調査は行なわれていない。県内でも上別府遺跡[13]，浄土江遺跡[14]，藤掛遺跡[15]と少なくどれも集落址で，当遺跡出土類似の土拡は検出されていない。ただ，谷を隔てた北隣の小山尻東遺跡には同時期と思われる土拡がある。いずれも単独で存在し，壺，甕などの日常

容器が1～2個体出土している。土拡の性格は不明である。また，時期的には上るが同規模の土拡が熊野原遺跡B地区[15]から検出され墓壙も単独で存在している点は，当遺跡，小山尻東遺跡出土の土拡と類似する。もしこれらが墓だとするならば，丘陵北東部の低地にある木花古墳群との関連が興味深いものとなる。

以上の如く田上遺跡では，縄文時代早期の遺構・遺物を中心に細石核，弥生土器片，古墳時代の土拡とそれに伴なう遺物，陶磁器などを確認した。すでに遺跡は小範囲にしか残存しておらず遺跡自体の性格づけをするところまで至らなかったのは残念である。しかし，県内でもこうして行なわれてきた発掘調査結果も膨大な量に達し集大成する時期にきていると思われる。それが「歴史」に近づくものでありかつ地域の人たちへの還元となりうるものであろう。

（菅付和樹，谷口武範）

註(1) 橘　昌信「九州地方の細石器文化」駿台史学　47　1979

(2) 『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』　Ⅱ　宮崎県教育委員会　1982

(3) 同　上

(4) 茂山　護・大野寅夫　「児湯郡下の旧石器」　宮崎考古3　1977

(5) 新東晃一他「桑之丸遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(7)　鹿児島県教育委員会　1977

(6) 青崎和憲他「永野遺跡」知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)　鹿児島県知覧町教育委員会　1983

(7) 青崎和憲他「加栗山遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(3)　鹿児島県教育委員会　1981

(8) 最近，これらの土器について長野真一氏が再度検討され新しいグループに整理されておられる。いわゆる，仮称「加栗山タイプ」である。
長野真一他「（上抜川遺跡）上柿原遺跡・水ノ谷遺跡・丸岡遺跡」鹿屋市埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　鹿屋市教育委員会　1984

(9) 面高哲郎「芳ケ迫第1遺跡　県営農地開発事業前平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」田野町文化財調査報告書第1集　田野町教育委員会　1984

(10) (2)と同じ

(11) 同　上

(12) 面高哲郎「熊野原遺跡C地区」『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査報告書』　第2集　宮崎県教育委員会　1985

(13) 日高正晴他　『上別府遺跡』　宮崎県教育委員会　1979

(14) 野間重孝　「浄土江遺跡」『宮崎市文化財調査報告書』　第6集　宮崎市教育委員会　1981

(15) 岩永哲夫他　「藤掛遺跡」『堤遺跡・藤掛遺跡』　新富町文化財調査報告書　第2集　1983

(16) (2)と同じ

表2　縄文土器観察表

※ 楔形貼付文の横押さえは「備考」に記入

図面番号	グリッド名	器形	器部	器面調整			文様		胎土	色調		焼成	備考
				外器面	内器面	(底面)	外器面	内器面		外器面	内器面		
1	C－4	円筒	口縁部	貝殻条痕↘のあとナデ↔	ヘラナデ↔ ヘラケズリ←	－	口縁部きざみ目刺突線文と楔形貼付文	－	黒雲母・石英・長石と0.5mm以下の砂粒を含む	にぶい橙色(7.5YR6/4)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	穿孔あり ヘラ押さえ
2	E－3,4	〃	〃	ナデ↔	ヘラナデ↔	－	口縁部きざみ目刺突線文と楔形貼付文	－	黒雲母・石英・長石と0.5mm以下の砂粒を含む	にぶい黄橙色(10YR7/3)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	〃	クシ状施文具による押さえ
3	D－5	〃	〃	ナデ	丁寧なナデ↔	－	口縁部きざみ目貝殻腹縁刺突線文と楔形貼付文	－	黒雲母・長石と1mm以下の砂粒を含む	浅黄色(2.5Y7/3)	浅黄色(2.5Y7/4)	〃	ヘラ押さえ
4	D－5	〃	〃	ナデ	丁寧なナデ↔	－	〃	－	黒雲母と1mm以下の砂粒3mm大の石を含む	灰黄色(2.5Y7/2)	灰黄色(2.5Y7/2)	〃	ヘラ押さえ 3と同一個体と思われる
5	C－5	〃	〃	ナデ↔	ヘラナデ↔ ナデ	－	口縁部きざみ目貝殻腹縁刺突線文と楔形貼付文	-	黒雲母・石英と1mm以下の砂粒を含む	にぶい橙色(5YR6/4)	にぶい橙色(5YR6/4)	〃	ヘラ押さえ
6	C－4	〃	胴部	ナデ↔	ナデ↔	－	貝殻腹縁刺突線文と楔形貼付文	－	1mm以下の砂粒と黒雲母・石英・長石を少量含む	にぶい橙色(5YR7/4)	にぶい橙色(5YR7/4)	〃	ヘラ押さえ
7	D－5	〃	〃	ナデ↙	ヘラナデ↘	－	〃	－	石英・黒雲母少量と0.5mm以下の砂粒を含む	にぶい橙色(5YR7/4)	にぶい橙色(5YR7/4)	〃	ヘラ押さえ
8	C－4	〃	〃	貝殻条痕↘のあとナデ	ナデ	－	〃		黒雲母・石英と0.5mm以下の砂粒を含む	にぶい橙色(5YR7/4)	にぶい橙色(5YR7/4)	〃	横押さえなし
9	D－5	〃	〃	ナデ	ナデ	－	(口縁部からの剥落) 〃	－	黒雲母・石英と0.5mm以下の砂粒を含む	にぶい橙色(5YR7/4)	にぶい黄橙色(7.5YR7/4)	〃	ヘラ押さえ
10	D－5	〃	〃	ナデ	ナデ	－	〃 (途切れる)	－	黒雲母・長石と0.5mm以下の砂粒を含む	浅黄色(2.5Y7/3)	浅黄色(2.5Y7/3)	〃	ヘラ押さえ
11	D－5	〃	〃	ナデ	ナデ	－	〃 (途切れる)	－	黒雲母・長石と0.5mm以下の砂粒を含む	浅黄色(2.5Y7/3)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	〃	ヘラ押さえ
12	C－3	〃	〃	ナデ	ナデ	－	〃 (途切れる)	－	1mm以下の砂粒と石英・黒雲母・長石を少量含む	にぶい黄橙色(10YR7/3)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	〃	ヘラ押さえ
13	C－4	〃	〃	貝殻条痕↘のあとナデ	ナデ	－	貝殻腹縁刺突線文	－	1mm以下の砂粒と石英・黒雲母を含む	にぶい橙色(5YR7/4)	にぶい橙色(5YR7/4)	〃	炭化物付着(内器面)
14	C－4	〃	〃	ナデ	ナデ	－	〃	－	1mm以下の砂粒と石英・黒雲母を含む	にぶい橙色(5YR7/4)	にぶい橙色(5YR7/4)	〃	
15	C－4	〃	〃	貝殻条痕↘のあとナデ	ナデ	－	〃	－	1mm以下の砂粒と石英・黒雲母を含む	にぶい橙色(5YR7/4)	にぶい橙色(5YR7/4)	〃	
16	C－4	〃	〃	貝殻条痕↘のあとナデ	不明	－	〃	－	0.5mm以下の砂粒と石英(微細)・黒雲母を含む	にぶい橙色(5YR6/4)	にぶい橙色(5YR6/4)	〃	
17	C－4	〃	〃	貝殻条痕↘のあとナデ	ナデ	－	〃	－	0.5mm以下の砂粒と石英(微細)・黒雲母を含む	にぶい橙色(5YR6/4)	にぶい橙色(5YR7/4)	〃	炭化物付着(内器面)
18	C－4	〃	〃	ナデ	ナデ	－	〃	－	0.5mm以下の砂粒と石英(微細)・黒雲母を含む	橙色(2.5YR6/6)	にぶい橙色(5YR7/4)	〃	
19	C－4	〃	〃	貝殻条痕↘のあとナデ	ナデ	－	〃	－	0.5mm以下の砂粒と石英・黒雲母を含む	にぶい橙色(5YR7/4)	にぶい橙色(5YR7/4)	〃	
20	C－4	〃	〃	ナデ	ナデ	－	〃	－	0.5mm以下の砂粒と石英(微細)・黒雲母を含む	にぶい橙色(7.5YR7/4)	にぶい橙色(5YR7/4)	〃	
21	B－5	〃	〃	ナデ	ヘラケズリ↕のあとナデ↔	－	〃	－	0.5mm以下の砂粒と石英・黒雲母少量を含む	にぶい橙色(5YR7/3)	橙色(5YR7/6)	〃	炭化物付着(外器面)
22	C－4	円筒	胴部	ナデ	ナデ	－	貝殻腹縁刺突線文	－	0.5mm以下の砂粒と石英・黒雲母少量を含む	にぶい橙色(5YR6/4)	にぶい橙色(5YR6/4)	良好	
23	E－4	〃	〃	貝殻条痕↘のあとナデ	ナデ	－	〃	－	0.5mm以下の砂粒と石英(微細)と黒雲母を含む	にぶい橙色(5YR7/4)	にぶい橙色(5YR7/3)	〃	
24	C－4	〃	〃	貝殻条痕↘のあとナデ	ナデ	－	〃	－	0.5mm以下の砂粒と石英・黒雲母を含む	にぶい橙色(5YR7/4)	にぶい橙色(5YR7/4)	〃	炭化物付着(内器面)
25	C－3	〃	〃	貝殻条痕↘ナデ↑	ナデ	－	〃	－	0.5mm以下の砂粒と石英・長石・黒雲母を含む	にぶい橙色(5YR6/4)	にぶい褐色(7.5YR6/3)	〃	
26	E－4	〃	〃	ナデ↔	ナデ↕	－	〃	－	0.5mm以下の砂粒と石英・黒雲母(微細)を含む	にぶい橙色(5YR6/4)	橙色(5YR6/6)	〃	
27	C－3	〃	〃	丁寧なナデ	ヘラケズリ↕	－	〃	－	1mm以下の砂粒と石英(0.5～2mm)・黒雲母(微細)を含む	にぶい赤褐色(5YR5/4)	にぶい橙色(5YR6/4)	〃	
28	D－5	〃	〃	ナデ	ナデ↔	－	〃 (途切れる)	－	1mm前後の砂粒と長石・黒雲母を含む	浅黄橙色(10YR8/4)	浅黄橙色(10YR8/4)	〃	
29	D－5	〃	〃	ナデ	ナデ↕	-	〃 (途切れる)	－	1mm前後の砂粒と長石・石英(微細)を含む	にぶい黄橙色(10YR7/4)	浅黄色(2.5Y7/3)	〃	
30	D－5	〃	〃	ナデ	ナデ↕	－	〃 (途切れる)	－	0.5mm以下の砂粒と長石・石英(微細)を含む	にぶい黄橙色(10YR7/3)	灰黄色(2.5Y7/2)	〃	29と同一個体か
31	D－5	〃	〃	ナデ	丁寧なナデ↕	－	〃 (途切れる)	－	1mm前後の砂粒と長石・黒雲母(微細)を含む	にぶい黄橙色(10YR7/4)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	〃	
32	C－4	〃	〃	貝殻条痕↘のあとナデ	ナデ↕	ミガキ	貝殻腹縁刺突線文、きざみ目	－	黒雲母・長石・石英(微細)を含む	にぶい橙色(7.5YR7/4)	にぶい橙色(5YR7/4)	〃	底部付近 炭化物付着(内器面)
33	C－4	〃	〃	ナデ	ナデ	－	貝殻腹縁刺突線文、きざみ目	-	黒雲母・長石・石英を含む	にぶい橙色(5YR6/4)	にぶい橙色(5YR7/4)	〃	底部付近 炭化物付着(内器面)
34	C－4	〃	〃	貝殻条痕↘のあとナデ	丁寧なナデ	－	貝殻腹縁刺突線文、きざみ目	－	0.5mm以下の砂粒と石英・黒雲母を含む	にぶい橙色(7.5YR7/4)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	〃	底部付近
35	C－2	〃	〃	ナデ	ナデ	－	貝殻腹縁刺突線文、きざみ目？	－	0.5mm以下の砂粒と石英・黒雲母・長石を含む	橙色(2.5YR7/6)	橙色(2.5YR6/6)	〃	底部付近か
36	C－4	〃	〃	ナデ↙	ナデ↕	－	刺突線文	－	1mm以下の砂粒と長石・黒雲母を少量含む	にぶい黄橙色(10YR7/3)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	〃	クシ状施文具あるいは貝殻腹縁による施文か
37	C－4	〃	〃	ナデ	ナデ↕	－	刺突線文	－	長石・石英・黒雲母を含む	にぶい黄橙色(10YR7/4)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	〃	クシ状施文具あるいは貝殻腹縁による施文か36と同一個体か
38	D－4	〃	〃	ナデ	ナデ↕		刺突線文	－	0.5mm以下の砂粒と石英・長石・黒雲母を含む	にぶい橙色(7.5YR7/3)	浅黄橙色(10YR8/4)	〃	36と同一個体か スス付着(外器面)
39	C－2	角筒	〃	貝殻条痕↘	ヘラケズリ↑	－	斜行貝殻腹縁刺突線文と楔形貼付文	－	0.5mm程の砂粒と1mm大の長石・石英及び黒雲母(微細)を含む	にぶい黄橙色(10YR7/4)	にぶい橙色(5YR6/4)	〃	クシ状施文具による押さえ
40	C－2	〃	〃	貝殻条痕↔	ヘラケズリ↑	－	斜行貝殻腹縁刺突線文と楔形貼付文角に刺突文	－	0.5mm程の砂粒と1mm大の長石・石英及び黒雲母(微細)を含む	にぶい橙色(7.5YR7/4)	橙色(5YR7/6)	〃	クシ状施文具による押さえ
41	C－4	〃	〃	貝殻条痕↘	ヘラケズリ↑	－	斜行貝殻腹縁刺突線文、角に刺突文	－	0.5mm程の砂粒と1mm大の長石・石英及び黒雲母(微細)を含む	にぶい橙色(7.5YR7/4)	橙色(5YR6/6)	〃	40と同一個体か
42	C－4	〃	〃	貝殻条痕↘のあと一部ナデ	ヘラケズリ↑	-	斜行貝殻腹縁刺突線文	－	1mm以下の砂粒と長石・石英・黒雲母を含む	にぶい黄色(2.5Y6/3)	橙色(5YR6/6)	〃	

図面番号	グリッド名	器形	器部	器面調整			文様		胎土	色調		焼成	備考
				外器面	内器面	(底面)	外器面	内器面		外器面	内器面		
43	C－3	角筒	胴部	貝殻条痕 ↗	ヘラケズリ ↑	－	斜行短線刺突線文と隆帯貼付文	－	0.1～3㎜の砂粒、小石と長石石英、黒雲母を含む	灰黄褐色 (10YR 4/2)	橙色 (5YR 6/6)	良好	クシ状施文具による押さえ
44	D－4	－	口縁部	口唇部ヘラミガキ↔ 貝殻条痕 ↘	ヘラミガキ	－	－	－	1㎜前後の砂粒と石英、長石黒雲母(微細)を含む	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	浅黄橙色 (7.5YR 8/4)	〃	
45	C－4	－	〃	貝殻条痕 ↔	ナデ ↔	－	－		長石を多く含む、1㎜前後の砂粒と石英、黒雲母を含む	黄灰色 (2.5Y 5/1)	黄灰色 (2.5Y 5/1)	〃	
46	D－4	－	〃	貝殻条痕 ↔ のあとナデ	ナデ ↔	－	－		0.1～3㎜の砂粒、小石と長石石英、黒雲母を含む	浅黄橙色 (10YR 8/3)	浅黄橙色 (10YR 8/3) 灰色	〃	
47	D－4	－	〃	貝殻条痕 ↘	ナデ	－	－	－	0.5㎜以下の砂粒と長石、石英黒雲母を含む	浅黄橙色 (7.5YR 7/4)	浅黄橙色 (7.5YR 7/4)	〃	
48	B－5	円筒	〃	貝殻条痕 ↔	ナデ ↕	－	口縁部きざみ目	－	0.5㎜以下の砂粒と石英、黒雲母を含む	にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	〃	
49	C－4	〃	〃	ナデ 貝殻条痕 ↘	ナデ ↔	－	口唇部きざみ目	－	石英、長石、黒雲母を多く含む	にぶい橙色 (7.5YR 7/3)	灰黄色 (2.5Y 7/2)	〃	
50	－	－	胴部	剥離	ナデ ↔	－	きざみ目あり	－	0.5㎜以下の砂粒と石英、長石黒雲母(微細)を含む	浅黄橙色 (7.5YR 8/4)	浅黄橙色 (10YR 8/4)	〃	口縁部近くか
51	C－3,4	円筒	〃	貝殻条痕 ↘ 一部ナデ	丁寧なヘラナデ ↕	－	－	－	0.1～3㎜の砂粒、小石と石英を若干含む	浅黄橙色 (7.5YR 8/6)	灰黄褐色 (10YR 6/2)	〃	擬似口縁
52	D－4	〃	〃	貝殻条痕 ↘	ナデ ↔	－	－	－	1㎜前後の砂粒と石英、長石を含む	浅黄橙色 (10YR 8/4)	浅黄橙色 (7.5YR 8/4)	〃	
53	D－4	〃	〃	貝殻条痕 ↘	丁寧なヘラナデ ↕	－	－	－	1㎜前後の砂粒・長石と石英を多く含む	浅黄橙色 (7.5YR 8/4)	にぶい褐色 (7.5YR 6/3)	〃	
54	D－4	〃	〃	貝殻条痕 ↘	丁寧なヘラナデ	－	－	－	1㎜前後の砂粒と石英、長石を含む	浅黄橙色 (7.5YR 8/4)	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	〃	
55	E－4	〃	〃	貝殻条痕 ↘	丁寧なヘラナデ ↕	－	－	－	1㎜前後の砂粒と石英、長石を含む	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	〃	
56	E－4	〃	〃	貝殻条痕 ↘	丁寧なヘラナデ ↕	－	－	－	1㎜前後の砂粒と石英、長石黒雲母を含む	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	〃	
57	D－4	〃	〃	貝殻条痕 ↘	丁寧なヘラナデ ↕	－	－	－	1㎜前後の砂粒と石英、長石黒雲母を含む	浅黄橙色 (7.5YR 8/4)	浅黄橙色 (7.5YR 8/4)	〃	
58	D－5	〃	〃	貝殻条痕 ↘	丁寧なヘラナデ ↘	－	－	－	1㎜前後の砂粒と石英を含む	浅黄橙色 (7.5YR 8/4)	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	〃	
59	C－4	〃	〃	貝殻条痕 ↘	丁寧なヘラナデ ↕	－	－	－	0.5㎜以下の砂粒、石英と黒雲母少量を含む	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	〃	
60	C－3	〃	〃	貝殻条痕 ↘	丁寧なヘラナデ	－	－	－	1㎜前後の砂粒と石英を少量含む	浅黄橙色 (10YR 8/4)	にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	〃	
61	C－4	〃	〃	貝殻条痕 ↘	ナデ ↗	－	－	－	0.5㎜以下の砂粒、石英を含む	浅黄橙色 (10YR 8/4)	浅黄橙色 (10YR 8/4)	〃	
62	D－5	〃	〃	貝殻条痕 ↘	ナデ	－	－	－	1㎜前後の砂粒、石英と長石を少量含む	浅黄橙色 (10YR 8/4)	浅黄橙色 (7.5YR 8/4)	〃	
63	D－4	〃	〃	貝殻条痕 ↘	丁寧なヘラナデ ↕	－	－	－	1㎜前後の砂粒と石英を含む	にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	にぶい黄橙色 (10YR 7/4)	〃	
64	B－5	円筒	胴部	貝殻条痕 ↘	ナデ		－	－	1㎜前後の砂粒と石英、長石を含む	浅黄橙色 (10YR 8/4)	浅黄橙色 (10YR 8/3)	良好	
65	E－4	〃	〃	貝殻条痕 ↘	丁寧なヘラナデ	－	－	－	1㎜前後の砂粒と石英を多く含む	橙色 (7.5YR 7/6)	橙色 (5YR 6/6)	〃	
66	D－4	〃	〃	貝殻条痕 ↘	丁寧なヘラナデ ↕	－	－	－	1㎜前後の砂粒と石英、長石を含む	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	〃	
67	E－4	〃	〃	貝殻条痕 ↘	丁寧なナデ ↗	－	－	－	1㎜前後の砂粒と石英、長石を含む	浅黄橙色 (10YR 8/4)	浅黄橙色 (10YR 8/3)	〃	
68	D－5	〃	〃	貝殻条痕 ↘ 一部ナデ	丁寧なナデ ↕	－	－	－	1㎜前後の砂粒と長石、石英を含む	浅黄橙色 (10YR 8/4)	浅黄橙色 (10YR 8/3)	〃	
69	D－4	〃	〃	貝殻条痕 ↘	ナデ	－		－	0.1～3㎜の砂粒、小石と石英長石を含む	にぶい黄橙色 (10YR 8/4)	浅黄橙色 (10YR 8/3)	〃	
70	C－4	〃	〃	貝殻条痕 ↘	ナデ ↗	－	－	－	0.1～2㎜の砂粒と石英、長石を含む	浅黄橙色 (7.5YR 8/4)	浅黄橙色 (10YR 8/4)	〃	
71	D－4	〃	〃	貝殻条痕 ↘	丁寧なヘラナデ ↕	－	－	－	1㎜前後の砂粒と石英、長石を含む	浅黄橙色 (7.5YR 8/4)	浅黄橙色 (7.5YR 8/4)	〃	
72	C－4	〃	〃	貝殻条痕 ↘ 一部ナデ	丁寧なヘラナデ ↕	－	－	－	1㎜前後の砂粒と石英を少量含む	浅黄橙色 (10YR 8/4) 一部灰色	にぶい橙色 (7.5YR 7/3)	〃	
73	C－5	〃	〃	貝殻条痕↘の上を一部ヘラナデ	丁寧なヘラナデ ↕	－	－	－	1㎜前後の砂粒と石英を含む	浅黄橙色 (7.5YR 8/4)	浅黄橙色 (10YR 8/3)	〃	
74	D－4	〃	〃	貝殻条痕 ↘ 一部ナデ	ヘラミガキ ↕	－	－	－	1㎜前後の砂粒と石英を少量含む	浅黄橙色 (10YR 8/4)	灰黄褐色 (10YR 4/2)	〃	
75	D－5	〃	〃	貝殻条痕 ↘ のあとナデ	丁寧なヘラナデ ↕	－	－	－	1㎜前後の砂粒と石英を少量含む	浅黄橙色 (10YR 8/4)	褐灰色 (10YR 6/1)	〃	
76	D－5	〃	〃	貝殻条痕 ↘	ミガキ ↗	－	－	－	1㎜前後の砂粒と石英を少量含む	にぶい黄橙色 (10YR 7/2)	褐灰色 (10YR 5/1)	〃	
77	E－4 D－4	〃	〃	貝殻条痕 ↘ のあとナデ	丁寧なヘラナデ ↕	－	－		1㎜前後の砂粒と石英を少量含む	浅黄橙色 (10YR 8/3)	褐灰色 (10YR 6/1)	〃	炭化物付着(内器面)
78	E－4	〃	〃	貝殻条痕 ↘ のあとナデ	丁寧なヘラナデ		－	－	1㎜前後の砂粒と石英を少量含む	浅黄橙色 (10YR 8/4) 一部灰色	にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	〃	
79	D－4	〃	〃	貝殻条痕 ↘ のあとナデ	丁寧なヘラナデ ↕	－	－	－	1㎜前後の砂粒と石英、長石を含む	浅黄橙色 (10YR 8/4)	にぶい橙色 (7.5YR 7/3)	〃	
80	E－4	〃	〃	貝殻条痕 ↘	ヘラナデ ↕	－	－	－	1㎜前後の砂粒と石英、長石を多く含む	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	〃	
81	－	－	〃	大めの貝殻条痕 ↔	風化の為不明	－	－	－	1㎜前後の砂粒と石英を含む	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	橙色 (5YR 6/6)	〃	
82	C－4	－	〃	条痕 ↕	ナデ ↗	－	－	－	黒雲母を多く含む、1㎜前後の砂粒と石英を含む	明赤褐色 (5YR 5/6)	橙色 (5YR 6/6)	〃	風化している
83	D－4		口縁部	貝殻条痕 ↘	ヘラナデ ↔ ↕	－	三列の刺突列点文	－	0.5㎜以下の砂粒と長石、黒雲母(微細)を含む	浅黄橙色 (10YR 8/3)	浅黄橙色 (7.5YR 8/4)	〃	
84	D－5	－	口縁部	ナデ ↑	ナデ ↑	－	口唇部きざみ目押圧文 ？	－	0.5㎜以下の砂粒と長石、石英黒雲母を含む	にぶい橙色 (7.5YR 7/3)	浅黄橙色 (10YR 8/3)	〃	

図面番号	グリッド名	器形	器部	器面調整			文様		胎土	色調		焼成	備考
				外器面	内器面	(底面)	外器面	内器面		外器面	内器面		
85	－	－	口縁部	風化の為不明 条痕？	ナデ ↔	－	－	－	0.1～3mmの砂粒、小石と長石黒雲母(微細)を含む	にぶい黄橙色 (10YR 7/4)	にぶい黄橙色 (10YR 7/4)	良好	
86	B－5	－	〃	ナデ？ ↔	ナデ ―	－	－	－	長石を多く含む、0.5mm以下の砂粒と黒雲母を含む	浅黄橙色 (10YR 8/4)	浅黄橙色 (10YR 8/3)	〃	風化が激しい
87	C－4	－	〃	ヘラナデ？ ↘	ナデ ↔	－	－	－	0.1～2mmの砂粒、小石と長石黒雲母を含む	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	〃	風化が激しい
88	D－4	－	〃	ナデ ↔	ナデ ↘	－	貝殻腹縁刺突文？	－	1mm前後の砂粒と黒雲母、石英(微細)を含む	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	にぶい橙色 (5YR 7/4)	〃	
89	C－5	－	〃	ヘラ引き条痕 ↔	ナデ	－	微隆起線文状文様	－	1mm前後の砂粒と黒雲母、石英を多く含む	浅黄橙色 (10YR 8/3)	淡黄色 (2.5Y 8/3)	〃	
90	C－5	－	胴部	ヘラ引き条痕 ↔	ナデ ↔	－	微隆起線文状文様	－	1mm前後の砂粒と石英、黒雲母を多く含む	にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	淡黄色 (2.5Y 7/3)	〃	
91	C－5	－	〃	ヘラ引き条痕 ↔	ナデ ↔	－	微隆起線文状文様？	－	1mm前後の砂粒と石英、黒雲母を多く含む	にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	〃	風化が激しい
92	C－4	－	頸部	ナデ ↔	ナデ	－	細隆起線文状文様？(きざみ目あり)	－	1mm前後の砂粒と石英、長石黒雲母を含む	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	〃	
93	D－4	－	胴部	撚糸文 ナデ	ナデ ↔	－	撚糸文 沈線	－	0.5mm以下の砂粒と石英、長石黒雲母を少量含む	浅黄橙色 (10YR 8/4)	浅黄橙色 (10YR 8/4)	〃	
94	C－5	－	頸部	ナデ ↔	ナデ ↔	－	沈線三条	－	0.5mm以下の砂粒と長石、黒雲母を含む	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	〃	スス付着(外器面)
95	C－4	－	胴部	風化の為不明 ヘラナデ？ ↘	ナデ ―	－	－	－	0.5mm以下の砂粒と石英、長石黒雲母を含む	にぶい橙色 (5YR 7/4)	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	〃	
96	C－4	－	〃	風化の為不明 ヘラナデ？	ナデ	－	－	－	0.5mm以下の砂粒と石英、長石黒雲母(微細)を含む	橙色 (5YR 7/6)	にぶい橙色 (5YR 7/4)	〃	
97	C－5	－	〃	ナデ？	ナデ？	－	－	－	0.5mm以下の砂粒を多く含む、石英、黒雲母を少量含む	浅黄橙色 (10YR 8/4)	浅黄橙色 (10YR 8/4)	〃	
98	C－4	－	〃	ナデ ↔	ナデ ↔	－	－	－	石英、長石、黒雲母を多く含む	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	〃	ススの痕跡(外器面)
99	D－4	－	〃	押型	ナデ	－	楕円押型文	－	0.1～3mmの砂粒、小石と長石石英(微細)、黒雲母を含む	橙色 (5YR 6/6)	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	〃	
100	D－5	－	〃	押型	ナデ ↗	－	山形押型文	－	1mm前後の白っぽい砂粒と石英を多く含む	橙色 (7.5YR 6/6)	にぶい橙色 (7.5YR 5/4)	〃	
101	E－4	円筒	底部	ナデ	ナデ	ヘラナデ	貝殻腹縁刺突文(多条)きざみ目	－	0.5mm以下の砂粒と黒雲母、石英、長石を含む	にぶい橙色 (5YR 6/4)	明赤褐色 (2.5YR 5/6)	〃	
102	C－2	角筒？	〃	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	きざみ目	－	0.5mm以下の砂粒と黒雲母、石英、長石を含む	にぶい黄橙色 (10YR 7/4)	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	〃	
103	D－5	円筒	〃	条痕 ↘	ナデ ↔	網代痕	－	－	0.5mm以下の砂粒と黒雲母、石英、長石を多く含む	浅黄橙色 (7.5YR 8/4)	浅黄橙色 (10YR 8/4)	〃	
104	C－4	－	〃	丁寧なヘラナデ	丁寧なナデ	ヘラミガキ	－	－	0.5mm以下の砂粒と黒雲母、石英、長石を多く含む	にぶい黄橙 (10YR 6/4) [illegible]	にぶい黄橙色 (10YR 8/3)	〃	
105	C－4	－	〃	丁寧なヘラナデ	ナデ	丁寧なヘラナデ	－	－	0.5mm以下の砂粒と黒雲母、石英、長石を含む	にぶい黄橙色 (10YR 7/3)	浅黄橙色 (10YR 8/3)	〃	

図面番号	グリッド名	器形	器部	器面調整			文様		胎土	色調		焼成	備考
				外器面	内器面	(底面)	外器面	内器面		外器面	内器面		
106	C－5	－	底部	ヘラナデ ↔	ナデ ↔	ヘラケズリ 一部ナデ	－	－	0.5mm以下の砂粒と黒雲母、石英、長石を含む	橙色 (5YR 6/6)	橙色 (5YR 6/6)	良好	
107	C－5	－	〃	－	ナデ？	ナデ	－	－	1mm以下の砂粒と黒雲母、石英、長石を多く含む	橙色 (5YR 7/6)	橙色 (5YR 6/6)	〃	ススの痕跡(底面)
108	C－4	－	〃	ナデ？	ナデ	ナデ	－	－	石英、長石、黒雲母を多く含む	明黄褐色 (10YR 6/6)	橙色 (7.5YR 6/6)	やや不良	炭化物付着(内器面)
109	C－4	－	〃	ナデ	ナデ？	ヘラナデ？	－	－	石英、長石、黒雲母を多く含む	にぶい橙色 (5YR 6/4)	ススのため不明	良好	厚く炭化物付着(内器面)
110	D－4	－	〃	ヘラナデ？ ↕	ナデ ↔	－	－	－	石英、長石、黒雲母を多く含む	浅黄色 (2.5Y 8/3)	浅黄色 (2.5Y 8/3)	〃	炭化物付着(内器面)
111	C－3	－	〃	－	ナデ	ナデ	－	－	0.1～3mmの砂粒、小石と石英長石、黒雲母を多く含む	明赤褐色 (2.5YR 5/6)	にぶい橙色 (7.5YR 6/4)	〃	

第Ⅴ章　赤坂遺跡の調査

第1節　遺跡の立地

赤坂遺跡は，宮崎郡清武町大字木原字赤坂に所在する。

清武川と加江田川に挟まれたところには，丘陵及び台地が西から東へ延びている。その丘陵及び台地間には，清武川の支流である田上川，熊野川が東流している。田上川と清武川に挟まれた丘陵は，標高70mほどで独立丘陵状を呈している。この丘陵上には，小面積ながら舌状の台地がある。清武川を望む丘陵の北縁一帯には河岸段丘が発達し，一方，田上川を望む南縁にも小規模ながら河岸段丘が形成されている。赤坂遺跡は，丘陵の南西縁に形成された河岸段丘上に立地している。

赤坂遺跡周辺の遺跡は，丘陵東端の舌状台地上に縄文早期の田上遺跡，縄文早期及び平安期の小山尻遺跡，丘陵上には小山尻石塔群，赤坂遺跡の北150mには縄文早期，前期及び平安期の下田畑遺跡がある。また，東流する田上川沿いには，上流に山内石塔群，下流には縄文早期，前期及び平安期の入料遺跡，旧石器～平安期の浦田遺跡，縄文～平安期の西ノ原遺跡が点在している。赤坂遺跡周辺には，縄文早期，平安期の遺跡が多く存在している。学園都市遺跡群内においても同時期の遺跡が多く存在し，同遺跡群の一つの特徴と言える。特に平安期の遺跡が多く存在することは，赤坂遺跡の東の熊野地区が「延喜式」に記された「救麻（クマ）」駅の推定地であり，注目される。

赤坂遺跡は河岸段丘上に立地するが，当遺跡の基本層序は，第一層表土（耕土），第Ⅱ層黒色土，第Ⅲ層砂質褐色土，第Ⅳ層アカホヤ，第Ⅴ層灰褐色土…となっている。第Ⅲ層は2次アカホヤで，赤坂遺跡では第Ⅲ層から縄文後期～平安期の遺物が，第Ⅴ層で縄文早期の遺物が出土している。

第2節　調査の経過及び概要

赤坂遺跡は，昭和54年の分布調査の際，土師器散布地として確認された，土師器の散布は河岸段丘上の畑の西半に密な傾向は示すが，ほぼ全域にみられた。調査は，畑全域を対象とし，昭和56年11月19日から昭和57年3月20日まで実施した。

耕土は重機で除去する。耕土下の黒色土の残りは悪く，調査区北半では，耕土下が砂質褐色土で，河岸段丘の縁辺にあたる南半に黒色土は残る。遺物は，第Ⅲ層砂質褐色土層で平安時代のヘラ切りの土師器坏，須恵器を中心に縄文時代後期及び古墳時代の遺物等が若干出土している。平安時代の遺物は調査区西半に集中し，その部分で古墳時代遺物が出土している。また，縄文時代後期の遺物は，調査区中央部で出土している。また，第Ⅴ層灰褐色土においては，縄文早期の遺物が調査区南半で出土している。

遺構は，平安期の掘立柱建物跡2棟，竪穴住居跡1基，縄文早期の集石遺構4基が検出されている。その他，時期不詳の溝状遺構，土壙，焼土等も検出されている。

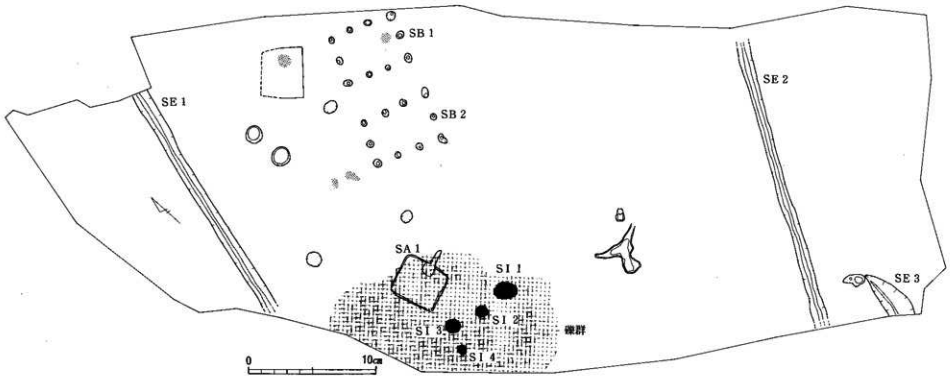
第3節　調査の記録

1. 縄文時代の遺構と遺物

遺構（第2・3図）

調査区南の第Ⅴ層において，挙大の焼けた角礫が長軸18m，短軸9mの範囲内に厚さ10cmほどの層をなしていた。礫群の中で特に礫が集中する部分があり，その下部から集石遺構4基が検出されている。集石遺構は，径1m前後の土壙を伴う。土壙内には焼けた角礫がつまり，埋土の中には木炭が含まれ，色調は黒褐色を呈している。集石遺構ＳＩ2は，径1.1m，深さ20cmほどの円形の土壙を伴い，上層に挙大の角礫がつまり，下部に長軸35cm，短軸12cmを最大とする河原石があり，配石されたものと考えられる。

第1図　周辺の地形図



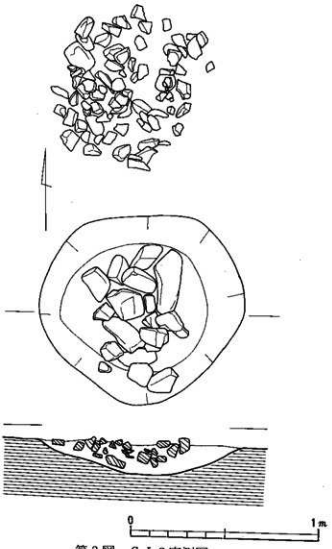
第2図　遺構分布図（1/300）

遺物（第５・６図）

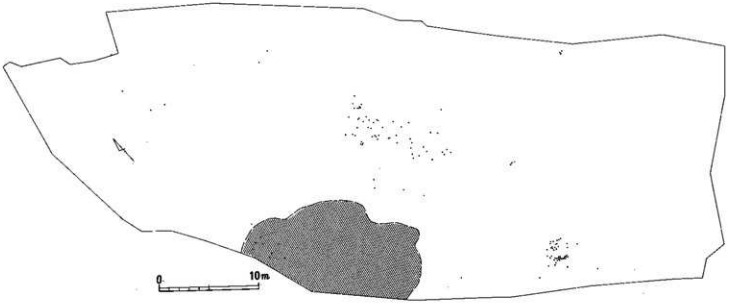
集石遺構が検出された第Ⅴ層灰褐色土で遺物が出土している。礫群内では，底部，石鏃等が，その周囲では，撚糸文をもつ寒ノ神式，押型文土器などが出土している。また，集石遺構の東13mでは，貝殻文土器がまとまりをもって出土した。縄文後期の遺物は礫群の北において出土している。

早期の土器は，第５図１～８，11～13である。１・２は，集石遺構の北西13mで出土したもので，口縁部にヘラ様施文具でミミズバレ状の微隆起線文が施され，その下部に貝殻条痕文がみられる。３～５は貝殻条痕文土器で３はヨコナデにより先細りとなっている。12は，礫群内において出土したものであげ底となっている。

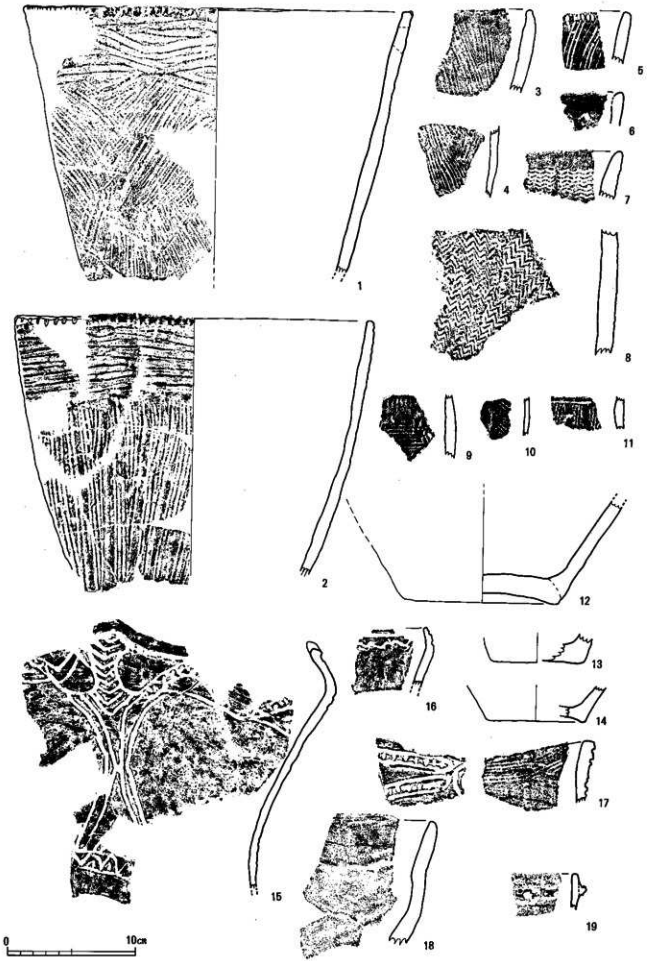
15はキャリパー状の器形で波状口縁をなす。赤橙色を呈し焼成良好な土器である。文様は口縁内傾部，波状口縁の頂部下位及び胴部中央部にヘラを施文具として，沈線文，刺突文，連続Ｖ字文，鋸歯文が施文されている，16も同様な口縁をなし，文様も類似しているので同時期のものと推定される。14は15の底部と思われる。14～16は集石遺構の北で第３層砂質黄褐色土層で出土したもので県内では



第３図　ＳＩ２実測図



第４図　縄文時代遺物分布状況図



第５図　縄文時代遺物実測図（1/3）

類例のない土器である。

17は，沈線文間に刺突文が施文され，後期のものである。18・19は晩期と思われるもので19は口縁部に刻目突帯をもっている。

石器は，石鏃（第６図１～４），磨石（同図５），打製石斧（同図６），磨製石斧（同図８）が出土し，１～６が早期８は後期のものである。

2. 古墳時代の遺物（第６・７図）

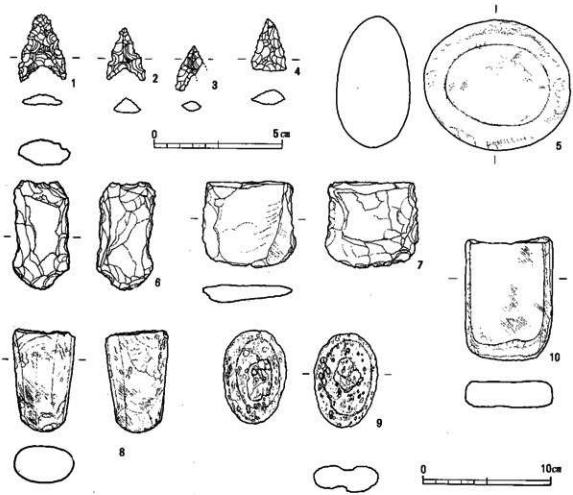
古墳時代の遺物が，平安時代の遺物分布内で出土しているが，その量は少なく，また，遺構等は検出されていない。第７図１～５は，ＳＡ１・２間の西端部，平安時代遺物と同レベルの第Ⅲ層砂質褐色土で出土している。１は，口縁部が外上方にわずかに開き，最大径を胴中上位付近にもつ甕形土器である。２・３は高坏で，３は坏下半部がほぼ水平で口縁部が開く。７は，ＳＥＩで出土したもので，刻目突帯をもつ甕の口縁部である。

第６図９の両面に凹みのある軽石製品，10の砥石はこの時期のものと思われる。

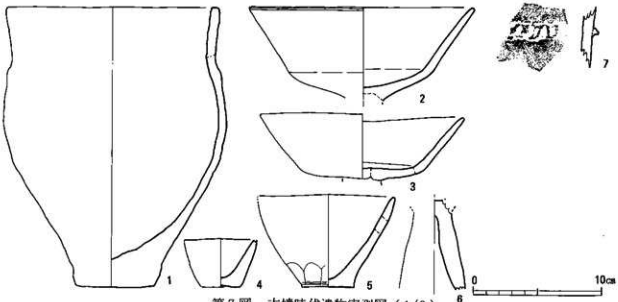
3. 平安時代の遺構と遺物

遺構（第２・９・10図）

検出された遺構は，竪穴住居跡１基（ＳＡ１），掘立柱建物跡２棟（ＳＢ１・２），である。掘立柱建物跡の北西２



第６図　石器実測図（1/3）



第７図　古墳時代遺物実測図（1/3）

mでは，西半のプランは確認されていないが，焼土を伴い，土師器坏，甕などを出土する１辺４mほどの竪穴状遺構も検出されている。

ＳＡ１（第９図）

平面形は方形で，長軸3.68m，短軸3.43m，床面積10.02㎡，壁高約21cmである。東壁中央部にカマドをもつ。カマドの本体は住居内にあり，馬蹄形に白色粘土で築かれている。火床幅は50cmほどで床面は５cmほど窪み，多量の焼土が堆積していた。煙道は住居外にあり，長さ1.5m，幅0.45mに掘られた土壙内に白色の粘土で造られている。煙道の床は東へ向って低くなり，その東端にはスス溜めと考えられる掘り込みをもつ。柱穴は確認されていない。

遺物は，カマド周辺，カマド内及びスス溜め部で出土している。カマドの袖70cmのところでは，内底に「大」の字がヘラ書きされた土師器坏が出土している。

ＳＢ１（第10図）

調査区西の北縁で検出された。３間×２間の掘立柱建物で，規模は，5.18m×3.63mを有し，棟方向はＮ115.5°Ｅである。柱穴の径は50cm～85cm，深さ40～85cmの間である。柱穴は第Ⅲ層砂質褐色土層面で確認され，柱穴の埋土は，上部が硬質の暗褐色土，下部で黄褐色土となっている。東梁間中央のＰ９から40cmほど離れたところに，長径約80cm，短径65cmの楕円状を呈する焼土がみられた。焼土は，硬質の黄褐色土を床面とする土壙内に３層にわたって堆積している。

遺物は，Ｐ６から須恵器片（第15図102）が出土しているが，この須恵器片は，南14mに位置するＳＡ１出土のものと接合している。また，Ｐ５・Ｐ７からは土錘が出土し，焼土内からは土師器片が出土している。

ＳＢ２（第10図）

ＳＢ１の南約2.8mの位置で検出された。３間×２間の掘立柱建物で，規模は5.37m×3.52mを有し，棟方向はＮ116°Ｅである。柱穴の径は50cm～75cm，深さは45cm～85cmの間である。

遺物（第11～15図）

出土した遺物は，土師器，須恵器，緑釉陶器，土錘などが出土している。

壺形土器は，口縁部が内彎ぎみに立ち上がる第11図２・３以外は，口縁部が「く」の字形に大きく外反している。

「く」の字形に外反する甕は，口径より20cmを境に２つに大別され，また，体部より，口縁部に最大径をもつもの（9，10，12，27，28，等）口縁部径と体部最大径が同じもの（1,11.22等），最大径を体部にもつもの（5，15，23，31等）の３つに分類される。坏は，いづれも底部へラ切りで，高台のつくものが数点ある。坏の法量は，大部分が口径13cm，器高４cm前後におさまる。皿は，口径14cm前後のものと13cm前後のものがあり，68は高台付皿である。70～75は内黒土師器である。体部は内彎して立ち上がり，調整はヘラミガキである。76～83は布質土器で口縁端部は外傾し，口径は15cm前後である。84は緑釉陶器で体部径９cmを測る。

85～112は須恵器である。器種は，坏，甕，壷などがあるが，その量は少ない。87～89は坏で口縁部がわずかに外反する。96は大甕の口縁部でヘラ描による波状文がみられる。

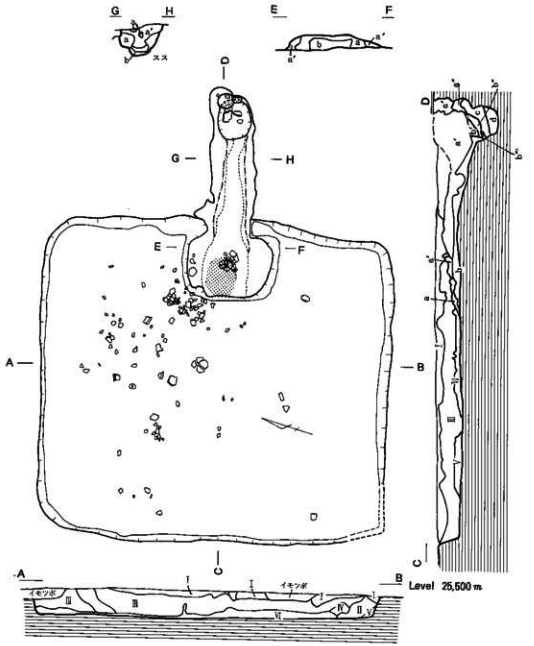
4. そ の 他

時期不詳ではあるが，調査区東西で溝状遺構３条（ＳＥ１～３）及び土壙などが検出されている。ＳＥ１は，調査区の西縁を南北方向にほぼ直線をなして走る溝で，断面逆台形状をなし，上幅1.3 *m*～1.5 *m*，底幅30cmほどを測る。溝の掘られた第Ⅲ層は砂質の軟弱な土質であり，溝の断面形から，本来は上幅50cmほどの断面「Ｕ」字形の断面をもつ溝でなかったかと推測される。溝の埋土は，黄灰色の砂層などがレンズ状堆積しており，自然埋土であることを示している。遺物は，古墳時代の刻目突帯をもつ甕の口縁部，土師器坏などが出土している。

ＳＥ２は，調査区の東をほぼ南北に走る溝で，断面「Ｕ」字形をなし，上幅80cm，底幅30cmほどを測る。溝の底面のレベルは南へ急な傾斜となっている。溝の南端付近の埋土は，下部に鉄分の薄い層を数層含む砂層があり，この砂層から磨滅の著しい須恵器片が出土している。ＳＥ１でみられた黄灰色の砂層は，溝北部においてレンズ状に堆積している。

土壙は，調査区の西で５基検出している。径１*m*～1.5 *m*を測る。土壙内から土器等は出土していない。竪穴住居跡の西６*m*で検出された土壙は径1.1 *m*，深さ約15cmである。土壙内からは多量の木炭が出土している。

第８図　平安時代遺物分布状況図

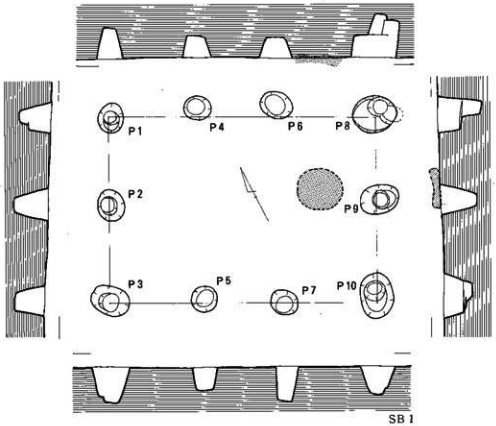


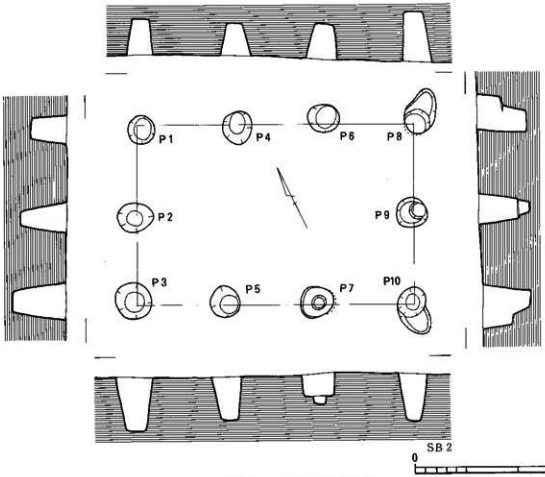
a ：粘土
a′：わずかに粘土を含む褐色土
a″：粘土（aよりわずかに粘土分が少ない）
b ：ススを含む赤褐色焼土
b′：淡褐色焼土
b″：赤褐色焼土
b‴：明褐色土塊を含む赤褐色焼土
c ：黒褐色ススd ：赤褐色土（ススか，灰？）

Ⅰ：アカホヤを含む軟質褐色土
Ⅱ：暗褐色土（やや硬い）
Ⅲ：やや硬質の褐色土
Ⅳ：軟質暗褐色土
Ⅴ：硬質灰褐色土
Ⅵ：硬質褐色土

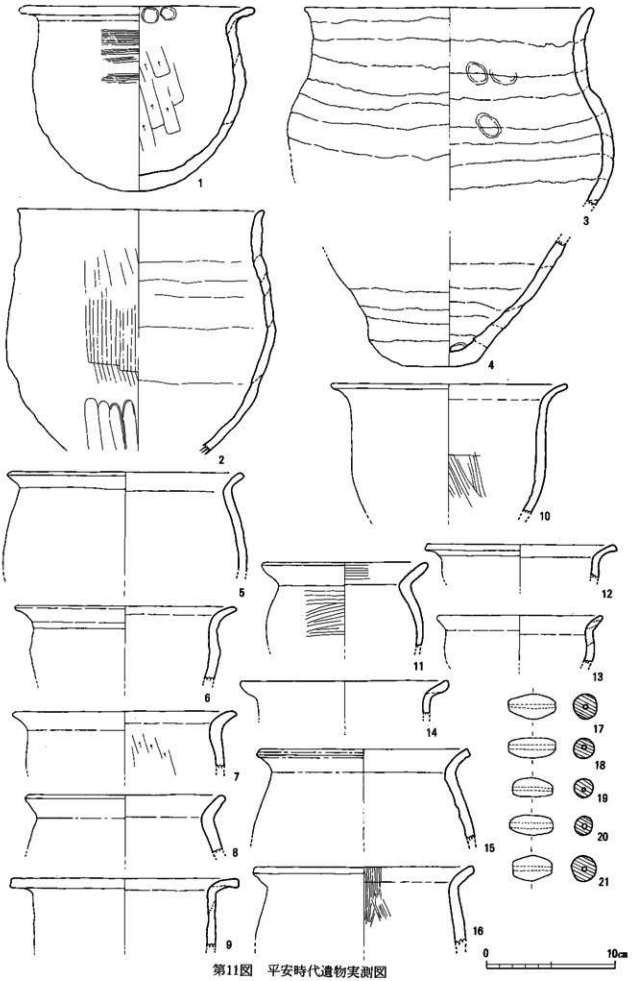
0 2m

第9図　SA 1　実測図

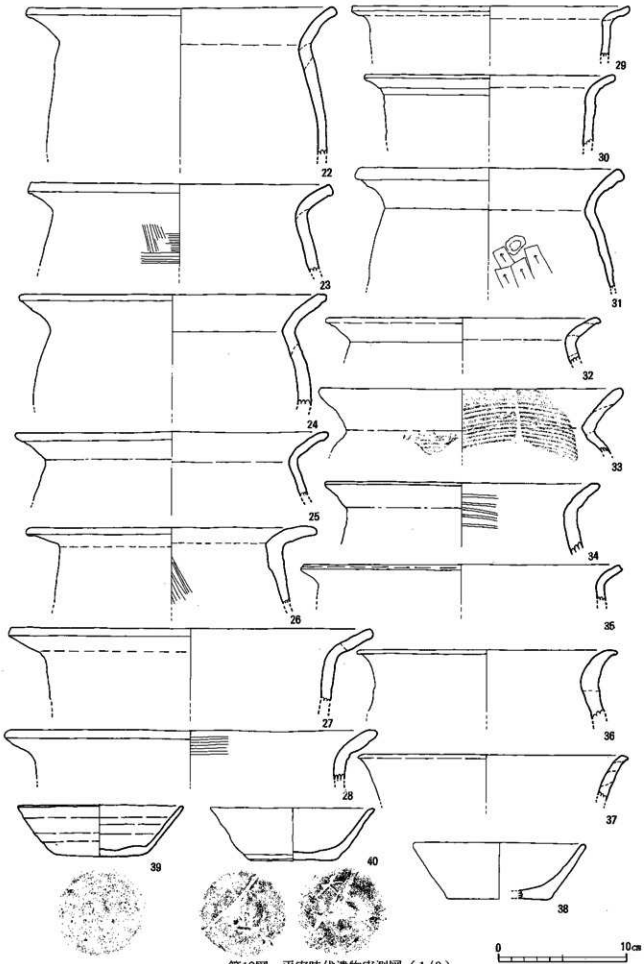




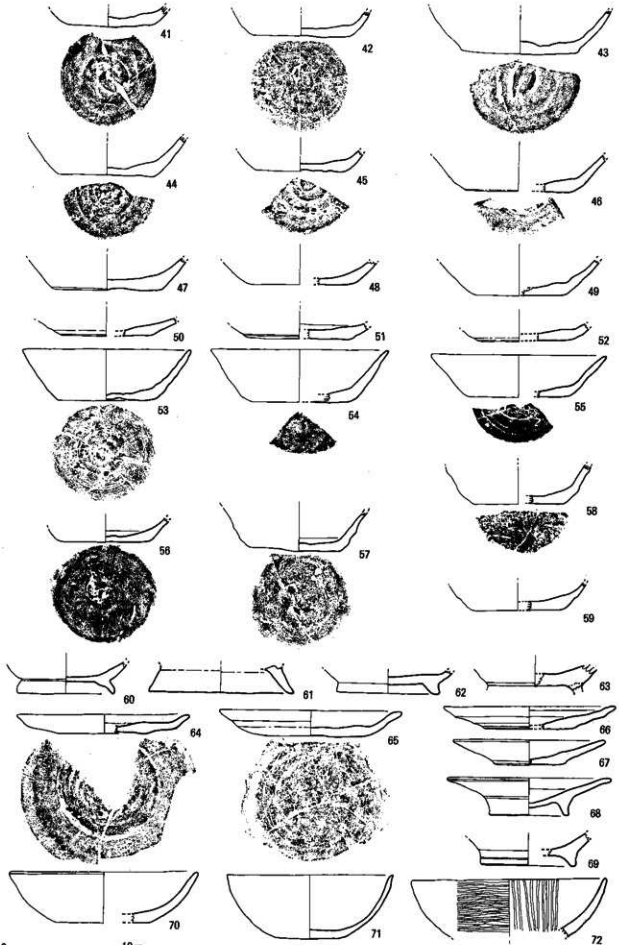
第10図　SB 1.2 実測図



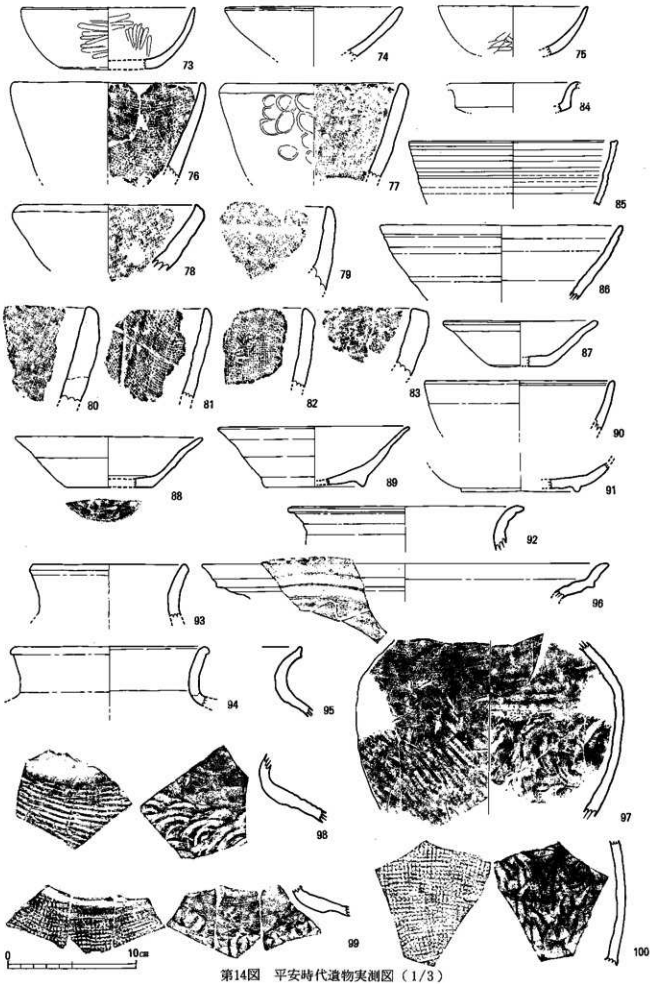
第11図　平安時代遺物実測図



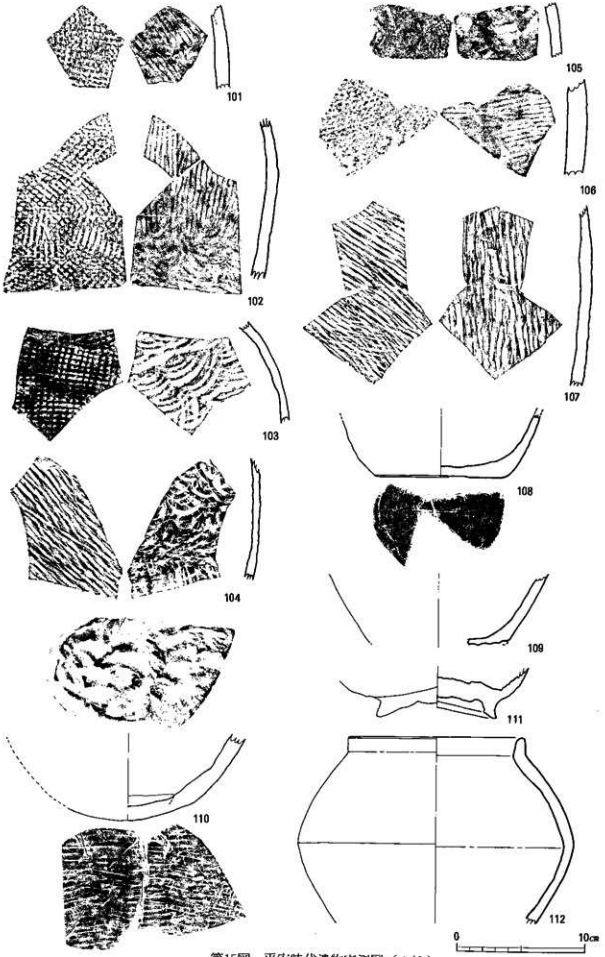
第12図　平安時代遺物実測図（1/3）



第13図　平安時代遺物実測図（1/3）



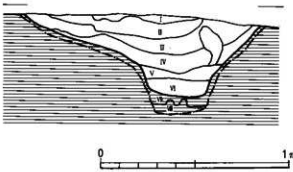
第14図　平安時代遺物実測図（1/3）



第15図　平安時代遺物実測図（1/3）

第4節　まとめ

赤坂遺跡の調査により検出された遺構は，縄文早期の集石遺構及び礫群，平安時代の掘立柱建物跡，竪穴住居跡である。遺物は，この遺構に伴うものの他，縄文後期及び古墳初頭の遺物等が出土している。



第16図　SE 1 土層実測図

集石遺構に伴う遺物は，山形押型文，燃糸文をもつ塞ノ神式が出土しているので，集石遺構は縄文早期後半のものと推定される。この他集石遺構が検出された第Ⅴ層の灰褐色土層で集石遺構の南東13mほどの位置で口唇部に刻みをもち，口縁部にミミズバレ状の微隆起線文，その下部に貝殻条痕文をもつ土器が出土している。県内でこれに類似する資料は，清武町若宮田遺跡[1]で押型文，吉田式，貝殻条痕文の塞ノ神式とともに出土している。若宮田出土の土器は，内面の調整に貝殻を使用し，ミミズバレ状微隆起線文は貼り付けであるなど手法は異なるが，口唇部や胴部の文様及び文様帯は類似している。赤坂遺跡出土の土器は，当遺跡の第Ⅴ層灰褐色土層で早期のその他の時期の土器が出土していないので，縄文早期後半のものと考えられる。

集石遺構は，長径18mほどの楕円状に分布する礫群の下部から検出され　その周囲からは検出されていない。礫群下において集石遺構の検出例は　新富町藤掛遺跡[2]　田野町芳ケ迫第1遺跡[3]などである。集石遺構は，礫群を伴わないものも県内各地で発見されているが，面的に調査された例をみると　これらはいくつかにグルーピングができる。芳ケ迫第1遺跡では　礫群が4群検出され，そのうちの1群からは集石遺構が検出され，また，礫群の周囲からも集石遺構が検出されている。その中で集石遺構の分布が粗になる地区においては土器やチップが多数出土しており　赤坂遺跡で見られる集石遺構とその東13mほどでの土器の出土状態に似ている。こうした例は　まだ少ないが，集石遺構の使用空間と日常の生活空間とは区分されていたとも考えられる。

平安時代の遺構に伴う遺物は，須恵器，土師器，緑釉陶器が出土している。須恵器は甕，壺，坏などが出土し，壺は肩の張らないタイプで，底部は端部が広がる高台付ものか出土している。土師器には，甕，坏，皿などあり，坏は全て底部切り離し手法がヘラ切りで，皿は太宰府出土の9～10世紀の高台付皿[4]に類似している。甕は，口縁部が内彎ぎみに立ち上がるものや「く」の字形に外反あるい屈曲するものがある。口径より小型と中型に分類され，また体部の張りによっても細分ができる。甕にみられる形態差は，単に甕のバリエーションなか時期差を示すものなのかは即断できないが，赤坂遺跡出土の平安期の遺物は，平安中ごろとみて大過ないだろうと思われる。

掘立柱建物は3間×2間のものが2棟検出されている。この2棟の規模は，5.2m×3.6mで棟方向も同じ方向であることから，併存していたものと思われる。SB1の東半には，中央が窪む焼土がみられたが，このような例は，赤坂遺跡の北150mに位置する下田畑遺跡でもみられ，焼土はSB1に伴うものと考えられる。

調査区の東西で検出された溝状遺構からは　古墳時代の刻目突帯をもつ甕部や，土師器，須恵器が出土している。溝の埋土の上層にのる黄灰色の砂層は，15世紀後半，文明期の火山灰と言われる。この砂層は，堂地東遺跡でも溝状遺構の埋土でみられ，砂層の上の層からは，備前第Ⅴ期の摺鉢が出土している。溝状遺構の時期については，砂層の存在から，平安期まで上げることは困難である。

〔註〕

1. 清武町教育委員会「若宮田遺跡」1980年

2. 新富町教育委員会「藤掛遺跡」新富町文化財調査報告書第2集, 1983年

3. 田野町教育委員会「芳ケ迫第1遺跡」田野町文化財調査報告書第1集, 1984年

4. 横田賢次郎, 森田 勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」九州歴史資料館研究論集2, 1976年

(面高 哲郎)

表1 土器観察表

図面番号	遺物番号	器形	器部	器面調整			文様		胎土	色調		焼成	備考
				外器面	内器面	(底面)	外器面	内器面		外器面	内器面		
第5図	1	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕文	ナデ		口唇部, 刻み 胴部, ミミズばれ突帯		1～2mmの石英と, 1～3mmの雲母・砂粒を含む	橙 (7.5YR [illegible])	にぶい褐色 (7.5YR [illegible])	良好	外, スス付着 径, 復元
〃	2	〃	〃	貝殻条痕文	板状ナデ		口唇部, 刻み 胴部, ミミズばれ突帯		1～2mmの石英と, 1～3mmの雲母・砂粒を含む	橙 (7.5YR [illegible])	にぶい褐色 (7.5YR [illegible])	〃	径, 復元
〃	3	〃	口縁部	貝殻条痕	横方向ヘラナデ				1～2mmの雲母(金)・石英・長石を含む	にぶい褐色 (7.5YR [illegible])	にぶい黄橙 (10YR [illegible])	〃	
〃	4	〃	胴部	貝殻条痕	ナデ				1～2mmの砂粒を含む	橙 (7.5YR [illegible])	にぶい黄橙 (10YR [illegible])	〃	
〃	5	〃	口縁部		ヨコナデ		口唇部, ヘラ刻み 口縁部, 斜方向に沈線		1mm前後の石英・雲母片(黒)を含む	明赤褐色 (5YR [illegible])	明褐色 (7.5YR [illegible])	〃	
〃	6	〃	〃	ヨコナデ	ヨコナデ				1～3mmの長石と砂粒を含む	にぶい赤褐色 (5YR [illegible])	にぶい赤褐色 (5YR [illegible])	〃	
〃	7	〃	〃	ナデ	ナデ		山型押型文		1～2mm程度の石英・雲母(黒)を含む	にぶい黄橙 (10YR [illegible])	にぶい黄橙 (10YR [illegible])	〃	
〃	8	〃	胴部		ヨコナデ 斜方向に板状ケズリ		山形押型文		1～2mmの石英・雲母片(黒) 1～6mmの長石を多く含む	にぶい黄橙 (10YR [illegible]) [illegible]	にぶい黄橙 (10YR [illegible])	〃	
〃	9	〃	〃	貝殻条痕	風化の為不明				1mm前後の石英と, 2～7mm前後の砂粒を含む	にぶい橙 (7.5YR [illegible])	にぶい橙 (7.5YR [illegible])	〃	
〃	10	〃	〃		ヨコナデ		浅い細沈線		1～2mmの砂粒を含む	黄橙 (7.5YR [illegible])	黄橙 (7.5YR [illegible])	〃	
〃	11	〃	〃	横に細沈線 斜方向に浅沈線	風化の為不明		横に細沈線 斜方向に浅沈線		1～2mmの石英を多く含む	にぶい黄橙 (10YR [illegible])	にぶい黄橙 (10YR [illegible])	〃	
〃	12	〃	底部	横方向のケズリ	横方向のケズリ	横方向のケズリ			1～2mmの雲母(金)・石英多く含む	にぶい橙 (7.5YR [illegible])	にぶい橙 (7.5YR [illegible])	〃	
〃	13	〃	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	風化の為不明			1～2mmの石英多く含む	橙 (5YR [illegible])	橙 (5YR [illegible])	〃	径, 復元
〃	14	〃	〃	風化の為不明	ナデ	ナデ			1～3mmの長石, 2～6mmの砂粒を多く含み, 2mm前後の雲母(金)を少し含む	明赤褐色 (5YR [illegible])	明赤褐色 (5YR [illegible])	〃	
〃	15	〃	口縁～胴部	板状ナデ	板状ナデ		沈線, 刺突文		2～4mm程度の雲母(金)と, 1～3mmの長石と砂粒を少量含む	にぶい赤褐色 (2.5YR [illegible])	にぶい赤褐色 (2.5YR [illegible])	〃	
〃	16	〃	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ		口縁上位に沈線と山型沈線		1mm前後の石英・雲母(黒), 1～3mmの雲母(金), 2～3mmの砂粒を含む	にぶい褐色 (7.5YR [illegible])	にぶい赤褐色 (5YR [illegible])	〃	
〃	17	〃	〃	ヨコナデ	口縁部にそって貝殻条痕 口縁下位ヘラケズリ		沈線と刺突文		1mm前後の石英を多くと, 雲母(黒)を少し含む	にぶい黄橙 (10YR [illegible])	にぶい黄橙 (10YR [illegible])	〃	外, 一部分スス付着
〃	18	〃	口縁～胴部	ナデ	口縁部横にヘラナデ 胴部ヨコナデ				0.5～3mm前後の砂粒を含む	明褐色 (7.5YR [illegible])	明褐色 (7.5YR [illegible])	〃	外, スス付着
〃	19	〃	口縁部	口唇部ナデ 口縁部ヘラナデ	ヘラナデ(ケズリ風)		突帯		1mm前後の石英を多く, 雲母(黒)を少し含む	浅黄橙 (10YR [illegible])	褐灰 (10YR [illegible])	〃	

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	調整		焼成	色調		胎土	備考
				外面	内面		外面	内面		
第7図		1	甕	風化が著しく調整不明	風化が著しく調整不明	良好	口縁部 浅黄橙(7.5YR [illegible]) 胴〜底部 橙(5YR [illegible])	橙 (5YR [illegible])	2～3mmの砂粒多含	外面胴部スス付着
〃		2	高坏	一部ミガキ(風化)	ナデ(風化)	〃	にぶい黄橙 (10YR [illegible])	にぶい黄橙 (10YR [illegible])	0.5mm前後の砂粒を含む 石英, 黒雲母を含む	
〃		3	〃	風化が著しく調整不明	風化著しく調整不明 坏底部にミガキ痕	〃	にぶい橙 (7.5YR [illegible])	にぶい黄橙 (7.5YR [illegible])	1～4mmの砂粒を含む	
〃		4	ミニチュア土器	ナデ	ナデ	〃	橙 (7.5YR [illegible])	橙 (7.5YR [illegible])	2mmの砂粒を含む	
〃		5	〃	ナデ 底部指押え	風化著しく調整不明	やや良	黄橙 (7.5YR [illegible])	黄橙 (7.5YR [illegible])	1～3mm大の砂粒を含む	
〃		6	高坏	ナデ	ナデ	良好	橙 (5YR [illegible])	橙 (5YR [illegible])	0.5mmの砂粒含む 黒雲母, 石英を含む	
〃		7	甕	ナデ	ナデ	〃	にぶい橙 (7.5YR [illegible])	浅黄橙 (10YR [illegible])	1～2mmの砂粒を含む 黒雲母, 石英を含む	

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
第11図		1	鉢	口縁部…ヨコナデ 胴上位…ヨコ方向のハケ目 胴下位…磨耗のため不鮮明	口縁部…指頭圧 頸部…ヨコナデ 胴部…ケズリ（↑）	良好	橙(2.5YR6/6) 灰褐(7.5YR5/4)	橙(2.5YR6/6)	2～10mmの砂粒を含む	
〃		2	甕	口縁部…ヨコナデ 胴上位…削り気味のハケ 胴下位…指頭圧	口縁部…ヨコナデ 胴上位…ナデ 胴下位…ヨコナデ	〃	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	1～10mmの砂粒多含	径・復元
〃		3	〃	口縁部～胴部…ヨコナデ	口縁部～胴部…ヨコナデ 部分的に指頭圧	不良	にぶい橙(5YR6/4)	にぶい橙(5YR6/4)	3～5mmの砂粒多含	4と同一個体 外面胴部スス付着
〃		4	〃	胴部～底部…ヨコナデ	胴部…ヨコナデ 底部…指頭圧	やや不良	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	3～6mmの砂粒多含	3と同一個体 内面底部スス付着
〃		5	〃	ヨコナデ	口縁部～頸部…ヨコナデ 胴部…ナデ	良好	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい橙(5YR6/4)	1～4mmの砂粒を含む	径・復元
〃		6	〃	ナデ	ナデ	やや不良	にぶい橙(5YR6/4)	にぶい橙(5YR6/4)	2～6mmの砂粒多含	径・復元
〃		7	〃	ナデ	口縁部…ヨコナデ 頸部以下…ヘラ削り（↖）	良好	黄橙(10YR8/6)	黄橙(10YR8/6)	0.5～3mmの砂粒を含む	径・復元
〃	SA1	8	〃	ヨコナデ	口縁部…ヨコナデ 頸部以下…ヘラ削り	〃	にぶい橙(7.5YR6/4)	橙(5YR6/6)	1～4mmの砂粒を含む 黒雲母・石英含む	径・復元
〃		9	〃	ヨコナデ	口縁部…ヨコナデ 頸部～胴部…ハケ目，一部ヨコナデ	〃	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	0.5～3.5mmの砂粒を含む	径・復元
〃		10	〃	口縁部…ヨコナデ 胴部…貝殻条痕	口縁部～頸部…ヨコナデ 胴部…ヘラ削り（↑）	〃	明褐(10YR6/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	0.5～5mmの砂粒を含む	外面一部スス付着 径・復元
〃	SA1	11	〃	口縁部…ナデ 頸部以下…クシ目	口縁部…クシ目 頸部以下…ヘラ削り（↖）	〃	淡黄(2.5YR8/3)	淡黄(2.5YR8/3)	1～2mmの砂粒を含む 長石含む	径・復元
〃		12	〃	ヨコナデ	ナデ	〃	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	2～3mmの砂粒を含む	径・復元
〃		13	〃	ナデ	ナデ	〃	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	1～3mmの砂粒多含	径・復元
〃		14	〃	ナデ	ナデ	〃	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	1mm前後の砂粒を含む	径・復元
〃		15	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	〃	赤橙(10R6/6)	橙(7.5YR6/6)	1～4mmの砂粒を含む	径・復元
〃		16	〃	ヨコナデ	口縁部…ハケ目のちナデ 頸部以下…ヘラ削り（↑）	〃	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	0.5～3mmの砂粒を含む	内面頸部スス付着 径・復元
第12図	SA1	22	〃	ヨコナデ	口縁部～頸部…ヨコナデ 胴部…ヘラ削り（↑）	〃	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	0.5～5mmの砂粒多含	
〃		23	〃	口縁部…ヨコナデ 頸部以下…ハケ目・貝殻条痕	ヨコナデ	〃	黄橙(7.5YR7/8)～浅黄橙(10YR8/4)	黄橙(7.5YR7/8)～浅黄橙(10YR8/4)	0.5～7mmの砂粒を含む	径・復元
〃	SA1	24	〃	口縁部…ヨコナデ 頸部以下…ハケ目	ヨコナデ	〃	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	0.5～6mmの砂粒多含	径・復元
〃		25	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	やや不良	黄橙(10YR8/6)	黄橙(10YR8/6)	0.5～3mmの砂粒多含	径・復元
〃		26	〃	ヨコナデ	口縁部…ヨコナデ 頸部以下…ヘラ削り（↑）	良好	にぶい橙(5YR6/4)	にぶい橙(5YR6/4)	0.5～3mmの砂粒を含む	径・復元

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
第12図		27	甕	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	1～5mmの砂粒多含	径・復元
〃		28	〃	ナデ	ハケ目	やや不良	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	0.5～5mmの砂粒多含	径・復元
〃		29	〃	ナデ	口縁部…ヨコナデ 頸部以下…ナデ・指頭圧	〃	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	1～3mmの砂粒多含	径・復元
〃		30	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	にぶい黄橙(10YR7/4)～明黄褐(10YR6/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)～明黄褐(10YR6/6)	1～4mmの砂粒多含	スス付着 径・復元
〃		31	〃	ナデ	口縁部…ナデ 頸部以下…ヘラ削り（↖）	やや不良	橙(2.5YR6/6)	灰白(10Y8/1)	3～6mmの砂粒を含む	径・復元
〃		32	〃	ヨコナデ	口縁部…ハケ目のちナデ 頸部以下…ナデ	〃	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	1～3mmの砂粒多含	径・復元
〃		33	〃	口縁部…ハケ目 頸部…ナデ 胴部…ハケ目	口縁部…クシ目 頸部以下…ヨコナデ	良好	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	1mm前後の砂粒含む	径・復元
〃		34	〃	ヨコナデ	クシ目	〃	浅黄橙(7.5YR8/6)	にぶい橙(7.5YR6/4)	3～5mmの砂粒を含む	径・復元
〃		35	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	やや良	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	1～2mmの砂粒多含	径・復元
〃		36	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	淡黄(2.5Y8/3)	淡黄(2.5Y8/3)	2～3mmの砂粒多含	外面口縁部スス付着 径・復元
〃		37	〃	ヨコナデ	ナデ	やや良	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	0.5～3mmの砂粒多含	径・復元
第13図		76	布痕土器	布目	指押え	良好	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	7～8mmの砂粒を含む	径・復元
〃		77	〃	布目（風化）	指押え（一部分剥離）	〃	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	0.5mmの細砂粒を含む	径・復元
〃		78	〃	布目	指押え	〃	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	3～6mmの砂粒少含	径・復元
〃		79	〃	布目	指押え（風化）	〃	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	黒雲母,長石,石英を含む 1～5mmの砂粒を含む	
〃		80	〃	布目	指押え	〃	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	0.5～6mmの砂粒を含む	
〃		81	〃	布目	指押え	〃	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	1～4mmの砂粒を含む	
〃		82	〃	布目	指押え	〃	橙(7.5YR6/6)	にぶい橙(5YR6/4)	1～3mmの砂粒を含む 黒雲母を含む	
〃		83	〃	布目（風化）	指押え（風化）	〃	橙(7.5YR6/6)	橙(5YR6/6)	1～5mmの砂粒を含む	
第14図		92	壺	口縁部…ヨコナデ 胴部…タタキ	口縁部…ヨコナデ	〃	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)		
〃		93	〃	口縁部…ヨコナデ部分的に平行タタキ	口縁部…ヨコナデ	やや不良	黄灰(2.5YR6/1)	浅黄(5YR8/3) 灰(5YR6/1)		

図面番号	遺構名	遺物番号	器種	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
第14図		94	壺	口縁部→ヨコナデ	口縁部→ヨコナデ		やや不良	黒褐（2.5YR3/1） 暗赤褐（2.5YR3/6）	灰黄（2.5Y8/2）		
〃		95	〃	口縁部→ヨコナデ 頸 部→平行タタキ	口縁部→ヨコナデ 頸 部→同心円タタキ部分的ナデ消		良 好	灰 色（N/6）	灰 黄（2.5Y6/2）		
〃		96	〃	口縁部→ヨコナデ	口縁部→ヨコナデ		〃	灰 黄（2.5Y6/2）	灰 黄（2.5Y6/2）		一金沢産 二金沢須恵 器模倣
〃		97	〃	頸 部→ヨコナデ 胴 部→縦方向の平行タタキ	頸 部→ヨコナデ 胴 部→ヨコナデ部分的に斜方向のナデ		不 良	橙（7.5YR7/6）	橙（7.5YR7/6）		
〃	堂	98	壺	底 部→ヨコナデ 胴 部→格子目タタキ	底 部→ヨコナデ 胴 部→同心円タタキ		良 好	灰 黄（2.5Y 6/2）	灰 黄（2.5Y6/2）		
〃	堂	99	壺	底 部→ヨコナデ 胴 部→細かい格子目タタキ	底 部→ヨコナデ 胴 部→同心円タタキ		〃	黄 灰（2.5Y 5/1）	灰 黄（2.5Y5/2）		
〃		100	壺	胴 部→細かい格子目タタキ	胴 部→同心円タタキ		〃	灰 黄（2.5Y 5/2）	黄 灰（2.5Y5/1）		
第12図	粗満砂層	101	〃	胴 部→細かい格子目タタキ	胴 部→平行タタキの後部分的にナデ		〃	黄 灰（2.5Y 6/1）	黄 灰（2.5Y 6/1）		
〃		102	〃	胴 部→細かい格子目タタキ	胴 部→平行タタキの後部分的にナデ		〃	灰黄褐（10YR5/2）	黄 灰（2.5Y5/1）		
〃		103	〃	胴 部→細かい格子目タタキの後部分的にナデ	胴 部→同心円タタキ		〃	にぶい黄橙（10YR6/3）	にぶい黄橙（10YR6/3）		
〃		104	〃	胴 部→平行タタキの後ナデ	胴 部→同心円タタキの後部分的にナデ		〃	黄 灰（2.5Y 5/1）	黄 灰（2.5Y 5/1）		
〃	粗満砂層	105	〃	胴 部→細かい格子目タタキ	胴 部→同心円タタキの後ナデ		やや不良	黄 灰（2.5Y 6/1）	黄 灰（2.5Y 6/1）		
〃	〃	106	〃	胴 部→細かい格子目タタキ	胴 部→平行タタキ		〃	黄 灰（2.5Y 6/1） 褐灰（10YR5/1）	灰黄褐（10YR5/2） 褐 灰（10YR5/1）		
〃		107	〃	胴 部→平行タタキ	胴 部→平行タタキ		良 好	黄 灰（2.5Y 6/1） 灰白褐色（10YR8/2）	黄 灰（2.5Y 6/1） 灰白褐（10YR8/2）		
〃		108	壺	胴 部→ヨコナデ 底 部→ナデ	胴 部→ヨコナデ 胴 部→ヨコナデの後ナデ仕上げ		〃	褐灰（5YR5/1） 黄 灰（2.5Y5/1）	褐灰黒（5YR4/1） 黄 灰（2.5Y5/1）		「キノ」様のヘラ記号
〃	SA1	109	〃	胴 部→ヨコナデ 底 部→刺突＋ナデか	ヨコナデ		不 良	浅 黄（2.5Y 7/3）	浅 黄（2.5Y 7/3）		
〃		110	壺	底 部→平行タタキ	底 部→同心円タタキの後部分的にナデ		〃	灰（5Y 5/1）	灰（5Y 5/1）		
〃		111	壺	胴 部→ヨコナデ 底 部→ナデ	ヨコナデ		良 好	オリーブ灰（2.5GY 6/1）	灰 黄（2.5Y 6/2）		金沢産 ロクロ整しい
〃		112	〃	口縁部→ヨコナデ 胴 部→ヨコナデ	口縁部→ヨコナデ 胴 部→ヨコナデ		やや不良	にぶい橙（7.5YR7/4） 浅黄橙（10YR8/3）	黄 橙（10YR8/6）		

図面番号	No	遺構	器種	法量 口径	底径	器高	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	調整 内面	調整 外面	備考
第14図	89		高台付 須恵器	16.3	7.6	4.7	灰（2.5Y6/1）	灰（2.5Y6/1）	精良	良好	ヨコナデ	ヨコナデ 底、糠化	
〃	90		坩堝器材	14.5			にぶい黄橙（10YR6/3）	暗赤灰色（2.5YR3/1）	〃	〃	〃	〃	
〃	91		高台付 須恵器		9.2		黒（2.5Y6/1）	にぶい黄橙（10YR6/3）	〃	〃	ヘラミガキ	〃	〃

図版番号	No	遺構番号	器種	法量 口径	底径	器高	色調 内面	外面	胎土	焼成	調整 内面	外面	備考
第12図	38		坏	㎝ 13.4	㎝ 6.6	㎝ 4	にぶい橙 (5YR6/4)	にぶい橙 (5YR6/4)	0.5mm以下の石英多含	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り
〃	39		〃	12.8	6.8	4.15	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	0.5mm以下の石英・雲母(黒)多含	〃	〃	風化	底部内面に「大」のヘラガキ
〃	40		〃	13.5	7.8	6.4	にぶい橙 (5YR6/4)	にぶい橙 (5YR6/4)	0.5～1mm以下の石英多含 1～2mmの砂粒少含	〃	〃	ヨコナデ	体、底元
第13図	41		〃		7.2		灰白 (2.5YR8/2)	灰白 (2.5YR8/2)	0.5mm以下の石英・雲母(黒)を含む	〃	ナデ	ナデ	体、底元 内・外黒変
〃	42		〃		7.95		にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	細砂粒を含む	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	体、底元
〃	43		〃		9.0		にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.5～1mの砂粒を含む	〃	〃	〃	体、底元 ヘラ切り
〃	44		〃		7.4		浅黄 (2.5Y7/3)	浅黄 (2.5Y7/3)	細砂粒を含む	〃	〃	〃	体、底元 〃
〃	45		〃		6.8		灰黄 (2.5Y6/2)	灰黄 (2.5Y6/2)	0.5mm以下の石英と細砂粒を含む	〃	〃	〃	体、底元 〃
〃	46		〃		8.3		黄橙 (7.5YR7/8)	黄橙 (7.5YR7/8)	1mm以下の細砂粒を含む	〃	〃	〃	体、底元 〃
〃	47		〃		8.7		橙 (5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	0.5～1mmの石英・砂粒を多く含む	〃	風化	風化	体、底元 〃 (?)
〃	48		〃		9.2		にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	1mm以下の雲母(黒)・石英を含む	〃	〃	〃	体、底元 〃 (?)
〃	49		〃		7.4		浅黄 (2.5Y7/3)	浅黄 (2.5Y7/3)	黄・1mm以下の石英・雲母(黒)を含む	〃	〃	〃	体、底元 〃
〃	50		皿		7.2		橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	1mm以下の石英・雲母(黒) と1～3mmの砂粒を含む	〃	〃	〃	体、底元 風化
〃	51		〃		8.6		淡黄 (2.5Y8/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	0.5～2mmの砂粒まく含む	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	体、底元 ヘラ切り(?)
〃	52		〃		7.25		橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	0.5～1mmの灰石・石英・雲母(黒)をやしく、砂粒を多く含む	〃	風化	風化	底部に黒変 体、底元 ヘラ切り
〃	53		坏	12.9	7.5	4.0	黄橙 (10YR8/8)	黄橙 (10YR8/8)	1mm以下の石英を含む	〃	ヨコナデ	ナデ後ヨコナデ ヘラケズリ	ヘラ切り
〃	54		〃	13.7	7.2	4.1	浅黄 (2.5Y7/3)	浅黄 (2.5Y7/3)	1～2mmの砂粒を含む	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	体、底元 風化
〃	55		〃	13.5	7.75	3.25	淡赤橙 (2.5YR7/4)	淡赤橙 (2.5YR7/4)	0.5mm以下の石英を含む	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	体、底元 ヘラ切り
〃	56		〃		7.5		橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	0.5mm以下の石英と、1～2mmの砂粒を含む	〃	風化	風化	ヘラ切り
〃	57		〃		6.4		にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	0.5mm以下の石英多含	〃	〃	〃	〃
〃	58		〃		7.0		橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	0.5mm以下の石英を含む	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	体、底元 〃

図版番号	No	遺構番号	器種	法量 口径	底径	器高	色調 内面	外面	胎土	焼成	調整 内面	外面	備考
第13図	60		高台	㎝	㎝ 7.5	㎝	浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	0.5mm以下の石英 1～2mmの砂粒を含む	良好	風化	ヨコナデ	体、底元
〃	61		〃		11.2		にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	0.5～1mmの石英・雲母(黒)多含	〃	ヨコナデ	〃	外、又大付着 体、底元
〃	62		〃		8.0		浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	1mm前後の石英と、1～3mm小砂粒を含む	〃	ナデ	ナデ	体、底元
〃	63		〃				にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.5～1mmの石英・雲母(黒)を含む	〃	風化	ヨコナデ	
〃	64		鉢	13.0	6.6	5.45	黄橙 (7.5YR8/6)	黄橙 (7.5YR8/6)	1mm前後の石英・石英 1～3mm小砂粒多含	〃	〃	風化	体、底元 ヘラ切り
〃	65		〃	14.1	8.5	2.0	浅黄橙 (7.5YR8/4)	橙 (5YR7/6)	0.5mm前後の砂粒含む	〃	ヨコナデ	〃	〃
〃	66		〃	13.1	7.2	2.0	黄橙 (7.5YR8/6)	橙 (5YR7/6)	0.5～2mm前後の砂粒多含 0.5mm以下の石英少量含む	〃	風化	ヨコナデ	体、底元 〃
〃	67		〃	11.6	5.3	1.95	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	1mm前後の石英、1～2mm前後の砂粒多含	〃	〃	風化	〃
〃	68		高台付皿	12.6	6.2	2.85	明赤褐 (2.5YR5/8)	淡黄 (2.5Y8/3)	1mm以下の雲母(黒)・石英を含む	〃	丹塗り?	ヨコナデ	
〃	69		高台		7.4		にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	0.5mm以下の雲母(黒)・石英多含	〃	ヘラミガキ	ヨコナデ	内、黒変 体、底元
〃	70		黒色土器	14.4	7.0	3.95	黄灰 (2.5Y5/1)	黄灰 (2.5Y5/1)	1mm以下の石英多含	〃	〃	ヘラミガキ	体、底元
〃	71		〃	12.8	5.2	5.0	黒 (2.5Y3/)	浅黄橙 (10YR8/)	雲母	〃	〃	〃	〃
〃	72		〃	15.0			黒 (2.5Y3/)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	〃	〃	〃	〃	〃
第14図	73		〃	12.3	7.45	4.85	黒 (2.5Y3/)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	〃	〃	〃	〃	〃
〃	74		〃	13.5			黒 (2.5Y3/)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	〃	〃	〃	〃	〃
〃	75		〃	11.5			[illegible]	橙 (5YR7/6)	〃	〃	〃	〃	〃
〃	84		緑釉皿		2.1					〃	ヨコナデ	ヨコナデ	〃
〃	85		須恵器杯	16.1			にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	〃	〃	〃	〃	〃
〃	86		〃	16.3			にぶい黄橙 (10YR7/3)	黄灰 (2.5Y4/)	〃	〃	〃	〃	〃
〃	87		〃	11.6	4.4	3.55	浅黄 (5Y8/)	灰白 (5Y8/)	〃	〃	〃	〃	〃
〃	88		〃	14.3	6.8	3.9	灰白 (5Y8/)	灰白 (5Y8/)	〃	〃	〃	〃	〃

第Ⅵ章　小山尻西遺跡の調査

第1節　遺跡の立地と環境

小山尻西遺跡は，清武川と加江田川に挟まれた南北丘陵の北側丘陵中にある。北丘陵を形成する三つの頂部のうち，もっとも低い標高約42mの頂部に位置し，東方向眼下に小山尻東遺跡，田上遺跡を眺め，はるか西南西の方向には山内石塔群が遠望できる。

大乗妙典供養塚は，この標高約42mの頂部が東側の次の小高い頂部へと続く橋梁状の地形の東端部にあり，塚の北側，南側は深い谷となっている。

第2節　調査の方法

板碑の造立されている河原石で葺かれた盛土部は，東西1.2 m×90cm，1.5 m×50cm，南北3.4 m×80cmの3ケ所にトレンチを入れ，板碑が挿入されている基部を中心に河原石を取り去った。盛土部分より北東35mの平坦部にⅣトレンチを東西12m×3.4 m，13m×4 m，南北8 m×2 mの3ケ所に入れた。切株が多く不定形のトレンチとなった。盛土部分より南西40mの平坦部に十字型にS2トレンチを入れた。東西10m×1.5 m，南北28m×1.5 mである。

第3節　遺構と遺物

本遺跡では，遺構として大乗妙典供養塚をあげることができる。板碑の立っている小丘は地山を約40cm盛り上げた層（Ⅲ層）とその上層の丸礫を含んだ約30cmの層よりなっている。（第1図参照）丸礫は径3～5cm内外の比較的形のそろった扁平な河原石で盛土最頂部で最高の堆積幅平均30cmをもちながら，周辺にゆくにしたがって，徐々にその堆積幅を狭めてゆき，未端部に至ってはほとんど表層面に散乱する。分布の範囲は，盛土最頂部，大乗妙典供養板碑付近を中心として南北およそ6.5 m，東西4.5 mの楕円形に広がる。板碑を造立する際，この30cmにも及ぶ河原石の層は，碑の安定に充分な効果をもたらしたと思われ，実際土壌と混じりあった河原石は基部をきつく圧迫して，掘り出すのにかなりの時間を要した。厚く盛土を被ったその景観は，古墳における葺石をみるようであり，同じような効果をねらったことを思わせる。又，河原石の多くが扁平な丸礫であるため，一字一石経の埋納が考えられたが，墨書石の埋納，散乱をみることはできなかった。[1]

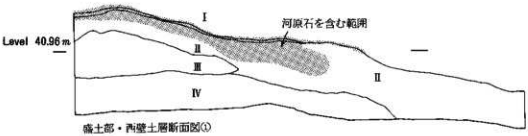
遺　物

大乗妙典供養塚より4基の板碑と塚を覆う河原石の表面上から一点の鐔，素焼き土器と思われる数点の小破片が出土している。まず板碑について第4図にそって解説したい。

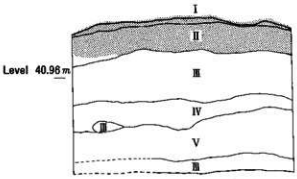
Ⅰ板碑（第4図Ⅰ，第5図）

Ⅰは盛土のほぼ中心に位置し，北に傾いている。全高160.5 cm（うち地中に36.0 cm），幅32.7 cm（塔身部中央），33.2 cm（塔身部下部），38.4 cm（基部），厚さ21.8 cmを測る。これは小山尻西遺跡板碑のなかで，最も大型で完全な状態で観察できる唯一のものである。形状は全体に最も一般的なもので，頭部は正面観が眠辺（羽込部上段）の二角でそれぞれ55度を測る三角形を呈し　平面観では，四方から緩線が直線的に一点に集まる四角錐形を呈する。ただし，四方から集まる緩線の中心は碑の中心軸よりやや前方にある。[2]

板碑の形状の最も特徴的部分である羽込部は，一般的な形状であるところの二条の切り込みを斜方向に彫り出す方式からは，大きく逸脱しないものの独特の形状をもっている。それは切り込みが単に段をつけただけでなく，さらに深く沈線を刻することによって，各段をより明瞭に表現していることである。一段目の羽込みは3.5 cm，二段目は3.0

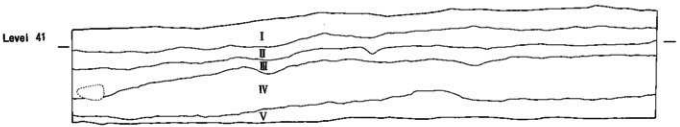


盛土部・西壁土層断面図①

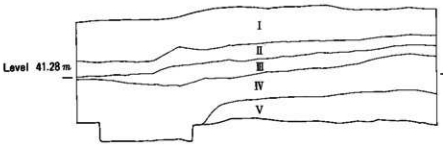


盛土部・北壁～東壁土層断面図②

盛土部土層
I層　表土（褐色腐葉土）
II層　薄褐色土
III層　明黄土色土
IV層　IIIとIVの中間色的な褐色土
スクリーントーン　河原石を含む範囲



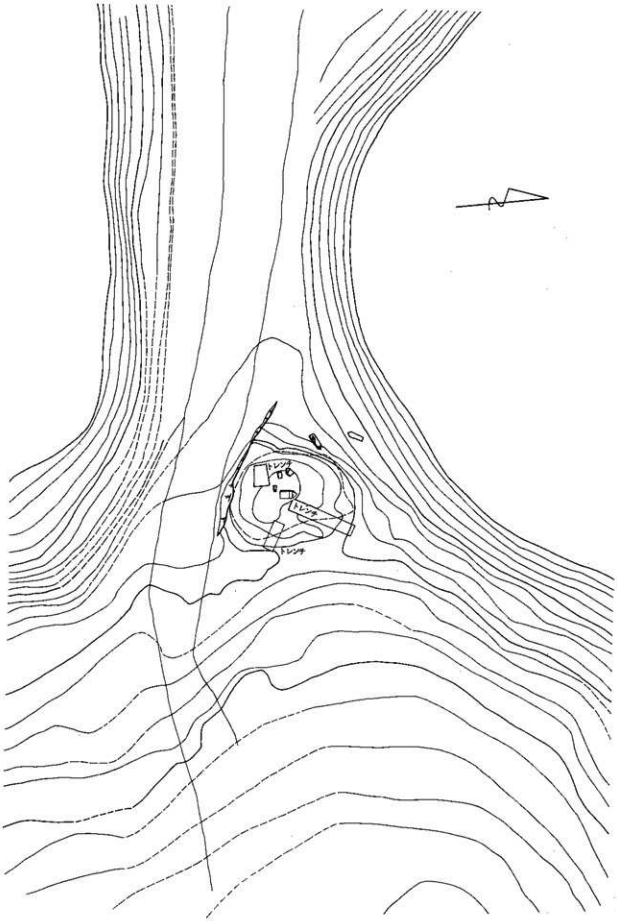
NIトレンチ土層断面図（南壁面）①



S2トレンチ土層断面図（西壁面）②

NI，S2トレンチ土層
I　表土（褐色腐葉土）
II　黒褐色土
III　褐色土
IV　オレンジ土
V　暗オレンジ土（粘質）

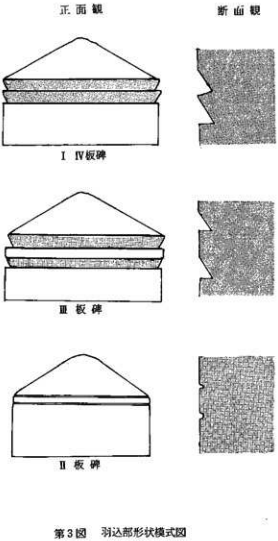
第1図　土層断面図



第２図　大乗妙典供養碑塚周辺地形図

cm，沈線は0.2cmを測る。羽込部から額部は14.8cmを測り，額部のはりだしはなく，単に深さ0.6cmの明瞭な沈線を正面，両側面にわたって刻している。塔身部は正面，両側面，背面すべてにわたって平滑に成形され，銘文を刻するのに供される。基部は下端より上部へ36.0cmを測り，平滑に成形されることなく荒削りのままで，塔身の横幅より5.7cmほど幅広く成形されている。これは造立時の安定を考慮したものと思われる。

碑四面にはそれぞれ陰刻で次のような銘文がある。碑正面，額部には𑖨𑖯（バク＝訳迦），𑖪𑖿（マン＝文珠），𑖦𑖿（アン＝普賢）の三尊種子を陰刻する。碑中央に，「奉讃諸大乗妙典一千部」とあり，その両側に「現世安穏　後生善処」の二行，すなわち，法華経草喩品第五十九－十九－中の下二句を刻する。以下に「施主敬白」とある。裏面中央に「干時大永六年丙戌八月廿八日」，「願以此功徳」，「普及於一切」，「我等与衆生」，「皆共成仏道」と法華経を刻する。右側面には，額部に𑖢𑖿（ウン＝普賢菩薩），以下キャ・カ・ラ・バ・アと大日如来真言を刻し，その右に「大願主海老原四郎兵衛尉妙為」，左に「本願権小僧都覚淳大法印勢舜」とある。左側面には，額部に𑖩𑖿（キリーク＝阿弥陀），以下ケン・カン・ラン・バン・アンと大日法身真言を刻し，その左右に「若人求仏慧通達菩提心」，「父母所生身速證大覚位」と菩提心論を刻している。



第3図　羽込部形状模式図

Ⅱ板碑（第4図Ⅱ，第6図Ⅱ）

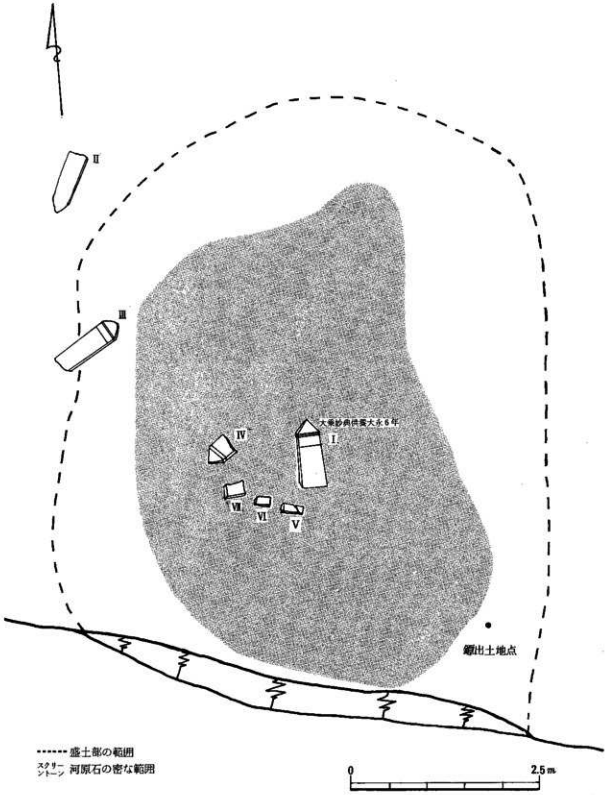
Ⅱは小丘より北西に折れ落ちて，頭部を南西に向けている。現高89.0cm，横幅22.2cm（上部），23.0cm（下部），厚さ14.0cm～15.5cmを測る。頭部は正面観で底辺（羽込部上段）の二角がそれぞれ65°を呈する三角形で，碑の平面がそのまま頭部まで延長する。

側面観は各四点が一点に集まらないために台形状を呈する。羽込部は二条の沈線を側面までめぐらし斜方向の切れ込みはない。二条の沈線間は2.0cmを測る。額部も同じく沈線で側面にまでおよび，突出はない。羽込部との間に7.5cmを測る。額部面に墨書で一字書かれてあるが，消えかけている。おそらく「喝」[3]と書かれていたと思われる。

塔身は正面，側面，背面すべてを平滑に成形して銘文面を形成しているが，陰刻はなく，墨書跡がかろうじて観察できる。碑表面の墨書はほとんど消滅しており，下記の数文字を確認できたにすぎない。正面に「空風火水地」，「□□者為」，「九月」，「干時」，背面に「諸行無常是」，「生滅□□滅□滅」と読める。

Ⅲ板碑（第4図Ⅲ，第6図Ⅲ）

Ⅲは小丘の北西端に折れ落ち，頂部を北東に向けた位置に倒れている。現高95.6cm，横幅26.0cm，厚さ17.2cmを測る。頭部は正面観で底辺（羽込部上段）の二角がそれぞれ55度を呈する三角形で，これもⅡと同じく碑の平面がそ



第4図　大乗妙典供養塔図

のまま頭部まで延長する。側面観は背面の二辺がゆるやかにカーブを描きながら頭頂部まで伸びる形状である。

羽込部は上部の一段部と下部の二段部が直接つながらず，間に0.7㎝ほどの間隔を設けながら側面までめぐる。羽込は鋭く切りこまれる。額部は羽込部7.6㎝を測り，突出なく沈線によって側面までまわりこむ。碑面は浸食が激しく，正面，背面ともに著しく荒れている。よって陰刻，墨書ともに判然としない。

Ⅳ板碑（第4図Ⅳ，第6図Ⅳ）

Ⅳは小丘の中央西側に位置し，頭部を南西に向けて倒れている。塔身上部は現高46.5㎝，横幅30.0㎝，厚さ12.0㎝を測る。頭部は正面観で底辺（羽込部上段）二角がそれぞれ40度を呈する三角形で，これも碑の平面がそのまま頭部まで延長する。

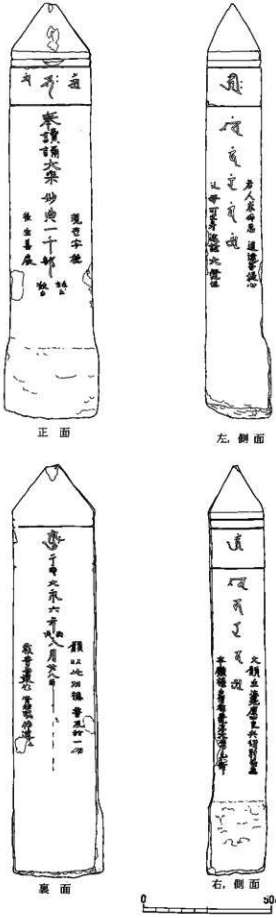
側面観は台形を呈する。従って頭頂は一点とはならず一線となる。羽込部は二段で1.7㎝を測り，背面にまで及ぶが，背面は一段となる。額部は羽込部下段より下6㎝を測り，背面にまで及ぶ沈線によって区画される。ただし，沈線は羽込部と同じように斜方向に彫りが入れられている。

Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ基部（第4図Ⅴ，Ⅶ，Ⅶ）

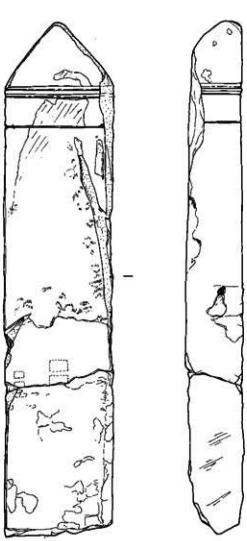
Ⅴ・Ⅵ・Ⅶは折れ残った基部である。Ⅰ板碑と若干のずれはあるものの東西に並列している。Ⅴは現高19㎝，横幅30.5㎝，厚さ12.0㎝を測る。Ⅵは現高38.0㎝，横幅24.0㎝厚さ17.2㎝を測る。Ⅶは現高39.0㎝横幅28.0㎝，厚さ20.0㎝を測る。それぞれⅤで深さ10㎝，Ⅵで32㎝，Ⅶで30㎝地下に挿入されていた。ただし，Ⅴは後の復元の結果，基部ではなく塔身の一部であった。

考　察

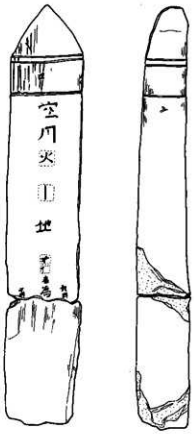
上記の基部Ⅴ・Ⅵ・Ⅶと塔身Ⅱ・Ⅲ・Ⅳを復元した結果，基部Ⅴと塔身Ⅳ，基部Ⅵと塔身Ⅱ，基部Ⅴと塔身Ⅲがそれぞれ対応し完形となった。このことから，この小丘上には，四基の板碑が造立されていたことが判明した。ここで便宜的に四基の板碑を東から順に，A（Ⅰ板碑―完形のもの），B（基部Ⅴと塔身Ⅳを接合したもの），C（同じく基部Ⅵと塔身Ⅱ），D（同じく基部Ⅶと塔身Ⅲ）としたい。これによって，復元全



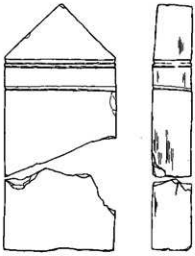
第5図　小山尻西遺跡大乗妙典供養大永六年板碑実測図



Ⅲ板碑



Ⅱ板碑



Ⅳ板碑

第6図　小山尻西遺跡出土Ⅱ.Ⅲ.Ⅳ板碑実測図

長を測るとそれぞれ，A 160.5 cm，B 65.5 cm，C 127.0 cm　D 134.0 cmとなった。Bの全長は65.5 cmと他の三基と比較して極端に低い。横幅は30.0 cmを測るから全長と横幅の関係でみると，甚だアンバラスである。基部Vをみると他の二つの基部のもっている特徴をそなえていないことがわかる。即ち，一般的に基部は正面，両側面，背面の全面にわたって平滑に調整されることなく，荒削の部分を残すのが普通である。また，造立後の倒壊を防ぐために，横幅を塔身幅より大きくとって安定を増すように成形されるか，逆に下端を鋭くして地面に挿入しやすく成形する。ところが，基部Vは塔身Ⅳと横幅がほとんど変わらず，確面は平滑に成形されている。実際，基部Vを小丘より掘り出す時，他の基部Ⅵ・Ⅶを掘り出す時より容易であった。

よって，基部Vとしたものは，塔身の一部が折損して残ったものと理解し，B板碑はその横幅から推定して少なくとも全長130 cm前後の碑であったと考えられる。また，このことから，A・B・C・D板碑の造立位置が，造立当時から不変であったと考えることは難しく，何度かの移動があったものとみなすのが妥当であると考えられる。

銘文により造立年代がわかるものは，A板碑のみであり，他は碑面が剝離して，著しく損傷するか墨書が消えて判読不可能であるため，碑の形状によってその造立時期を推測する他にない。この小丘上の四基の板碑中，A板碑がその大きさや各部の形状，銘文等によって中心的な位置を占めることはまちがいなかろう。B・C・D板碑の頭部は，A板碑の頭部のように，一点に集まらず，各緩線が一線に集まる形状で，これは古式の板碑にはみられない形状であり，B・C・D板碑の頭部形状は，A板碑より新しい形態である。羽込部をみると，BはAと同じく羽込部を斜方向に切り込む一般的形状で，最も古式の板碑から江戸期の新しい板碑まで普遍的にみうけられる。Cは沈線のみで羽込部を表現する形態であり，板碑最盛期の最も簡略化した小形の板碑によくみられる。D板碑の羽込部は一段目と二段目に間隔を設けるタイプである。これは量的には数少ない。知る限りでは，A板碑と同時期，大永年間から江戸期にわたってみられる。

額部のはりだしは，A・B・C・D，いずれの板碑も表現されておらず，沈線のみである。一般的に額部は，突出度が大きいほど古式である。

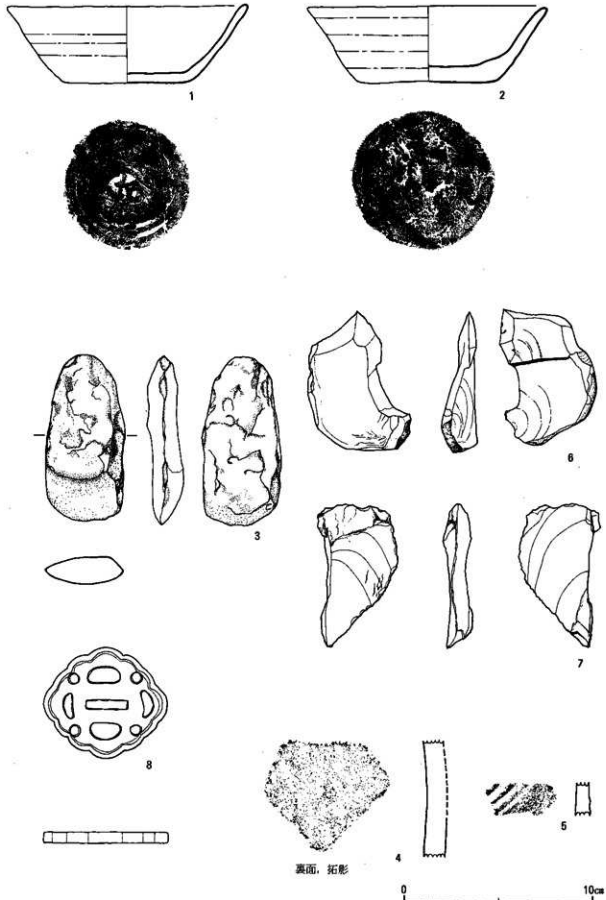
以上，形態上，B・C・D板碑はA板碑より先行するものではないと考えられ，B・C・D板碑の中では，D板碑が最も古い形状を有し，B・Cがそれに続くものと思われる。

その他の遺物

大乗妙典供養板碑より南西方向3 m，ちょうど河原石の範囲がきれる位置に，河原石混じりの表土から小型の粗製鉄地鋳物鐸が出土した。鐸（第7図8）の形は十二木瓜型で，長径6.6 cm，短径5.9 cm厚さは切羽台のところで3.6 cm耳部で4.5 cmを測る。これは切羽台の厚さが，耳際より薄い中低といわれるもので，耳は土手耳となる。切羽台に銘はない。小柄櫃孔，斧櫃孔は卵形である。この鐸は盛土上より出土したとはいえ，供献されたものとは考えにくいと思われる。その他，素焼き土器と思われる小破片が板碑基部付近から出土したが，磨耗して実測に耐えないものであった。

NI，S 2トレンチの遺物（第7図）

NIトレンチからは土師器の杯二点，石斧一点，縄文土器片二点，チャート製のチップ数点が出土している。土師杯はⅡ層（黒褐色土）から出土し，二点は重なりあっていた。一点（第7図1）は口径12.7 cm，底径6.6 cm，器高4.1 cmを測り，底部からの立ち上がりは丸味をもって立ちあがる。底部，体部とも極めて薄い。もう一点（第7図2）は口径12.5 cm，底径7.2 cm，器高4.1 cmを測り，これも丸味をもちながら底部から立ちあがっている。底部は心もち上げ底となっている。ともにヘラ切底である。石斧と縄文土器片はⅣ層（オレンヂ色土）下の粘質オレンヂ色土中より



第７図　小山尻西遺跡出土遺物実測図

出土している。石斧（第7図3）は最大長8.8㎝，最大幅4.1㎝，最大厚1.65㎝を測る短冊形の局部磨製石斧で，全面に磨耗が激しく鋭い面を残していない。縄文土器片はわずか二点のみの出土であった。一点（第7図4）は表面が完全に剥離しており紋様を観察し得なかった。胎土に大粒（6～7㎜）の長石を多く含んで焼成は極めて不良である。もう一点（第7図5）も表面が磨耗し，かろうじて条痕を観察できる程度である。

S2グリッドでは同じくⅣ層より，剥片石器二点が出土し，土器の出土はなかった。第7図6は二次的な剥離が片面にみられ，刃部をつくりだしている。先端を鋭く調整してあり，錐として使用された可能性もある。第7図7は片面に細かな小剥離痕を有し刃部をつくり出している。下端に未加工の自然面を残している。

第4節　歴史的背景

本遺跡の大乗妙典供養板碑が造立された頃，即ち大永年間の加納，木原，船曳，今泉，田野の五郷は伊東氏の支配下にあり，文安年間に伊東祐堯の所領となって以来，約130年後の天正5年（1577年）まで伊東氏の所領であった。当の伊東氏は，今の都城地方をめぐって島津氏と激しく覇を争い，あるいは内訌の最中にあった。日向纂記によれば，A板碑が造立される三年前の大永三年（1523年)には，7代尹祐が真幸の北原氏との戦いの最中に没し，子の祐充が伊東八代の統を嗣いでいる。大永四年（1524年)には敵対していた北郷氏より領地の一部を返還され，北郷氏と結ぶ島津氏と一時的な和平の盟約を結び，暫時の小康状態に入った。続く大永六年（1526年)には祐充の命により，荒武氏を肥後に派遣し，大童刑部左衛門の乱を鎮圧せしめている。日向纂記は，中世が間断のない争いの連続であったことを語っており，このことは中世に造立された供養碑の銘文の中に，戦さに倒れた兵を供養したものが散見され，造立者も僧籍にあるものの他は，武士階級を思わせるものがほとんどであることを考えるとうなずける。A板碑の碑面右側面にみられる海老原四郎兵衛尉も，武士階級であったことは疑いないが，海老原四郎兵衛なるものを文献中に確認し，特定することはできなかった。ただ，伊東氏に関係する記事の中に，たびたびその姓をみることはできた。例えば，資料中より同時期の海老原姓をみると，日向纂記の中に「伊東氏の将，海老原隠岐守，長倉某を山ノ口城に配す」との記事，日向記巻第四「三俣御陣並合戦」の記事中に海老原志摩介為安，海老原弥二郎為長，海老原二郎三郎，海老原六郎太郎為用などの諸氏を，同じく「豊州衆依手替山東引事」(永禄5年）1562年の記事に海老原清左衛門尉をみることができる。しかし，前者は都城の和田梶山衆，後者は田野衆であり，清武周辺の海老原姓を確認できなかった。しかし，造立地が伊東氏の支配地であることを考えあわせると，この海老原四郎兵衛という人物も密接に伊東氏とかかわりのある者であろうと考えられる。もう一つ，時代は約70年後になるが，上加納坂に次のように刻された石碑が残っている。「慶長五年庚子十月朔日」「〇岑浄江居士」「海老原次郎助廿八打死」一確かに海老原姓を名のる一族がこの地にいたことを確信できる資料であり，清武の地と海老原氏を結びつける一つの手がかりとなると思う。

〔註〕

(1) 盛土南端は，重機によって削られており，さらに1～2m延びていたものと思われる。

(2) 「二条線」，「羽きざみ」と呼称されるが，ここでは「羽込み」とする。

(3) 「喝」以外に「咄」，「妙」，「貪」などを額部に刻するものがある。禅宗系である。

第5節　ま　と　め

小山尻西遺跡では，縄文・平安・室町の各時代に比定できる遺構，遺物を確認した。ここでは本遺跡の中心をなす大乗妙典供養塚について考察してみたい。

まず，大乗妙典供養碑の形状をみてみると，頭部，羽込部，額部，塔身部の面構成はすべて平面であり，比較的曲面が用いられることの多い頭部構成でさえ平面を用いている。従って碑全体から受ける印象は極めて直線的，鋭角的で，県内の鎌倉，南北朝期の板碑のような大胆で雄渾な印象とはかけ離れている。本板碑近くに立地する山内石塔群の板碑の中にも，この板碑と同様の形態をとるものを散見するが，むしろこの板碑の直線的かつ鋭角的な形状は，宮崎市生目本勝寺に所在する題目板碑群に似かよっている。他の3基は，頭部，羽込部形状，そして全体から受ける印象も山内石塔群のものと大差を感じない。

碑面に記される銘文字数が多いことも経典供養碑の特徴の一つで，願主，願文の他，経文が碑正面ばかりか両側面，背面にまで及ぶことがしばしばである。

従って，銘文を側面までに記さんがために，側面の厚みを大きくとるものが現れる。碑面の横幅に対する厚みを扁平率[1]として表わすならば，中には100％に近い値を出し，板碑というよりは柱碑とでも表現したいような形態をもつものが現れる。例えば，宮崎市大字住吉，大王寺境内にある永禄11年銘の法華経典一千部供養板碑は，総高119.7㎝横幅27.3㎝，厚さ25㎝で扁平率は実に92％である。

本遺跡の大乗妙典供養碑の扁平率は66％であり，「日向の金石文」[2]に掲載されている板碑（羽込部を有する九州型板碑とし，自然石板碑や，値の記載のないものは除外した。）82基の平均扁平率61％を上回っている。これはまた経典供養碑のみられない山内石塔群中の71基の扁平率55％をも上回る値である。

柱型の板碑が多い鹿児島県の例[3]をみると，38基の平均的扁平率69％を示し，本遺跡の大乗妙典供養碑の扁平率に近い値を持っている。扁平率については板碑総高との関連をも考慮に入れながら検討すべきであり，今後の課題としたい。

大乗妙典供養板碑の碑面に刻されている大乗妙典とは，華厳経，法華経，涅槃経等の大乗を説く教典の総称で，特定の経典をさすものではない。大乗妙典の読誦を碑文に銘記する板碑としては，この小山尻遺跡の大永六年（1526年）の板碑が最も古いと思われる。ただし，板碑以外では明応五年（1496）銘記の変形宝篋印塔があって，これには，讀看読大乗妙典三千部，同金剛経五千四十八巻とある。経典を明確にしたものとして，文安四年（1447）の六地蔵碑があり，これが日向における経典供養碑の最も古いものである。銘文には奉読南無一乗妙法蓮華経とある。

経典供養銘記の供養塔を一覧表にすると表1[4]のようになり，これをみると経典供養碑26基の内，明らかに追善と考えられるものは三基で，残りの23基はいずれも本願主が生前に造立したものである。隣県の例として，鹿児島県の板碑をみると，総計70基のうち経典供養と思われるものが9基あり，うち2基が追善供養である。これによって，経典供養は逆修供養が多いと理解してもよいだろう。

本板碑の場合は，銘文中に特定の個人の追善を思わせる字句がないことから，願主本人の逆修碑か，あるいはこの時代によく行なわれた戦乱に倒れた不特定多数の敵味方を同時に供養して領地の平和を願う追善供養かと思われる。文献資料の中に経典供養の具体的な例をさがすと次のようなものがある。

「近年依騒動多人数亡失ケレハ国家安康ヲ希ヒ為善根同八月晦日ヨリ九月八日迄都於郡六ケ所ノ寺家ニテ法花妙典一万部誦シ奉フ其功徳ニ依テ国中無為泰平ニ治リ其誉近国ニ無隻コソ聞エケレ」日向記巻第四，「祐清佐土原御入城事」。これは伊東氏の10代義祐が，天文5年（1536年）に行なった例でこれほど大がかりでなくとも，武士階級の間で経典供養はしばしば行なわれたようである。

以上のように経典供養碑の背景には，数日間をかけた法要という祈念に向かっての宗教的営みがあり，それを主催

できるだけの多大な経済力を有した人々の存在をも意識する必要がある。

次に供養碑の立地を考えてみたい。元来，板碑が造立される場所は寺社の境内，台地，丘陵，墓地，小径の辻などが多い。このうち寺社の境内が最もよく利用されるが，境内といっても大量にみられるところでは，寺院敷地内の山の斜面が供されるようである。例えば，日南市鵜肥次遺寺址永仁３年板碑，えびの市霧山寺址正中二年板碑のような古い年紀銘をもつものでも寺院境内であり，宮崎学園都市遺跡中の山内石塔群は丘陵斜面，宮崎市生目本勝寺題目板碑群は寺院敷地内の斜面を利用している。本州の場合は丘陵上であるが，単に自然地形上に建てられたものでなく，人工的に盛土した上に河原石（玉砂利）を葺くという手の入った造立法をとっている。県内の大型でしかも造立時期の古い代表的板碑をみてもこの様な例を知らず貴重な一例である。この盛土部はまた，保存状態がよく造立時の形態をよく残している。いつの頃かはわからないが，この丘陵は子籠（コゴモリ）と呼ばれ，供養碑の上に御光がさしていたという伝説[5]が地元に残っており，人跡まれであったことが当時の状態にちかく維持できた原因であろう。盛土をしたうえ石造供養塔を造立するというのは，「飢餓草紙」がその初見であり，本来的な造立法であったと考えられ，そういった意味でも本遺跡の供養塚がもつ意味は大きいと思われる。

表１　宮崎県内経典供養碑一覧表

番号	年号	所在	供養碑種別	経典銘文	備考
1	文安四（1447）	小林市	六地蔵碑	法華真読一千部	
2	明応五（1496）	宮崎市赤江	変形宝篋印塔	諸尊読大乗妙典三千部 同念期経五千四十八巻	アビラウンケンバサラダトバン アン　バク　マン
3	天文二（1533）	高原町	板碑	奉読誦法華妙典	バン　バン　バン
4	天文四（1535）	佐土原町広瀬	板碑	奉読誦大乗妙典一千百部	バク
5	天文九（1540）	都城市志和池	石碑	奉読誦法華経王五千部・六重経一蔵 奉書写法華経一字一石一部八万四千本	
6	天文十四（1545）	東諸県郡本庄	板碑	奉読誦大乗妙典一千部供養	願あり
7	天文二十（1551）	児湯郡木城町	六地蔵碑	奉為法華経一千部供養六地蔵尊形図	タラーク カキャーク ナーク
8	天文二十一（1552）	宮崎市住吉	板碑	奉読誦大乗妙典一千部	願あり 唱・黙・心
9	永禄十一（1568）	宮崎市住吉	板碑	慶奉省着護法華一千部為現当二世	円相
10	永禄十一（1568）	宮崎市住吉	板碑	諸奉読誦薬華一千部為現当二世也	円相
11	永禄十二（1569）	宮崎郡清武町	無縫塔	奉看読大乗金剛経〇千以十八巻成就処	
12	永禄十二（1569）	宮崎市住吉	板碑	欽奉看読法華一千部功徳忙迎	
13	永禄十一（1569）	児湯郡都農町	板碑	〇〇大乗妙典一千部右志趣意林宗智 三十三遍総也	キャ（陽刻）
14	永禄十二（1569）	宮崎市住吉	板碑	奉読誦経王一千部成就得入無ノ上道之地也	円相
15	永禄十三（1570）	宮崎市住吉	板碑	奉読誦経王一千部之供養也	鈔
16	永禄十三（1570）	東諸県郡大字八代川上	板碑	奉読誦大乗妙典一千部成就之処	円相
17	元亀二（1571）	児湯郡都農町	板碑	奉看読大乗妙典一千部右志者 妙清大姉二十五遍総也	ベイ
18	元亀三（1572）	宮崎市赤江	板碑	奉読誦大乗妙典一千部	ア
19	天正三（1575）	佐土原町	板碑	奉読〇誦大乗妙典	㊞
20	天正四（1576）	宮崎市住吉	六地蔵碑	奉読誦大乗妙典一千部	
21	天正六（1578）	宮崎市瓜生野	板碑	奉読誦法華妙典一千部供養	
22	天正六（1578）	宮崎郡清武町	板碑	念仏五百辺，奉読誦普門品五篇	

番号	年号	所在	供養碑種別	経典銘文	備考
23	天正七(1579)	東諸県郡大字八代	板碑	奉読誦大乗妙典一千部供養	円相あり
24	天正十(1582)	西諸県郡飯野	板碑	奉供養法華一千部幻生童子無上證果故也	カンマン
25	天正十三(1585)	児湯郡川南町	六地蔵碑	諷奉訓誦大乗妙典一千部乃戦死者各霊	
26	天正十五(1587)	宮崎市大淀	六地蔵碑	○○経一巻一字一石埋之供養者也 如是所修之善根者報意樹菩提自初七日○	
27	寛文元(1661)	宮崎郡清武町	石碑(羽込部なし)	奉読誦大乗妙典二百部、二世安楽所	
28	正徳四(1714)	〃		諷奉読誦大乗妙典一千部	仏
29	享保十七(1732)	〃		奉読誦大乗妙典一千部	

〔注〕

(1) 扁平率は厚さを横幅で割った値に100をかけたもの．100弱に近ずくほど柱にちかく0に近ずくほど板にちかい。

(2) 瀬之口伝九郎「日向之金石文」（『宮崎県史蹟名勝天然記念物報告』第12輯，1942）

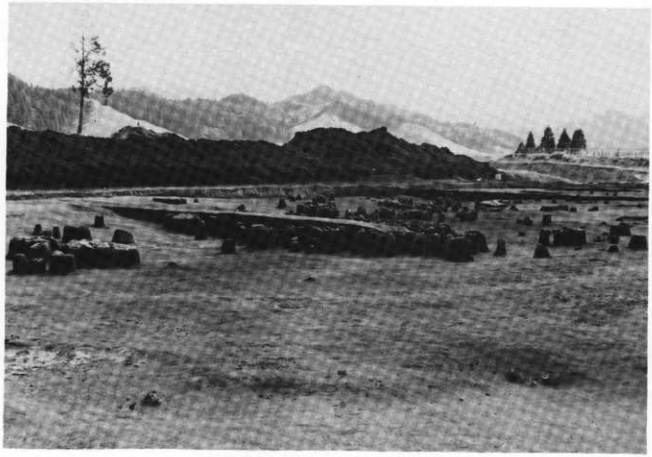
(3)「鹿児島県の板碑」（『鹿児島県文化財調査報告書』第5輯，1955）

(4) 瀬之口伝九郎「日向之金石文」（『宮崎県史蹟名勝天然記念物報告』第12輯，1942）の他，「清武町の文化財」第1集～第4集に記載のものを中心に筆者知見のものを加えたが，ほんの一部にすぎないと思われる。

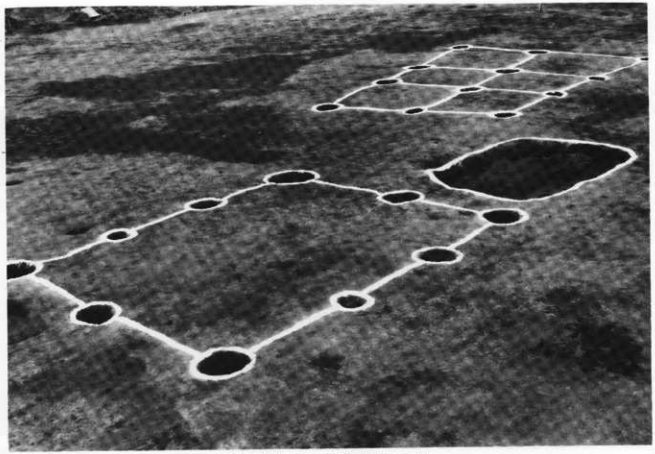
(5)「清武町の文化財　第4集，石造物，木原編（清武町文化財保護審議委員会）昭56

図　　版　　編

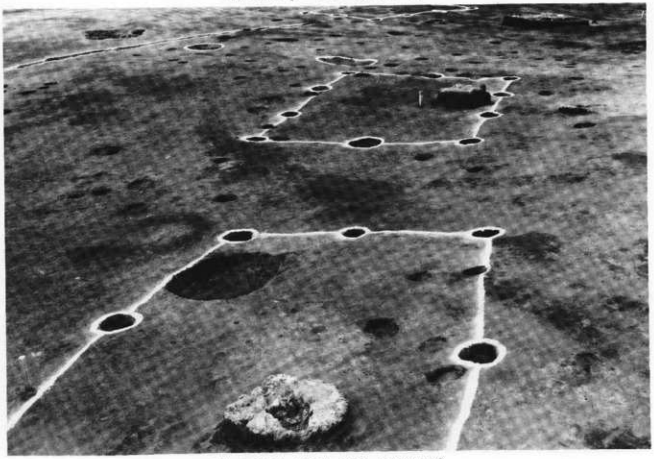
下田畑遺跡 遠景（南東より）



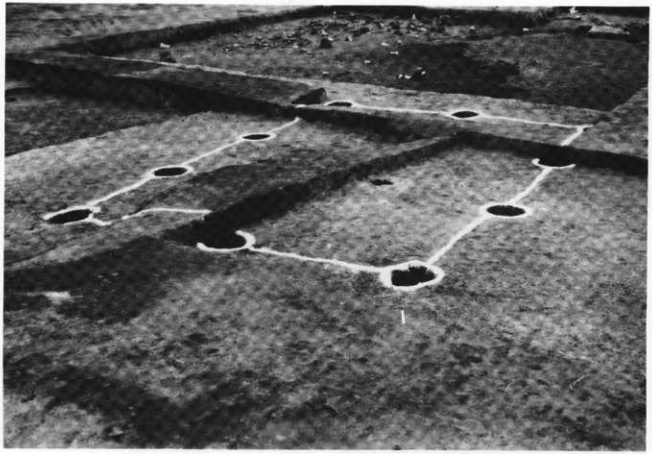
A区 遺物出土状況（北東より）



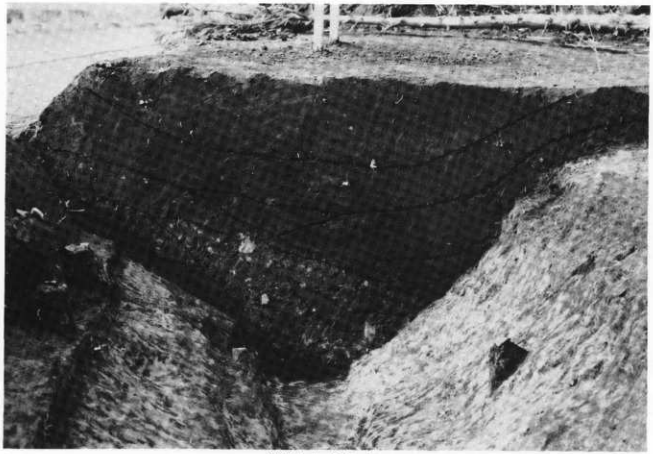
東からSB2・SB3（南西より）



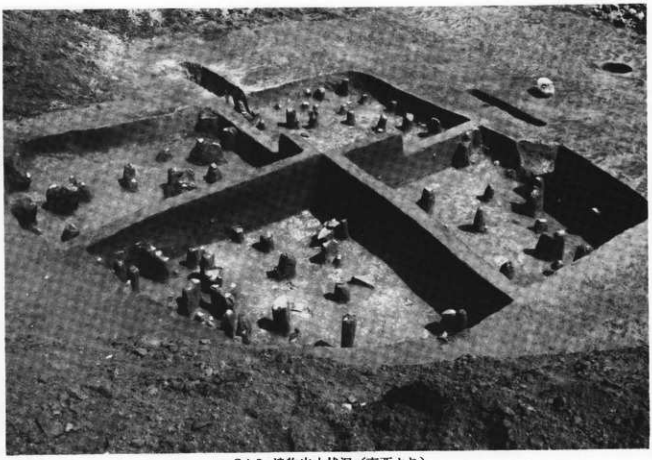
東からSB1・SB4・SB5（南西より）



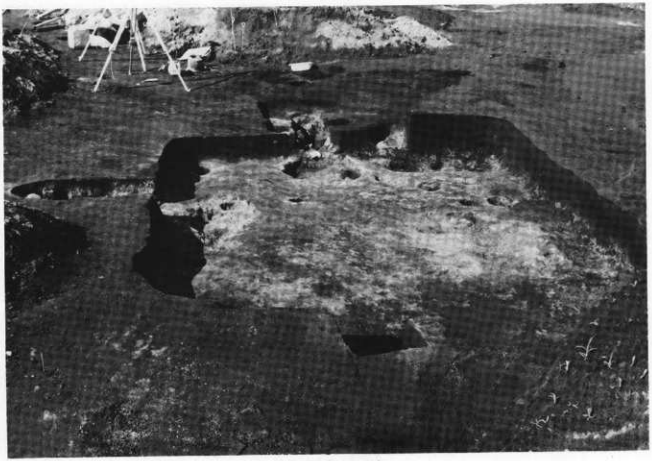
SB7（南東より）



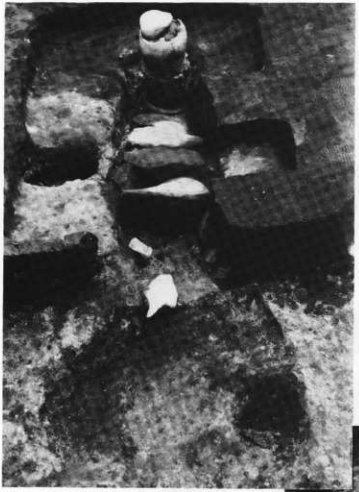
SE1 セクション



SA2 遺物出土状況（南西より）

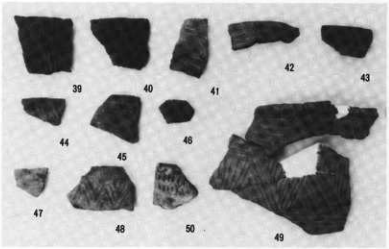


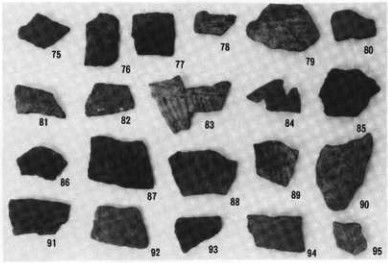
SA2（北西より）

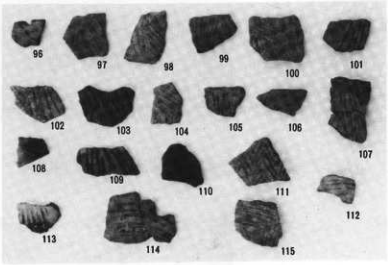


A２ 東カマド（西より）

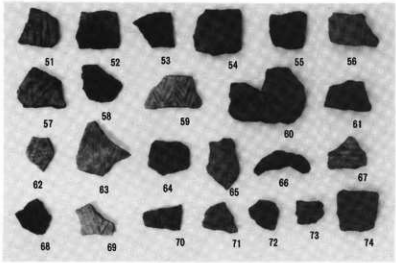
SA２ 東カマド（西より）

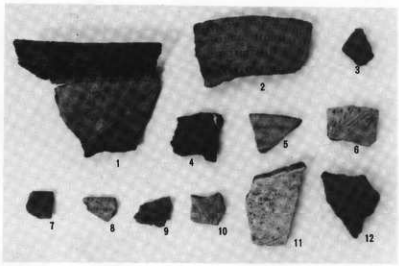

39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
50
49

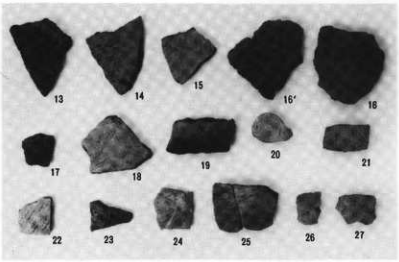

75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95


96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115

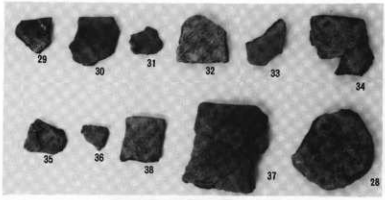
縄文土器(1)

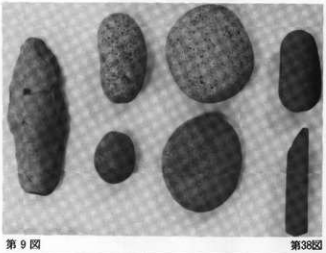

51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12


13
14
15
16
16'
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27

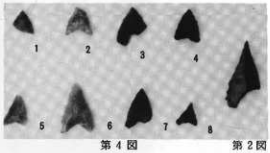
縄文土器(2)





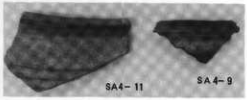
第9図

第38図



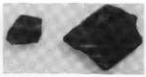
第4図

第2図



縄文土器・石器・弥生土器

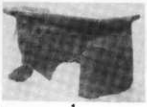
SA 4－18
SA 4－17
SA 5－21
SA 4－19



SA 4－13

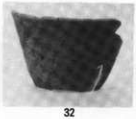
SA 4－12

29


1

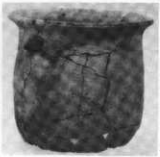
22

2
4


32

93

19


20

18

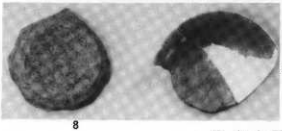
3

7

40

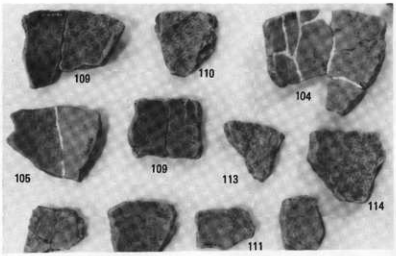
9

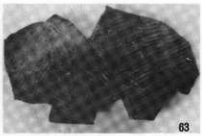
66

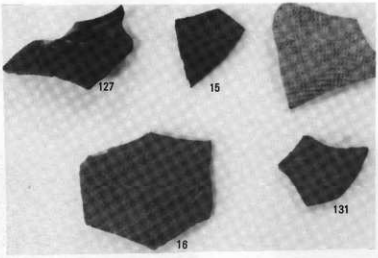

55
8

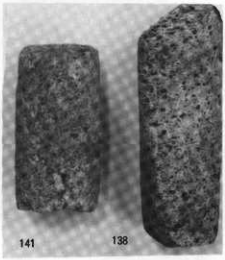
28

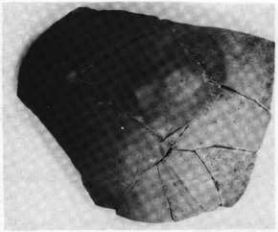
弥生土器・土師器

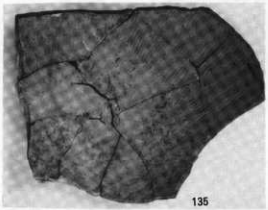












布痕土器・須恵器・軽石製支脚